育成會編纂

教育字彙

全一册
總クロース上製堅牢
定價金八拾錢
郵税金拾貳錢

本書は本邦に於ける**教育上、哲學上**の術語並に普通語**千有餘**を網羅し、**原語**と**對照**して一々**語原、沿革、意義**等を簡潔明瞭に解説して餘蘊なく、且つ**東西教育家、哲學家等**八百餘家の**傳記**並に**學説**の大要を記し、終りに**英、獨、和**の肝要なる**術語二千有餘**を**對照蒐集**したるもの、學者の座右一日も缺くべからざる良書なり。思ふに本邦**現時**言語を領解せんがために要する困難と勞力とは、**正に此の書によりて減殺せ**らるべし、

育成會編纂

續教育學書解說

教育界の多事なる、終に此の續解說書を發行せしむるに至りぬ、皆是れ必須の良書、解說の明暢適切なる、批評の穩にして健なる、正に是れ千金の璧玉、永く讀書界の珍たらん、敢て推奬す、

紙數 凡千五百頁

定價金參圓 郵稅金卅六錢
分版六册 一册賣金五拾錢
豫約價金壹圓八拾錢

カロチア氏 **遊戲の心理及教育**
文學士 菊池俊諦君解說批評

シルレル氏 **訓練論**
東京高等師範講師 中谷延治君解說批評

ラングゲ氏 **類化論**
文學士 春山作樹君解說批評

キユヨー氏 **教育と遺傳との關係**
文學士 八木光貫君解說批評

ドエリング氏 **修身科教授論**
文學士 吉田熊次郎君解說批評

モンロー氏 兒童の社會的 **意識の發達**
文學士 大瀨甚太郎君解說批評

本會曩に博士學士等の十二大家に請ひ、三大解説書を編纂出版したりしが、そが學術界教育界に貢献せし多少は、諸君の既に認めらるゝ所、今復更に續三大解説書を發行して、以て讀書界に寄與する所あらんとす、

育成會編纂

續倫理學書解説

紙數　凡千五百頁

定價金參圓　郵税金參拾六錢

分版六册　一册賣金五拾錢

今や思想界過渡に屬し、東西相爭ひ、新舊相戰ふ、志あるもの豈たゞざるをえんや、**社會**は如何なるべき、**國家**は如何ならざるべからざるか、抑、**良心**とは如何、**力の本能**は如何、**道德的事實**とは何なるか、此等の問に答へんと欲せば、必先づこの解説書を讀め、

文學士　野田義夫君解説批評
パウルゼン氏　社會倫理

文學博士　桑木嚴翼君解説批評
ニイチェ氏　倫理主義

文學士　友枝高彦君解説批評
ロバートソン氏　良心論

文學士　藤井健次郎君解説批評
メンチ氏　道德之事實

文學士　深作安文君解説批評
アレキサンダー氏　道德進步論

文學士　蟹江義丸君解説批評
ブレトウ氏　國家篇

育成會發行圖書目録

東京帝國大學文科大學長文學博士井上哲次郎君
東京高等師範學校敎授文學士蟹江義丸君
共編

日本倫理彙編

全部十卷
定價金十四圓
郵稅拾六錢宛

夙に東洋哲學特に日本道德に精通せらるゝを以て有名なる**井上文學博士**と、斯學に造詣深き**蟹江學士**との共編になりし**國民道德の大寶典**書類を蒐集したるものにて、現下過渡時代の道德の危機を救はんと欲するもの也、**廿世紀劈頭の大出版**はこれ也、本書は堙滅して知られざりし日本道德**全部十卷紙數五千餘頁**收むる所の**古書珍籍七十餘種**貳百有餘卷、思ふに光明永く世界を照耀せん、今や漸く第六卷を刊行するに至りぬ、七卷以下亦日ならずして相見えん、

朱子學派

全二卷

印刷中

日本倫理彙編卷之六終

明治三十五年六月十二日印刷
明治三十五年六月十六日發行
全部定價（上製 金拾四圓／並製 金拾貳圓五十錢）
第六卷定價（上製 金壹圓／並製 金八十五錢）

編纂者　井上哲次郎
　　　　蟹江義丸
發行者　石川榮司
東京市本鄉區森川町一番地
印刷者　淺野榮作
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
發行所　育成會
東京市本鄉區森川町一番地
印刷所　帝國印刷株式會社
東京市京橋區築地三丁目十五番地

泥して、凡の世務を忘却し、親戚僚友の慶弔をも廢し、官司ある人は爲ㇾ是職掌に怠る輩あり。行有ニ餘力一則以學ㇾ文とこそきけ。如ㇾ此は害あるに近し。曰。世に其人あり。されどそれは其人の失なり。學問の失に非ず。左樣の人は詩文に泥まざれば他の嗜好に泥む。有益の事に泥まば猶可なり。連歌俳諧圍碁象戲蹴鞠茶湯香花等は、さのみ人事を助くる事あるにも非ず。遊戲の具なり。若是等の事に泥まば、詩文に泥むに優りやせん、劣りやせん。甲斐の信玄の詩文の嗜みありし時、板垣信賢がよく諫めて止し事は、軍國の急務にかへて諫しなり。其忠深し。然るを一槩に聞て、文學は武家の業にあらざるなりと思ふは、文盲の人例の偏僻の論なり。不ㇾ足ㇾ言也。不ㇾ有ニ博奕者一乎、爲ㇾ之猶賢ニ乎已一と孔子も曰へり。博奕は圍碁の事なり。是をなすも、徒然としてあるに賢れり。凡人は動物なれば、徒然として無ㇾ爲、氣血欝滯して惡意作る。世道に害なき程の事は、閑暇に乘じて遊戲せんに、必しも尤べき事に非ず。されど古人賤ニ尺璧一而重ニ寸陰一といへり。晉の陶侃は敵國彊目の大守たりしが、無ㇾ事とき瓦を運んで筋骨の衰へを防ぎし事、晉書に記せり。左程にこそなくとも、志あらん人は、業を擇んで勤むべきことなれ、志惰らずんば事業繁多にして、さのみ閑暇は得難からん。詩文に泥んで世務を廢するは、其人の失なり。學問の失に非ず。

周南先生爲學初問下終

るなり。連歌いふ程の文思あれば、詩を作る事は易きなり。唐詩選唐後詩など讀習へば、いつとなく詩の心移る。心を留て辭を記憶し、詩筌詩礎など見合せて綴屬せんに、難き事なし。詩學の內に文字も出來、文義もこなれて、漢語に習る故、書を讀で義理も通解する事なり。

一。理學好む人、武學好む人、詩文の學は無益なりとて誹る人あり。僻陋の見なり。古より猛將勇士歌を讀詩を作り、文雅の名傳る人こそ多けれ。風雅の心なき人は、鄙野無骨にて、武德も全からず。助けにこそ成べけれ。何の害かあらん。又理學好む人の詩文誹るは、學問固陋にて、大道の旨に達せぬ故なり。不レ學レ詩無ニ以言一と孔子曰し。古の詩と今の詩と、體こそかはれ、詩の德は殊なる事なし。文雅の心なき人は、固陋偏僻にて、君子の域に入難し。先詩を學び、それより文章を學び、文辭の道に通ずれば、六經古書もすめて、聖賢の道にも是より入ことなり。詩文何の害かあらん。專ら務むべき事なり。漢の書に和訓を付てよむは、漢書を和書になしてよむ心なり。漢と和と言語異なれば、和訓必しも當らず。言語の次第も順ならざれば、作者の旨分明にすむべき樣なし。唯心を以推て、おぼろげに大意を得て、其餘は我料簡を以義理をつけていふなれば、作者の本意にあらざる事多かるべしと思はる。文辭を學んで彼土の言語の趣を會得し、其眼を以看るにあらざれば、作者の意を得がたし。理學者多くは文辭に通ぜす。臆度の見識を主として、唯我獨尊の說多し。漢土の人さへ如レ斯。和人はさらなりと心得べし。

一。詩文の學の學問に大益あること左もあるべし。されど世の詩文を好む人を見るに、多く其事執

一。王道とは王者の道なり。士庶人の身にて王道學びんは過分の事歟。曰。爲二人君一而止二於仁一といへり。王者の道は仁道なり。仁也者人也とて、人として不仁なれば、貴賤ともに世に立れず、人の身が立られぬなり。王者の天下を治め給ふ道が仁道の全體なる故、都て王道ともいふなり。孔子の吾道一以貫レ之と曰ふも、其義を曰へり。道に貴賤の差別なし。分に應じて仁をすべきなり。論語を能讀で、仁の味を知べき事なり。

一。文字は大槩見覺えたる樣なれど、書を讀で見れば義理分れず、講釋を聞ても物を隔て物聞樣にて、しみ〴〵と心に移らず。いかにして取入べきにや。曰。それは習るとなれざるとの界なり。假名字草字のみ見なれたる故、眞楷の角なる文字に向へば、珍客に對したる樣にて、何となく隔心あり。讀レ書百遍、義自通といへり。常にすきて書を見れば、目なれて義理をのづから通ずる物なり。蒙求史記など手近き歴史を見れば、事の始終の次第に付て、知ぬ文字も義理を推て讀るゝ物なり。又講釋を聞て移らぬは、信心の淺き故なり。何にてもあれ、我入用の事を其道しれる人に聞んに、會せぬ事や有べき。誠に好む心にてきかば、などか聞得ざらん。我入用の事なりと思はゞ、をのづから心も留りてきゝとるべきなり。

一。書籍になれたき事なれども、文字も覺えず義理も通ぜねば、面白きといふ心なし。面白からねば、いつとなく退心あり。いかにしてか宜かるべき。曰。詩學にしくはなし。詩と歌と辭こそ殊なれ、比興の趣は異なる事なし。風雅の心ありて、歌讀ん連歌せんと思へば、文盲の人も移

親ニ有レ道、反ニ諸身ニ不レ誠不レ順ニ乎親ニ矣といへり。是求レ進の道なり。よく徳義を修め、天性の如くに成たるを誠といふ。然る故親の心其子を信向し、何事も一味同心して、少しも逆ふ心なきを順といふ。父母親類既に如レ此なれば、朋友傍輩其人をよく見こみ、信向して不レ疑を信ぜらるゝといふ。如レ此なる時は内より積て外に顯れ、名望世に著ければ、自然に上に達するなり。此道を棄て外に進取の捷徑を求むるは、禍を得るの道に非ず。

一。樂羊といふ人爲ニ魏文侯之將ニて中山國を攻けるに、樂羊が子中山國に在けるを、中山の君殺して羹にして遺レ之。樂羊啜レ之盡ニ一盃ニ。文侯樂羊我爲に其子の肉を食へり、誠の忠臣ぞと喜ばれければ、堵師贊といふ臣傍に在けるが、我子を食ふ程の人ならば、誰肉をか不レ食といひければ、文侯心付て、是より樂羊に心を許されざりしとなり。又魯國の大夫孟孫氏獵して麑を得たり。秦西巴といふ臣に抱せて歸しけるに、母鹿付慕ひて離れざりければ、哀れがりて與へたり。孟孫歸りて鹿の子を求めければ、秦西巴有の儘に言上す。孟孫大に怒りて、秦西巴を追放せり。其後間もなく呼返して、其子の傅とせり。或人問レ之ければ、孟孫主命にかへて鹿の子にさへ情ある者なれば、増て主の子を疎そかにはせまじと思ひ當りたりといへり。韓非子評レ之して、巧詐不レ如ニ拙誠ニ、樂羊以レ有レ功見レ疑、秦西巴以レ有レ罪益信といへり。君に仕る人は心得べき事なり。誠だにあらば、主には見限られまじきなり。如何に上手にしたりとも、詐りは終には隱るまじきなり。

撫民の職に用られば、其職をけがすまじ、武備の官に用られば、其職をかくまじと、日夜に修行して、上の命を待。是則天職を盡すなり。孟子に士尚レ志といへり。此事なり。先祖の功にて大祿を賜り、我は士なりと心得て、天職を務むる心なくんば、恐るべき事なり。君子之澤五世而斬、小人之澤五世而斬といへば、先祖の餘澤も限りあり。萬物は皆天地に胎れて生ず。天より見れば人も物も皆子なり。差別なし。況貴賤の種姓あらんや。其德あれば位を得、其功あれば賞を得る、是則天道なり。先祖功德有て爵祿を賜り、子孫其餘澤にて蕃昌す。されども餘澤限り有て盡るなれば、子孫たる人一世一世我身に當て功德を立先祖の澤を繼續いで、無窮に傳ふべきなり。不レ然して世に用うるべき才能もなく、功德を立べき志もなく、先祖の餘澤を賴み、天地の萬物を費し、其養ひを受るのみならば、世界の大蠹ならん。必天の所レ廢なれば、其家長久には榮ゆまじ。心の外の事出來て家衰るか、凡疾病患難不慮の禍、遲速はありとも不レ可レ遁也。皆天之命なり。故に君子畏二天命一、小人不レ知二天命一而不レ畏也と孔子曰へり。舜の禹を戒めて四海困窮天祿永終と曰ふは、王者の御愼みなり。聖人さへ如レ此。況於二凡下一乎。

士たる者上の目利に逢てよき役に進むに非れば、事を操ひ人を治めて世の益となる事不レ能。されど非義の計略を以進む者は一旦志を得れども、其實なければ、終に黜罰を免かれず。唯其身を修め才德を磨ひて、天命に任すべし。中庸に在二下位一不レ獲二乎上一、民不レ可二得而治一矣、獲二乎上一有レ道、不レ信二乎朋友一不レ獲二乎上一矣、信二乎朋友一有レ道、不レ順二乎親一不レ信二乎朋友一矣、順二乎

と打明ていはゞ、怨心解て前の咎は殘るまじ。君子之過也、如二日月之食一焉、更也人皆仰レ之とは、前のくもりが後の光の妨にならぬ事なり。故に過而不レ改、是謂レ過矣といへり。されど過を改る事は甚難き事にしてあり。其故は我非を顯す事を嫌ひ、人に勝る事を好むも人情なり。其心よりも義理を好む事強く、深く道を重んずる心ならでは難レ及。心にかけて工夫すべき事なり。

一。王者を天子と申奉る。王者天道を奉じ萬民を撫育し給ふ事、譬ば人の子の父の家督を繼家法を守り家族を撫育するが如くなる故の御名なり。凡人に四民の分あり。されば王者の御職を天職と申す。天に代りて萬民を撫育し給ふ御職なればなり。農工商の三民は食二於力一とて、己々が家職を勤めて衣食の本をそなへ、器物を制し萬物の有無を通用して、天下の養を贍はし、天道に報ひ奉る。首上たる士は、假令一介士にても王者の羽翼となりて、天職を佐け奉る故に、士大夫の職をも天職といふなり。其故は假令いかなる明主にても、一人の力にて國家を治め給ふ事ならず、いかなる賢臣にても、一二人の力にて國家の用を達する事不レ能。必百官有司下部奴隷に至るまで、それ〴〵の役をそなはりて國家の事全し。是を大鳥の風切を六翮といひ、大官に比す。六翮強くしても毳ふつけそなはらざれば、飛翔する事不レ能に喩へたり。百官有司其役々を堅固に勤れば、天職を盡すなり。農の耕すに均し。

一。有司は皆其職あれば、天職を盡さん。唯無役の士何の所業なくして天祿をうく。何をなしてか天職を佐け天道に報ずべきや。曰。用レ之と不レ用とは、上君相のさばきなり。我常の用心は、

毀らるゝ人も有べきなり。

一。易泰卦六二の辭に、用ニ馮河一とあり。治世には安樂を怙んで人心怠る物なり。怠る時は漸く否になる。修補に怠れば、柱の根いつとなく朽て、家傾くがごとし。馮河の勇を用て日夜勵むに非れば、凌ぎ難しといふとなり。孟子に詩を引て、迨ニ天之未ニ陰雨一、徹ニ彼桑土一、綢ニ繆牖戸一、今此下民、或ニ敢侮一レ予、孔子曰、爲ニ此詩一者、其知レ道乎、能治ニ其國家一、誰敢侮レ之といへり。又引レ書、天作孽猶可レ違、自作孽不レ可レ活といへり。天下の大體を知り盛衰の所由を察し、事に先だつて其設をし、怠る事なければ、能保レ世安レ民なり。以レ是爲レ知レ道給ふなり。中庸に爲ニ天下國家一の九經を叙て、其次に、凡事豫則立、不レ豫則廢、言前定則不レ跲、事前定則不レ困とあり。又皐陶謨には、一日二日萬機、天工人其代レ之といへり。皆聖賢の大訓、天下の至言なり。凡事成ニ於勤一、隳ニ於惰一。疎そかに心得て般樂怠敖して自ら孽をなさば、活べき道なかるべし。盤庚に、若ニ農服レ田、力穡乃亦有レ秋、惰農自安、不レ服ニ田畝一、越其罔レ有ニ黍稷一といへり。禍福無下不ニ自レ己求レ之者上。愼むべき事なり。

一。文レ過は甚惡き事なり。過は君子にもあるなり。されど君子は速に改る故、無レ過にひとし。何にても料簡違ひある時、迹にて道理を付て料簡違はざる樣にもてなすを、文レ過といふ。譬ば刑罰を行ふに、料簡違ひにて殺まじき人を殺し、後に辭をかざり道理を付て、死罪當りたる樣に言なすとも、輕罪に重刑行はれし世間の公論は消まじ。そこにて前の刑は當らず、後悔限りなし

しき者にて、頓て私かに烹て食しぬ。偖子産彼魚をば放ちけるにやと問れければ、始舍ㇾ之圉々焉、少則洋々焉、悠然而逝と、誠しやかに對へければ、子産げにもとて手を擊て悅ばれけり。校人は子産はぬき易き人なりとて笑ひけれど、孟子は孔子の君子可㆔欺以㆓其方㆒、難㆔罔以ㇾ非㆓其道㆒と曰へる言を引て譽られたり。小人難ㇾ事、而易ㇾ說也、說ㇾ之雖ㇾ不ㇾ以ㇾ道說也とある程に、察々の智を好む人には、黠智の小人其機に應じて入故、却てぬかれ易し。君子說ㇾ之不ㇾ以ㇾ道不ㇾ說也なれば、不正の小人近づき得ず、欺るべき事なし。仁を離れて働く智惠は、害ありて益なしとしるべし。

二。善なればほめ、惡なれば毀るは、世間の公道なり。聞ㇾ譽愈勵、聞ㇾ毀愈愼は、君子の道なり。書に罔㆘違ㇾ道以干㆗百姓之譽㆖といへり。人に譽られんといふ心あれば、大義を遺れて私をする事あり。敏㆓於事㆒而愼㆓於言㆒、手前を堅固に行ひて、强て毀譽に心を留べからず。聞ㇾ謗而怒者、讒之由也、見ㇾ譽而喜者、佞之媒也といへり。可ㇾ愼事なり。されど偏に名利を嫌ふは、遁世者の心にて、君子の道に非ず。君子疾㆓沒ㇾ世而名不㆒ㇾ稱焉とあり。才德世に顯るヽに非れば不ㇾ足ㇾ爲ㇾ士。曹交が所ㇾ謂九尺四寸以長食ㇾ粟而已にて一生を過さば、可ㇾ恥の至りなり。又毀譽を以人をとるは愼むべき事なり。人は類を以聚まる者なり。我と善者をばほめ、我と惡き者をば毀るも、人情なり。故惟仁人能好ㇾ人能惡ㇾ人といへり。又孟子憂心悄々、慍㆓于群小㆒、孔子也、肆不ㇾ殄㆓厥慍㆒、亦不ㇾ隕㆓厥問㆒、文王也といへり。小人の毀りをば、文王孔子ものがれ給はず。其德ある故に、

ありといへども、大體に相違なければ、事調ひて人事闕ることなし。世間小量の人此料簡なく、事を傷ふこと多し。木は木金は金、餘りに細密に吟味して、分寸の差ひを咎むる故、人心退屈して、身に虧瑕なきを肝心とし、其事の善惡成否に心を留ず。故に日用繁多にして事絶ず。却て大體の成功は闕ること多し。銖々而稱レ之、至レ石必差、寸々而度レ之、至レ丈必過といへり。瑣細の事に拘れば、大體を見はづす事を謂なり。凡事に本末大小あり。君子務レ本といひ、又君子先立二其大者一といへり。凡其事の始終の歸着、大槩の目當を吟味して、大要の所と大本の所に目を付て事を謀り、其内細小の事は、進退遲速時宜に任せて尤むべからず。大德不レ踰レ閑、小德出入可也とあるも、此事なり。修身の道は謹嚴を重んずれども、それさへ大小本末を分別せざれば德不レ進。況事を謀り人を治るに、其料簡なければ大害あり。以二責レ人之心一責レ己身修、以二恕レ己之心一恕レ人人服といへり。人心不レ服、事業不レ成。大體を知る事肝要なり。

一。欺かれじぬかれじと、智惠の鞘をはづして、人の肺腑を伺ふ者は、人怖れて不レ親。其害極めて大ひなり。論語に不レ逆レ詐、不レ億二不信一、抑亦先覺者是賢乎とあり。ぬかれまじと思ふ心故、眞實なる人をも、詐はりはせぬかと、無事を迎へて疑ひ、又人を疑ふ心故、我言を人も不レ信と憶り、初より誓言だてなどしてくり言をいふ人あり。總じて人の心をいはぬ先に覺りて合點する樣なる猿智惠の人を賢者とするは、末世の風俗下劣の至りなり。君子の智は鄭の子產の樣に有たきことなり。子產に生魚を饋る者あり。校人に命じ、池に放ちて畜せられけるに、其人姦

も、與ふべき官祿なし。賢者を集めて道を興したく思へども、其勢なし。疏ましき小人あれども、上下の交り避がたし。皆果報の不足なる故なり。國郡をも有つ程の人は、いふにや及ぶべき。一縣一邑の主にて、甲乙の人育む程の勢あらば、相應の道行はれ、其樂多かるべし。あたら富貴を徒になし、世俗下劣の樂に一生を朽さん事は、惜きとも悔しきとも言はんかたなし。時勢時俗心に任せぬ事ありとも、志だにあらば、世の耳目を驚かさで、人悅び我樂みて、果報を徒になさゞる事幾らも有べし。

一。善惡畿々、先王之封疆蹙矣、邪正誾々、仲尼之區域削矣と、徂徠先生いへり。至論なり。易の泰の卦の九二の辭に、包レ荒とあり。九二は泰の主にて、天下の泰平をなすの本なり、荒は荒穢の物なり。包は包含なり。荒穢の物なりとも排ひ棄ず、其疵瑕の見えぬ樣にして、其儘包含して保つ心なり。左傳に、川澤納レ汙、山藪藏レ疾、瑾瑜匿レ瑕、國君含レ垢といへり。荀子に水太清無レ魚、人太察無レ徒といへり。老子に治二大國一若レ烹二小鮮一といへり。皆此事なり。容レ物の量なき人は、萬事理窟ばつて、好んで人の惡をせめ、事の瑕をさぐる。人の惡を攻れば人棄れ、事の疵瑕をさぐれば事敗る。缺欠世界といへり。世の中は缺たる事のみぞ多き。料簡なき人は、貴賤共に事行くまじ。

一。春暖夏熱秋凉冬寒は天氣の常なれども、於レ時進退遲速も亦常の事なり。されども五穀熟し萬物成就して、歲功闕るとなし。陰陽の大化相違なきが故なり。人事も亦然り。前後遲速小過不及

させたらば、事をば敗るとも、何とて管仲の仁をなし得べき。諸葛孔明の劉繇王郎、動引二聖人一、群疑滿レ腹、衆難塞レ胸といはれしも、王道の體統を知たる輔弼の器なる故なり。孔明雜霸の學にて、聖人を不レ重など、儒者のいへるは、笑しき事なり。道學家王道をいふと高きに過て、人情に不レ近。說法僧の極樂淨土を說が如し。可レ羨して可レ爲の理なし。道與レ人離れて、先王の道虛器となり、尊きとは尊けれども、治國の用に不レ當、簠簋籩豆の常用に不レ副が如くなるは、後世の儒者高妙精微を尊んで、王霸義利の治先王孔子の旨にあらざるが故なり。

一。禮義廉恥を國の四維といふ。四維絕則國滅といへり。管仲齊國を治められし時の數の條目なり。昔の武士はさのみ學問したりとも聞えねど、弓矢の道とて、一種の禮義有て守レ之、二心あるを羞、心と言と相違するを恥るなど、廉恥の守りも有て、今より見れば殊勝なる事多し。太閤秀吉行伍より起り給ひて、英武豁達の威風を以一時の豪傑を懾伏す。故國舊家の意地堅く、弓矢の道などいふをば擯斥して、間に合ぬ事にせり、此時鎌倉以來の故家多く亡び、古來の禮俗廢れて、豁達を尙ぶ事になり、武家の風俗一變せり。近頃は士風次第に輕佻になりて、恥を不レ知、禮義廉恥の心薄し。如何にして張返すべきことにや。

一。儒者は天命といひ、釋氏は果報といふ。果報こそあらまほしけれ。孔顏の德有ても、富貴の位なければ、其道行ひ給ふこと成難し。況衆人に於てをや。よき事知ても、事業に施すこと不レ能。徒に無證の言を口舌にあぐ。誰か是を信ぜん。羞べき事なり。人材を知て寶の如く思へど

法にて、眼前の交りは六かしけれど、左樣の人には、多くはよき人ありといふ事なり。巧言令色は人の悅ぶ所にて、迷ひ安く、剛毅木訥は人のすかざる人物にて、疏み安し。故に其德を推本づけて、斯はの給ひしなるべし。

一。王道霸道といふことあり。論語には霸道の名目なし。霸者の事をば齊桓晉文といへり。孟子は五霸者三王之罪人也といひ、荀子は仲尼之門、五尺童子恥ㇾ稱二五霸一といへり。是より後の儒者、王道を尊び霸道を賤むるを斯道の大節とせり。されど五霸は桓公を盛なりとす。孔子管仲が功を稱して、其仁を尊び給ふ。霸道なりとて卑め給ふ事は見えず。荀孟の時諸侯無道至極せり。其人皆桓文の霸業を口に藉て私をする。二帝三王には及ばねば、桓文を引て祖とせり。荀孟の深く五霸を擯斥せられしは、當時の無道を正さん爲に、其本づく所を攻む、根をたち源を塞くの術なり。孔子の旨に殊なるに非ず。知者は天下の大勢を觀、時を量り力を計りて、國を治め民を安んず。孔子の顏子に四代の禮樂を告給ふも、此意なるべし。管仲の事業は國語管子に詳なり。管子當時周の天子列國諸侯の勢、齊國の力、桓公の才と、我才德の分量を勘辨して、先王禮樂の旨によりて、新たに制度を吟味して、功業をなし、合二諸侯一匡二天下一孔子其仁を稱して、微二管仲一吾其被ㇾ髮左ㇾ衽と曰へり。直に先王の禮樂を不ㇾ能ㇾ用して、新に制度を立し事は、管仲時勢を量り國體を察して、力の及ぶ限りにせられたるなるべし。是孔子の其器小哉と曰し所なり。されど是は孔子の力量を以管仲の上を評し給ふなり。後の世の王道自負する道學の士に

侯にて在ます人昵近の交りなければ、其賢否知がたし。されど易くしるべき道は、其親信近幸の臣下の風を見て、其君の心著さなり。又凡下の上にても、其人には交らねど、其すきて伴ふ人の賢否を視て、其人の賢否かくれなし。凡そ人は親昵の交りを擇べきことなり。

一。書の旅獒に不下作二無益一害中有益上、功乃成、不下貴二異物一賤中用物上、民乃足といへり。誠に百世不易の聖人の大訓なり。されど莊子に知二無用一而始可二與言一ㇾ用矣といへり。譬ば道を行んに、足を容るの外皆無用の地なりとて、掘て黄泉に至らば、不ㇾ可ㇾ行が如しといへり。凡世間の事、半ば無益の事無用の物にてぞある。無益の事無用の物を立置て、助けとするにあらざれば、有用の實行はれず。先王禮樂の道如ㇾ此。旅獒にいふ所は、人君の好尚に付て言るなり。民不ㇾ從ㇾ所ㇾ令、而從ㇾ所ㇾ好といへり。又上有ㇾ所ㇾ好、下必有ㇾ甚焉といへり。人君の好尚は國家風儀の根本なれば、無益有益異物用物の吟味あるべき事なり。故に左傳に凡物不ㇾ足三以講二大事一、則君不ㇾ擧焉といへり。法令と上の好尚と不ㇾ合ば、民法令には不ㇾ從して、上の好尚に從ふ。愼むべき事歟。

一。張良は其形婦人女子の如しといへり。鬷蔑澹臺滅明などは其形醜陋なれども、其德は賢者なり。荀子非相の篇を著して、德の形によらざる事をいへり。されど巧言令色鮮二矣仁一、剛毅木訥近ㇾ仁といへり。上手に物を言まはし、眼前快く人を悦ばしむる者は、多くは諂諛の小人にて、仁德なき人なり。君子の溫柔仁厚とは、似て似ぬ事なるべし。又剛毅木訥の人は、萬無骨無調

揚二君美一といへり。若官人に邪佞あり、政道不レ當、國家の禍とも可レ成と深く思ひ入、忠義の心不レ得レ已ば、上言上疏他に漏さずして上に達する計ひあるべし、不レ然して猥に時務を誹謗し、我才幹を人に衒ふは、大ひなる罪人なり。譬ば我兄弟親戚の中に過失あらん時、世に披露して其非を顯さんや。資レ父而事レ君といへり。國家の爲よからぬ事を樂むは、大不忠なるべし。居二其邦一而不レ謗二其大夫一といへり。大夫は君に近きが故なり。政道を誹るは卽君を誹るなり。君子絶レ交不レ出二惡聲一、忠臣去レ國不レ潔二其身一といへり。其國を去てだに國惡を不レ言に、正しく其國に仕へ其祿をはんで、臣子の列にありながら、國恩に報ゆる忠功こそ及ばざらめ、人心を動搖し國威を損ずる後言をば愼むべきことにや。總じて何の目當怨ることもなく、誰に仇すといふこともなくて、好んで世を誹り人を謗るは、何の故にや。我智の人に越たることを滿ずるにや。又榮利の道を開かんと思ふにや。北レ轅而行レ越とやいふべき。思慮あるべきことなり。

一。汎愛レ衆而親レ仁といへり。汎愛すとは、凡の世の交りの道なり。縦ひよからぬ人なりとも、のぞき弃る心あるべからず。あはれみ助くる心有て、我仁德を傷ふべからず。親レ仁とは修レ德の道なり。汎く交る內にて、仁賢なる人をば我より慕ひ求めて、親く交るべし。よき人に交ればいつ變ずるともなく、自然と我德進むことなり。無レ友二不レ如レ己者一といへるも此意なり。世俗多くは我に增る人をば何となく憚りて忌嫌ふ。禮義方正の人去ば、柔媚面諛の人至る。必然の勢なり。愼むべきことにや、不レ知二其君一、視二其所レ使、不レ知二其人一、視二其友一といへり。譬ば王

べく、亂國も治國になるべし。小人は胷中狹く、小智を自滿する故、覺えず人の善を妒み人の才を惡んで、親信の人なく、廣き世界に獨立して、一生安心の日なし。

一。嫉妒は婦人の常なれども、賢女は是を下劣の事にして恥るなり。男子として妒心あるは、女に劣りて下劣の至極なるべし。されど才能ある者を何となくそねみ、善事を聞ては疵瑕を付ていひけす類ひ、皆內に妒心ある故なり。女は陰類に、其心狹小なる故、さもあるべし。男子にして妒心あるは、大きに恥べき事なり。論語に君子成二人之美一、不レ成二人之惡一とあり。大學には人之有レ技、媢疾以惡レ之、人之彥聖、而違レ之俾レ不レ通。仁人放二流之一、迸二諸四夷一、不三與同二中國一といへり。孟子に不祥之實、蔽レ賢者當レ之といへり。賢者善事は世の寶なり。然るを媢み惡みいひけさんとする心、天道に背き人情に違ひ、不吉の惡心をいだくは、愚痴の至りにてぞあるべき。賢士善人あらば、揄揚推擧して、國家の用に供はり世の助けにならんことを願ふべし。人の善事は我善事の如く思ふべし。若人の過失惡事をきかば、凡俗の辱世の凶事と心得、心に留ず言語に出さず、其惡名のきへんことを願ふべし。かくあらば、我身こそ不レ及とも、治國の便生民の福となりて、天に事る道なるべし。人の善をそねみ人の禍を喜ぶ心ある人は、天之災不レ可逭。

一。惡下居二下流一而訕レ上者上といへり。當路の人の非をあげ政道を誹るは、大きなる僻事なるべし。一人唱レ之萬人和レ之ときは、亂の本なり。事レ君之道、有レ諫而無レ訕といへり。又內匡二君過一、外

用一而用二衆知一。天下の智恵を一所に集めて用る道なり。故に大知といへり。若我に滿心あれば、人に物問事をはぢ、我より加增ある事をいひ、異見だてする者を嫌ふ。況押立て議論說話して是非を爭ふ者をば大きに惡み、はては寇敵の如く思ふ。假令用捨ありて言に不レ見ども、內に其心ある人は、自然と顏色に見はる。さる人をば親戚朋友も用捨していふべき事ありてもいはぬ物なり。況君臣の間は、上に雷霆の威あり。假令言を求め給ひても、大臣は重レ祿て不レ言、小臣は諛ふて不レ言物なれば、增て嫌ひ給はんに於をや。孟子に訑々聲音顏色拒二人於千里之外一といへり。訑々は我知たり顏して人を用ぬをいふ。皆滿心より起れる失なり。書に帝舜大禹の德を賛して、不二自滿假一惟汝賢と曰へり。又禹舜の命を受て三苗の君を征伐し給ふに、其罪を數へて昏迷不レ恭、侮慢自賢、反レ道敗レ德、君子在レ野、小人在レ位といへり。我賢智を自滿して人を輕しめ侮り、其言を聽納ぬ故、志ある君子は皆山野に退き、諂諛して利祿を貪る小人ばかり高位に上るといふ事なり。又狎二侮君子一、罔三以盡二其心一、狎二侮小人一、罔三以盡二其力一といへるも、此意なり。又益の言に滿招レ損、謙受レ益、時乃天道といへり。自ら滿する者は、人疏んじて助けず。故にをのづから退損す。自ら謙る者は、人懷きて助くる故をのづから進益す。譬へば高き所には物不レ聚、卑き所には物聚まるがごとし。天道の常なり。易に天道虧レ盈而益レ謙といふも此事なり。凡て天地の間は何事も相助けて成就することなり。自ら滿する者は、人よけて不レ助。唯德義のみならず、一切の事何として成就すべき。自ら謙りて益を人に受ば、中人の才も上等に進む

し、理に二はなし、智者の目とて別にはなしと、手前の見識を引堅め、隨て人の異見を不レ受、人を直下に見て、我智を高ぶる輩、皆性理佛性の理を聞はつり、此身を誤る者なり。

一。人に上智中人下愚の三等あり。上智は聖人なり。堯舜禹湯文武周公孔子なり。其仁如レ天、其智如二神明一。天に日月あるが如く、物に麟鳳あるが如く、一有て二なし。學んで不レ可レ及者なり。下愚は心耳閉塞して、義理の道實なく、聞レ道大笑といふ輩にて、聖人も無レ若二之何一。中等の人は、性相近也習相遠也と孔子曰へり。善惡智愚の差別ありと雖、五分七分の差ひにて、莫大の差なし。假令偖もよき生質なりと譽られし人も。志なく無能無才にて生長すれば、一生物の用にも立ず。劣りたりといはれし人と、さのみ差別なし。學問修行に志厚く、諸事に心を寄て器量を琢く人は、いつとなく才器のび上り、人の上にこゆるなり。習相遠也とは、生質は並々の人なるが、一人は惡習にそみて惡くなり、一人は善習にそみて能なる、よきは上りて二三段の上等に至り、惡は下りて八九段の下等に落つ、其時は二人の中間杳に遠き違なりといふことなり。

一。中庸に舜其大知也與、舜好レ問而好察二邇言一といへり。これを大智といふ。子細は天下の事窮りなければ、義理も亦窮りなし。一人の思慮にて必當るべしとも思はれず。人に意見を博くきゝ、下賤凡愚の人の淺近の言にも心を留てこれをきゝ、能味いて見て其善所を擇んで用ゆ。凡物は好む所に集まる物なり。己を謙り我慢なく、物問事を好み、人の言を用ゆる人なりときけば、人悦んで相應の思慮を悉して告レ之。又志ある人は、彼より來りて所存を述る物なり。是不二自

德性日々に養はれて、材氣月々に長ず。又理を窮むる事は聖人の所作なり。衆人何として天地の理を窮め萬物の性を盡さんや。易の窮理は聖人大易を作り給ふ時の心道をいふ。人々理を窮めよといへるに非ず。理を窮め性を盡し道を履といふは、木を作り石を作り其後屋舍を構ふるに似たり。木石は天地の所ㇾ生に任せて、心を營作の所作に盡すにしくはなし。聖人既に理を窮めて、此道を立て、天下の定規とし給ふ。聖人の定規に從ひて、心を德行に盡すにしくはなし。無用の理を窮めんとて、及ばぬ心力を盡せば、是又德性を傷り材氣を損して、學びに害あり。故に聖賢心學理學の敎なし。

一。性は卽理なりといふは、理は天理なり。人の形體は陰陽五行の氣聚りて此形をなす。濕地に水氣を得て菌の生ずる意なり。旣に五行の氣此形質をなせば、此中をのづから天理こもりてあり。是則性といふ物なり。氣質は形象あれば、水に淸濁あり、金に剛柔ある類にて、利根鈍根品々の生付あれども、性は天理なり。理は形なければ、氣質の利鈍に染ず。聖凡一致にて、本然の明德常に不ㇾ昧。唯氣質の偏と人欲の習染とに掩はれて暫く昧し。鏡の塵埃に染てくもるが如し。日用の間時々發見す。不義なる事を見て羞にくみ、善事を見て欣慕する類、本性の發見なり。此所に氣を付て常住に離れぬやうに保ち續くべし。卽本然の初に復るなりといへり。氣質の事を釋家には四大假合といひ、本然の性を佛性といひ、復初の事を悟道といふ。名目は殊なれども事は一なり。性は卽理也といふは、則卽心卽佛なり。世間少しく智惠ある人早く道理を落着

にして證すべきや。無益の論なり。故に聖賢心法の教なし。形に長少あれば、心も連て長少あり。形病ば心も病、形盡れば心も盡。氣血を離れて別に心あるに非ず。心は氣血の精靈なり。故に孝弟忠信の情も氣血の爲なり。飲食男女の欲も氣血の爲なり。發したる所は善惡あれども、其本は一なり。形二なきが故なり。孝弟の情あれば、飲食の欲も共に存す。これを樹木に譬ふ。本幹の長ずるも木なり。旁蘖の生ずるも木なり。旁蘖の絶ん事を欲して其根をたてば、本幹も共にかる。根を絶ざれば旁蘖も止ず。故に欲をたつの理なし。故に聖賢無欲の教なし。尙書に以㆑禮制㆑心以㆑義制㆑事といへり。是聖人治㆑心の法なり。藥を以て病を治するが如し。心を以て心を治むるの比ひに非ず。欲心作るといへども、禮義の垣あれば縱㆑欲の憂なし。欲心の發するを不㆑憂して、禮義の守りを重んず。禮義習熟すれば、欲心不㆑制してをのづから寡かるべし。大學の正心も、先王禮義の道を以て正すなり。我心を以て正すに非ず。誠意も禮義に習熟して善を好むの意天性の如くになるをいふなり。懸空に誠を立るに非ず。總て欲を絶惡をさる力を用ゆるは、攻擊の藥を以て痼疾を治するが如し。疾未㆑除して身體斃る。無刑を以て盜賊を治るが如し。盜賊未㆑盡して國斃る。攻擊殺戮は惡德なり。北方殺伐の氣なり。德性を傷り才氣を耗して、其害甚大ひなり。樹木を作りて枝を剪り葉を洗すが如し。條暢の氣奪れて棟梁の望みなきのみならず、漸瘁て遂には枯るなり。禮義を學び德性を養へば、欲心惡意不㆑治して自然に治まる。元陽を養へば疾をのづからさり、善政を行へば盜賊自然に止が如し。春夏生養の德なり。

たるやうなれども、法は一時のたつる所にて、犯す者は罰あり。賞罰の權を以下を制する役にて、有司の當る事なり。禮義は人君の躬行に出、下觀感して效レ之。京如レ此なれば、遠國邊鄙も是を慕ひて、自然に風俗となり、下知を不レ待して、人々をのづから勤行ふ。若不義無禮あれば、人の咎めなけれども、是を恥て面を赤め過を文る。殆、天性の如し。是先王禮樂の遺化にて、堯舜の餘澤なり。堯は天下を舜に讓りたまひ、舜は禹に讓り給ふ。伽藍の住持の法器を選んで後住を定るが如し。三代を經禹の時に至りて、禮樂の化天下に徧く、風俗定まり文敎既に成就しければ、禹は人道の常に從ひ、其子に天下を傳へ給ふ。是より政道の定木人倫の規矩定りて、至レ今まで文字通達する程の國は、皆堯舜の道を守るなり。禽獸に飮啄牝牡の欲あれば、人に飮食男女の欲あり。欲に際限なければ、禮義有て欲を制せずんば如何あらん、計りがたし。禮義は人の禽獸に異なる所以の道なり。

一。心は身の主宰なり。大學にも正心誠意といへり。心正しければ身修まる。心學豈非耶。易に窮レ理盡レ性とあり。理學豈非哉。曰。出入無レ時、無レ知二其鄕一、惟心之謂歟とあり。生物の習ひ、見るに從ひきくに從ひて心發動するなり。風來て草木動き、波浪湧が如し。自然の理なり。此境に未發已發明鏡止水などいふ微妙の說あり。皆空理にて、無益の論なり。如何となれば、心に形なし、何を執柄にして治むべきや。治まらざるも我心、治めんと思ふも我心なり。治りたり悟りたりと思ふも其人の虛想なり。虛想にはあらず、實眞なりといふとも、心に形なし、何を體

從ふに候。儒者の服とて別にはなく候と對へ給ふ。喪致レ哀祭致レ敬ば、道に背かざるべし。私に禮を議し式を立るは、道をしらぬ人のする事なり。又盛衰の說は、君明かに臣賢にして、國治まり民安きを、有道の世といふ。左もなければ、學問はやればとて、儒道盛なりとは難レ言。宋の世ほど經學も文學もはやりけれど、其治體は遙に漢唐に不レ及。學問はやらば其效あるべきに、左もなきは、其道とする所聖人の旨に非るが故也。されど堯舜禮樂を制作し、此道を立給ひしより以來、至レ今其道によれば治まり、離るれば亂る。貴賤共に不レ能レ不レ由レ之異端左道の有ても無ても損益なきがごくならず。王道には盛衰なしといふとも可ならん。王道は如ニ嘉穀一。人日に食へども不レ知ニ其味一。又衣服車等常用の器の如し。一日も不レ可レ離。異端左道は奇味遠物の如く、又奇巧珍玉の如し。なければとて民生の日用に闕る事なし。時に取て玩弄すれば、賞翫淺からざるに似たり。凡道は士君子の設なり。君子喩ニ於義一。小人喩ニ於利一なれば、義理を好む人ならでは、學問は好まぬものなり。故に民可レ使レ由レ之。不レ可レ使レ知レ之といへり。細民凡下の心にては、うつりがたき事なり。儒學好む人の少なきは此故なり。又厭レ常好レ奇は人情の常なれば、左道を好むは嘉穀をば常にして奇味を賞する意なり。細民凡下も聞落して信向するは、則異學の效しとしるべきなり。

一。世の始は、道といふ事もなく、敎といふ事もなし。顓蒙敎朴にて、今時の遠夷の人邊鄙の俗のやうにぞあるべき。聖人出給ひて、民を治むべき道を開き、禮樂を作り給へり。禮と法とは似

るべし。

一。本朝には神儒佛といひ、異國には儒道釋といふ。三教一致などいふ事もあり。前説の如きは道釋の差別不レ明。曰。三教一致といふ事は、明の世に林兆忍といふ妄人の言出せる事にて、不レ足レ論事なり。老釋の學、其門に入て其説を極めば、高妙なる事もあるべし。又精粗優劣の差別もあるべし。されど是は其門内の事なり。外より見れば差別なし。老莊は達摩西來以前の中華の禪學なりと見て違ひなし。又儒道といへど、儒者の道とて別にはなし。先王の道を儒者傳ふる故、儒道ともいふなり。老釋などは、先王の道を離れ、別に道を建立したり。傳心傳法などいひて相傳する事もあれば、一流立る事さもあるべし。先王の道は、君臣上下古今通用して相與に守る所なれば、一人の可レ私事に非ず。又別に相傳の子細もなし。儒道とて老釋に並べ稱するは僻言なり。儒家にも儒喪儒祭など格別に禮式もあり。儒學の盛衰などいふことあれば、儒道とて別になしとも難レ云歟。曰。中庸、愚而好ニ自用一、賤而好ニ自專一、生ニ乎今之世一、反ニ古之道一者。烖及ニ其身一者也。非ニ天子一不レ議レ禮、不レ制レ度、不レ考レ文とあり。凡禮義は上の所レ定なり。下は守レ之者なり。士庶人の家私に禮義を考へ式法を立るは、何にもせよ知レ道人のすべき事に非ず。孔子の雖レ違レ衆吾從レ下と宣ひしは、周の禮の衰へしとき、時王の制の內にて斟酌して從違し給ひしなり。私に禮義を吟味し給ひしに非ず。孔子常に章甫の冠を戴き、縫腋の衣を着給ひしに、魯君儒服にて候にやと問れければ、少して魯に居り、長じて宋に居候へば、二國の俗に

淙の音あるが如し。治世は政和平なる故、其民安樂なり。安樂の辭を安樂の聲にて歌ふ。樂器の調子も人の聲に應じて調ぶる故、治世之音安以樂といへり。亂世は反レ之。故に音者生ニ人心一者也といへり。今の諷は、足利の中比義滿將軍の時、聲明平家の聲に依て作るといへり。左もあるべし。げにも武家の風俗に合たる調子と聞ゆ。雅樂は廢れぬ。此音曲有て饗宴嘉會の禮をたすけ、君臣賓主の歡を合す。告朔の餼羊にてやあるべき。淨瑠璃小歌は文祿慶長の比より起る。昔の早歌白拍子の遺聲なりといふ。今の箏は寛文年中八橋檢校筑紫琴の曲を變じて十三組を作りしより起る。三絃は晉の阮咸が月琴より出たりと、藝林伐山に記せり。本朝には寛文の比琉球國より傳へたりといふ。始は倡家にのみ有て、妓女の色を鬻ぐ具なりければ、近き比まで士大夫の妻女は手に取ことをも恥たり。今は左もなし。淨瑠璃三絃は誠の淫聲にてぞあるべき。鄭衞の音も爭でかか程まで細密にはあるべき。武器に鳥銃有て、射藝すたれ弓矢の道衰ふ。樂器に三絃有て、箏琵琶すたれ音樂の道亡ぶ。皆夷狄の國より出たり。よき事とは思はれず。勁正莊誠之音作、而民肅敬、流辟滌濫之音作、而民淫亂すといへり。淨瑠璃三絃は丈夫の聞べき物に非ず。古は君子無レ故、琴瑟不レ離レ身といへり。凡音曲は鬱滯を導引し、邪穢を蕩滌し、氣血を和順し、德を養ふべき物なり。心中斯須不レ和不レ樂、而鄙詐之心入レ之矣、外貌斯須不レ莊不レ敬、而易慢之心入レ之といへり。昔を慕はゞ、樂の箏笙篳篥、今の音曲にても、諷小鼓などは時時翫ふべき事にや。婦女にも箏を彈ぜしむべし。三絃を好まば組にて止べし。女德を養ふ使な

に非ず。人意の好む所に任せて、これに節文を成て教とし給ふ。譬ば人の弓矢を帶するは、禽獸の爪牙あるが如し。天然の用具なれば、世の初よりやありけん。先王これに節文をなして、禮義を教へ德行を養ふことにし給へり。音曲も天性人の好む所に付て教を立給ふなり。樂記に云、夫樂者樂也、人情之所レ不レ能レ免也、樂必發二於聲音一、形二於動靜一と。動靜は舞の事なり。檀弓に、人喜則斯陶、陶斯咏、咏斯猶、猶斯舞といへり。陶鬱陶也。懷レ喜未レ暢意といへり。喜氣內に蓄へて發せんと欲するをいふ。凡歌舞は人の喜心の外に發するなり。是則天地の和氣にして、生育の德なり。聖人の仁德なり。故に樂記に、大人擧二禮樂一、則天地將レ爲レ昭焉。天地訢合。陰陽相得、煦二嫗覆育萬物一、然後草木茂、區萠達といへり。先王愷悌の德、父母の心を以て萬民を撫育し給ふは、春夏生育長養の德なり。山林の士諸物を放下し一心を治るは、秋冬收斂肅殺の心なり。誠に陰陽黑白の差ひなり。音樂を無用の長物と思へるは理なり。

一。音聲は形なし。氣を以て達する故、物を隔て聞ゆるなり。故に人の肌膚に透り肝腎に徹し、能人の氣を移し心を動かす。故に心に怒りなけれども、粗厲猛奮の音をきけば怒心動き、心に憂なけれども、急微噍殺の音をきけば憂思生ず。移レ風易レ俗莫レ善二於樂一といへり。雅頌の聲作りて民風正しく、鄭衛の音盛にして民俗淫なり。故に顏淵邦を爲めんことを問れしに、孔子樂則韶舞、放二鄭聲一と曰へり。邦を治むるの大經なり。又聲音之道、與レ政通矣、治世之音、安以樂、亂世之聲、怨以怒といへり。譬へば同じ風なれども、樹に觸ては颯々の聲あり、水に遇ては淙

周南先生爲學初問下

一。道は理の名なり。理に形なし。道の形は禮樂なりといへり。禮はさもありなん。音樂の禮と同じく道の形なることは何の故にや。曰。老釋は皆遁世の士なり。老莊は無道の世に生れ、釋氏は無敎の邦に生れたり。其人生得高才なる故、世の有樣を悲みて、身を捨世を遁れて、衆生を濟度せし人なり。其道無欲を本とす。欲を制する者は心を治む。心を治むる者は、理を窮め精粗を分ち、粗跡を捨て精微を守る故に、形を捨て心を澄し、情を絕て理を專とす。凡世譌は皆無用の長物にて、欲を誘き心を亂るの具なりとして、諸物を放下し、一心を堅固に守ることなり。儒者も其理に本づきて心法の修行し、心學理學などいふ學問出來たり。是より世界理窟となる。理窟世界の見識にては、音樂は唯無用の長物とこそ思ふべけれ。爭でか世を治め民を安んずるの具なることを知ん。人喜べは歌ふ。歌へば手を拍てはやし、革木絲竹の音を以て人聲を助け音曲をかざる。自然の人情なり。譬へば禽鳥の春陽に感じて囀るが如し。故に音曲は天地の和氣なり。聖人旣に禮を制して、人道の規矩定木を立給ふ。規矩定木あれば、自然と方正嚴恪の意ありて、隔心に成易し。於レ是樂を制して、天地の和氣を致し、人倫を調へ、雍和の俗を成しめ給ふ。樂記に、樂者爲レ同。禮者爲レ異。同則相親、異則相敬、樂勝則流、禮勝則離、合レ情飾レ貌者、禮樂之事也といへり。總じて先王の道は、我智慧を以て道を制して、人を導く

事難かるべし。國體時勢を知てこそ政は行ふべけれ。何事をか聖人の大道とは覺えられし。不審し。民をば赤子に比へたり。譬へば小兒の糖を手に持たらんに、糖に增る物を與へばこそ放ちもせめ、何の用捨もなく奪ひたらんは、豈父母の心ならんや。且仁政を行んに、佛法何の害かある。仁政の澤下に及ばゞ、世道に害ある事は、不攻ともをのづから消滅すべきなり。

周南先生爲學初問上終

問の力禮義の德なり。なべての世に用ひ難し。器量あれども不レ知。忠義あれども不レ賞。勤勞あれども不レ褒ば、賢者何を以て進んや。不肖者何を以て勵まむや。大德は大官大祿をうけ、小德は小官小祿を受るは、聖賢の道なり。田祿財寶與ふる道なくば、王侯の寶にあらじ。殷の紂王は身に寶玉をまとひて燒死し、鉅橋の粟鹿臺の財は、皆人の寶となれり。王侯財を好めば、必禍をうく。仁者以レ財散レ身。不仁者以レ身發レ財といへり。又財聚則民散、財散則民聚といへり。節レ用而愛レ人、散レ財而聚レ民は、保世の道なり。賞行はれずば國治まらじ。

一。近世熊澤何某とかや、備國の君に得られて政行はれし。善政こそありけめ。吾等寡聞なれば、聞得たる事もなし。其國を歴し時心を注て見しに、城郭廬舍田野溝洫風俗も儉勤なり。げにも物識の手形有て、有難くぞ覺ゆる。又集義和書大學或問などいふ物を見しに、名の下虛からず。理學には精しかりけり。其時の政令なりとて書たる物を見しに、佛法の邪道を掃除し、聖人の大道をしらしむるなど、夥しく書れたり。其人のしつる事とも思はれず。旁人の僞托にやと不審しけれど、寺を破り僧を逐し事など世に事々しくいふなれば、誠にや有けん。それならば王政の旨にはとゞかざりしとぞ思ふ。さしも一代の名儒なるを、吾らが口にてかく申はおこがましけれど、聞ける事あればいふなり。佛法の行はるゝ事、敏達の朝より千年にこえて、君臣國を傾けて尊崇し給へば、闔國の民何とは不レ知、二世安樂の救主なりとて、夢にも幻にも南無阿彌陀佛と唱へまつり、君にも親にもかへぬ程なり。かく民心に浹ければ、百年の仁政にても回す

皆實心なり。されば仁君不ㇾ得ㇾ已して行はるゝ罰は、怨る人もなく、世の戒になるなり。上父母の心あれば、下に子の心あり。上下親子の如く、眞實のちなみあらば、賞罰を以て、ひやうる事は入まじきなり。偖罰を愼み給ふことは、罰は凶德なり、我身に受ていやなる事なれば、誰も嫌ふ事なり、嫌ふ事を表に立て下に臨むは、下に疎まるゝ道なり、臣倍き民離るれば國亡ぶ。故に罰は國家の大事なり。愼むといふは大事にして容易に行はぬことなり。罰を以て治むるは、毒藥を以て病を治するに似たり。其病は愈ても、毒氣遍身にめぐりて身を亡すなり。罰輕くば上を恐ずして國威たゝじと思ふは淺まし。離心ある下を罰を以て治めんとするは、杖を以て火を撲が如し。愈もゆるなり。上下父子の睦みあれば、上の憂を下にも憂へ、上の喜びを下にも喜ぶ。上下一體和合して、吉祥こそあらめ、凶惡はあるまじ。其中に道を背き義を忘れ、惡きふるまひする者あれば、人共に惡む所なり。其時こそ不ㇾ得ㇾ已して罰すべきなり。凡て世に君子は少なく小人は多し。賢者は少なく愚者は多し。視るに隨ひて咎めば、朝より夕まで氣の休まりはあるまじきなり。赦二小過一擧二賢才一とあり。仁恕に心あらば、人の過を視る事は少なかるべし。偖道は一なれども　身の居る所に付て差別あり。爲二人君一止二於仁一。爲二人臣一止二於敬一といへり。忠を勵みて賞を不ㇾ思は臣の義なり。忠義を悅び勤勞を感じて慶賞賜るは君の道なり。凡て人情與ふれば喜び、奪へば怒る。得る事を好み失ふ事を嫌ふは、卽好ㇾ生惡ㇾ死の天性にて、君子小人差別なし。されど君子は義不義の分別して、得失與奪を顧みず。義に從ふて行ふは、學

きを樂み、罰なきを賞と思はゞ心安かるべし。

一。勸ㇾ善懲ㇾ惡は風俗を正すの道にて、賞罰は國の大權なり。それに古の賞罰と刑名法家の賞罰と二派あり。刑名家は信賞必罰とて、賞罰にて下をひやうりて世を治めんとするなり。功ある時は相違なく信に賞し、罪ある時は一寸も遁さず必罰するゆへ、人々功を勵み罪を恐れて罪を犯さず、何事もりつぱ速にて成功はやし。一段よしと見ゆる。されど惡を不ㇾ爲は罰を恐れ法を遁るゝまでにて、不義を羞る善心にてなければ、法にふれぬ惡事をば用捨なくするなり。又功を勵むも、忠義の心にてはなく、賞を得んためなれば、一過の手際を專らにして、後の禍國家の大計を顧ず。論語に君子懷ㇾ刑小人懷ㇾ惠といへり。上刑罰を以下を威して治めんとすれば、下は上を欺ひて恩惠を得んとす。互に敵を謀る樣の心にて、安き心はなし。秦の國刑名家の賞罰を用ひて、一旦天下を得たれども、幾程なく亡びたり。後の世も和漢共に此賞罰用ひたるは、皆世運短し。近くは甲斐の信玄など、學問もあり武材もあり、さしも彊國なりしかども、幾程なくやみ〳〵と亡び、忠臣も義士もなかりし。ひやうりて治めたる故に非ずや。賞罰も如ㇾ此なれば、禍にこそなれ、治めの益にはならず。聖賢の世は撫育を先として、罰をば不ㇾ得ㇾ已してぞ用ひられし書に文王明ㇾ德愼ㇾ罰といへり。文王君德厚かりければ、誰も明白に見てしるなり。明ㇾ德とは是なり。偖大學に文王の事を引て爲二人君一止二於仁一とあり。文王の御德君德と申は仁なり。愷悌君子民之父母といへり。父母の心にて下を治るが君德なり。父母の子を育つるに、表裏の不實あるべきや。喜ぶも怒るも

同じき時は忠臣怠るといへり。賞なくば何の勵みかあらん。臣の義も怠るべし。懐レ恩畏レ威といへり。恩惠なければ畏ろしき事もあるまじ。罰は惡を懲さんためなり。賞なくして罰行はれんは、却て上を怨むる事にて、國家の威を損じ、衰微の基にてぞあるべき。爲二君一日恩一。捐二妾百年身一といへり。物賜ふには限るまじ。賞行はるべき事にや。曰。罰は過やすく、賞は常に不レ及。陰陽に譬へて對待するはあしき說なり。されど福莫レ福二於無一レ禍。樂莫レ樂二於無一レ憂といへり。天下の至言なり。就レ中治世世祿の國に仕る人は、如レ此心得べきことなり。然らば常に樂しかるべし。其故は郡縣の世にこそ田祿皆君の手にあり、心に任せて賞慶を行はるべけれ。世祿の世は、上下皆分に應じて田祿をうく。君何の餘計有て賞慶を行はれんや。賞慶を願ふて賞慶至らざれば、いつとなく退心出來て、我獨人に越て勤勞するも無益なりとて、天職に怠る。又必賞慶を得んと思ひ、辛苦にたへ危難を冒し、年月を經て勤むれども、賞慶至らざれば、人を怨み世を怨み、限りなく鄙しき心になる。淺ましき事ならずや。爲二人臣一止二於義一といへり。一往君臣の契りあれば、不幸にして爵祿を離れても、爲レ君に命を棄る人あり。是こそ臣の義なれ。世祿の家は、其子愚不肖にて、何の用にもたゝぬ代も、あたら爵祿を賜りて、妻子を顧み安樂の世を立る。先祖の餘慶とはいひながら、我身を省よ。出て仕官せんに、何時も是程の祿得べき器量ありや。累代重恩の上報にも、身の健なる程は、如何にも辛苦して役目すべきことなるに、心得よからねば、臣の義をも失ひ、治世の樂みをもしらぬなり。唯禍なきを福、憂な

り。又圃に葵を種たるが、よく生たるを見て、拔棄させて曰、我家は田祿ありて不足なし、何ぞ工女園夫と利を爭はんやといひし。又大學には、畜二馬乘一不レ察二於鷄豚一。伐氷之家不レ畜二牛羊一といへり。是も公儀子が意なり。儉約をするとて民と利を爭ひ、身に應ぜぬ卑劣のふるまひしては、行ひの汚るゝのみならず、世の謗り人の怨み遁るべくもなし。禍の基にてぞあるべき。

一。恭儉と驕奢とは裏表の事なり。恭儉は吉德なり。驕奢は凶德なり。恭は丁寧なることなり。丁寧なる人は質素簡約にして、自然と財用費すやうの事を好まで、儉なる者なり。驕はふとくいでゝ緩怠無禮なることなり。左樣の人は餘勢を好み、何事もかさある樣にと思ふに付て、をのづから奢侈して、財用の費ある者なり。勘辨あるべきことなり。

一。倉廩實而知二禮節一。衣食足而知二榮辱一といへり。學問敎化も時節によるべき事にや。されど小人窮斯濫矣といへり。士も貧乏困窮すれば志を奪れて、思はずあしきざまをするなり。困窮せば猶更學問して、士を嗜むべきことなり。老當二益壯一。窮當二益固一といへり。斯てそあらまほしけれ。學問して恥をしらば、愼みもあるべし。道義に達せば、貧苦も堪よかるべし。貧して樂むといふ事もあれば、道義程有難き者はなし。貧窶さへあるに、行儀も卑劣にて、人に下しまれんは、口惜き事なり。

一。賞罰は陰陽に譬へたり。罰あれば必賞あり。賞なきとて、罪ある時の罰は遁れまじ。其上善惡

とは財を惜みてしはき事なり。益ㇾ己時は人に損あり。財は人々欲するものなり。然るを我のみ金持んとせば、人の怨み出來て、人情離る。斯る人は父子兄弟の間さへ睦じからず。論語に節ㇾ用而愛ㇾ人との給へり。節ㇾ用時は人を損する氣遣ある故なり。何故に用を節するぞなれば、譬へば諸侯の上にていはゞ、保ㇾ國安ㇾ人ぜんためにこそするなれ。節ㇾ用するかためにㇾ人をそこなひ、人情離れば何の益かあらん。大夫士以下一己の身の上とても、皆同じ道理なり。其上物設せん金持むと思ふは、浮世通する賤者の心にて、下劣の事なり。内に其心あれば、物いひ形にも自然と下劣の相あり。士の恥べき事なり。

一。晏平仲といふ人は、齊の國の貴族大夫なりしが、極めて節儉なる人なり。譬へば一狐裘三十年とて、一の裘を三十年まで不ㇾ改し程の人なり。或る時景公家も貴く祿も豐なり、餘りに儉に過たりといはれければ、晏子齊の國の處士臣が餘惠を待て朝夕の火を擧る者七十餘家ありと對られし。偖こそは晏子が儉は吝嗇に非ず、人を惠むべきためなりとしられたり。又鎌倉の時、筑後權守俊兼といひし人、常に華美を好めり。或時例の美麗の衣服して出仕しけるを、賴朝見給ひ、其袖を引付、自ら切棄て、千葉土肥などは大名なれども、人數多く持て軍役すべき用意に、常は儉素を用るなりとて、大きに戒られし事、東鑑に記せり。賴朝親近の人をかく嚴重に戒められし事は、凡の外樣の奢りを懲しめんためなるべし。賢慮不ㇾ淺事なり。又公儀休といふ人は、魯國の宰相なりしが、朝より退りて、其家の女の絹を織て、極めて工なるを見て、其人を出せ

十倍に成たれば、唯昔より斯ぞありけんとおもふなり。何にても父祖の代の事を今日に引合せて見給へ。十倍なること思ひ當りぬべし。半分に減じたらんは、何か苦しかるべき。それを士の分立ずと思はるるこそ口惜けれ。都て今の世の恥る事と、昔の世の恥る事と、氷炭なる事多し。困窮に付ては不屆なること多く、士のすまじき事をもする。譬へば富家の金を借て返さず、取まじきものをもとり、育むべき人をも顧で、それをば何とも思はず、よき絹きて富貴の體相して立廻るなどこそ、いと恥かしき事なれ。官祿高き人は、高きに付ての用意あり。一己の士は、一己に付ての用意あり。其闕たらむこそ羞なるべけれ。女のはづる樣なる事數へあげて、是ぞ士の羞なりと思はんは、口惜き事なるべし。最明寺入道殿、かはらけ味噌を日本一の肴なりとて酒飲れたりし事、誰もいみじとは思へども、其世の勢に付て、我獨もせられまじきか。されども都てなさむと思へば、なすに付ての道理あり。せまじと思へば、せぬに付ての道理あり。必せで叶はずと思はゞ、人の耳目を驚かさでよき程の計ひいくらも有べし。左もなくて安危存亡の機を察せず、唯世に連て浮沈せば、譬へば重き病ある人の、灸はあつし藥は苦しとて用ひず、一日の安きを頼み、眠り居て命の盡るをしらざるにひとし。死亡の患の種なりと、しりて思ひつかば、これを避る業はなしよかるべし。

一。儉約とも節儉ともいふ。節ㇾ用省ㇾ財となり。所用を節畧してへらす時は、經費をのづから減省するなり。格をかへ事をへさずして、唯財用を省んとする時は、客嗇の形に成て甚惡し。客嗇

不肖を鑑みば、いつとなく知識厚く成て、時節相應の計らひも出來ぬべし。禮記王制に、三年耕而有二一年之蓄一とあり。是は一年の所務を四分として、其三分を今年の用料とし、餘る一分を蓄へ置て、飢謹の用意とす。三年蓄れば三分あり。則一年の用料あり。是を積て三十年にして十年の用意あり。是を堅固の國とすといへり。又量レ入以爲レ出といふことあり。是は一年收入る所の所務はいか程と見て、ならるゝだけに拂ひ出すべし。遣方を先にして拂ひ出せば、必不足するものなりといふことなり。無二一年之蓄一國非二其國一といへり。一年飢饉すれば上下餓死する故なり。又軍事には分限相應の人張をして從軍する外に、石に當りて軍役あり。役旗役槍等分に應じて出す事なり。今の士大夫何として辨ずべきや。先は近昔の風俗を手本にして、身上半分の覺悟にして、凡の格をたてゝ見よ。それならば風俗自然と恭儉に成て、何事も成よかるべし。それより先は彼學問の力にて、よきことを思ひ出し、人の耳目を驚さで、いつの間にか風俗直りて國治まる樣の計らひあるべし。相かまへて學問こそしたれと物知だてして、大道の旨に違ひたる輕忽の計らひして、人の國家に過ちばしさせ給ふな。

一。左樣に格を改めば、勝手にはよかるべけれど、餘りにさもしく成て、士の分たゝじと思はる。

曰。吾も人も其心なればこそ世は窮するなれ。居所の莊嚴家内の器物、凡吉凶の人事、昔に比せば輕くとも十倍せむ。されば昔一年の用金百兩にして餘計有し人は、十倍して千兩にても不足あり。なれ來る事を常の樣に思ふは人情なり。四五十年以來年增につみあげていつとなく、

を運ばする道具なり。此道具揃はねば、仁政天下に偏ねからず。軍中にこそ皆甲冑をきるなれば、軍裝袷服とて、貴賤の章服差別なけれ。今は王者も社裃をめす。凡民も社裃をきるなれば、いかで貴賤をわかたん。されば財だにとめば、凡民も王者の榮耀の眞似をする。混奢りに奢りて、今は世共に財つきて、貧窮を苦むなり。分を越て奢らずば、何の故にか貧窮せん。貴者は身を高く持上て、輙くは人に物をもいはぬ程の風俗なれば、今の諸侯は昔の王者にも増るべし。今の大夫は昔の諸侯にも増るべし。是を見眞似て、足輕の奴隷まで、士大夫の眞似して、上臈めけば、などか貧窮せざらん。治世の德をば恭儉の勤儉のとこそいふに、高くでるを規摸と覺え、緩怠をするを貴相と思ふ。淺ましき風俗なり。偖困窮程恐ろしき物はなし。小人窮すれば濫すといへり。奢る者の癖として、奢りの用をたさん爲めに、財寶を貪る。財寶は貴賤上下相應して配當したる物なれば、分に越て張時は、必たらぬ物なり。不ㇾ足ばとて、人の財寶を手立ても取られねば、上よりは下を剝てたし、下は上を掠めてとる。はぐも掠むるも手を見せじと巧む程に、凡俗大きに惡く成て、禮義廉恥の四維たへ、士のかたぎはなし。其世に生れし人は、士のかたぎはかうぞあるものと思ふらん。上下交取ㇾ利ば國危からんといへり。易からぬ事にてあり。

一。扨それをばいかにして立直すべきや。曰。制度を建る事は、天下を保ち給ふ王者ならでは成がたし。それこそ博く學問して、世々の制度を考へ、古今治亂の源委をさがし、世々の君臣の賢

へば、天下をのづから封建に定りぬ。眞主世に出給へば、時節自然に到來す。有難き事なり。

一。さりながらちかごろは、士庶ともに貧窮を苦む人多し。盛世にも斯る事あるべきや。曰。苦を經ねば樂を不レ知。今の世の貧窮も、亂世の苦患にたくらべなば、いか程か樂しかるべき。世久しければ人口增加して物不レ足と人はいへど、さは思はれず。和漢の史どもを見るに、飢饉は亂世にこそあれ。治世には稀なり。誰も知れる唐の太宗の世の斗米三錢など、時豐なる驗なり。亂世は造化の氣虛して人類減耗すれば、米穀諸物も同く減耗す。治世は造化の氣旺する故、人類蕃昌すれば、諸物も同く蕃昌して、人の養ひ不足なし。杜氏通典明史など、天下の戶口を記したるを考へ見るに、漢桓帝永壽三年口數五千六百四十八萬六千八百五十六人、唐玄宗天寶十四年口數五千二百九十一萬九千三百九人、明世宗嘉靖年中口數五千五百七十八萬三千人とあり。是彼邦全盛の時の員數なり。此間の亂世は戶口皆減ぜり。是を以見れば、譬へば豐年の田地に稻よく生ればとて、一町の田に生る稻の限りある如く、中華の地に生ずる人も、土地相應の限りあると見えて、古今の差ひなし。世久しければとて、諸物に越て人類のみ蕃昌して、養ひ不足すべきことに非ず。唯治世久ければ、人情嬌慢に成て、風俗自然に奢侈し、過分に物を費す故、奢侈極まれば財力盡るなり。天地の生育不足するに非ず。人事の相違にてあり。但禮樂の制度あれば、急には困窮にならぬことなり。禮樂の制度とは、上王者より下凡民に至るまで、上下貴賤人倫の差別を、居所衣服一切の物にて格式をたて、其品を分るをいふ。是治世安民の道

みこそはやりつれ。誰人か文學儒道に心を寄べき。惺窩先生などありつれど、誰問人もなかりし。其中に羅山先生を招き給ふて親近し給ひ、金地院傳長老などいふ物識をめさせ給ひ、軍中召供せられしとかや。常に書籍を重んじ給ひ、異國本朝の古書經傳子史記錄等を集め給ひ、江戶の御文庫にも送り給ひぬ。今の世に傳はる令式本朝文粹東鑑なども、皆此御時より世に見はれて行はれぬ。又京南都諸國諸宗の名僧を年々駿府に召て、御前にて論議法問きこし召、金銀賜りて歸し給ふ。戰國暴虐の風俗を文化溫柔に移し、永き太平を基ひし給はんとの神慮にて在ましけんと、今更尊く覺ゆる中にも有難きは、大坂の役御上洛の時、さしも干戈騷擾の中なるに、朝家秘府の御記錄を請下し、又廷臣故家の典籍など多く召て、終夜故實を沙汰し法令を定め給ふといへり。げにも天下を保ち給ふべき王者の御器量にて在ます。其御驗にや、天下の大法悉く圖に當り、今百年に踰れども、國體のつり合よく、磐石の固めあり。學問日に開けて、君臣父子五倫の正きこと前古に越たり。中華朝鮮も及ばず。是等の事は、書博く見たる人ならではしらぬとなり。是ぞ所謂夏の虫の冬の寒きを知ざるなり。偖天下の制に郡縣封建といふことあり。郡縣の事は前にいへり。諸侯を建天下を分配して治むるを封建の制といふ。封建の世は士大夫も世祿也。君臣譜第なれば、君民上下の恩義厚く、一國の内一家のちなみあり。是三代聖王の天下を治め萬民を安じ給ふ法制の骨柱なり。人身に骨あり屋舍に柱あるが如し。封建定まれば天下をのづから治まる故に、非二封建一仁不レ偏二於天下一といへり。闕が原にて武德成就し給

なれど、大きに異なり。天下の武士は御家人とて國々に散在し、領地は貫文にて、たとへば千貫の地なれば、筑紫にも北國にも、出羽にも南海にも、幾所にも與へ、私の讓狀に將軍家の判賜りて傳へしなり。守護人其國の旗頭として、是を宰判して、軍役を勤しにこそあれ。今の國持大名の國持たるとは殊なり。應仁の後よりこそ、討勝たる人其國を保つ事にはなりぬ。されば下知も法も一統せず。誠の夷狄の君なきが如し。悲しかりし世なりけり。もろこしの三代は、さしも聖人の大業にて、古今に類なき盛世なり。今の御代を以對應せば、諛言に似たれども、左にてはなし。聖人をば佛菩薩の樣に覺え、三代をば極樂世界の樣にいふ、聖人世に出給へば日の出る如く、世をのづから治まる、聖人の軍は人一人も殺さで、をのづからかつ樣に覺え、凡今の人界とは似も似ぬ事の樣にいふことは、理學者の滅他に道を尊くいはんとていふなり。いかでさる事のあるべき。先王は天下の主なれば、天下の宰領なり。治世安民の沙汰の外他事なし。唯庄屋名主の大きなる者と思ひ給へ。世治り民安くば、聖人の事業成就しぬ。更に何をか思ひ給ふべき。今の治體に周の禮樂を以文らば、周の世にをとる事はあるまじ。孔子孟子の兎や角の玉ひしも、世治らで父を弑する子あり、君を弑する臣あり、人倫亂れて四民苦しみければ、それをなげきて、今の世の樣になしたきとこそ思ひ給ひつらめ。四民安くば、何をか願ひ給ふべき。扨も神祖は聖智にてまし〳〵けん。御一生の事業、天下を治め給ひつる事は、凡慮の及ぶ所に非ず。先我等が學者の目を以いへば、其御時代は干戈弓馬の事の外は、猿樂茶湯放逸の事の

り後は、漢唐明の盛時といへども、今の世の治めには沓に及ばず。彼は郡縣の制にて、法律の治めなれば、三代封建の世の仁政に及ぶべくもなし。それのみならず、外に夷狄の騒ぎあれば、十年と干戈動かさぬことは稀なり。我國上代はしらず、史傳の記す所、異國の三代の代と、日本の今時とのみ、誠の治世とは覺ゆる。彼國の郡縣といふは、秦の始皇帝よりぞ始りし。天下を一國にして、其内を郡にわけ縣にわけて、代官をすへて治むるに、一任三年として交代する故、上下のちなみなく、恩義薄くして、法を侵し易し。凡官人に譜第なければ、匹夫進んで宰相となる。賢才を選んで用ゆとこそいへど、君子は退き易くして、小人は進みやすし。士大夫身體輕して、禮儀卑劣なり。法律とて罪科輕重の品を定め置て、嚴刑を以これを糺すに、朝には宰相となり、夕には死囚となる。秦漢以後今に至て三代の治に及ばざるは、是ぞ其根本なる。本朝の古へ詳なる事は知がたし。上代は太古淳朴の風俗にて、其國々にて治りけん。中比より後は、郡縣にてぞありける。國司こそ京官なれ。介以下の廳官は、大形は土官なりと聞ゆ。土官は其州の國人なり。もろこしの郡縣程にこそなけれ。よからぬ事ぞ多かりける。中にもあやしきは、周公の禮樂を傳へながら、中冓の事は正されざるにや。夫婦は人倫の始なり。朝議いかゞありけん、いぶかし。禮を侵して恥とせず。今の世の人は羞畏れてせぬ事を、いみじき事にして、歌にもよみ草紙にも書て翫びぬ。世の衰へ國の亂れ、多くは此事よりぞ起りける。封建の制なりせば、斯る事もあらじと思はる。武家の代の制、鎌倉も室町も、今の世に似たる樣

れば、現在に手柄を見する故、氏種姓にも體佩にも年齡にも拘らず、擧てこれを用ゆる故、なべて器量せんぎなり。されば治世の人のやうに、世を賴み人にすがる心なければ、一分をさはめ男を立て、死ぬるとも堅固に死たきこと。死後の名までを思ふ故、心操自然と剛直なり。明日の命を計らねば、居所什物の思ひもなく、甲冑を枕とし、艱苦飢寒になれぬれば、飲食色欲の意もあさし。言の合ぬを恥とすれば、心に起らぬ虛言もいはず。風儀質素にして、夙興夜寐、役儀を堅固にしむる、是戰國の良士の風俗なり。昔の餘風にて、近比までは其人も在し。今にてもかゝる風儀の人あらば、未ㇾ學といふとも、吾は之を學びたりといはん。

一。夏の虫は冬の寒きを不ㇾ知とかや。今の時程目出たき御代はなけれど、我も人も常の事とおもへば、改めて樂しとも思はず。熟遠き昔を案ずるに、神武天皇のあたり、世々の帝は聞ゆるもろこしの明君にも增り給ふ聖德にてぞ在ましけん。王澤民心に入こと深く、今に至て二千餘年、日月のごとく戴くなれば、斯る事は他の國の記傳にも見たることなし。されど其程の事は、國史にも詳ならず。民俗も醇厚にて、政も寬なりけん。さこそと思ひやられて慕はし。今の世に增りやしけん、增らずやありけん、知がたし。後の世は今の御代に比ぶべくもなし。紀氏の土佐日記を見しに、貫之土佐の國の任果て京に歸るに、海賊つきまとひて、辛じて難波に至りぬ。南海は天子の宇下なり。國司は微官に非ず。それに海賊の畏あれば、當時の事思ひやられぬ。將門純友が亂より後は、世の中靜ならず。小康はありけれど、唯亂世ぞ多かりき。異國は三代よ

いふとなり。木曾義仲などは、朝命を帶したれば、群盜とはいひ難し。されど軍の體相將の心ばへは、群盜にて有けり。又一騎の武士にも、誠の武士なるもあり。又群盜の下手なるもあり。太平記に記せる何某四郎といふ人は、器量も勇力も無雙の壯士にてぞありける。相模入道これを賞翫し、何事もあるならば入道が用に立給へとて、又なく痛しみけり。今はの軍の時、四郎殿日比の契約は今日の事にてぞあるなれ、さらば働て給よとて、自ら酒を勸め名馬をたびて出立せけり。天晴武士や、よき敵討んずるよとて、皆人見居たれば、さはなく、冑脫て敵に降りぬ。又左傳に、齊の陳不占といふ人は、臆病なる人なりけり。其君難あると聞て、物具して出けるが、わなゝきて車にも乘得ず、從者どもかくては叶ひ給ふまじといへば、君の難に死するは臣の義なり、車はせよとて向ひけるが、戰の場に至り、金鼓の音聞て、氣絕て死けるとなり。四郎が勇よりは、陳不占が怯こそあらまほしけれ。群盜と武士と、勇氣は何かゝはるべき。恥かしき事也。君子有レ勇而無レ義爲レ亂。小人有レ勇而無レ義爲レ盜といへり。唯學問して義をきはめたきことなり。依二於仁一遊二於藝一といへり。隙さへあらば、武藝にても文藝にても、よき事にさへ携はれば、風儀はよくなるものなり。

一。昔の武士は學問なけれどもよかりしといふ誠にさる事あり。亂世の士は荒磯の松のやうにて、性よき者なり。其故は主君贔負に思ひ給ひても、家老用人懇切に思ひても、其器量なき人は、事に臨んで忽藁を出すなれば、其實なき者を繕ふ事ならず。又疎遠なればとて、其器量ある人な

レ義ときは亂をなし、小人有レ勇て無レ義ときは盜をなす。國天下を保つ人武備ありて文德なきときは、平治すること不レ能のみならず、多くは亡國の災を招く。鎌倉より近代まで五百年の間、天下一日も安きことなく、萬民安堵の思ひなし。是其驗に非ずや。武家盛衰記等にしるせし所を見るに、或は大臣私の威を爭ふて國家を不レ顧、或は暴逆にして民を貪り、或は多欲にして賄賂に耽り、或は色を好み酒に亂れ、事こそかはれ皆武備不足の故にはあらで、文德不レ修が故なり。か程に證據顯然たるを、昔は學問なけれども國治りて事不レ闕など思ふは、近頃淺はかなる事なるべし。

一。文德の尊き事のみいへば、さらば武備は治國の要務に非るに似たり。左にてはなし。武家といへば一槩に心得て、武藝はさもありなん、學問は無益なりといふに付てかくはいひし。治に亂を忘るゝ時は、其國必亡ぶといへり。孔子も足レ食足レ兵民信レ之の三を、一としてすてがたき治國の要務との玉ふ。又子所レ愼齋戰疾と記せり。又左傳には國之大事在ニ祀與一レ戎といへり。凡經傳の所レ記、擧ていへば事長し。唯軍政は聖代こそ精しけれ。されば戰にも必かち、國を保つ事も久し。後世の君臣は、一旦武力を以國を得れども、旣に治平になれば、富貴に誇り安逸を常とし、武備に怠る故にこそ、幾程なく世亂れ國亡ぶるなれ。異國にては武力のみ強くて文德なく、國を掠め邑を侵し、財寶を取り美女を奪ふなど、唯身の欲に耽り、國を得ても安レ民治レ世の心なき將をば、群盜の亂賊のと唱へて、國主とも大將ともいはず。唯多勢を持たる强盜と

ひて後は、公方家は天下の主にて王者なり。大名は國主にて諸侯なり。文德を修め武備を設け、天下萬民の司命にて在ませば、昔の武家とは大ひに易りしなり。

一。頼朝下知に從はぬ者を心儘に征伐せんため、總追捕使といふことを申賜り、國々には守護職を居、追捕に事よせて濫妨し、國司の權を奪ひ、庄園には地頭をつけ、軍役に事よせて、所務を押へ、猥籍す。庄園とは公家官人神社佛家等の私領なり。是を領家といふ。頼朝表向は是を制す體にて、裏には是を許して、朝家を傾け國を奪んとす。北條父子曹操司馬懿が姦智ありしかば、又潜かに計りて將軍家の後を闚ふ。上首既にかゝりしかば、天下の武士日夜竊盜の謀を挾んで家門を興さんとす。國司領家を犯す事はいふにや及ぶべき。嗣を爭ひ界を論じ、他人の領をかすめ、種々の姦計をせしかば、公事訴訟絶ることなく、世上の騷劇やむことなし。室町家は芳野の帝三種の神器を帶して近國に在ませば、これを恐れて、京を去ことと不ㇾ成。東國には管領と號し代官を置たれど、別立して將軍の下知に從はず。師直師泰などの如き武暴無慙の田舍武士國命を掌りしかば、上下濫妨にて、武威さへ弱かりければ、下を制すること不ㇾ能。大名貴族縱に大國を領し、猛威を振ひ、叛逆の輩年々不ㇾ絕。應仁より後は、武士自國に散在し、爭亂を事とす。此時已に國司も無く、領家も亡び失ぬ。武家の成敗をも用ひねば、國郡は武士の取がちなり。或は父を逐子を殺し、兄弟相滅し、或は弑ㇾ主して敵に降り、殺ㇾ人而奪ㇾ妻など、筆にも盡し難し。日本開國以來未曾有の大亂、異國にも聞及ばぬ程の事にてぞありし。君子有ㇾ勇て無

等の武官に屬して、常は警衞の事を勤め、事ある時は追捕の事を勤む。これを京都の大番といふ。又蝦夷其外諸國に謀反人ある時は、京より征伐の大將軍を出さる。大將軍節刀を賜り、驛路の鈴を鳴して其所に赴くに、道筋の國々より押領使其國の軍兵を牽ひて、將軍の手に屬し、軍役を勤む。本より無位無官の凡人なれば、平民にてあり。されば官家の草紙には、たとへば武藏の國の民畠山、紀伊國の民野長瀨など書るもあり。東鑑盛衰記等に記せる公文にも、諸國源氏幷軍兵等とあるは、八平氏七黨等の事なり。中比より王威衰へて、萬民の元首たる御德なかりしかば、國々不ㇾ穩、源平兩家の貴族將官を承りて、常に征伐に出らる。軍兵等勳功積る時は、推擧して賞を賜はる。或は田地を賜り、或は官位に補任せらる。されど四府の尉諸國の介椽などにて、六位をこゆるはなし。鎌倉繁昌の始、千葉介常胤武家の宿老にて、侍所の上座す。其比常胤が末子六郎胤賴、在京奉公の勞にて五位に成て下りしかば、賴朝是を賞翫し、常胤は右の上座胤賴は左の上座と定られ、（見ニ東鑑一）若年にて父と對座し、多くの武士の上につく。又和田義盛は受領を望みて許されざる憤りに、謀反を思ひ立て身亡びたり。況や庄司名主等は、今時の庄屋體の者なり。多く田畠を持て軍役を廣く勤むる者を大名といひ、さもなき者を小名といふ。皆名主の事なり。鎌倉にては官位なき故、身代の大小を賞翫して、かくは唱へしなり。國務は國司廳官是を掌り、武士は征伐追捕の役を勤むるばかりなり。されば追捕使檢斷などいふ者は一向の武官にて、治國撫民の事に不ㇾ與。今の武家とは異なり。我國家の初、大亂を撥ひ給

聖賢の言を述て、微妙の理を說なれば、奇特を好む類ありて、是を聖人の道なり、眞儒の敎など丶火々めかす。學文は斯る事を敎るにこそと思はゞ、學問を嫌ふこそ理なれ。是皆世人の罪にはあらで、儒者の罪なり。

一。上古の事、異國も本朝も、書傳に記せる所を見るに、其人は神聖なれども、宮室衣服飮食の道さへ開けねば、增て禮義といふ事もなく、人倫さだかならず。今時の遠夷の俗に異ならず。堯舜禹禮樂を造り、人倫を明かにし、治國の法を定め給ひしより、萬世の規矩となりぬ。世に隨て小變はあれども、堯舜の手形を易ると不レ能。是至極の道なるゆへなり。本朝には天智天武の帝淡海公父子當時の賢臣達、令を造り式を作り格式を作り、唐の禮義を移して、吾國の人倫の法を定め、治國の道を建給ふ。今に至て其軌範に循ふ。大經大法はいふにや及ぶべぎ。宮室衣冠日用の諸物風俗言語に至るまで、悉く中華の式なり。漢土と吾國と異なりといへるは、小異を見て大同を不レ知なり。國史を讀て來由を究め、異國の史とつき合せて見ば、其實を知べし。本朝中華朝鮮等は一氣の國なる故、堯舜の規矩に隨へば能治り、其道に違へば必亂る。古今一徹なり。然るに昔は學問なしといへるは、室町の末戰國の餘習を見ていへるなり。

一。上古の武士と申は諸國の軍兵なり。國の大小に隨ひて人數の多少を定られ、國役として國司沙汰して出す所の士卒なり。國司の被官に軍團押領使などいふ軍官ありて、平民の內にて勇健にして戰鬪に堪たる者を撰び、武藝を習はし軍兵とし、其內より擇んで京に上せ、四府撿非違使

闕たる事もなし。今時學問したりといふ人を見るに、よきは稀にて惡きは多し。武藝などはさもありなん。筆取て人並々に物書程ならばたりぬべし。なまじゐに學問せんよりは、なさぬが増りぬべきか。曰。譬へば五穀は不レ生禽獸の肉のみ食ひて養ひとする遠夷の人に、米麥こそ人を養へと語るに似たり。米麥の味知たらばこそ、よしともあしともいふべけれ。見たる事もなき物を、是こそ人の命を續ぐ物なりと語るとも、よも信とは思はじ。瞽者無三以與二乎文章觀一。聾者無三以與二乎鐘鼓之聲一といへり。聞人にこそいふものなれ。しらぬ人に語るは詮なし。無益の事なり。

一。君子の道は嘉レ善而矜二不能一といへり。輙く棄レ人は世の道なきを愠るに似たるべきか。曰。天下一家四海兄弟とて、仁者の道は内外なき物なれば、爭ふ事なし。爭はねば愠る事もなし。世にさる者あり。道の片端を見て定式をかまへ、我見たる所を又なき至道なりと思ひ、それに差へる者をば非なみ謗る。吾そしれば人謗る。兒童の喧嘩するに似たり。儒者の道は先王の道なり。先王といふは天下の主にて、民の父母なり。天下に充滿したる我子なれば、善も惡もありぬべし。惡ければとて子を弃る道やある。すたらぬ樣に謀るこそ、父母の道なるべけれ。かけまくも聖賢の書を我見識に引付、似も似ぬ偏僻の道理を高上に說ちらし、人を誹り世を誹り、はては父兄長上をも非なみ、三代より後は世もなし人もなし、道知たる人は吾より外にはあらじと思ふ樣なり。學問して斯る怪異の人とならば、誰もよしとは思ふまじ。經傳の文句を引、

あるべきとぞ覺ゆる。

一。學問はせで叶はぬ物なり。されど我身は年老氣衰へたらば力なし。子孫をば爭でか棄置べき。玉不レ琢不レ成レ器とかや。たとへば、片田舍にて生立たる人の、智慧さへ愚かにて萬頑なる、いかにも田夫野人なるが、都に出て人に交り事になるれば、幾程なく智惠も才もいでき、容儀さへ物立て、本の人とも見えぬ程なり。市に住人は商賈の風あり。村に住人は農家の風あり。大家の人は大家の風あり。小家の人は小家の風あり。是にて喩るべきことなり。人は唯ならはしにていかにも成立事と見えし。禮樂の敎と申も、唯習はしの事にてこそあれ。世に子程愛ゆき者はなく、又子程大切なる者はなし。誠に愛ゆきならば、其子の生立て身の不肖を怨ぬやうに生立たらんこそ、實の愛なるべけれ。祖母の孫愛するやうの心にて、今日は〳〵といひをる内に、十五にも廿にもなれば、氣勢いできて惡習純熟し、父兄の敎さへ聞入ねば、増て人の敎うけんともせず。無才無能にて、心ざまさへあしければ、人に後指さゝれ世に侮られ、あれこそ何某の家なれ、官祿こそ高けれ、かゝる子孫はいできぬるは、よくぞ先祖の面ぶせよなどいはるゝを見ば、悲しかるべし。我子とてこそいへ、先祖の遺體なり。君の臣なり。然るを物の用にもたたで、世にうるさがるゝやうにそだてなさば、我身の不慈のみか、先祖へは不孝なるべし。君へは不忠なるべし。我こそ後悔すとも及ばじ。子孫をば爭でか敎へざるべき。

一。學問は近代こそ盛なれ。昔はあるとも聞えず。されど國は國にて治り、家は家にてたち、世に

に利益せんといふやうに、多少一時に成佛させんとせば、勸めらるゝ人よりも勸むる人ぞ愚かなるべき。

一。右にいひしは下にある人の敎する道をいへり。君師の道は不レ然。君は民の父母なりといへり。世を保つ人は、世は皆我赤子なりと思ひ給へり。大學の敎養老序齒の禮を本として、天下に孝弟を敎へ給ふ。孝弟風俗になれば、天下戶々人々安樂の生を遂ることなり。故に堯舜之道孝弟而已矣といへり。又聖人の代には棄才なしといへるも、此中の事なり。人心不レ同如二其面一といへり。人の性質人々不レ同、品々の生れあり。されど禮樂を學び敎化を經れば、義理に通じ君子の道をしる故、性質相應の才德成立なり。其器量に應じ、大なるは大官を授け、小なるは小官を授け、百官庶司それ〴〵に配當して用ひらるゝ時は、都て國家の用に不レ立といふとなし。是を棄才なしといへり。皆聖主の仁道なり。事長ければ言殘しくおくなり。

一。太古の世は、他の國も我國も、神聖の德こそ在ましけれ。禮文備はらざれば、人倫もさだかならず。男女夫婦の道も、今の世の道より見れば、恥かしき事のみぞ多かる。しらぬ人は人の道は世の初よりをのづからかくありけんとのみ思ふ。世々の神聖だち道を興し給ひ、禮文を定め給ひてこそ、人の道は漸々成定りぬ。今にてもあれ、禮文をすて學問といふ事なくば、男女の欲より始め、凡の事支度解なくなりて、蝦夷達旦の風俗のやうになるべきは、いと安かるべし。唯此道定め給へる古の人こそ有がたけれ。假にも聖賢を疎かに思はゞ、身の上に天地神明の冥罰

どいふ。いかでさる事のあるべき。神明は靈妙不測の威德在まして天にひとしく、人智の及ざる所にてこそあるべきに、「身は社心に神はある物を。」などいふて、神道の奥義なりと思へり。即ち即身即佛の禪理なり。神は我にありといはゞ、神壇宗廟は廢すべきか。鬼神なきに似たり。物體なき事ならずや。祭祀の禮を愼みて、神明の感應をなさしめ、國土の福を致すこそ、其職の道なるべけれ。文といふは衣冠車服の品分れ、上下尊卑のあやいちじるきが、人道の文樣にてあれば、文といふなり。即ち禮樂の總名なり。武は戈を止るの義にて、干戈武器の稱號なり。即ち兵刑の總名なり。是を以官を設け職掌を分ち、政令を行はるゝことなり。人主の天下國家を治め給ふは、父母の家を治るが如し。心を盡して撫育すれども、不幸にして驕子悍奴ある時は、時に永く折檻もするなり。不廷の國不義の臣ある時は、兵刑の政あり。司馬司寇の官を設けて、武備怠りたまはず。斯するは撫育を偏ねくせんためなれば、兵刑も亦仁政なり。されば治亂共に、文武は政道の全體なり。爾るを各別の事の樣に思へるは誤りなり。されば治國平天下の大道を理會せぬ人は、輙くしり難からんか。

一。異國は奈何もあれ、我國は假名國なれば、學問せねばとて凡の事支るにしもあらねば、氣くだしに物學びんは無益なりと思ふ人あり。さる人は學ばでもありぬべし。强て進めなどせんは、進むる人の愚かにてぞある。下士聞レ道而大笑といへり。志なき人聖人も如何ともすることなし。信向なき人に敎るは、石に物を種るが如し。生成すべき理なし。それを佛氏の後世勸めて平等

周南先生爲學初問上

一。我國の神道は卽ちもろこしの神道なり。昔は天照太神の御靈大殿に在まして、神宮皇居無㆓差別㆒といへり。祭祀の禮は輔臣の掌る所にて、朝政は皆神德を以ぞ行はれし。唐虞三代の禮は尙書三禮に載たり。大政は皆宗廟にて行はる。宗廟の制作、大槪後の世の朝堂にひとし。祭祀の禮を治め、神靈の命を受て行はれければ、異國本朝神聖の道は同一揆なり。後の世に官職分れて、中臣齋部の掌る所は、卽ち漢土の大宗伯の職にて、祭祀の禮を掌れり。朝政の中の一職にてあり。大宗伯に准じて神祇伯とは名付られぬ。人事は皆天のなす所なれば、天地神明の感應なくては治らず。政事皆神明の命を受て行ひ給へば、王道神道差別なく、治世安民の道にてぞあるべき。易に聖人設㆓神道㆒而治㆓天下㆒といへる、是なり。上古は淳朴にて禮文未㆑備、他の國も我國も、世の初めは皆神の代にてぞある。人の世に移りてぞ人の禮義はありける。漢土は土地廣大なればにや、風氣早く開けて、我より先に禮文備りけるにこそ唐虞夏商を歷、周の世に至りて、禮文成就完備して、人道の規矩定りぬ。我國中古の世、古今の移りゆくことを深く考へ知給ひて、杳の海を凌ぎて使者參らせ、漢土の禮義を移し給ひてこそ、我國の禮文天地に參へて恥ざる事になりにけれ。世々の律令格式今もあれば、漢土の禮文移されたることはまがふべくもなし。然るを古の神道といふことをしらで、我國の神道は異國と異なり、其道はかう／＼な

右六經略說。爲二磐都世子一著レ之。世子雅好二經術一。一日謂レ純曰。予數聞二六經之名一。又聞二其義一。而未レ聞二其說之詳一。是以徒知レ宗レ之。而不レ知三六經果爲二何物一。雖レ欲レ請レ益。未レ由也已。願子爲レ予著レ書。予幸受而讀レ之。可二以釋一レ疑。純對曰。敬諾。遂用二國字一著二錄所一レ聞。以獻焉。夫六經之說。未レ易レ詳レ之。此猶略說耳。若必詳レ之。則在二善學一レ古者一云。世子諱乘薀。

延享元年十二月丙寅　太宰純

興亡をありのまゝに記して、國家の典禮を示し、懲惡勸善の意を知せたる者なるを、穿鑿して義理を求め、一字の褒貶といふことを要とする故に、二百四十二年、列國の君卿太夫士、過半有罪の人となる、毛を吹て疵を求むといふ者なり、胡安國が傳かくの如し、凡此類皆宋儒の六經を治る大謬なり、此方の仁齋先生も、宋儒を擊たるは豪傑なれども、六經に於ては全く工夫を用ざる故に、疎謬甚多きなり、此には姑論ぜず、

六經略說 終

一すぢといふは、天下の民を安くするといふ一塗の外に出ること無し、此一すぢの道を行ふには六つの術あり、譬ば人の身に耳目鼻口手足ありて、各其はたらきをなして、一身の用を足すが如し、六經は、聖人の道の耳目鼻口手足なり、一經一つも闕ては、天下の道に足らざること有り、人の身に耳目鼻口手足の六つの者、何れにても一つ闕れば、廢人となるが如し、又六經は其用各別にして、通用すること無し、人の耳目鼻口手足、各其役ありて、耳は目の代にならず、口は鼻の代にならず、足は手の代にならざるが如し、是六經の大義なり、宋儒此義を知らず、六經の名をば稱すれども、一經を說くに及ては、唯一經にて天下を治べしといふ、大なる謬なり、又詩は人情をありのまゝに吐露するのみにて、深き義理なき者なるを、他の經書の如く深き義理ありとおもひて、一句一字に就て義理を求め、或は詞に善惡ありとおもひて、勸善懲惡の說をなし、善を以て勸とし、惡を以て懲しとすといふ、朱子集傳の序に見えたり、書は二帝三王の天下を治たまへる事業を記したる者なるを、二帝三王の道は心に本づくとおもひて、只管二帝三王の心を求むることを說く、蔡沈が集傳の序に見えたり、禮樂の二つは、必其事を習て、其道に達し、其義理をも知ることとなるを、宋儒は事を捨て、只心法に就て義理の禮樂のみを談ず、譬ば劒術を習はずして勝負の理を談ずるが如し、勝べき理を明めたりとも、技術に拙くば、一擊に命を失はずとも、必大なる創をば被ん、此謬見は程子朱子の說に多く見ゆ、易は本來卜筮の書なるを、義理の書とおもひて、卜筮を廢して、只管義理を說て、身を修るより天下を治るまで、一部の易にて足れりといふ、伊川の易傳かくの如し、春秋は天下の治亂

を綴るなり、朝聘會盟に辭令を善するなり、辭令は、今の世の口狀なり、比事は、事に臨て先例を援て裁斷處置すること、春秋を學べる者の能する所なり、莊子に春秋以道二名分一と云るは、春秋の要は、天子諸侯卿太夫士庶人の名分を正し、禮義を明にするに在となり、今春秋を學んには、左氏傳を熟讀して、二百四十二年の事實を觀て、今日の事務に引合せて、是非可否を料簡すべし、古來の說を用て、一字の褒貶などいふことに拘り泥て、强て義理を求むべからず、公羊穀梁の二傳は、古書なれども、穿鑿の義多し、宋の胡安國が注は更に甚し、且議論慘刻にて、仁を害すること有り、讀ざるを好とす、後世溫公の通鑑、朱氏の綱目も、春秋に倣て作れる書なり、是を讀も、只事實のみを觀て、評語を看るべからず、評語を看れば、是非の心盛になりて、害を生ずること多し、是春秋を學ぶ者の用心なり、凡古今春秋を說く者、皆義理を求むるの甚しきに由て、却て正義を失ふこと有り、孔子の本旨に違ふなり、愼まずばあるべからず、

○六經は道の名なり、書籍の名に非ず、六經の中にて、書籍といふ者は、書經と春秋との二經なり、詩はうたひものなれば、うたひておぼゆる者なり、禮樂の二つは、其事を習ふのみなり、易は六十四卦の象數を學て知るのみなり、文王の卦の辭、周公の爻の辭ありてより、纔に上下二篇の經となれり、今の初學者、六經の義を知らず、古より六部の書籍ありとおもふは、誤なり、六經を書籍となして傳ることは、孔子より以來の事なりと知るべし、經字の義は、前に云る如くなり、六經を道の名なりといへば、聖人の道分れて六つとなる樣に聞ゆれども、さにはあらず、聖人の道は唯ひとすぢなり、

夫を遣すを小聘といふ、諸侯の朝聘するを、節二春秋一といふ、古の詞なり、朝聘は時節一同ならざれども、四時の中にて、春秋を時として朝覲聘問するといふ義にて、節二春秋一といふなり、朝聘は、自國と他國と往來して、更に賓となり主となる事なれば、其禮むつかしく重きこと、餘事の比類にあらず、此故を以て國史を春秋と名づくるなり、漢書の藝文志に、春秋の事を記せるに、假二日月一以定二歷數一。藉二朝聘一以正二禮樂一と云るも、此義なり、國史には、祭祀軍旅はいふに及ばず、餘の大事をも書すれども、朝聘を以て重しとして、春秋と名づくるなり、楚の申叔時が太子を敎る法をいへる最初に、敎二之春秋一而爲レ之聳レ善而抑レ惡焉、以戒二勸其心一と云るは、春秋を敎るに因て、善を聳め惡を抑て、太子の心の不善を戒め、善を勸むとなり、申叔時が云る春秋は、其國の春秋なり、是を以て觀れば、古は諸侯の國に各春秋ありしと見ゆ、今六經の春秋は、魯の春秋なり、諸國の春秋あるべけれども、孔子魯人にて、本國の春秋を修して世に遺したまへる故に、他の春秋は傳らず、魯の春秋のみ後世に傳れるなり、春秋を學べば、國政の善惡成敗、君臣の行事の得失、天地の災祥變異、國家の治亂興亡、自國のみならず、他國の事まで皆歷歷として明に見ゆる故に、事變に達し、知識も廣くなり、物に當て疑惑すること無し、是春秋を學の益なり、詩書禮樂は敎なり、春秋は實錄にて善惡雜記せる故に、上に云る如くの益あり、君子詩書禮樂を學て、身を修るには餘あれども、天下國家の事に臨て、春秋の義を知らざれば、大疑を決し大謀を立るに、必おぼつかなきこと有り、是に因て六經に春秋を入て、天下を治る道具とせるなり、經解に屬辭比事春秋敎也と云るは、屬辭は、辭

に絜靜精微易敎也といへるは、君子易を學べば、心の疑慮除て淸潔になり、動轉止て靜になり、陰陽變化の理に達して、精微を知ることをいへるなり、繫辭傳に、聖人以レ此洗レ心と云るは、すなはち潔靜の義なり、莊子に易以道二陰陽一と云るは、易を知れる至極の言なり、易は、陰陽變化の道を卦爻に寫て見せたる者なり、君子の學は、詩書禮樂の四術にて、身を修る道備りぬ、其上に又易を學ぶは、何の爲ぞといふに、詩書禮樂を學ても、易を學ざれば、陰陽變化の理を知らず、陰陽變化の理を知らざれば、政をするに、時に逆らひ無理をすること有り、又卜筮も天下國家の事に所用あり、上に云る如くなり、易を知らざれば、卜筮の吉凶を辨ずることあたはず、畢竟君子の身を修るは、詩書禮樂にて事足れども、天下國家の政をするに及て、易を知らずして叶はざる義あり、六經に易を入たるは此義なり、六經は天下を治る道具なる故なり、

〇春秋は國家の記錄の名なり、國家の事は、朝聘より大なるは莫し、左傳に、國之大事、在二祀與一レ戎と云れば、祭祀と軍旅とを國の大事とすること、固よりの義なれども、祭祀は恆例の事なり、軍旅は非常の事なり、祭祀は禮典に定式ありて、歲時に懈ること無かるべし、軍旅は、出るに治兵の禮あり、入に振旅の禮あり、武備は常に其制あり、兵賦の多少は、國の大小に隨て定法あり、軍を出すは常に無き事なれば、國の大事なれども、國史の名とすべきに非ず、朝聘は國家の大禮なり、朝に朝覲なり、今いふ參覲なり、諸侯の天子に朝するのみならず、諸侯と諸侯と相朝するをも朝といふ、聘は、諸侯より使を天子に遣し、使を諸侯に遣すを、皆聘といふ、卿を遣すを大聘といひ、大

消の時に當れば、消の時ぞと知て、消に處する道を工夫するのみにて、憂る心なし、息の時に當れば、息の日久からずして、又消すべしと思て、恐懼を忘ず、損の卦の彖傳に、消息盈虛、與レ時偕行と云るは、此義なり、消息盈虛の理を知れば、時に隨て易き道を行ふなり、又寒暑の往來は、定れる事なれども、常の人は其時に臨まざれば、これを知らず、君子は寒の時に當ては、寒去て暑來るべきことを思て、寒の時に暑の備を用意す、暑の時に當ては、暑去て寒來るべきことを思て、暑の時に寒の備を用意す、かくの如くなれば、時に臨て惑ふこと無し、是皆易を學て陰陽變化の道を知る故なり、身を修るより以上、天下國家を治るに至まで、皆かくの如し、聖人仰觀俯察して、陰陽變化の道を見て、これを天下の人に示ん爲に、八卦を畫し、八卦を重て六十四卦となして、天地萬物の理を窮め、萬物の性を盡し、天命必然の處まで推到る、これを名づけて易といふ、易といふは、往來變化の名なり、天地萬物の理を窮たる者なる故に、此易を用て、蓍を揲り卦を立て筮すれば、事の吉凶見えて、疑を決し未來を知るなり、繫辭傳に神以知レ來といひ、占レ事知レ來と云るは、此義なり、君子は何事も義に由て行ふ者なれども、事の兩可に涉るに遇ては、疑あることを免れず、其時に當て疑を決すること、卜筮を捨ては更に他の術なし、又大事を行ひ大衆を動すに、君子は其義を知て惑ふこと無かるべけれども、小人愚民は義を知らねば、疑ひ危む心ありて、果決しがたし、其時卜筮を用て吉兆を得て事を行へば、衆心一致して必其功を成すなり、是卜筮の道、天下國家の事に預りて、其用甚重きなり、易は本卜筮の書なりといふは、朱子易經の功用をいへるなり、經解

榮へ、西市衰れば東市榮るが如き是なり、消息盈虚といひ、消長といふ、皆陰陽變化の類にて、易の道なり、消息盈虚は、小くいへば、一歳一月の内に有り、大にいへば、人の一生に幾度も有るなり、天下の治亂の如きは、數十年數百年に一たび有り、是又大消息、大盈虚なり、易は最初一陰一陽を生じてより、一陰又陰陽を生じ、一陽又陰陽を生じて、生生の理窮ること無し、聖人卦爻の上に於て此理を示したまへり、又易は時の一字を要とす、消の時到れば必消す、息の時到れば必息す、消の時を息に返し、息の時を消に返すことは、聖人も能したまはず、都て人力の及ぶ所に非ず、時節到來せざれば、聖人ありても何事も成就せず、時節到來すれば、中材の人も功を立ること有り、此等の道理は、易を學て知ることなり、又易に數あり、數とは物の命數なり、譬ば菓實の如し、最初花落て實を結ふ時、其數幾千萬といふことを知らず、月日を經る内に、其實熟するを待ずして落る者過半なり、熟する時に及て、樹上に留まる者、僅に十の二三なり、是造物者の所爲なれども、究竟するところ、其物の定れる數なり、又陶工の器を作るに、數十の中に、いまだ燒ずして破るゝ有り、燒て後に破るゝ有り、其成就せる中に、又好き有り惡き有り、それより世人の用となりて、幾ほども無く破れ失する有り、幾十百年を經て久く存する有り、此等は人の手にて作る者にて、造物者の所爲にもあらねども、其成敗に自然の數あり、凡萬物萬事に皆かくの如くの數あり、人も亦然なり、人の上にてはこれを命といふ、君子は必これを知る、不レ知レ命。不レ可三以爲二君子一也と、論語に云り、君子易を學べば、命を知り時を知る故に、凡消息盈虚、吉凶禍福の事に於て、惑こと無し、

の外には是を習ふ者なかりしと聞ゆ、近世に及ては、民間に種種の淫樂興て、士大夫もこれを悦ぶ故に、雅樂いよ〳〵廢れて、樂は如何なる物といふことをだに知らずして、一生を過す者あり、若稀に樂を學んと思ふ者ありても、絃は必公家より傳へ、管は必樂人より傳ふる法なれば、志ありても、其師なくて得學ばぬ者多し、是大に聖人の樂を以て敎としたまひし意に背けり、昔の如く民間まで に及ぼさずとも、士大夫の中には、樂を學ことの容易なる樣にあらまほしきなり、是風俗を化する要術なればなり、今の樂器は、琵琶箏和琴を三絃といひ、笙笛篳篥を三管といひ、鞨鼓大鼓鉦鼓を三鼓といふ、此中に三絃は公家に傳來し、三管三鼓は樂人の家に傳來して、常の人も志あれは皆學得るなり、此方の樂は、皆隋唐以來の樂にて、古樂に非ずといふは、樂を知らざる者の說なり、上に云る如く、隋より以前、古調猶存せる時に、此方の人學得たる故に、傳來の樂曲には六朝以來の曲も多けれども、音律の調は、全く古樂の調なり、唐より已後、古調變じたれば、中華の樂は、却て今の日本の樂に及ばずと知るべし、

○易は陰陽變化の道なり、天地開闢してより、陰陽の二氣、往來變化すること暫も止まず、往來は、晝夜寒暑の如き是なり、變化は、生成榮枯の如き是なり、又消息盈虛といふは、消は物の消滅するなり、息は物の生出するなり、盈は滿溢するなり、虛は虧損するなり、萬物一たびは消し、一たびは息し、一たびは滿溢し、一たびは虧損す、消息は、物の盛衰なり、盈虛は、月の圓缺、海水の潮汐の類是なり、又消長といふは、世に君子衰れば小人興り、君子興れば小人衰へ、東市衰れば西市

に用るに害なきなり、今の猿樂の笛鼓は、殺伐の音なり三線は、淫娃の音なり、皆中和を失へる故に、人の心を傷り、或は人の心を蕩す、皆人に害あり、唯古樂は、天地中和の音なる故に、聽く者も中和の德を養ふこと妙なり、心を正くする術、樂に勝る者なし、此方の古人は、琴を能く彈ぜしこと、源氏物語などに書る如し、然るに何れの時よりか此事廢れて、近世は公家にも琴を彈ずる人を聞かず、且古は日本も雅樂のみ有て、他の俗樂なかりし故に、貴賤皆雅樂を習て、朝暮に是を玩て心をなぐさめしこと、源氏物語などに書るを見るべし、源平の世に至て、新羅三郎笙に堪能にて、豐原時秋に笙の大事を授られしこと、著聞集に見えたり、其餘は推て知べし、俗間に白拍子などといふ者ありて、平相國もこれを好たまへれども、平氏の公達は皆雅樂を習て、舞などをも能せられたり、後白河の法皇の七十の壽筵に、小松の維盛淸海波を舞れしが如き、其世には珍からぬ事なり、賤き者には、矢作の長の女淨瑠璃が侍婢を集て管絃して遊たりし、又平重衡囚となりて關東に下しに、手越の妓女千手が箏を彈じければ、重衡琵琶を彈じて、五常樂皇麞廻忽の三曲を奏せられしなどいふ事あり、北條氏の世の末に、田樂といふ者ありて、高時これを好めりしかども、武士たる者田樂を習へることは無しと見えたり、其比も楠正成は琵琶を好み、足利の尊氏は笙を吹たまひ、新田の義貞は笛を吹たまひ、中にも義貞は殊に堪能にて、越前に居たまひし時、陵王の荒序を吹たまひし事あり、荒序は、今は樂人も容易には吹ざる事なるを、義貞これを吹たまひしは、誠に有がたく殊勝なる事なり、室町の時より、猿樂ありて、武家の樂となる、是より雅樂廢れて、公家

太師に逢ては樂を語たまひ、師摯が關雎の亂を始るを聞ては歎美したまひ、賓牟賈と武の舞を論じては、其義を盡したまふ、衞より魯に返て、樂を正したまへば、雅頌各其所を得たりと云ふ、孔子の樂に心を用たまへること淺からざるを見るべし、秦漢以來は、古樂崩て世に行はれざれども、其音律法制は遺て、六朝の末、隋の初まで傳はれり、隋の世に樂大に變じて、唐宋以來の樂は、古樂に非ず、日本の樂は六朝より傳たる故に、古樂の制なり、樂人これを守て失はざる故に、今の世まで傳はりて、志ある者は學習することを得るは、大なる幸なり、此方の樂器は、絲の屬には、琴、箏、琵琶、和琴なり、昔は阮咸、箜篌、箜篌、新羅琴などといふ者も有しこと、延喜式に見えたれども、今の世には傳らず、竹の屬には笙、篳篥、横笛、高麗笛、神樂笛、洞簫、大篳篥、尺八なり、洞簫、大篳篥、尺八は、今は樂に用ず、尺八は、俗に一節截といふ者なり、長さ一尺八分なる故に、尺八といふ、今の虛無僧の吹く尺八といふ者は、洞簫の類なり、一尺八寸なる故に、是をも尺八といふなり、其制は三節截なり、笙は本匏の屬なれども、今は匏を用ず、頭を木にて作れば、是も竹の屬なるべし、革の屬には大鼓、羯鼓、三鼓なり、金の屬には鉦鼓なり、鉦鼓は磬の代なり、磬は石の屬なるを、鉦鼓は金にて作る故に、金の屬なり、木の屬には笏拍子なり、此諸の樂器の中に、笙琴は皆上古の樂器なり、其餘は秦漢以來の樂器なり、新羅琴高麗笛は、三韓より來れる樂器なれども、本は中華の古器なるべしと、先儒云り、和琴神樂笛は此方の樂器なり、箇様に種種の樂器ありて、必しも皆聖人の制作にあらざれども、樂は聲音を主とす、何の器にても、其音中和に協へば、樂

るは、其功緩く、淫樂にて風俗を惡くするは、其變速なり、是國を治る者の知らずして叶はざることなり、先王の道、百世に及て、民の風俗を維持して、敗れしめざるは、只是樂の力なり、他の諸子百家の道も、國家を治ることをいはざるは無けれども、樂を以て風俗を維持することを知らざる故に、畢竟先王の道に及ばざるなり、是先王の道と諸子の道との分るゝ處なり、又禮は嚴敬を主として、尊卑上下を辨別する者なり、禮を行て樂を用ざれば、尊卑上下の間隔絶して、情意も通ぜず、樂は和樂を主として、慈惠を施し、情意を通ずる故に、大禮には必樂を用て、人の心を和樂せしむ、樂記に、禮自レ外作。樂由レ中出と云るは、此義なり、禮は嚴肅なる者にて陰に屬し、樂は發揚する者にて陽に屬す、是禮樂の二つは、車の兩輪、鳥の兩翼の如くにて、相離ざる者なり、古の君子の德を養ふ術、此二つの者に在り、又樂は本技藝にて、其業を習ふを務とする故に、其道書籍に在らず、されば古の樂經といふは、只譜を傳るのみなるべしと、先師云り、譜は歌舞八音に皆あるべし、其中一二は遺て、今の世までも傳はれり、經解に、廣博易良樂敎也と云るは、廣博は、心の廣きなり、易は心のむつかしからぬなり、良は、心に癖なきなり、人がらのかくの如くなるは、樂の敎の德なり、莊子に樂以道レ和と云るは、樂の主意は、只和の一字に在ことをいへるなり、すなはち上に云る如くなり、昔孔子は、樂を萇弘に學たまひ、琴を彈ずることを師襄に學たまへること、家語に見えたり、論語に磬を擊たまふ事を記せるは、師襄は擊磬の職なれば、此人に學たまへりと見ゆ、齊國にて韶を聞たまふといふも、聞くはすなはち學ぶなり、韶の樂を學たまへるなり、魯の

を治る術は、樂なり、樂記に致レ樂以治レ心と云る、是なり、又樂也者。聖人之所レ樂也。而可三以善二民心一とも云り、心を治め心を善するといふこと、唯樂にのみ有て、他術に無きことなり、樂を聽けば、暴厲なる者も惻怛の心起り、懦弱なる者も奮激の心起るなり、國語に、楚の申叔時が太子を敎ることを說るに、敎二之樂一以疏二其穢一而鎭二其浮一と云り、疏は疏滌なり、鎭は鎭壓なり、心の穢を疏滌して、其浮たるを鎭壓するは、樂の力なり、又孝經に、移レ風易レ俗。莫レ善二於樂一と云るは、民の風俗を移し易る者、樂に勝ることなしとなり、前に云る如く、人は何にても心を慰て樂むわざ無くてはあられぬ者なり、樂むわざの中にて、音樂ほど心を慰ることは無し、音樂をなして樂むより、民の風俗自然に移り易る者なり、然るに雅樂行はるれば、民の風俗善くなり、淫樂行はるれば、民の風俗惡くなること、人力の及ぶ所に非ず、雅樂は聖人の作にて、甚しく面白からざる故に、人も亦これに耽らず、譬ば水の味の淡きが如し、淫樂は俗人の作にて、甚しく面白き故に、人も亦これに耽る、譬ば酒の味の醇きが如し、先王民の情を知たまひて、雅樂を作てこれを敎へ、淫樂を禁じて行はしめず、人皆雅樂のみを玩て心を慰め、宴饗にも是を用て、君臣父子夫婦兄弟朋友の際までを和げ、祭祀にも是を用て、天地鬼神を感格するに至る、貴賤男女、唯此樂をのみ玩て、他の俗樂淫聲をば、終身耳に聞かざる故に、民の風俗いつまでも頹れざるなり、後世に及て、種種の淫樂起て、甚しく面白きことなる故に、人多く雅樂を厭て淫樂を好む、是より民の風俗惡くなり、士大夫國君までもこれに化せられて、淫亂放逸になる、皆淫樂の力なり、總じて昔より雅樂にて風俗を善くす

と有り、成長して喜樂の事には、歌舞して歡情を抒ること有り、悲哀の事には、啼哭して慘怛を泄すこと有り、役夫の力作するにも、聲を揚て喚應すること有り、凡何にても心に思あり、內に欝することと有れば、必巳ことを得ずして聲を發するは、人情の自然なり、聖人是が爲に樂を作り、人情の喜怒哀樂に象て、歌舞管絃の節をなし、五音六律の調を設て、過るを抑へ、及ばざるを助て、人情を中和に合す、是樂の起れる本原なり、凡樂は歌より始まる、歌は人の思より出る詞なり、是すなはち詩なり、舞はこれを形にあらはす者なり、金石絲竹匏土革木の八音は、物の音にて歌に合する者なり、鐘は金の屬、磬は石の屬、琴瑟は絲の屬、簫管は竹の屬、笙は匏の屬、塤は土の屬、鼓は革の屬、柷敔は木の屬なり、此中に、君子の常に玩ぶ者は、絲竹の二音なる故に、管絃といふなり、管は竹なり、絃は絲なり、八音の器に、各五音六律あり、五音は、宮商角徵羽なり、六律は、黃鐘、太簇、姑洗、㽔賓、夷則、無射を陽とし、林鐘、南呂、應鐘、大呂、夾鐘、仲呂を陰とす、陽を律といひ、陰を呂といふ、陽を以て陰を總て六律といふ、實は十二律なり、日本にては十二調子といふ、壹越、斷金、平調、勝絕、下無、雙調、鳧鐘、黃鐘、鸞鏡、盤涉、神仙、上無、是なり、十二律は、萬物の聲の高下なり、五音は、淸濁高下の次序なり、萬物の聲、五音十二律の外に出ず、若此外に出るは、中和の音に非ず、中和の音に非れば、樂の德なし、周禮に樂德六つ有り、中和祇庸孝友なり、此中にて、中和を樂の主とするなり、天地を動して、八風を調へ、人の心を和げて、中に協しむるは、樂の力にて、樂の中和の德ある故なり、聖人の敎に、心を治むることをいはず、心

是禮の敎の德なり、莊子に禮以道レ行と云るは、禮は、人の行を第一として敎る者といふ意なり、秦漢以來は、古禮經亡て、僅に遺るところ、儀禮、周禮、禮記、大戴禮なり、儀禮は、古の禮經の殘編にて、經禮三百の數の中なり、周禮は、周の世の官職なり、禮記大戴禮は、孔子の時、七十子と禮を講じたまへるを、門人記錄して傳たるなり、漢の世に及て、戴氏の家より傳し故に、戴記ともいふなり、又論語、家語、左傳、管子、孟子、荀子等の書にも、古禮の文雜見せり、今の世には其事を知たる師も無く、古禮の詳ならぬ事も多ければ禮を學んとするに便なし、只此等の禮書を熟讀して、古禮はかくの如くなる者ぞと知て、今日の俗禮の是非を考て、少も心を禮に用ば、禮を好む君子といふべきなり、

○樂は、本君子のなぐさみなり、凡人は動物なる故に、平居閑暇の時、するわざ無て只はあられぬ者なり、するわざ無てひまなるを、閑居といふ、閑居の時、何にても心のなぐさむこと無ければ、必よからぬ事をする者なり、大學に、小人閒居爲二不善一と云るは、是なり、論語に、飽食終日。無レ所レ用レ心。難矣哉とあるも、終日するわざ無て暮すは、難きことなりとて、世俗の勝負のなぐさみにてもするは、只あるにまさると孔子のたまへり、終日するわざ無て暮すの甚不可なることをのたまへり、されば古の君子は、故障だに無ければ、常に琴瑟を側に置て、閒暇無事の時は、必しも一曲を奏彈するにあらず、爪しらべなどして、つれ〴〵を慰しなり、是心を養ふ術にて、閑居して不善をなすに至るまじき爲なり、又人生れて幼稚の時、遊戯するに、必聲を發して歌謠するこ

制すとは、制は制止の義なり、情欲の起るを、禮にて制止するなり、先王の道は、情欲の起るを罪とせず、禮を犯て欲を縱にするを罪とす、釋氏は情欲の起るを無明煩惱と名づけて、一槩にこれを斷絕せんとす、宋儒は人欲の私と名づけて、これを禁止せんとす、是皆甚難き事なり、先王の道は、情欲の有無を問ず、只管禮を守て正く行ふ者を君子とする故に、志あれば誰も行ひ易き道なり、又先王の禮を、世後に及て必これを行んとにもあらず、禮記に禮從レ宜とあり、又禮運に、協ニ諸義一而協、則禮雖三先王未ニ之有一。可ニ以レ義起一也と云り、此意は、先王の禮の義に達すれば、千萬世の下にても、古に無き禮を始て制するに、難きこと無しとなり、又老莊楊墨申不害商君韓非等が如き諸子の道も、國家を治て治らざるに非ず、然れども彼等は皆衰世の弊俗を治る術にて、國家を興隆し、治安を保つ道に非ず、禮樂を弃て時の急に趣くが故なり、諸子の道とするところ、人人其旨ありて、一同ならねども、禮樂を弃ることは一同なり、先王の道は、重きことと禮樂に在り、禮樂を弃ては、國家治らず、縱治まれども、久からずして亂亡に至ると知るべし、是先王の道と諸子の道と異なる處なり、孝經に、安レ上治レ民。莫レ善ニ於禮一といひ、左傳に、禮。經ニ國家一。定ニ社稷一。序ニ民人一。利ニ後嗣一者也といひ、又禮、國之幹也と云り、幹は木の身にて、枝葉の附く所なり、此等は皆禮の國家に於て肝要なることをいへる詞なり、學者の上にていへば、經解に、恭儉莊敬禮敎也と云り、恭は、人に高ぶらず、己に誇らず、謙退するなり、儉は、事をひかへてうちはなるなり、莊は、容儀の整りて惰慢ならざるなり、敬は、事を愼て輕忽ならざるなり、禮を學ての益は、其人がら恭儉莊敬なる、

どいふ者を見たるのみにて、師の口訣指敎を受ざれば、其事を行ふことあたはず、況や先王の禮に於てをや、祭禮は孔子素學で知たまへども、太廟に入て祭を助たまふ時は、必每事人に問たまひて、是禮也とのたまへるを見て、禮の重きことを知るべし、凡先王の道は、形も無く體も無き者なり、道の形となり體となる者は禮なり、禮は道を載て行く者なり、道は如何なる者といふことを知らざれども、禮を學て、敎の如く行へば、是すなはち先王の道を行ふなり、又先王の道は、人の必すべき事と、必すまじき事とを定置る・是を義といふ、義は譬ば物に大小多少長短輕重ありて、これを用るに各宜き所、當る所あるが如し、今日の人、心にて此宜き所、當る所を求れば、人人の異見にて、過不及ある故に、如何にも中を得がたし、先王の禮に從へば、心を勞せずして中を得るなり、禮は本中を立たる者なる故に、禮を行へば、すなはち好きほどを得るを中とするなり、古人の言に、先王の制と云るは、皆禮を指て言り、制は、今の世に定といふ意なり、禮は先王の定なり、荀子に、曷謂レ中。曰。禮義是也と云り、先王の禮は、皆義を以て制する故に、禮には必義あり、禮に義あるは、譬ば人に魂あるが如し、義は虛なり、禮は實なり、されば禮運に、禮也者、義之實也と云る、是聖人の旨なり、宋儒は禮を離て義を說き、禮を外にして中を求む、禮を離て義を說は釋氏の義學なり、禮を外にして中を求むは、子莫が中なり、皆先王の道に違背するなり、又先王の道には、心を治ることをいはず、心は治れるか治らざるかと問ず、只禮を守る者を君子とす、禮を守て身を固むれば、心も漸漸に治まるなり、書經の仲虺の言に、以レ禮制レ心と云るは、成湯の行狀を述たる詞なり、心を

り、

○禮は天下の萬事の儀式なり、禮に五禮あり、一を吉禮といふ、祭祀の禮なり、二を凶禮といふ、喪禮なり、喪は、人の終を哀む道なり、三を賓禮といふ、賓客の禮なり、四を軍禮といふ、軍旅の禮なり、五を嘉禮といふ、冠婚の類なり、冠禮は、元服の禮なり、婚禮は、婦を娶る禮なり、萬事の儀式を五つに分て、吉凶賓軍嘉の五禮にて百禮を統るなり、又冠婚喪祭の四つは、天子より庶人まで、無くて叶はざる禮なり、此外に、吉は鄕飮酒士相見の二禮あり、鄕飮酒禮は、鄕黨の人に酒を飮しむる禮なり、士相見禮は、大夫と士と相見する禮なり、冠婚喪祭に此二つを加て六禮といふ、凡五禮の類は、先王の時より、其式法條目次第定まれるを、先王の制といふ、冠婚喪祭の如きは、禮の大綱なり、此大綱を經禮といふ、經は經緯の經なり、經禮の大數三百餘條ある故に、經禮三百といふ、經禮に又各委曲の小節目あり、升降趨走坐立拜揖進退周旋の類、其大數三千餘條ある故に、曲禮三千といふ、或は禮義三百、威儀三千とも云り、此三百三千の禮儀は、皆一一に師の敎を受て、其業の習熟せざれば、事に臨て其禮を行ひ得ること無き故に、孔子の聖智にても、老聃に就て學たまへり、況や孔子に及ばざる者をや、後世の儒者、孔子は聖人にて、生知安行なれば、何事も皆學はずして知たまふ、然るを學而不レ厭とのたまふは、人を勸る謙詞なりといふは、大なる謬なり、凡禮樂は皆事なり、師の敎なくては、聖人も知たまふことあたはず、禮書禮經といふ者あれども、只其條目次第を書つけたるのみにて、其事は必傳授を得て詳に知るなり、今の世の俗禮すら、次第書な

君には成王康王あり、臣には周公旦召公奭康叔蔡仲君陳畢公君牙伯冏呂侯あり、諸侯には晉の文侯、魯公伯禽、秦の穆公あり、其言行事實を記錄して、凡三十二篇となせり、虞夏商周、合せて五十八篇なり、昔は百篇なりしが、缺失て、今存する者五十八篇なり、書には六體あり、一を典といふ、典は法なり、二典是なり、二を謨といふ、謨は謀なり、三謨是なり、三を訓といふ、訓は敎訓なり、伊訓の類是なり、四を誥といふ、誥は衆人に告るなり、湯誥大誥の類是なり、五を誓といふ、軍旅に誓ふなり、甘誓湯誓の類是なり、六を命といふ、帝王臣に命じて官人とし、或は諸侯とする命令の詞なり、說命畢命の類是なり、かくの如く六體ありて、其文同からねども、畢竟皆先王の法言にて、天下國家の規矩法則なり、詩には天下のあらゆる人事人情を盡して、義理を極め、書には天下の大中至正の道を載て、義理を極たる故に、左傳に詩書義之府也と云り、府は、財寶を納る藏なり、天下の義理、詩書二經の中に納りて有といふ義なり、されど古人何にても人と事を論じて、其卒に、詩を引かざれば、書を引て、己が義を證明す、先王の法言なる故に聞く者これを破ることを得ず、是先王の道の天下に貴き所なり、古は只書とばかりいひしを、漢の伏生より尙書といふ、尙は上なり、尊稱なり、上古の書なるを以て、尊て尙書といふなり、六經の中にて、只讀て文義を解するを以て學とする者は、尙書ばかりなり、書を學べば、能く天下の義理に通じて、遠き事を知る故に、經解に疏通知遠書敎也と云り、疏通とは、道理分れて碍なきをいふ、人の才智かくの如くなるは、書の敎の力なり、莊子に書以道ㇾ事と云るは、尙書は二帝三王の書にて、皆天下國家の事を記せる故な

を習ふ如く、ふしにてうたひおぼへて、それより後は、宴饗に必これを歌ふ、平日は其詞を誦して、忘ざる様に心がくる故に、いつとなく其文句を熟記して、自然に其意をも領解するなり、其詞も皆其世の詞なれば、後世になりては時代移り、人の詞も變じて、註解を得ざれば、其意義を知ることあたはざるが如くにはあらず、詩を學べば、其人がら溫柔とやはらかに、敦厚とあつくなる故に、經解に溫柔敦厚詩敎也と云り、君子の德を養ふこと、詩より始まる故に、四敎の第一に是を立たり、今時は歌ふことは其法亡て習ふべき樣なければ、只三百篇の詩を讀誦して、其詞を記憶し、其義理を知て、古人の引用たる意を會得するまでの事なり、かくの如くにても、詩を學ぶといふに叛かざるべし、莊子に詩以道ㇾ志と云るは、上に云るが如し、

○書は、二帝三王の書なり、二帝は、帝堯帝舜なり、三王は、夏の大禹、殷の成湯、周の武王なり、虞書は二帝の書なり、堯舜の時は、大禹皐陶稷契伯益伯夷夔龍垂の臣あり、四岳十二牧の官人あり、凡二十二人、其人皆賢聖にて、君臣常に天下國家の道を論じ、互に相戒て、少も怠慢したまはず、威德を天下に施行ひたまへる事を記錄して、二典三謨の五篇とせり、夏書は、大禹の水を治たまへる次第、啓の有扈を征伐せんとて、軍旅に誓たまひし事、太康不君にて、五人の弟の歌を作し事、胤侯の義和を征伐せし事を記錄して、凡四篇となせり、商書は、成湯の夏桀を伐て、天下を取たまひし事より始て、君には太甲盤庚高宗あり、臣には伊尹仲虺傅說祖己祖伊微子箕子比干あり、其言行事實を記錄して、凡十七篇となせり、周書は、武王の殷紂を伐て、天下を取たまひし事より始て、

ひあり、父になれば、父の情にてすききらひあり、弟には弟の情あり、兄になれば、又兄の情あり、人の上となり、人の下となりて、好惡のかはるも、皆此類なり、一人の身すら、其居る所に隨て好惡の情かはれば、況や男女の情は各別にて、互に相知こと至て難し、又卿大夫より以上は、位ようやく貴ければ細民小人の賤き者の情を知らず、國君は又卿大夫よりも貴し、天子は又諸侯よりも貴し、位愈貴ければ、下を去こと愈遠し、且宮室奥深き内に住て、下民の匹夫匹婦の情をば何として知んや、下民の情を知らずして、妄に政令を出せば、民情に逆ふこと有り、民情に逆ひては、其令行はれぬ者なり、されば政をする者は、民情を知ことを務むべきなり、今天下の尊位に居て、萬民の情を知んとおもはゞ、詩を學ぶより善きことなし、詩には天下の人情を盡せればなり、今の世の諺に、歌人はゐながら名所を知るといふが如し、詩を學べば天下の事を知るなり、又詩は志をいふ者にて、人情の實より出たる者なる故に、天下の義理の至極を盡せり、されば古人何にても人とものいひて、義理の事に及べば、必詩を引て、己がいふ所の義理を證明す、詩を引ていへば、愚蒙なる者も得心す、車を横に推んとするほどの無理なる者も、其義理を得破らず、又宴饗に詩を賦するも、己が志を達せん爲なり、又詩は詞淺くして意味深き者なる故に、是を學たる者は、人の言語の意味に通ずること速なり、又詩は詞正くやさしき故に、是を學たる者は、自然に其詞うるはしく、君子の體に稱ふ、孔子伯魚に告て、不レ學レ詩無二以言一。とのたまひしは、此義なり、凡詩を學ぶの益は、論語に見えたる者詳なり、古人の詩を學ぶといふは、初より歌ふことを習ふなり、今の人の誦

傳の中に、國君士大夫の詩を賦するといふは、皆是なり、今の世に小諷を歌ふが如し、己が志を人に知せんとおもひて、常の言語にては盡しがたきを、詩を賦すれば、千言萬語よりも詳に達して、而も人の心に入こと深し、是詩の德なり、二に小雅、三に大雅といふは、雅は一つなり、雅は正と訓じて、雅の詩は皆正き詞なり、天子諸侯の賓客を宴するに、樂を奏して此詩を歌ふ、其事に小大ある故に、雅の詩にも小大あるなり、二雅の詩は民間より出るに非ず、皆士大夫の作なり、四に頌といふは、天地社稷宗廟を祭る時の樂歌なり、頌は容と訓じて、祖宗の德の形容を美て、鬼神に告る故に、これを頌といふ、頌は譽る意なり、頌の詩も、作者は皆在朝の士大夫なり、さて國風雅頌、凡て詩の數三百十一篇あり、此内小雅の中に、笙の詩六篇には詞なし、詞ある者三百五篇なり、其大數を擧て三百篇といふ、論語に詩三百といふ是なり、三百篇の詩には、天下のあらゆる事、天子より庶民までの、外內公私の所作、天下のあらゆる人情、あらゆる義理、皆ことごとく此中に在て、おほかた遺ること無し、凡人情は、天子國君より庶民に至まで、其居る所の位によりて、それぞれにかはる者なり、其故いかにといふに、人情といふは、約ていへば好惡の二字なり、好はこのむ、惡はにくむと訓ず、このむとは心にすくなり、にくむとは心にきらふなり、然れば好惡はすききらひなり、人のすききらひは、其身の居る所にてかはる者なり、一人の身にて、人の君になりたる時は、君の情にてすききらひあり、人の臣になりたる時は、臣の情にてすききらひあり、都て人は己がかつてによきことを好み、己がかつてにあしきことをきらふ者なり、子は時に、子の情にてすききら

て、臣下の職事を知たまへば、臣下官事を務る心なくて、萬事墮れ廢るとなり、此帝舜と皐陶との歌は、すなはち詩の始祖なり、又夏の太康逸豫盤遊して、君の德を失ひ、畋獵を好て、政事を懈たまひしかば、其弟五人これを怨て、大禹の戒を述て、五首の歌を作れり、此歌どもは、皆書經に載て、上古の事なり、歌といふは、すなはち詩なり、詩經は多く周の世の詩にて、殷の世の詩も少まじれり、四詩といふは、一に國風、二に小雅、三に大雅、四に頌なり、一に國風といふは、諸國民間の歌謠なり、歌謠といふは、今の世の民俗のはやりうたの如くなる者なり、又田家の麥つきうた、磨ひきうた、或は馭子の歌ふ馬かたぶしなどいふ類なり、此等の歌は、國國の風俗ありて、詞も聲もふしも各別なる故に、總じて是を國風といふなり、此方の萬葉集の歌是に似たり、國風の中に、國君の夫人、卿大夫などの作れる詩も有れども、畢竟其國の風俗なる故に、國風に編入たり、此中には男女夫婦の情を語り、親を思ひ、子を思ひ、君を怨み、夫を怨み、不肖なる君を刺り、賢なる大夫を美め、國政の正からぬを歎き、或は貧士の仕宦に勤勞するを憐み、或は匹夫匹婦の室家を安んぜざるを憂るが如き、凡世間にありとあらゆる事、大小美惡、賤き者の所作までも、いひのこせること無し、されば國風の詩を觀れば、其國の政の善否、風俗の美惡、皆見ゆるなり、古の時、天子の太史官、諸國の詩を採集て、王朝の樂府に列す、其中にて詞がらの文雅にして野鄙ならぬを選て、これを音律に協て、君子の宴饗にこれを歌はしむ、樂府とは、此方にいふ樂所なり、本は賤き男女の詞なれども、一たび王朝の樂府に入ぬれば、君子の宴饗にもこれを歌て、己が志を述るなり、左

○詩はうたひものなり、孟子に、心之官則思と云り、人の心は思ふを官とする故に、閑暇無事の時も、何かは知らず、思ふこと無きこと有らず、況や物に感ずること有れば、其事に隨て、或は喜び、或は怒り、或は哀み、或は樂み、或は愛み、或は惡む、喜怒哀樂愛惡は、人の情なり、此情内に起れば、すなはち言に形れ聲に發す、輕きは呻吟し、重きは咨嗟詠嘆す、猶已まざれば、言に形る、言に形れて、人に告語るべき樣もなければ、只其心の思ふ所を詞に綴て唱出す、是を詩といふ、詩を心の聲といふは、此義なり、凡人の心に喜怒哀樂の起るは、皆心の不平なり、此不平なる思を人に告語んとするに、常の言にては如何にも陳盡しがたく、又心中の曲折なる處は、人に向ていひがたき事も有り、增て人を怨み人を刺る類の事は、殊に常の言にて顯にはいひがたき者なり、然るを詩には如何なる事をも言て、常の言にて盡しがたき事をも、僅の詞にて說盡す、人を怨み人を刺る類の事ありても、聞く者怒らず、言ふ者罪なし、又常の言語にては、人の心を動かすことも無きに、詩にては人の心を動すのみならず、天地鬼神をも動かすこと妙なり、毛詩の序に、動二天地一。感二鬼神一と云るは、是なり、昔帝舜群臣と天下の政を論議したまひて、卒に歌を作て、股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉と歌ひたまふ、股肱は臣なり、元首は君なり、百工は百官なり、此意は、臣下喜て忠を盡す故に、君上の功業起り、百官の職事廣まるとなり、時に皐陶これに答て、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉と歌ふ、此意は、君の德明なる故に、臣下賢良の才を盡して、萬機の庶事治り安しとなり、又これに次て、元首叢脞哉、股肱惰哉、萬事墮哉と歌ふ、叢脞は瑣碎なり、此意は、君の行ひ瑣碎に

んとするなり、中庸に、仲尼祖二述堯舜一。憲二章文武一と云り、六經はすなはち堯舜文武の道にて、孔子の祖述憲章したまへる所なるに、論語を上として、六經を下とするは、冠履倒置といふ者なり、凡先王の道といふは、物なり、物といふは、六經なり、物なるが故に、或は六藝ともいふ、物を捨て理を語るは、老子の道なり、物を捨て心を語るは、釋氏の道なり、學者是を知らずばあるべからず、是道の分辨なり、六經の大義なり、又漢の代に經術といふは、六經を學て、國家の治道經濟にこれを用るを、經術といふ、宣帝の公卿大臣當下用二經術一明中於大誼上とのたまひし、是なり、治道經濟は、必六經を學び、先王の道を知たる上に、位を得、時を得て、これを行ふ故に、經學と經濟とを合せて、經術といふなり、先王の道は、天下を治る術なる故に、是を道術ともいふ、漢書に　霍光を譏て不學無術と云るも、經術なきことをいへり、儒術學術といふも、皆經術をいふなり、漢の世はいまだ古訓を失はざる故に、術といふことを嫌はず、後世に及て、術數術解妖術幻術などいふことと有るによりて、宋儒術の字をいふことを嫌ふは非なり、經術といふことを嫌て、經學といひて、只管經書の義理を尋求て、心性の微妙を談ずるを事とす、別に經濟とて、國家の治道を論ずるをば、經學の外の俗事とおもへり、是に因て今の世には經學と經濟とを兩岐となして、各別に心得る者、學者の中に多く有り、是古今學術の變にて、宋儒より起れる禍なり、先王の道は天下を治る道にて、六經はすなはち其道具なることを知らざる故なり、先王は皆聖人なる故に、聖人の道ともいふ、孔子これを後世に傳たまふ故に、孔子の道ともいふ、孔子の傳たまふ道は、すなはち六經の道なり、

國家の用に闕る所ある故に、君子必これを學ぶ、六經は六種の道にて、其用同からず、六經一つも闕ては、天下を治るに必不自由なる事あり、人家にて事を行ふに、器財の足らぬ者あれば、其事行ひがたきが如し、されば六經は、天下國家を治る六つの道具と心得べし、宋儒は六經の中、何れにても一經を治得れば、身を修るより、家を治め國を治め天下を治むるまで、他經を用ひず、一經にて足らざる所なしといふ、朱子詩傳の序に其說見えて、程伊川の易傳、胡安國が春秋傳、蔡沈が書傳、皆一經を用て他經を廢する意なり、是佛者の宗門を立る者、法華經を用る者は、法華一部にて佛法を盡すといひ、華嚴經を用る者は、華嚴一部にて佛法を盡すといふが如し、佛法は一心を治る法なる故に、何れの經にても、學て其旨を得れば、心を治むるに不足なること無し、聖人の道は、天下を治むる道にて、六經は其道具なる故に、六つの中にて一つを闕ても、天下の治めに不足なること有り、又一經にて他經を兼ることもならず、一經を他經の代りに用ることもならず、譬ば刀には刀の用あり、扇には扇の用ありて、刀と扇と通用することとならざるが如し、是にて宋儒の說の非を知るべし、又仁齋先生の如きは、六經を廢して用ひずして、論語を最上至極宇宙第一の書と稱して身を修るより天下を治るまでの道、一部の論語の外に出ること無しといふ、是大なる僻見にて、大なる謬說なり、六經は物なり、論語は義なり、六經あれば論語あり、六經を廢すれば、論語は只懸空の議論なり、譬ば刀は制斷する物なり、扇は風を出す物なり、刀を捨て、制斷する義を論じ、扇を捨て、風を出す義を說んに、人誰か領解せん、論語を最上至極とすれば、六經をも論語の下に置

たまへる道、幷に君臣の問答教誡の言を記錄せる者なり、すなはち今有る所の書經五十八篇なり、四教の中にて、唯此一つは簡策に書つけたる者を讀誦するなり、詩はうたひものなれども、平日は只其詞を諳んじて、文句ばかりを諷誦して、忘却せざる樣に、心がくる故に、詩を誦すといふ、書は字音を正し、句讀を明にして、釋氏の讀經の如く、反覆熟讀するを務とする故に、書を讀むといふ、學者の務を言ふに、誦レ詩讀レ書といふは是なり、第三に禮は、天下の萬事の儀式なり、是を學ぶは、今人の小笠原の諸禮故實を習ふ如くなり、書籍を讀にも及ばず、只其所作を習ふを要とす、然ども禮にも書籍なきにはあらず、其事の次第を書しるしたる者ありて、是を禮經とも禮書ともいふ、此方の諸禮に、次第書といふが如し、第四に樂は、歌舞管絃鐘鼓の藝なり、樂師に就てこれを學ぶ、是も書籍を讀に及ばず、譜といふ者を書つけて傳授するを、樂經とも樂書ともいふなり、されば詩書禮樂の四教の中に、書籍といふは書經ばかりにて、詩はうたひものなり、禮樂は所作藝なり、古人の童子より學習する事、只此四つのみなり、後世の學者の讀書を務とし、講說を要とし、義理を論じて歲月を過す樣なる事は無きなり、四教を受て、才德を成就したる者を、君子といふ、禮樂を習ばざる者は、小人とも、俗人とも、野人とも、庸人とも、凡夫ともいふなり、第五に易は、六十四卦、三百八十四爻に、文王周公の辭あり、詩書禮樂を學習したる上に、易を學ぶは、陰陽變化の道を知り、吉凶消長の理を明めん爲なり、第六に春秋は、魯國の史官の記錄なり、是を學ぶは、國家の治亂興廢の跡を考へ、褒貶賞罰の法を辨ん爲なり、四術に達しても、此二經を學ばざれば、天下

て、天下の常道なりといふは、聖人の書を經といひ、賢人の書を傳といふと云るより出たる說にて、正義に非ず、書籍の上にて經傳といふは、文の體を以て名づくる事にて、聖賢の作を分る名には非ず、されば易の十翼は、孔子の作なれども、文王周公の作たまへる上下經を、孔子釋したまたへる故に、これを大傳と稱す、水經は、漢の桑欽が作にて、天下の水の事を記したるを、經と名づけたり、神農本草經の如し、神農は聖人なり、桑欽は聖人にあらざれども、文の體を以て經と名づけたり、古書の中に、九方皐が相馬經、甯戚が相牛經、師曠が禽經等の如きは、後人の僞作なれども、經と名づけたるは、文の體に就ての名なり、後世の花經茶經棊經などいふも、皆此類なり、細微いふに足らざる事なれども、經は經緯の經にて、聖經賢傳といふ名目の非なること、是を以て悟るべし、畢竟六經といふは、道の名にて、書籍の名に非ず、六經の中に、詩書禮樂の四つを四術と名づけ、亦四教ともいふ、禮記の王制に、樂正崇二四術一。立二四教一。順二先王詩書禮樂一以造レ士。春秋教以二禮樂一。冬夏教以二詩書一と云る、是なり、詩書禮樂は、天下の士君子の學ばずしてかなはざる事にて、古人の學といふは、唯此四つを學ぶなり、論語に學而時習レ之とあるも、此四つを學習するなり、詩書禮樂を學習して、其義に通達し、其道を行ひ得れば、君子の才德成就して、天下國家の用に立つを、學者成立とするなり、第一に詩はうたひものにて、簡策に書しるすまでもなく、童子の時より其師に就て口づから授かりて歌ひ習ふなり、其詞は、すなはち今有る所の詩經三百篇の詩なり、古人の詩を學ぶは、今人の謳を習ふ如くなり、第二に書は、堯舜より以來、夏殷周三代の明王聖賢の天下を治

六經略說

太宰純著

聖人の道は六經に在り、六經は、先聖王の天下を治たまへる道なり、六經とは、詩、書、禮、樂、易、春秋をいふ、六經の名は、禮記の經解の篇に孔子の言を載て曰く、溫柔敦厚、詩敎也、疏通知遠、書敎也、廣博易良、樂敎也、絜靜精微、易敎也、恭儉莊敬、禮敎也、屬辭比事、春秋敎也と、是なり、此篇に孔子の六經の說を記して、篇を經解と名づけしに因て、後世六經の名を傳たり、又莊子天下の篇に、詩以道レ志。書以道レ事。禮以道レ行。樂以道レ和。易以道二陰陽一。春秋以道二名分一と云るも、六經の說なり、天道の篇に、繙二十二經一以說と云るは、其說詳ならねども、恐らくは六經に各傳記あるを、合せて十二經ともいふならん、經緯の經なり、布の縱の縷を經といひ、橫の縷を緯といふ、布の經は、直に通りて、本末を貫く者なり、六經もその如く、天下を治る道に六種の事ありて、各其事の條理を知らする故に、經と名づけたるなり、中庸に、經二綸天下之大經一と云るを、鄭玄註に、謂二六藝一と釋せり、六藝は、すなはち六經なり、六經を六藝ともいふなり、禮樂射御書數を六藝といふとは別なり、史記の孔子世家の贊に、自二天子王侯一。中國言二六藝一者。折二中於夫子一といひ、又太史公が自序傳に、夫儒者以二六藝一爲レ法と云る、皆六經を六藝といへるなり、史記漢書の中に、六經を六藝といへる處多し、鄭玄が中庸の註にて、經の字の義明なり、又經の字を常と訓じ

六經略說序

磐村世子少好二經術一。所二引見而問一者蓋數輩。要未レ有下中二其心一者上云。居數年。見二春臺先生一。而問以二古道一。先生告以下先王之道在二六經一。仲尼所レ傳是已上。世子大悅。遂盡棄二其學一。而學焉。自後每二引見一。輙問二六經之義一。先生答レ之。大意以爲六藝皆物也。若或一物紕繆。不レ可二以治一レ民。世子數擊レ節稱レ善。因謂二先生一曰。願爲レ我著レ書。先生許諾。遂爲二略說一以授レ之。世子喜以爲二至寶一。於レ是學レ於二先生一者。自二諸侯貴人一。至下區々如二惟時一者上。皆欲下寫二一本一。而爭上レ先。則有二賈人一。請二刻而傳一レ之。先生曰。膚淺之言。何足二以行一レ於レ世。賈人遂奪而去。先生亦不レ追。因使三惟時敘二其事一。惟時以爲今之人固有二讀書學問者一。特其所二以爲一レ學。率後儒之所レ創。非三復孔子之舊一。何則。以二其外一レ乎二六經一也。夫六經者。先王所三以治二天下一之具也。外レ乎レ是而求レ道。猶下舍二規矩一而爲中方圓上。其得レ無レ差哉。今世子所レ志在二經藝一。不二亦善一乎。孔子所レ傳六經是已。若廢レ一。則不レ可二以爲一レ學。先生之所三以有二略說一也。此說雖レ略。然學者得レ之。庶乎知二先王之道一。則其所レ得者。世子之賜也。不レ可四以不三宣二揚其德一。先生於二六藝一。皆頗有レ述。此誠其一端云。

延享乙丑六月壬戌　篠山松崎惟時序

ざるが如くなれば、人人皆己が是とする所を是として、人の言を聽受ぬも常の習にて、怪む事に非ず。畢竟は吾が好む所に從ふより外なること無し。何ぞ人の好まぬ事を強て好ましめんや。

聖學問答卷之下終

來の窠窟を脱出すること無し。されば聞レ義不レ能レ徙。といふは、孔子の門弟子の上を憂たまへる言なり。徙の字は、居處を易る意なり。義に徙るは吾人の住なれたる舊宅を捨て、新宅に徙るが如し。人ごとに小か大か邪か正か、義といふ者を存せざることは有らず。只舊來義と思て握つめたる事は、捨がたき者なり。義に徙るといふは、小義を捨て大義に徙り、邪義を捨て正義に徙る、少も勝れる義を聞ては、己が今までの義をば、敝たる屣を脱棄る如く、卽時に棄て、勝れる義に徙ること、新く善き屨を着が如くなるべし。かくの如くなるを、斷といふ。宋儒の中にて、張横渠は、程子朱子よりも聰明にて、豪傑の氣槩ありし人なる故に、右に云る如くの名言を出せり。若横渠に古道の説を聞しめば、卽時に學術を改むべき者なるに、程氏の毒酒に沈醉して、一生性理家にて終りしは、是非も無き天命なり。第三に勤といふは、精力を用る義なり。韓退之が言に、業精ニ于勤一といへり。既に古道を聞て、孔子を信じ、狐疑の念も無く、果斷して學術を改ても、自己に精力を用て、六經論語孝經を熟讀し、古書を博覽するにあらざれば、眞實に悟を開くこと無し。六經論語孝經を讀まば、只本文を熟讀して、暗んずるまで讀むべし。古書といふは、西漢以上の書を指すなり、漢書より以上なり。かくの如く勤て惰らざれば、前に聞て信を起せる古道の説、徹底して其旨を得て、少の疑惑も無く、先王の尊きこと天の如く、孔子の敎の明なること日月の如く、今の世に生れても、千古の聖人に拜謁して、親く嚴命を聞が如し。是純が身に經て覺たる事なる故に、人もかくあらんと思て、常に初學の徒に語るなり。然れども子産が云る如く、人心の同からざること、面の同から

ふは、皆杜撰妄説なり。決して信ずべからず。大學の至善、中庸の明善擇善は、皆是が爲の敎なり。至善にあらざる者を至善と思ふは、明善に非ず。善に暗きなり。善を行ふ中に、不善の雜るは、擇の精からざるなり。至善といふは、先王の道なり。孔子の傳たまふところ是なり。他は皆至善に非ず。取るに足らず。今純が信を勸るは、純が説を信じたまへといふに非ず。徂徠を信じたまへといふにも非ず。孔子を信じたまへとなり。孔子を信ぜば、只六經論語孝經を熟讀して、後儒の註解を恃まず。只本文に就て、其旨を求むべし。其中に、禮樂等の名物度數に至ては、訓詁に依らずしては叶はず。訓詁は爾雅を本として、漢儒の説に從ふべし。漢儒の訓詁にも、恃みがたき處あれども、十に七八は、孔門傳授の説なり。是亦信ぜずばあるべからず。孔子を信じて、末師の説を看れば、規矩を持て方圓を正すが如し、末師のゆがみひずみ悉見ゆるなり。是信の説なり。第二に斷といふは、斷は、果斷決斷なり。凡學問に、先入者爲レ主といふ事あり。宋儒の言なれども、名言なり。主は、家の主人なり。何事も最初に聞たる事が、胸中に在て、主人となる故に、後に聞く事は、外より來る客の如くにして、主人と入替ること能はず。如何なる善道にても、後に聞く事は入りがたし、是亦古今學者の通患なり。此患を除く方は、張橫渠が言に、學者須下洗二舊見一而生中新見上といへる、是亦名言なり。洗ふとは、腹中を洗濯するなり。三斛の灰湯を以て腸を洗へと敎たる人も有り。蘧伯玉が行年六十までに六十化せりといふも、毎年に見識の替れることをいふなり。然るに舊見を洗て、新見を生ずること、極て難き事なり。其心ありても、果斷決斷すること能はざれば、猶豫狐疑して、舊

詠じ、二章には麟の角を詠じ、三章には麟の定を詠じたるを、麟は靈獸にて、仁德を具たる故に、生草を履まず、角の端に肉ありて、物に牴觸せずといふに因て、足と角とは、麟の仁德を詠じたりといふ。三章に至て、麟の額に何の義理も無ければ、朱子困て、麟之額未ㇾ聞と註せり。凡詩の詞は、窮なき者にて、此麟之趾の篇も、敷衍して作らば幾章にも作るべし。若章を疊て五章十章にも作らば、麟の身の內を一一詠じて、麟の目、麟の耳、麟の鼻、麟の口、麟の舌、麟の腹、麟の背、麟の尾などいふべし。其時に朱子如何義理を附んや。麟は固より仁獸なるべけれども、一身百體に、悉仁德を見することは能はじ。麟の身の內にも、義理なき處多かるべし。宋儒義理の學の愚昧なること、一笑に餘れり。是も釋氏の天台華嚴等の敎相家に、經文の俗語にて粗淺なる者を解するとて、字字句句に義理を附て、其道を甚深にするを、宋儒羨て、杜撰せる事なり。今の學者、六經を信ぜず、孔子を信ぜずして、一向に末師を信ずるは、後の佛者の、釋迦を信ぜずして、其宗門の祖師を信ずるに異なること無し。程子朱子、既に六經を信ぜず、孔子に叛て、異說を立たりし故に、後の學者、程朱を聖人の如く思て尊敬し、六經を信ぜずして、程朱の說を信ずれども、卒には疑惑生じて、程朱の道に足らぬ事ある故に、或は佛法に歸し、或は天主敎に歸す。日本にては山崎闇齋が如く、三元神道に歸して、巫祝の黨に入る者あり、是皆道を信ずる心ありて、信ずる所の見頭違ふ故に、種々の疑惑生ずるなり。凡道といふは通名なり。何れの道にても、道は道なり。只先王の道といふは、孔子の傳たまへるを正道とす。後の儒者、程朱の如きも、先王の道とは稱すれども、孔子の說に無き事を言

なるに、信ずる心あれば、誰も能く入るといふ義なり。佛法は人情に遠き敎なれども、信ずる者は能く入る、聖人の道は、人情に因て立たる敎なれども、信ぜざる者は、入ること能はず。されば學問の道は信ずるを初入とす。如何なる善道を聞ても、信ぜざれば其益を得ること無し、信ずるに又深淺あり。淺く信ずれば、益を得ること少なし。深く信ずれば、益を得ること多し。然る故に、信ずる上にては、又深く信ずるを上とす。論語に、篤信好レ學と有る、是なり。顏淵を好學と稱したまふも、篤信の故なり。於二吾言一無レ所レ不レ悅。とのたまひしは、孔子を信ずること篤かりしなり。子張も道を信ずること篤からざる者を誹れり。道は、先王の道なり、孔子の敎なり。此等を以て、孔門の諸賢の心を立る處を知るべし。さて今日末世の學者は何をか信ずべきぞといふに、今の學者も道を信ぜざるには非ず、只信ずる所の見頭大に違へり。見頭の違といふは、古の聖人を信ぜずして、末師を信ずるなり。程朱を學ぶ者は、程朱を信じて、孔子を信せず。陽明を學ぶ者は、陽明を信じて、孔子を信ぜず。是信の違なり。程朱陽明、皆既に孔子を信ぜずして、釋氏を羨み、先王の道を以て佛法に擬て、一家の說を立たるを、後の學者、又程朱陽明を信じて、其家の書にあらざれば、讀まず、詩書禮樂をば粗跡と名づけ、道德を精微なる者として、只管粗を捨て精を取る。是佛法に、有爲の事を嫌て、無爲の理を高しとする敎あるに倣へるなり。漢儒をば訓詁の學と名げけて、これを斥て、只管義理を求む、周茂叔が花に義理を附たるより、朱子詩經を註するに、詩は義理なき者といふことを知らず、字字句句に其義理を求む。たとへば麟之趾の詩三章ありて、首章には麟の趾を

去り、心中の風波も定まるに近し。此後又如何なる事か有て、大なる蔽惑の出來らんも知らざれども、今に於ては、孔子の道に少も疑はしき處なく、青天白日の如くなれば、老莊楊墨より以下、諸子百家の道、釋氏の諸教、神仙の方術、宋儒の性理、王氏の良知、西洋の天主敎、日本の三元神道、此等の種類の雜說、八面より鋒起して、惠施が辯舌、孟賁が勇力、盜跖が暴戾、西極の化人の幻術を以て、萬方曉諭すとも、吾が守る所を變せじと思ふのみなり。是又純が安身立命なり。

○問曰。前來既に古道を聞、又吾子が安身立命の處を聞くこと詳なり。然れども我等久しく性理の學に沈溺して、既に痼疾となりぬ。されば古學の說を聞て、景仰の心起らざるにはあらねども、舊來の迷網解けがたく、即時に其旨を得ること能はず。願はくは此痼疾を除く方を聞ん。答曰。聞ゆる所の如きは、足下一人の患に非ず。古より今に至るまで、天下の學者の通患なり。四肢の疾すら、痼疾になりては除きがたし。況や心の痼疾をや。純不才にして、人の心疾を治する方を知らず。只平日初學の徒に告る事あり。今足下の爲にこれを語らん。是を語ればとて、必しもかくの如くにしたまへと勸むるに非ず。只虛心にて聽れば幸甚ならん。凡學者の心を立る處に、三字の要訣あり。一つには信、二つには斷、三つには勤なり。第一に信といふは、古を信ずるなり、孔子の言に、信而好レ古。とのたまひしは、人の上には非ず。孔子の自身の上をのたまへり。信而好レ古とは、古を信じ古を好むといふ義なり。孔子は聖人にてましませども、かくのたまへり。況や後世の學者をや。釋氏の書に、佛法大海、信爲二能入一。といふ語あり。名言なり。佛法は大海の如くにて、輒く入がたき者

の芻、一臠の肉をも受けず。以ㇾ義制ㇾ事とは、是をいふなり。義といふは、先王の義なり。吾人の自己の心に料簡する義には非ず。先王の義は、禮の中に存するなり。釋氏は人に布施の行を勸て、施す者さへ有れば、多少に拘はらず、義不義を論ぜす、無緣の財を受く。是利欲に便なる道にて、先王の道に比すれば、甚行ひやすし。然れども先王の道には、義を守る者を君子とす。此の道を知らざる者をば咎めず。一たび此道を聞てより、義を好み不義を惡む心生じて、おのづから釋氏の道の易きを羨まず。又釋氏の義不義を論ぜずして、人の施しを受るは、易き樣なれども、主ある財を見て、手を出しては盜まざれども、心に其財をほしく思へば、是を貪欲心と名づけて、罪とす。貧を惡み富を欲するは人情なるに、是を抑て其念を起さゞるは、甚難き事なり。是却て吾道に無き事なり。吾道の敎は、以ㇾ義制ㇾ事といひて、只先王の義を以て、事の上を制して、放逸にせざのみにて、心の內を責めざる故に、實は行ひやすきなり。然れば以ㇾ義制ㇾ事、以ㇾ禮制ㇾ心。といふ。仲虺の言を受用すれば、色欲も財利も、此身を沈溺すること能はず。是純が安身立命の二つなり。純が安身立命かくの如し。此外はいふに足らず。富貴は固より願なれば、求て得べきにあらざれば、心を絕して求めず。少き時は、身の不才を知らずして、名を求る心ありしが、名も成らずして年ふりぬ。近來は虛名の無益なることを悟て、更に求めず。今は却て名の成らざるを幸とす。天性疎拙にして、權貴の人に近づく道を知らず。只今一二の諸侯貴人の召を蒙るは、皆思よらざる値遇にて、我より求たるに非ず。冉冉として春秋を送り迎る內に、五十の年を過て、老境に入ぬれば、壯年の時の客氣も

富、皆然なり。かくの如く達觀通知して、毫髮も疑惑すること無きを、知命の君子といふ。純は知命の君子に非ず、至愚陋劣なること、只一向門徒の如し。是純が安身立命の一つなり、次に色欲は、人情の重き者なり。財利は、人の離れがたき者なり。飮食は、人の性命を養ふ者にて、一日も無くて叶はぬ者なる故に、男女と並べて、人の大欲なり。と、禮運には云れども、飢渴の時に、何にても食飮して、飢渴止ぬれは、其上には太牢の滋味、醍醐の妙味にても、貪る心なし。腹に限量ある故なり。財利の欲は限なき者にて、富る上にも富を願ふは、人の常の情なり。俗諺に、長者富に饜かずといふは、虛語に非ず。されば色欲と財利とは、防なくて叶はざる者なり。聖人これを知しめして、禮義の敎を立て、民の淫佚を防たまふ。禮義を以て民を制するは、堤防の水を防ぐが如くなる故に、禮義を防に譬たり。男女の欲は、人の大欲にて、是を縱にすれば、禽獸と異なること無き故に、婚姻の禮を制し、男女の別を嚴にして、人の淫亂を防たまふ。自己の妻妾に非ずして、他に淫するを、非禮とす。釋氏は一向に夫婦を絕し、男女の欲を禁じて、身に其事を行ぜざるのみならず、心中に其念を起すをも罪とす。聖人の道には、他の婦女を見て、心に美女なりと思ひ、其色を悅ても、身に非禮を行はざれば、禮を守る君子とす。以レ禮制レ心とは、是をいふなり、心を制すといふは、只其心の欲を、思ふまゝに遂ざるをいふ。釋氏の如く、一向に念を起さしめざるには非ず。釋氏の道は、生たる人を死人にする道なり。至て難き事なり。先王の道は、釋氏に比すれば、甚行ひやすし、財利には義不義あり。義に當れば、千金の賜、萬鍾の祿をも受く。不義に當れば、一束

の先王、國家に巫祝を立置き、禱祠祭祀の禮を制して、鬼神に事ふる道を、天下の民に示したまふ。先王の仁なり。易に、聖人以₂神道₁設ㇾ敎而天下服矣。といへる、是なり。其身に於ては、鬼神に惑はず、皆孔子の如し。是古の君子の心を立る所にして、王符が潜夫論などの意かくの如し。然れば今日の君子も、身を修め身を守る處は、誰も皆孔子の如くなるべき者なり。日本の佛者の中に、一向宗の門徒は、彌陀一佛を信ずること專にして、他の佛神を信ぜず、如何なる事ありても、祈禱などすること無く、病苦ありても呪術符水を用ひず、愚なる小民婦女、奴婢の類まで、皆然なり。是親鸞氏の敎の力なり。今純は一向宗にあらざれども、孔子を信ずること、彼等が彌陀を信ずる如く、鬼神に遠ざかりて祈禱祭祀せざること、全く一向門徒の如し。室中に先父母の神位を設け、神牌を立て、（神主を作らず、說あり、）歲時朔望に奠獻するのみにて、更に神像佛像を安置せず、宅に方寸の護符を貼せず、身に一封の護符を佩ず、厄難に遭といへども、神呪を誦し、佛名を念ずること無し。念誦の恃むに足らざることを知れる故なり。凡人は、一生にたたび死せざること無し、何事にて死するも、死するは死するなり、生ある者の常にて、定まれる事なり、其中に、人は首領を保て地に歿するを上とす。古の君子の願ふ所なり。然れども義に當れる事には、首領を保つことを得ずして死するも、命なり。命盡ざるほどは、必死の地に居ても死せず、命盡れば、耆婆扁鵲が禁方にても、生身の不動觀音の加持にても、活すこと能はず、若祈禱厄難加持にて厄難を除き、死を免るゝ者ならば、天命は尊ぶに足らざるなり。死生の變のみにあらず、一切の禍福吉凶、榮辱升沈貴賤貧

祓除しても逃るゝこと能はず。愛宕秋葉の祠も天火に焚け、水神の祠も洪水に流れ、福神にも貧窮なる祠多し。人の爲に祈禱する僧道巫祝も、貧賤にて世を渡りかぬる者多く、或は惡疾を受け、或は疫癘にて死し、或は天殃、或は人禍にて横死し、或は國家の法を犯して、刑戮を被る者あり。凡人間の禍福吉凶は、皆天命なり。天より賜はらぬ福は、何れの神に祈ても、得ること能はず。天より降る殃は、何れの神に禱ても、除くこと能はず。何故ぞなれば、神といふ神に、天より尊き神なければなり。されば孔子の言に、獲二罪於天一無レ所レ禱也とのたまへり。又人家にて歳德を祭り、竈を祭るは、常なり。然るに歲德竈神を祭て、福を得たる者をいまだ聞かず。歳德の祟、竈神の祟とて、殃を蒙り疾を得る者は、婦女などの中に時時有り。陰陽師、巫祝の徒の言ふことなれども、實は祭る故に祟をも得るなり。純等が如き、初より祭らざる者の家には、祟を受る者あること無し。近づく神に祟あり、さはらぬ神に祟なしといふ諺は、誠に然なり。只平生に天を敬ひ、罪を畏れ、禮義を守り、仁德を行ふ。是すなはち君子の祈禱なり。孔子の丘之禱久矣。とのたまひしは、此禱なり。此禱にては、福をも得べく、殃をも免るべき道理なるに、君子も福を得ず、殃を免れざるは、天命なり。此天命は何故ぞといふことを、聖人も知ること能はず、天意測られぬ故なり。詩經に、愷悌君子、求レ福不レ回と云るは、古の君子を美たる詞なり。純等愷悌の君子にはあらねども、求レ福不レ回の一句をば、服膺して失はず。かくいへばとて、祈禱祭祀を、一槩に非とするには非ず。小民を治むる道は、祈禱祭祀を捨ること能はず。是にあらざれば、衆心を安くすること無き故なり。古

歳初には歳德を祭り、常には竈の神を祭る。天照太神は、天子の祖神なれば、庶民の祭るべき神に非ず。歳德は天神なれば、天子の祭たまふ神なり。庶民の家にてこれを祭るは、越祀なり。竈は士庶人ま祭るべき神なれども、貧家にては供具を清潔にすること易からず。清潔ならざる供具を以て祭て、神を瀆さんより、祭らざるを愈れりと思ふ。其の他の諸神は、大小貴賤を論ぜず、皆士庶人の祭るべき者に非ず。世の愚俗の、彌陀、觀音、藥師、大日等の佛菩薩を念ずるは、常の事なり。關東の人は、野狐精を稻荷と名づけて、士民の宅中に祠を立て祭る者多し。純甚これを惡む。此の外に、富を求る者は、大黑天、辯才天、毗沙門、蛭子、宇賀神に事ふ。魔障を畏るゝ者は、不動明王に事ふ。人の親愛を求る者は、歡喜天、愛染明王に事ふ。威名を求る者は、大威德、降三世に事ふ。怨敵を畏るゝ者は、大元帥に事ふ。子孫の生育を求る者は、鬼子母神に事ふ。火災を畏るゝ者は、愛宕秋葉の山神に事ふ。地獄を畏るゝ者は、地藏閻魔に事ふ。人心の求る所さまぐ〵なれば、事ふる神もさまぐ〵なり。此等の諸神の中にて、愛宕秋葉は、皆山靈なり。蛭子は、天照太神の弟なりといふ。宇賀神は、白蛇なり。餘は皆天竺の神にて、釋氏の祭る所なり。今の我等の祭るべき神に非ず。祭るべき神にあらざるを祭るは、諂なり。淫祀なり。世俗此等の神を尊信して、或は自己に祭り、或は僧道巫祝を憑て祭らしむ。其願ひさまぐ〵なれども、大要をいへば、祈福禳災の二つに約まる。此二つは實に人情の至願にて、貴賤上下替ること無し。然れども死生有ㇾ命、富貴在ㇾ天。といふ聖言を信ずれば、福利は求て得べき者に非ず。淫祀無ㇾ福。と禮記に云り天より降る殃は、

は、父母の敎に由ての事なり。本是先王の敎なり。孩兒の天性にて兄を敬ふには非ず。敎なければ、兄を敬ふ義をば、一生知らず、此義は前に旣に論ぜり。孟子は仁も義も皆性に有る者とおもひて、仁も義も皆內より出るといふ論を立る故に、親ㇾ親、仁也、敬ㇾ長、義也。といふ。畢竟性を知らず、仁義の本を謬解せるより起りて、此無理を言るなり。陽明は聰明なる人なれども、孔子を信ぜず、六經の道を知らずして、釋氏の說に惑し故に、孟子の良知良能の論を面白く思て、凡の學者にこれを敎て、第一義としたるなり。善く聖人の書を讀めば、此等の是非は明に見ゆるなり。

○問曰。佛家に安身立命といふ事あり。學問修行して、畢竟自身の落着する處を、安身立命といふと聞く、此事儒者にも有るべし。今吾子が安身立命の處如何。答曰。安身立命といふ事、儒者には無き事なれども、好き名目なり。儒者にも是に似たる事なきには非ず。凡人の惑ひやすき者は、鬼神なり。溺れやすき者は、色欲財利なり。鬼神を信ずる者は必惑ふ、信ぜざる者は必嫚る。惑ふは愚なり、嫚るは不智なり。惑はず嫚らざるは、智者なり。孔子の樊遲に告たまへるに、敬ニ鬼神一而遠ㇾ之、可ㇾ謂ㇾ智矣。と有り。鬼神を待つ道、是より盡せるは無し。敬ふは、嫚らざるなり、遠ざかるは、惑はざるなり。純此聖言を信じて、平生鬼神を敬ふ。敬ふが故に畏る。畏るゝが故に、敢て妄に近づかず。家に居て、先父母を祭るより外に、一切の鬼神に事へず。父母は尊嚴なれども、親しき者なる故に、貧家にて麁末なる供具を以て祭るも、輕嫚に非ず。只如在の敬を致すのみなり。他の鬼神は、人家にて妄に祭るべき者にあらざる故に、敢て祭らず。日本の人は、家家にて天照太神を祭り、

惱の中に、眞如の佛性あるといふを聞て、彼に似せて杜撰せる妄說なり。宋儒は性を理といふより、遂に誤て氣質を器と見て、氣質すなはち性なることを知らず。惑の甚しきなり。

○問曰。孟子の言に、人之所ㇾ不ㇾ學而能者、其良能也、所ㇾ不ㇾ慮而知者、其良知也。といふ。明の王陽明、是を以て學者に敎て、良知良能を養はしむ、古道を以て論ぜば、其是非如何。答曰。凡人の學ばずして能し、慮らずして知るは、皆天性の知能なり。是すなはち中庸に、誠者天之道也。といへる誠なり。前に云る如く、此天性の知能には、善あり不善あり。中庸の誠は、善不善を分たず。明善擇善の工夫を用て、始て純粹の善となる。孟子の云る所も、良知良能といへばとて、皆善にして不善なきことと有らず。良の字を善の義と見るべからず。趙岐が註に、良甚也。と云り、人の學ばずして能し、慮らずして知ること、何ぞ皆善ならんや。人の性さまぐ〵なれば知能も亦さまぐ〵なり。孟子は性善の論を持する故に、良知良能は、皆善にして不善なしといふ、是僻論なり。孩提之童、無ㇾ不ㇾ知ㇾ愛其親者。といふは、信に然なれども、一二三歲の孩兒の親を愛するは、親と知て愛するに非ず、己を養育する者を愛するなり。若生れたる初より、他人に授て乳養せしめて、二三歲になりたる時、眞の父母これを抱んとせば、必畏て近づかざるなり。然れば是孩兒の親を愛するは、親と知て愛するには非ず、只己を養育する者を愛するなり。己を養育する者を愛するは、凡生ある者の天性の欲なり。未これを抑て親ㇾ親といふべからず。親ㇾ親といふことは、今少し成長して、親と他人との別ちを知ての上の事なり。及其長也、無ㇾ不ㇾ知ㇾ敬其兄也。といふは、非なり。兄を敬ふ

長短、能不能、人人同からず。凡人のみ然るに非ず、聖賢も亦然なり。聖人の道は、人の生れつきを、其まゝにて養て、其ふり〳〵の器を成就する、是人才を生ずる道なり。何を以て人の性を養ふとなれば、禮樂なり。禮を以て人の身を閑め、樂を以て人の心を和げて、其過る所を裁抑し、及ばざる所を勉强すれば、人人の性、其ふり〳〵にて皆才德と成る。是を君子といふ。是其生れつきを變じて、別人の如くにするには非ず。只其生れつきの上を、禮樂にて其なりを好くするまでなり。人の才性には長短能不能ある故に、事を行ふに必有餘不足あり。不足なる所をば勉强し、有餘なる所をば、抑て盡さず、是禮樂の功なり。中庸に、有レ所レ不レ足、不ニ敢不一レ勉、有レ餘不ニ敢盡一と云るは、此の義なり。朱註に有餘不足を言行に分たるは、非なり。かくの如く禮樂を以て人の性を養ふを、聖人の道には修身といふ。身を修むるといふは、國家を治むると異なり、修の字は、修飾の義なり。物の體質出來たる上を、又つくりこしらへて、其なりふりを好くするを、修飾といふ。かざる意なり。譬へば庭の樹木を養ふが如し。長き枝を伐ち、短き枝を長て、密なる處を洗し、疎なる處を茂らしむれば、其木の生れつきより外に、庭の觀となる。枉る性の木を矯て直にするにも非ず、直なる性の木を揉て枉るにも非ず。只其天性を害せずして、其形を好くし、花實の多き樣にするを、善く養ふ者といふ。宋儒の道は、枉るべき木を直にし、直なるべき木を枉んとするなり。道理の決して無き事なり。宋儒の意は、人の本然の性は善なれども氣質に不善ある故に、本然の善、隱れて顯れず。氣質の不善を去れば、本然の善出現して、聖賢になるとおもへるなり。是佛家に、無明煩

者多し。天經或問を作れる遊藝、通雅を作れる方以智等、すなはち其人なり。日本にても、朱氏學より佛法に歸する者多し。山崎闇齋が如きは、佛法に歸せずして、神道に歸す。闇齋も佛法に歸すべき者なれども、本來禪僧より還て儒になりたる故に、復佛法に歸することを耻て、巫祝の道に走れり。日本には東照宮の法にて、天主敎を禁ぜらるゝ故に、朱氏學の徒も、これに歸することを得ず。若今にも天主敎の禁を弛られば、闇齋が如き者は、必皆天主敎に歸すべきなり。凡常人は、何にても似たる事の少勝れる事には、必心を移す者なり。畢竟宋儒以來の學者、先王の道を知らざる故に、外慕の心止まずして、他の邪說に惑ふなり。程子の學を佛學なりといひし者は、宋の代に於て、王廷秀が如き其人なり。困學紀聞に見えたり。朱子の同時に陸象山、明の代には王陽明王龍溪など、程朱の道を破すれども、己が說く所は、皆佛者の見解なり。明の末に吳廷翰といふ者、吉齋漫錄、甕記、櫝記などいふ書を著して、程朱の道を闢きしは、豪傑なり。日本の伊藤仁齋も、吳廷翰が書を讀て悟を開たりと聞けり。徂徠は一途に六經孔子の說を信じて、先王の道を悟り、宋儒の說の邪說なることを知れり。善く六經論語を讀まば、徂徠の說の臆解にあらざることを知ん者なり。

○問曰。宋儒の道には氣質を變化するを、學問の極功とす。徂徠これを非とす。其說如何。答曰。是聖人の道に無き事なり。氣質はすなはち性なり。人の生れつきなり。生れつきは變化せられぬ者なり。前に云る如く、人の性は萬人萬樣にて、面の同からざる如く、萬事の好惡、口腹の食性、才の

り。吾が聖人先王の道は、辱も天下を治むる道なり。至て大なる道なり。佛法と比して、同年に語るべき者に非ず。先王の天下を治たまふに、身を修むるを本とすといへども、禮義を以て外を治むるのみにて、心を治むること無し。内心は如何にもあれ、外面に禮義を守て犯さぬ者を君子とす。前に引きたる如く、以ㇾ義制ㇾ事、以ㇾ禮制ㇾ心。といふ、仲虺の言は、先王の法言なり。程子朱子此等の義を知らず、佛家に心法を談じて、玄妙なることを言ふを聞て、面白く思ひ羨て、孔子の道を心法となして說く。然れども畢竟似せたる者ゆへに、心法を說くところ麁くして佛者の精微なるに及ばず、佛家には人心を二つに分て、一つを肉團心といひ、一つを識心といふ。肉團心といふは、人の身の中に在る心の臟なり、肉團心といふは、形にて名づけたるなり。心の體なり。識心といふは思慮の心なり、心の用なり。識といふは、一切の事物なり。識心といふは思慮の心なり、心の用なり。識といふは、一切の事物を覺知する處を、識といふ。法相宗に唯識論を本として、萬法唯識といふは、是なり。此識に位を附て、眼耳鼻舌身意の六根に六識を立、第六意識より、第七、第八、第九まで、四等の階級を定む、是を九識といふ。其說甚微細なり。宋儒心法を談じて、精微を極むとおもへども、佛者の心法に比すれば、甚麁略にして、似たる者にも非ず。さる故に程子朱子の末流、一生の工夫を費して、心法を學て、明められぬ處ある故に、晩年に及て、節を折て佛法に歸依せる者多し。明の萬曆年中に、歐邏巴國より利瑪竇といふ者入朝して、天主教を說しに、其說程朱の性理學に似て、其精微なること性理學に超たる故に、性理家の學者、己が道を捨て、天主教を受たる

佛者は、眞の佛者には非ずと知るべし。釋氏の道は、一己の外に物なく、乞食して活命する故に、一心を治むるより外に、何にても經營すること無し。佛に成るといふも、只一心を覺悟するのみなり、佛を梵語にて詳にいへば、佛陀といふ。漢語には覺者といふ。菩薩を梵語にて詳にいへば、菩提薩埵といふ。漢語には覺有情といふ。然れば是佛も菩薩も、皆覺れる者の稱號なり。菩提といふも覺る義なり。佛法の至極は、覺の一字なり。覺とは他に非ず、一心を覺るなり。されば華嚴經には、三界唯一心、心外無別法。といひ、法相宗には、三界唯心、萬法唯識。といひ、大日經には、云何菩提、如實知自心。といふ。法華經には心の字を顯に說かざれども、經の總題を妙法蓮華經と名づけたるは、心法を蓮花に譬たるなり。他の小乘經には、煩惱を除て菩提を求めよと敎へたるを、法華にては煩惱の中に菩提あること、蓮の泥中に生じて泥に染まざるが如しと敎るを、一佛乘の法とす。聲聞緣覺は、衆生の汚穢不淨なるを厭離して、自己の一心を澄すことを專務とするを、佛は衆生の汚穢不淨に混雜して、少も厭離の心なく、而も衆生の汚穢不淨に染られぬ處、蓮花の如くなるを、一佛乘の法といふ。是法華一部の極意にて、蓮花はすなはち心法の喩なり。禪家には達磨の法とて、直指人心、見性成佛。と說く。かくの如く華嚴、法相、眞言、天台は、皆大乘の法にて、其敎は皆心法の外に出ず。他の小乘敎とても、心法より外に、佛法といふ者は、決して無きこと明白なり。凡釋迦一代の敎、一切經五千餘卷、八萬四千の法といへども、一心の外に出ることなし。然れば釋氏の道は、僅に長一丈より內の身一つを治め、方寸の心を安くするに止まる。至て小さき道な

いふ。佛家に大悟發明といへば、吾道には豁然貫通といふ。凡此等の事、只名目の替れるのみにて、佛法と少しも異なること無し。昔より先王孔子の道に無き事を、宋儒新に建立して、學者に敎へ、佛法に有るほどの事は、皆吾が道に有りといふ。誠に是世を惑し民を誣るといふ者なり。釋氏の道は、父母の家を出、妻子を棄て、上に君なく下に臣なく、士農工商の業をなさず、室家を有せず、乞食して活命し、樹下石上に坐禪して、心法を硏き、一切の情欲を禁じて、槁木死灰の如くになることを務とす。乞食といふは、卽只今の世の乞食なり。天竺にて釋迦の時の法は、釋氏たる者は、家にて食物を作ること無く、鉢を持て城市に入て、人家の殘飯を乞受て食ふ故に、乞食といふ。されば僧を梵語に比丘といふ、新譯には苾蒭といふ、漢語には乞士といふ。人家の殘飯を、人の施すに任せて食て活命するを、正命食といふ。乞食せずして、他の業をなして活命するを、邪命食といふ。衣服も自分に作て着ること無し。天竺の人は淸淨を好む故に、凡病人死人產婦の衣服、又は火にて燒けたる衣服、總じて少も汚穢不淨なる衣服臥具等をば、皆持出て糞壤に棄る習はしなり。棄たる物なれば、人の執念の掛らぬ者なる故に、釋氏これを糞壤より拾取て、其汚れたる處を割去て、其餘を皂角水にて洗ひ淨めて、袈裟より以下、諸の衣服を作る。錦繡綾羅、其外色色の布帛を縫合せて作る故に、是を糞雜衣と名づけて、佛者の衣服には、是を最上の法服とす。箇樣に衣服も飮食も、皆世人の棄る物を取て用ひ、居處も或は巖窟に住し、或は林下に宿して、屋廬を設けず、是正しく今の世の乞食非人の活計なり。後世に及ては。佛者も皆釋迦の法を破て、後世に從ふ故に、今の世の

其身を治む。大學に、自二天子一以至二於庶人一壹レ是、皆以レ修レ身爲レ本。といへるは、此義なり。孟子も天下之本在レ國、國之本在レ家、家之本在レ身。といふ。大學には以レ修レ身爲レ本。といひて、心を治むることをいはず。孟子は家之本在レ身。といひて、身之本在レ心。といはず。大學は固より孔子の道なり。孟子も此等の語は、孔門傳授の正説なり。兩晉より以後玄妙の理を道とする風になりて、稍稍心法に入る。宋儒其弊を受て、心法を以て道とし、玄妙の理を談ずるに及て、吾道を佛道に較れば、卑く小く思はるゝ故に、佛道に負るを口惜く思て、只管佛道に似せて、種種の事を建立す。佛家に無明を斷じて眞如の理を證すといふことと有れば、吾道には人欲を盡して天理を存すといふ。佛家に法身如來といふことと有れば、吾道には太極といふ者ありといふ。佛家に安心といふことと有れば、吾道には持敬といふことと有といふ。佛家に佛、菩薩、緣覺、聲聞などの階級を立れば、吾道には聖人、亞聖、大賢などいふことを立つ。佛家に付法、傳法、血脈相承といふことと有れば、吾道には道統の傳ありといふ。佛家に成佛といふことと有れば、吾道には人皆聖人に成るといふ。佛家に本有佛性といへば、吾道には人の性皆善なりといふ。佛家に坐禪といへば、吾道には靜坐といふ。佛家に十大弟子といへば、吾道には十哲といふ。佛家に本分の田地といへば、吾道には本然の性に復るといふ。佛家に心外無別法といへば、吾道には道外無物といふ。佛家に大安樂の法門といへば、吾道には仲尼顏子の樂處といふ。佛家に拈花微笑して正法眼藏を附囑すといへば、吾道には一貫の傳授ありといふ。佛家に心月輪といへば、吾道には明德といふ。佛家に煩惱菩提といへば、吾道には天理人欲と

も、是は骰子を投て、其采に從ふ者なる故に、骰子の采凶なれば、如何なる上手にて、如何なる智にても、敵に勝つこと能はず、是命に似たり。骰子は死物なれども、これを打て一より六までの采を得ることは、定まること無く、人の心に任せぬ處あるは、活物に似たり。然れば事物の理は、圍碁の勝負の如し。天命は、雙六の骰子の采の如くなる者なり。さて圍碁は勝負の理を視とをして、智にて勝つ者なれども、勝つ理を視とをして、勝つ道ばかりを打つ中に、過ちて一道なりとも負る道を打てば、それより敗れを取て、勝つべき碁に負ること有るは、是亦命なり。凡理は、常ありて定まれる者なり。命は、常なく定まり無き者なる故に、いつとても理に勝つ者は命なり。理は命に勝つこと能はず、命は理を超て來る者なり。書經に、天道福レ善禍レ淫といひ、中庸に、大德必得二其祿一、必得二其壽一といへるは、常理なり。孔子の不遇、顏淵の短命、伯牛の惡疾は、命なり。命と理との辨別かくの如し、圍碁雙六の喩は、至て小き事なれども、命と理との辨別を明すに、是より近き事なし。此等の事に因て開悟せば、天下の事、皆推て知らるべし。然れば是宋儒は天命を知らざる者といふこと明なり。

○問曰。程朱の學を佛學なりといふ、其說如何。答曰。凡聖人の道といふは、先王の道なり。先王といふは、伏羲神農より以下、皆古の帝王にて、天下の君なり。されば先王の道といふは、古の帝王の天下を治たまへる道なり。孔子の人に教たまへるも、此道なり。大なれば天下を治め、次に小なれば國を治め、又次に小なれば家を治む、皆此道なり。家の本は身なる故に、家を治んとては、先

には、地震山崩海溢の變あり、人には吉凶禍福の命あり、皆理を以て測られぬ事どもなり。されば聖人は、天の活物なることを知しめして、人の生たる君に給事する如く、二六時中に畏敬を忘れたまはず。詩書に帝と稱し、上帝と稱するは、皆天を指す詞なり。活物なる故に帝と稱するなり。程子は形體を以て天と稱し、主宰を以て帝と稱すといふ。天を理と見る心より、此辨別を立たるなり。天と帝とを分ること、古書に無き說なり。六經の古註には、帝をも天と釋せり。是漢儒の傳たる古訓なり。

○問曰。命と理との辨別如何。答曰。命は活字なり、理は死字なり。命は活物の上帝より出る者にて、定まること無き者なり。詩經には天命靡レ常といひ、又は天難レ忱斯といひ、書經には惟命不レ于レ常といふ、其證明白なり。理は物のもくめ、すぢめなり。人事にもすぢめ有り。且小き事を以てこれを喩へば、圍碁と雙六との如し。碁には三百六十の道あれども、大要をいへば、勝つ道と負る道と二つなり。されば始て一つの碁子を下すより、一局終りて勝負決するまで、勝つ理と負る理と二つあり。上手なる者は、其理を視とをして、勝つ道ばかりを打て、負る道を打たず。下手は勝つ理をも負る理をも、視とをすこと能はず、勝つ道を打んとして、負る道を打つ故に、勝負是に因て分るるなり。畢竟圍碁は、勝つ理と負る理とを能く知て、勝つ道ばかりを打て、負る道を打たざれば、敵に勝つこと必定なり。理にて勝負の分るゝ者なる故に、智ありて能く其理を知る者は、人に勝つなり。是を以て知るべし、一切の事物の理をば、智ある者は能く知るなり。雙六も智を用る事なれど

說て道の體とす、實は皆佛者の見なり。

の理なりといふ義なり、前に云る如くなり。畢竟宋儒は、高遠玄妙の說を好む故に、理の字を重く

を得ても、そだつこと有るべからず。樂記に天理といへるは、性の養はれて長ずる處、すなはち天

○問曰。凡活物は畏ろしき者なり。死物には畏ろしきこと無しといふ。其說如何。答曰。譬へば牛馬を養ふが如し。久しく畜て善く馴たる牛馬にても、不時に怒を發して、養ふ者に牴觸し踶嚙することと有る故に、牛馬に近づく者は、常に畏れを忘れず、其牛馬死すれば、畏ろしきことと止む。人も然なり。譬へば臣下の君に事ふるに、其君慈仁溫柔なる人ならば、畏ろしきことは有るまじきに、給事する者は、常に畏敬を忘るゝこと無し。何故なれば、人君の機嫌は測られぬ者にて、如何ほど慈仁溫柔なる人も、機嫌惡き時ありて、忽に怒を發すれば、給事する者、思はずに罪を得ること有り。韓非がいへる如く、龍に逆鱗あり、人主にも亦逆鱗あり、人これに嬰れば命を損ずる故なり。若暴虐無道なる君、死して柩に在んに、侍者其君の生たる時の如く、奠膳給事せば、畏ろしき心あらんや否やと問て看るべし。畏ろしき心平日に替らずと答んは、如在の敬にて、禮なり。若抑て其情實を探らば、何ぞ其君の生たる時の如くに畏ろしきこと有んや。是何故ぞなれば、死したる人に近づきては、逆鱗に嬰るべき慮なき故なり。是を以て推て知るべし。宋儒の天を畏るゝは、彼の死したる君を畏るゝ類にて、義理ばかりの畏れなり。宋儒天を理也と稱して、人の行ひ理にさへ違はざれば、天は畏るゝに足らずといふ。然るに今日吾人の見るところ、天には風雨雷電の變あり、地

二程、これを受て、性理の宗旨を弘めたり。是より萬事の義理を推窮るにつきて、天地萬物、陰陽造化の上までも、其理を窮んとす。風は何の理、雷は何の理、雨は何の理、雪は何の理といふ類なり。天地は一大活物にて、陰陽の升降往來は、活物の運動する氣なれば、凡天地の間にあらゆる事、風雷雨雪のみならず、水の流れ火の燃え、草木の榮枯し、人物の生死するが如きまで、皆神の所爲にて、聖人も測て知ること能はず。されば陰陽不レ測之謂レ神と、易に見えたり。不測とは、はかられぬといふ義なり。聖人すら不測とのたまひ置たる事を、後世の學者として、これを測て其理を知んとするは、大に愚なる者なり。縱其理を窮得て、かくあらで叶はぬ事と言出せりとも、何を證據として、誰かこれを信ぜんや。無益無用の事なり、畢竟宋儒は、天地の活物なることを知らず、理を以て推測んとするは、天地を死物にしたるなり。是より推て、天をも命をも人の性をも、都て理なりと說く。朱子の四書の註に見えたり。天は固より活物なり、命は天命なり。活物の天より降る命なれば、命の字は活字なり。人の性も活物の性なり。理の字は死字なり。活物活字を、死字にて註するは、字義を知らざるなり。聖人は天を畏れたまふ、君子の三畏には、第一に畏二天命一と有り。宋儒の如く、天をも命をも理と見れば畏ろしきこと少も無し。理にて推測られぬ者なる故に、聖人これを畏れたまふなり。凡何にても、活物は畏ろしき者なり、死物には畏ろしきこと無き者なり。宋儒は天地を死物にする故に、天を畏れ命を畏るゝといふ道は亡るなり。人の性も活物なる故に、嬰兒より漸漸に成長して、賢人君子にも成り、小人不肖者にも成る。若理ならば、理は死物なり、養

又は名理といふ。理の字を重んずること、是より始まれり。是正しく宋儒の理學の權輿なり。晉の代の才子賢達、時時に集會して、玄理を講論するを、清談といふ。其論ずる所の旨は、七八分の老莊に、二三分の易を合せたる者なり。後に又佛道を挿入れて、附會して論ず。其時釋氏に、道安佛圖澄慧遠支遁などいふ名僧學匠ありて、彼清談に加はれり。是より儒者も先王の道を明めず、只玄妙の理のみを道とおもへり。其後南北朝の間に、佛家に華嚴宗起りて理事無碍、事理無碍などいふことを說く。又隋唐の際に天台宗起りて、諸法實相といふことを宗旨とし、圓頓の敎を立、止觀の法を說く、是皆理學なり。又眞如の理、眞如の佛性などいふこと、釋家の奧義なり。唐の代には韓退之、一代の豪傑なりしかども、今少先王の道に達せぬ處ありし故に、先王の道は、禮樂を主として、人を敎るところ、もつばら事の上に在ることを悟らず、されば退之が文章を著して道を論ずる處、いつも事を略して義理のみを論ず。宋儒の學の如くにはあらねども、畢竟義理の學にて、宋學を引起す端なり。宋儒に至て、周茂叔二程より、性理の學起れり。茂叔太極圖說を作り、通書を著して、二程に授てより、聖人の道を心法となして說く。愛蓮の說を作て、百花の中にて、蓮は君子の德に似たる故に愛すといふ。然れば茂叔が心には、花も義理なき花をば愛せず。海棠などは美人に比したる花なれば、定て愛すまじきなり。草木の花を見ても、先づ其の義理を尋て、義理あれば愛す、義理あしければ愛せぬ心なり。凡天下には義理なき事多き者なり。若一一に其義理を求んとせば、聖人の智を以て一生を盡すとも、窮得ること能はじ。茂叔が箇樣の道を建立して、二程に授たる故に、

此欲なきこと能はず。只其法とて、强て欲を制して、男女を遠ざけ、終日に一食して、其欲を遂ぬまでなり。されば聖人の道には、人欲を絕することとは、決して無き事なり。若人欲を絕する道ならば、夫婦姻婚の禮は有るまじき義なり。程子も朱子も妻あり子あり、人欲を遏るといふ工夫は、何れの處に在るや。樂記にいふ人欲は、人の定まれる情欲なり。若此欲なければ、槁木死灰なり。死人と同じ。佛法は心を靜にすることを主とする故に、無明煩惱を斷除して、心を明鏡止水の如くにせよと敎るなり。梵語に禪那といふを、漢語に翻譯して靜慮といふ。是すなはち禪定なり。心は活物にて、明鏡止水の如くなる者に非ず、若果して明鏡止水の如くになりなば、心の用をなすこと能はじ。畢竟無理なり。程子朱子佛法に傚て此說を創たるは、六經を信ぜず、孔子の言を考へざる故なり。論語に理の字なし、孟子には理義といふ字あり、條理といふ字あり、理義も條理も、理の字は皆物理を指ていふ。宋儒のいふ理の字には非ず。道理といふ字は、漢儒より以來これを言ふ。道理といふも、事物の理なり。天を理といひ、命を理といひ、性を理といふ類は、宋の前には無き事なり。但し理學といふ事には非ずして、宋儒の如くなる見識を立たる者は、漢の王充なり。論衡に論ずるところ、禍福壽夭吉凶消長の類を、皆定まれる事と見て、陰陽變化鬼神卜筮の類を悉打破り、祭祀祈禳を無益の事なりといふ。先王の道に叛たる處多し。漢儒の中にて、理學の祖といふべき者なり。論衡三十卷は、全く理屈なり。漢の後に及で、兩晉の代に、學者皆老莊を悅び、聖經の中にて周易ばかりを取て、老莊の道に附會して、老易と稱し、其道を玄と名づけ、其義を玄理と稱す。

究理を致るは、大に非なり。樂記に天理といへるは、鄭玄が註に、理猶レ性也といふ。人の性には、種種の才能の種を生れつきて有るを、禮樂の敎にて長養すれば、其性中に具したる才能そだちて、賢人君子となる、是そだつれば必そだつ道理ある處を、理といへるなり。性の體を理と名づけたるには非ず。理の字の意輕し。滅二天理一而窮二人欲一といふは、古の君子は、禮樂を以て性を養ふ。禮樂を捨れば、性を養ふべき道具なき故に、養はれてそだつべき性の道理滅して、人欲盛になる。人欲は、賢人君子も、愚不肖なる者も、無くて叶はぬ情なる故に、人欲は罪に非ず。人欲を窮るを罪とす。禮樂は人欲を節制する道具なる故に、是を廢すれば、人欲必恣になるなり。然れば禮樂を學ばず用ひずして、耳目鼻口の欲を縱にすれば、性に具したる才能のそだつべき道理滅して、情欲の節制なくなるを、滅二天理一而窮二人欲一者といふなり。程子朱子此語を謬解して、天理をば直に人の性の體となし、人欲をば性の邪魔とおもひて、人欲をひしと遏絕して、天理を存すべしと說く。是すなはち佛敎に、無明を斷じて、佛性を顯すといふを羨て、立たる妄說なり。樂記には、天理を滅して、性を養はずそだてず、人欲のみを窮る者を罪とす。人欲を性の邪魔とするには非ず。されば本文に程朱の說の如く、人欲を遏て天理を存せよとはいはず。凡人欲といふは、其品さまざまなる中に、飲食男女の欲を重しとす。飲食男女。人之大欲存レ焉と、孔子のたまへり。存レ焉とは、こゝに在りといふ義なり。此大欲は、聖人も凡夫も異なること無し。一切の生ある者、此大欲を離るゝこと能はず。此大欲止めば、すなはち死するなり。一息いまだ絕せざるほどは、此欲止むこと無し。釋迦も達磨も

らずは、六經論語孝經にこれを言はざること有るべからず。六經論語孝經に無きことは、必邪說なり。佛家には本有佛性とて、人人皆佛性あれども、心中に無明煩惱といふ病ありて、佛性を害する故に、成佛すること能はず。無明煩惱を斷除すれば、本有の佛性顯るゝこと、譬へば雲霧去て日月の見ゆるが如し。是を法身如來出現すといひ、禪家には見性成佛ともいひ、本分の田地に歸るともいひ、本來の面目を見るともいふ。程子朱子此等の佛敎を羨て、復性復初の說を立つ。朱子四書の註に、毎毎これを言ふ、大なる惑なり。さて理の字の義は、仁齋これを辯じておもへらく、理の字は死字なり。朱子これを活字と見て、一切の事を理にて判斷するは、大なる謬なりと、此論甚當れり。六百年來に無き卓見なり。理の字は、本玉石の類に、必もくめ有るを、理といふ。木には木理あり、肉には肉理あり。理はすぢめといふ義にて、凡物の理は、木にても玉にても、石にても肉にても、理には直なるも有り、屈曲するも有り、直にても屈曲しても、其すぢめの通りは、いづくまでも通る者なり。此義を取て用たる者なり。六經に理の字をいへるは、易の說卦に、窮ㇾ理盡ㇾ性。以至㆓於命㆒といふ言あり。樂記に、天理滅矣といふ言あり。此外には無し。說卦に窮ㇾ理といへるは、聖人の易を作りたまへることをいふ。理は物理なり。物の理は、すぢめ通りて、此より彼まで見ゆる者なるを、聖人の智にて萬物の理を洞視して、萬物の變化、人事の次序、かくあらで叶はぬといふことを、卦爻の上にて示したまふ、大約序卦傳にいへるが如し。是窮理は聖人の所爲なり。凡の學者の及ぶ所に非ず。然るを朱子大學の格物を謬解して窮理の二字を以て格物を釋し、凡の學者に

○問曰。宋儒の學を、聖人の道に非ずといふ。其說如何。答曰。宋儒の學は、性と理と二つを工夫の本とする故に、或は性學と稱し、或は理學と稱す。或は二つを合せて、性理學ともいふ。性の說は前に既に辯ぜり。但し程朱の說に、復性復初といふこと有り、其意は、人の性は本來善なるものなれども、氣稟物欲に累はされて、善人となること能はず、學問して氣稟物欲の障碍を除き去れば、本分の善顯るゝを、復性とも復初ともいふとなり。此說は、禪家に本分の田地、本來の面目などいふこと有るに傚て立たる義にて、以ての外なる邪說なり。聖人の道は、人の性中に具したる才能を、敎にて養そだてゝ、其器量を成就して、國家の用に立るを要とす。譬へば材木の如し。菓實の核の中に仁といふ者あり、此仁すなはち百丈の大木になるべき種なり。是を土に蓺れば、仁より雨葉を生じ、それより雨露風日の養を得て、成長して大木となり、棟にも梁にもなるべき良材を成就す。既に大木になりたる者を、昔の兩葉になしかへすことは、如何なる造物者の力にても叶はず、道理の決して無き事なり。人の性は、菓實の核中の仁の如くなる者なり。聖賢になるべき性を生れつきたる人も、赤子より二三歲までの嬰孩の時は、智慮も才能も無く、木の兩葉より少そだちて、苗になりかゝる時の如し。成長して三十四十五十にもなりて、賢人君子の才德を成就するは、木の棟になり梁になり、柱になり、椽になり、舟になり、車になり、諸の器物になるが如し。才德成就して、賢人君子となりたる者を、昔の嬰孩赤子の心になしかへすことは、決して無き事なり。若千萬人に一人も、左樣の人あらば、何の用に立つべきや。是を以て復性復初の邪說なることを知るべし。若然

ならず。是を誠といふなり。凡中庸にいふ誠は、其旨かくの如し。後世只心法の上にて誠を說くは、佛者の論なり。宋儒の徒は、孝悌忠信仁義禮智を、皆誠の別名なりとおもふ、大なる謬なり。孔子の旨に非ず、孝悌忠信等に限らず、何の德にても、成就したる處を、誠といふ。懸空に誠といふ者を主とする敎は、孔門に決して無き事なり。されば孔子は坐立動止に、口を開けば仁とばかりのたまふ。誠とはのたまはず。哀公の政を問はれしに因て、國家を治る次第を說たまふとて、推て此義に及べるなり。誠の字を政の要とするには非ず。子思中庸を作るに及では、楊墨が徒に對して、聖人の敎の功を明さんとて、孔子の語を引て、それより推廣めて、聖人の道を說たるなり。子思の旨は、楊墨に答たる者にて、大に謂れ有る事なり。至誠といふは、人人の性に具したる才能の成就して、德となりたる者を、至誠といふ。唯天下の至誠。爲[二]能盡[一]其性[一]といひ、性之德也といふ、是なり。孔子の本語には只誠の字を說たまふ。子思これに至の字を加て、至誠と名づけ、反復辯論して、誠の字を讃ず。畢竟聖人の道は、人の性には深く拘はらず、只敎を以て人の才德を成就することを要とする故に、何にても人の才德の成就したる處を、誠といふなり。才能を離て外に、別に誠といふ德も道も有るには非ず。宋儒は誠の字を別に一つの德行の名なりとおもへる故に、子思の旨に叛て、釋氏の敎に同ずるなり。さて中庸の如くに誠の字を重く說くことは、子思より前に無き事なり。荀子が子思を誹れるも、此等の義を以てなり。畢竟は後世の心學の祖なり。荀子を所見なしといふべからず。

まじく有る中にて、至極の善を擇て、固く執持するなり。誠レ之者、擇レ善而固執レ之者也といふは、是なり。上の文に、不レ明二乎善一。不レ誠二乎身一矣といへるも、此義なり。誠は善不善に通ずる名なるを、宋儒は明善擇善といはずして、一槩に誠の字ばかりを守り、人にも教る故に、佛法などにいふ至誠心といふ者になりて。中庸の旨に違ふなり。日本の三元神道にいふ誠も、佛法の至誠心なり。三元神道は、佛法を以て作れる道なる故なり。畢竟、子思の中庸を作られし意は、老子楊墨が徒の論に、聖人の教は無用なる事といふを破せん爲なる故に、教學の功を重く說けり。自レ誠明謂二之性一。自レ明誠謂二之教一。誠則明矣。明則誠矣といふに至て、天性の誠と、教にて成たる誠と差別なきことをいへり。明といふは、知能なり。誠より出る知能は、教を待たぬ知能なる故に、これを性といふ。性は天性なり、教に因て知能を得て、誠に至るは、教の力なる故に、これを教といふ。性の德と、教の德と、德に差別あること無し。伊尹の言に、習與レ性成といへる、すなはち此意なり。然れども教を以て德を成すこと、人の性に明暗利鈍あるに因て、功の成就する所に遲速あり。されば暗鈍なる者は、百倍の勤を以て追つくなり。人一能レ之己百レ之。人十能レ之己千レ之といふは、此義なり。さて人の知に生知學知困知の三等あり。行に安行利行勉强行の三等あり。此知行の三等を、宋儒只三品の人として說くは、疎なり、種種の事を學で看れば、一人の身にも此三等は有るなり。されば匹夫匹婦の愚不肖なる者も、能く知り能く行ふ事あり。聖人も知ること能はず、行ふこと能はざる事ありといふは、此義なり。學知困知も功を積めば、生知と異ならず。利行勉强も功を積めば、安行と異

事にも不善事にも皆あり。事と心と洞徹して一致なるを、誠といふ。事をなして其心なきは、誠に非ず。心ありて其事をなさゞるも、誠に非ず。事は外なり、心は内なり、外内符合するを、誠といふ。合ニ外内ニ之道といふは、此の義なり。外内符合せざれば、誠といはず。凡人の學ばずして知り、習はずして能する事は、善も不善も、皆天性にて、思慮作爲を用ひざる故に、是本然の誠なり。誠者天之道也といふは、此義なり。鄭玄が註に、誠者、天性也といへるは、本文の天道を、直に天性と釋するなり。此註すなはち孔門傳授の說なり。人の學て知り、習て能する事は、善も不善も、皆外より入る知能にて、天性の自然にあらざる故に、或は情を抑て堪忍し、或は勉強して力を用ひ、許多の思慮作爲を加て、其事成就す、然れども其事純熟して、我が物となり、身の癖の如くになりて後は、堪忍することも、勉强することも無くなりて、生れつきたる天性の如くになる、誠レ之者。人之道也といふは、此義なり。誠レ之といふは、本分に無き誠を、學習にて成し立る故に、誠レ之といふなり、此誠は天性に非ずして、人の敎にて出來る故に、人之道といふなり。天性自然の誠も、人の敎にて成就したる誠も、誠といふに至ては、勉强思慮を離るゝ故に、誠者不レ勉而中。不レ思而得といふ、孔子の從ニ心所レ欲不レ踰レ矩とのたまひしは、此位なり。從容中レ道聖人也といふは、是をいふなり。さて此誠といふは、善惡を分たぬ德の名にて、善にも誠あり、不善にも誠あり、然るを聖人の道にては、不善の誠を捨て、善の誠を取る、不善の誠は凶德なり、善の誠は吉德なり。聖人の敎にて、人の誠をなすといふは、純一に善を以て敎として、吉德を成就せしむる故に、世の善不善さ

聖學問答卷之下

太宰純著

○問曰。誠の一字は、中庸一篇の骨子なりと聞く。誠の字を、朱子は眞實無妄之謂と註す。徂徠先生これを非として、表裏一致の義と說く。願くは其詳なることを聞ん。答曰。中庸の古註に、誠者、天性也といふ、此の說甚好し。是孔門傳來の說なり。後世此義を知らず。宋儒に至ては、只心法を以て說く、劉安世が司馬溫公に就て學問せしに、心を盡し己を行ふの要を問ければ、溫公これに誠を敎ふ。安世其工夫の方を問しかば、不妄語より始よと答ふ。溫公の敎たる誠も、心法なり。朱子は殊に佛道に倣て、心學を宗旨とせし故に、萬事を皆心法となして說けり。誠の字を、大學にては實也と註し。中庸にては眞實無妄之謂。天理之本然也と註す。此の註當れる樣なれども、中庸に於ては當らず。徂徠表裏一致の義と說く、此の說至極なり。是すなはち、鄭玄が誠者天性也と註せし意なり。天性にてなす事は、何事も表裏なく、內外洞徹して一致なる者なり。天性とは、人人の生れつきたる本性なり。何事も敎を待たず、習に因らず、勉强を用ひず、無心無念にて、天然自然になす事は、皆天性のしわざなり、是を名づけて誠といふ。中庸の旨なり。譬へば技藝、又は細工の勝て上手なる者の、其事をなすが如し。其事を善くせんとも思はず、只手足の動き慣たるまゝに、無心無念にてなすなり。此誠は、聖人にも凡夫にも、智者にも愚者にも、賢者にも不肖者にも、善

るも亦然なり。造物に惡意なけれども、生ずる所の物には善惡ありて、其性さまぐ\なり。大蟲には虎狼の類あり。小蟲には蚊虻蚤蝨の類あり。家には鼠あり。田には蝗あり。是皆人を害する惡物なり。鳥獸魚鼈のみにあらず、草木金石にも毒物あり。天地の正氣より生ずる萬物の中に、此等の惡物あるは何故ぞや、程朱の說の如くならば、此等の惡物も、本然の性は善なれども、氣質の性に惡ありといふべし。腹を捧たる事なり。されば萬物の性に善惡ある如く、人の性にも善惡あり。善に又種種あり。惡に又種種あり。同く天地の正氣より生ずれども、生れ出たる處を看れば、萬人萬樣なり。一父一母にて生む子も、十人は十樣にて、賢愚善惡さまぐ\なるは、父母も知らず、如何にともすべき樣なし。天地造物も、定て人の父母の如くなるべし。天下に不善人なき樣にと思ふべけれども、造物者の心にも任せぬなるべし。若然らずば、世に不善人の生ずるも、天下の全體に於て、何か所用ありて生ずるならん、畢竟天意測りがたし。道理を以て推すことを得ず。只六經の旨に任せ、孔子の言を以て觀れば、程朱の妄謬見ゆるなり。

聖學問答卷之上終

なかるべし。如何。答曰。此説は、性善の義を立てんとて、古聖人の道になきことを、杜撰していへるなり。畢竟造化の理を知らざるが故なり。天地の性に不善なければ、其氣を受て生ずる人も、不善の性なかるべしとおもへるは、理に當れる樣なる論なれども、造化の理に昧し。陰陽五行の氣に不善なしといふこと、謬論なり。陰陽の二氣は、天地に升降する者なり。五行の氣は、天地の間を運行する者なり。陰陽は、盈虛消長して萬物を生じ、五行は、更代旺衰して萬物を養ふ。陰陽は天地の氣なり。五行は又陰陽より分れ出たる者なれば、陰陽五行の氣は皆正氣にて、是に邪惡の氣は有るまじき義とおもはるれども、此氣に太過不及といふこと有り。太過とは、甚暑く甚寒き類なり。不及とは、寒かるべき時暖に、暑かるべき時涼き類なり。寒暑のみに限らず、風雨霜雪の類まで皆然なり。陰陽五行の氣は、天地の間を均く升降運行すれども、太過不及あるに因て、正氣も邪氣となりて、人に中り物を害す。天地は萬物を生じ萬物を養ふは常なれども、其氣の太過不及に因ては、萬物を傷害すること有り。是天地の如何なる心にて、此災沴を降すといふことをば、智者も知ること能はず。然れば天地は正氣のみにて邪氣なしといふべからず。又造物の理をば、古より陶家の器を造るに譬ふ。古詩に、洪鈞陶二萬類一といへるは、此の譬なり。洪は大なり、鈞は、陶家の轆轤を鈞といふ、天地の萬物を造る轆轤なる故に、洪鈞といふ。陶工の器を造るは、同形の器を百千造るに、皆悉疵なく、其形の好く成就せんことを欲すれども、其器の成就するに及て、形に不同あり、或は疵あり、或は藥の行とゞかぬ處も有り、百千の陶器一樣にはあらず。天地の萬物を生ず

重に隨て、其罪を判斷する、是古法にて、「先王の仁なり。是より外には、內心の是非善惡を論ずること無し。是堯舜以來、三代の先聖王の道にて、孔子の傳たまふ所なり。釋氏は內を主とする故に、外面に非をなさゞれども、內心に不善あれば是を無明、煩惱、妄想などゝ名づけて、罪とするなり。されば釋氏の敎を內敎といひ、儒敎を外敎といふは、後世の名目なれども、當れる名なり。發微錄に、「域中治レ身。謂二之外敎一。域外治レ心。謂二之內敎一」と云るは、事理に叶へる釋なり。儒者の方にて、外敎の名を惡むは、却て道を知らざるなり。孟子の公都子に答へたる性善の義に因て、程子以來、本然の性、氣質の性といふことを言出せり、此意は菓實の仁と殼との如くなる者とおもへるなり。釋氏に、一切衆生、悉有佛性といふこと有るを羨み、孟子の性善の論を是として其の說を主張せんとするに、本より道理なき事なる故に、其說に困みて、此妄說を創たり。純少年の時、程朱の書を讀で、二十許の時、程子の本然氣質の說を見て、忽に疑を生じ、それより十餘年、博く古書を讀み、六經論語を熟讀して、始めて性の說を悟れり。其後徂徠先生の論を聞て、疑惑の雲霧悉霽たり。今に及では一點の疑も存せず。

○問曰。朱子性善の說におもへらく、人は天地陰陽五行の氣を受て生ずる故に、陰陽の性は、乾坤健順の德となり、五行の性は、五常の德となる、天地陰陽五行の氣に不善なければ、是を受けて生ずる人も、性に不善なし、是を本然の說といふ。人の不善をなすは、氣質のなす所なり、性の罪に非ずと、此說に依れば、人の性は、すなはち天地の性なり、天地に不善なければ、人の性にも不善

る同意なり。此論に依て、程子も盗に禮樂ありといふ。皆亂道なり。古語に。夢中之有、有無俱無、非中之是、是非俱非と云り。不善人に善性ありといふは、非中之是なり。此是何の用に立つべき。凡聖人の道には、人の心底の善惡を論ずること、決して無き事なり。聖人の敎は、外より入る術なり。身を行ふに先王の禮を守り、事に處するに先王の義を用ひ、外面に君子の容儀を具たる者を、君子とす。其人の內心は如何にと問はず。孟子の曹交に告る言に、堯の服を服し、堯の言を誦し、堯の行を行はゞ、是堯なり。桀が服を服し、桀が言を誦し、桀が行を行はゞ、是桀なりといひて、堯の心桀が心を心とせばといはず。孟子の是等の言は、正しく孔門傳授の說にて、先王の敎かくの如し。孝經に卿大夫の孝を說けるにも、先王の法服、先王の法言、先王の德行とばかり有て、先王の心といはず。孟子の曹交に告たる言、すなはち孝經の旨なり。されば聖人の敎は、衣服を最初とす、內心は如何にもあれ、先君子の服を着せて、さて君子の容儀を習はし、次に君子の言語を敎へ、それより漸漸に君子の德を成就せしむるなり。德といふは別物に非ず、衣服容儀言語の凝かたまりたる者なり。此の義禮記の表記に見えたり。聖人の敎は、外より內に入て、純熟すれば表裏一致になるを成就とす。是を成德といふ。德は得なり、身に行ひ得たるを德といふ。禮記の鄉飮酒義に見えたり。朱子佛學の意にて身の字を心の字に改たるは、大に非なり。中庸に誠といへるも表裏一致なるを、誠といふなり。凡聖人の道はかくの如くなる者にて、心の中をば探らず、情の善惡を問ふこと無し、只刑罰を行ひ、獄訟を聽くに、罪人の情を察すること有り、犯す所の罪の輕重をば略して、情の輕

類あることをいへる故に、上の二說一意なると共に三類なり。天下の人の性、此三類の外に出ず。是孔子の旨なり。かくの如くなれば性善の說破るゝ故に、公都子疑て問へるなり。孟子の答に、世の不善人の不善をなすも、其情は必善なり、其情に順へば、善をなして成らざること無し、是すなはちいはゆる善なり。情に順はずして不善をなすは、其身の受たる天才の罪に非ずといふ。此答、又大に無理なり。情といふは、人の心底の實をいふ。情は性より出る者なり。孟子の意は、不善人も善惡を辨へぬにあらず、至極の惡をなす者も、心底には惡と知てなす。又惡をなす內にも、其事に因ては小小の義を立或は人を愛し、或は人の急難を救ふ事も有り。是すなはち仁義の種にて、性の善より出るなれば、若これを擴充せば、眞の仁義となるべきを、當前の利欲に牽れて、其善を擴充することと能はずして、不善の行を遂るなり。然れば是性の本分には善を具することと疑なしとなり。是より四端を說き、又烝民の詩を引き、孔子の言を引て證據とす。四端の說は、前に既に辯ず。烝民の詩は、性善の理を言るに非ず。然れども詩には定まれる義なき故に、斷章取義といふ事ありて、議論の證據に引くには、如何樣にも義を取なをして引くなり。孔子の言も、性善の義を說たまへるに非ず、孟子これを引て證據とするは妄なり。聖人を誣るなり。さて孟子の此處の答、大に不分明なる論にて、殊に聖人の道に違へり。惡人の心底に少分の善ありても、其善を立ることと能はずして、其なしかゝりたる不善をなし果すは、是すなはち性中に不善なる處多き故なり。況や至極の惡人には、毫末ほども善心なき者あり。惡人に善性ありといふは、莊子が盜に仁義あり豺狼仁なりといへ

能く僻論をなせり。

○問曰。公都子が孟子に問へるは、性に三說あることを言ふ。其義如何。答曰。初に告子が言を擧て、性無レ善無ニ不善一也といへるは、性のいまだ養を得ざる時をいふなり。童稚の時なり。是すなはち孔子の性相近也とのたまひし性なり。此時は善にも不善にもいまだ赴かぬ故に、善になるべきか、不善になるべきか、成立の處知りがたし、是前に云し中庸の性にて、天下の人、多くは此性なり。人の敎と其身の習とに因て、後には其品分るゝなり。湍水の喩も、此性なり。次に或人の說とて、性可ニ以爲レ善。可ニ以爲ニ不善一といへるは、上の告子が說と替れる樣なれども、同意なり。上には性の善不善を論ずまじきことを言ふ、此段には彼善不善なき性の人を、善に習はせば善をなし、不善に習はせば不善をなすといふことを論ず。善なき故に、不善に習はせば不善をなす、不善なき故に、善に習はせば善をなす。かくの如く說けば、兩段一意なり。畢竟孔子の言の旨にて、上の段は性の相近きことを明し、此段は習はしにて相遠くなることを明せり。又次に或人の說とて、有ニ性善一。有ニ性不善一といへるは、是正しく孔子の上智下愚の說なり。性に又此二類あり。生れつき一定して、敎にも習にも因らず、如何なる事にても移らず、本來の善にて一生終り、本來の不善にて一生終る者、古今其人あり、すなはち象と舜と微子比干と、四人を擧て證とす。引證明白なり。公都子が擧たる三說。第一は告子が說、第二第三は、或人の說を擧たれども、今おもふに、後の二說も皆告子が言なるべし。三說の中にて初の說と次の說とは、一意なり。第三の說には、性の善なると、性の不善なると、二

んに、世俗にいふ水かけ論といふ者になりて、窮まる處あるべからず。朱子と陸象山と太極を論じたるが如くならん。學術に益なきのみに非ず、長者の德を損ずるなり。朱子は此等の義を知らずして、却て告子が論を遁辭なりと評す。書を讀むことの精密ならざる故なり。告子は何人に學べるといふこと詳ならねども、性を論ずる處は、孔門の正傳を得たりと見ゆ。

○問曰。孟季子と公都子と性を論ずる處、其の是非如何。答曰。孟季子是なり。公都子非なり。孟季子は告子が說を信じて、義は外なりといふことを、確かに領解したる故に、此說を以て公都子と論辯せるなり。公都子すなはち長を敬ふ義を以て答ふ。一再論じて、終に季子に問詰められて、答ること能はずして、孟子に告ぐ。孟子又これを辯ず。理に當れる樣に聞ゆれども、畢竟敬ふべきを見て敬ふは、輕く敬ふも、重く敬ふも、皆義なり。此義は先王の敎にて、敬ふべきを見て起るなれば、是義は外なること彌明なり。然る故に季子これを聞ても會得せず、季子が會得せぬは宜なり。公都子重てこれを曉さんとて、湯を飮み水を飮むを以て譬ふ。是又孟子の炙を嗜むことを言ると同意にて、以ての外の無理なり。冬は湯を飮み、夏は水を飮むは、時の宜きに隨て取捨する處は、固より心中の料簡なれば、是を內といふは勿論なれども、是を義と思て、長を敬ふ義に比するは、大に無理なり。冬は湯を好み、夏は水を好むは、天下の人の常の性にて、天性に具れる好惡なり。告子が食色は性也と云る、是なり。此情は、聖人なき以前より有る情なり。是何ぞ長を敬ふ義の比類ならんや、長を敬ふは、聖人の道の義なり。人性の本分に有る者には非ず。公都子は孟子の傳授を得て、

る處を見て敬ふなれば、長を敬ふは外なる故に、義は外といふなりと、孟子これを聞ても猶悟らず。又難じて曰く。他人の作たる炙を食て、美しと思ふ心と、吾が作たる炙を食て、美しと思ふ心と、異なること無し。長を敬ふが外ならば、炙を嗜む心も亦外ならんかと、是亦前の人牛犬の三性をいへる段と同く僻論なり。人の齡には長幼の次第あり。人に對しては、人の年の長幼を視て、我より長なれば敬ふ、少なれば敬はず。是敬ふに料簡あり、料簡する處すなはち義なり。炙には具たる味あり、味を辨ずるは、口の職分なり。美味を甞て、美しと思ふは、心の知識なり。告子旣に食色性也といふ、口の味を嗜むは天性なり、何ぞ是を以て長を敬ふ心に比することを得ん。孟子の論大に非なり。孟子謬て一すぢに性善の論を持して、告子が說を聽納れず、十分の客氣にて、只管彼に勝んとして、理に戾れることを言ふ故に、告子重て辯ぜず、性の論是までにて止ぬ。篇首より是まで四章、每每告子發端して、孟子これを難ずること一再して、終には告子答へず。朱子の集註には、告子が論を皆非とする故に、孟子に難じ詰られて、告子答ること能はずして、論の端を更たる者といふ。今本文を詳に看るに、道理の是非は右にいふ如くなり。孟子は無理をいひても人に勝んと思ふ。告子は只正等の論を以て、孟子を曉さんとするのみにて、必しも孟子に勝んと思はず。一再論じて、孟子其理を悟らず、彌無理を言へば、告子重て爭はず、別に端を更て說く、說くところ其旨別なる樣なれども、本來一理なり。堯舜より孔子まで傳はれる、性の字の義を得たる者なり。今日書面にて二人の氣象を觀察するに、告子は實に長者なり。若長者に非ずは、孟子の無理を言ふ上を、又返して辯ぜ

といふも、此義なり。孔門の諸賢多く仁を問しは、此故なり。仁にまぎらはしき事ある故なり。程朱の徒、孟子の性善の說を信じて、極重惡人も、內には善性ありといふは、聖人の敎の義を知らず、內に在て目に見えぬ者を指て、人を欺くなり。是莊周が盜に仁義あり、財狠仁なりと云るに、少も異なること無し。古人のいはゆる亂道といふ者なり。然れば告子が仁は內義は外といへるは、至當の論なり。孟子これを難じて、何故に仁は內義は外といふぞと問ふ。告子が答に。彼年長ずれば、我これを長と見て敬ふ、譬へば彼白ければ、我これを見て白しと思ふが如し。長も白も皆彼に在り、我が方には無し。彼に在るを見て、長とし白とするなれば、是すなはち外物なりといふ。孟子又難じて曰く、馬の白きを白きと見ると、人の白きを白きと見ると、異なること無きは、勿論なり。馬の年長たるをば敬はず、人の年長たるをば、敬ふ。是年長たるが義か、敬ふが義かと、此論も亦大に無理なり。人と馬とは異類なり。馬の年長たるを、何故に敬はんや。人の中にて、長者をば必敬ふ、長者を敬ふは、聖人の敎なり。今日の人、長者を見て必敬ふは、聖人の敎を聞習たる故なり。聖人の敎なき以前には、長者を敬ふことは無し。聖人の敎ありて後も、長者に向はざれば敬はず、父母妻子を愛するは、對面せざる時も、忘るゝこと無し。是を以て仁義の內外を知るべし。孟子は長を敬ふ心も內より出ると思へる、大なる謬なり。告子又これを曉して曰く。吾弟をば愛す、他人の弟をば愛せず、是吾弟は親の枝にて、骨肉を分たる故を以て、眞實に愛するなれば、內より出る愛なる故に、仁は內といふなり。長者を敬ふは、他人の長者をも敬ひ、親戚の長者をも敬ふ、是其の長ぜ

故に、箇樣の無理をいへるなり。告子が重て答へざるは、爭を好まぬ心にて、長者なり。鄙き諺に、いさかひには聲の高きが勝つといふ。孟子は聲高き人なり。次に告子が食色性也。仁內也。非ㇾ外也。義外也。非ㇾ內也といへるは、人の食を欲し、色を悅ぶ心は、天下の人の同き所にて、君子も小人も、智者も愚者も、皆同然なり。聖人の敎なき前も、聖人の敎ありて後も、替ること無き故に、是すなはち人の本性なり。此食色の性は、生れてより死するまで有るなれば、前に生之謂ㇾ性といへると、其旨同じ。然るに又かくの如く云るは、前の論を孟子領解せざる故に、又改て箇樣に說るなり。仁は內なりといふは、仁は人の敎に因らずして、內より起るといふ意なり。仁は、人を愛し物を愛する心なり。父母妻子を愛するのみならず、凡我を愛し我を親む者をば、我も亦これを愛しこれを親む、此愛心は、誰も有る心にて、人の敎に因らず、名聞を飾るにも非ず、天然自然にて、胸中より發する故に、內といふなり。義は、聖人の敎にて、是はすべき事、是はすまじき事といふことを知ての後に有る事なり。心中に本來ある事に非ず。外より薰べ附たる者なる故に、外といふなり。告子が此論至極なり。孔門の說なり。さて仁は愛を本とする故に、內より出るといふは、差なけれども、此愛も、內より出るまゝにては、愛すべき者を愛せずして、愛すまじき者を愛すること有り。孝經に、不ㇾ愛二其親一而愛二他人一者。謂二之悖德一と有り。悖德は仁に非ず。世の惡人、君父を弑しても、妻妾をば愛する者あり、內より出る愛心を仁といはゞ、大なる差なり。然れば仁も聖人の義を知たる上にて定まる故に、先王の道にては、內に有る仁よりも、外より附る義を重んずるなり。中庸に擇ㇾ善

性をいふほどにては、多くは此性の字なり。然れば此說は、孔門傳授の說なること明なり。此論にては性善の義立がたき故に、孟子これを難じて曰く。生たる者を性といはゞ、白き物を見て白しといはんかと、告子然なりと答ふ。孟子又問ふ。羽の白きを白きと見るは、雪の白きを白きと見るに同きか、雪の白きを白きと見るは、玉の白きを白きを見るに同きかと、告子又然なりと答ふ。孟子又問ふ。然らば犬の性は牛の性に同く、牛の性は人の性に同きかと、孟子是をいはん爲に、前に再往の問を設く。告子が意に、白き色を見て白きと識ることは、天下の人皆同然なり。羽と雪と玉と、三物の體は異なれども、白き色は白きなり。物の體質異なれば、色の白さも、それに隨て異なれども、其物の上にての色なれば、五色は定まれる五色なり。白を黑とも靑とも見るべき樣なし。さる故に問を受て、然なりと答たり。第三問に至ては、犬と牛と人と、其性同きかと問ふ。犬と牛とは物なり。物の中にて、犬と牛と又種類別なれば、其性同からず。況や牛と人と、種類の別なること、犬と牛との異類なるよりも甚し。旣に異類なれば、其の性何ぞ同からんや。同からねども、性は性なり、性に非ずといふべからず。前の二問には、羽雪玉の白きを白きと見る意を問し故に、告子然なりと答たり。此段にても、犬の性を性と見るは、牛の性を性と見るに同きか、牛の性を性と見るは、人の性を性と見るに同きかと、孟子問はゞ、告子又然なりと答ふべし。孟子左樣には問はずして、直に犬の性は牛の性に同きか、牛の性は人の性に同きかと問故に、告子答へず。是孟子の前の二問と、其旨大に替れる故に、告子答へざるなり。畢竟孟子は、人と爭ふことを好で、人に負じとする

子是を取て譬としたるなり。若實に水の性を論ぜば、物を潤すが水の性なり。下るは水の情なり。洪範に、水曰潤下と云るは、性情を兼ていへるなり。然れども告子が意は、水の性を以て人の性を譬喩するに非ず。只湍水の東へも西へも、人の決するに順て流れ行くを以て、人の性の善にも惡にも導かるゝことを喩たり。然れば是孟子の難は理に當らず。次に告子が生之謂性といへるは、此一句に多義を含めり。生とは、一切の生物の始て生るゝより死するまでの內をいふ。凡生ある物は、生出の初に、天地の性を受て性とす。されば今日耳の聽く、目の視る、鼻の嗅ぐ、口の味ふ、手足の運動する、心の思ふ、凡一身のはたらき、皆此性の用なり。中風の症にて半身偏枯し、或は痲痺不仁の病あれば、一身の中にても、其病する處は、痛癢を覺えず、生氣なき故に、死したると同じ。既に生氣なければ、性も無し。人も物も、死すれば性なし。生存の內は性あり。然れば今日生物の活動する處、すなはち性のしわざなり。生之謂性といふは、生たる者が卽性なりといふ意なり。さて又凡生物の活動する處を性と指す時は、一切の生物を觀るに、其性さまぐ〵なり。人も生物にて、生れ出る初に、此性を受來る故に、人人の生れつきにて、其性さまぐ〵なり。善とも惡とも、一偏に定て論ずべからず。告子が此說の如くなれば、凡生物の性は一樣ならず、さまぐ〵なる者といふこと知らるゝなり。是すなはち古より傳はれる說にて、六經の中にも性の字を出せる處は、多分此意なり。孔門の說も、是を相傳せる故に、孔安國が論語の註にも、性者人之所受以生也と云り。是すなはち告子が生之謂性といへる性の字なり。孔子の後、孟子荀子を除て外は、漢儒に至るまで

けり。率レ性といふ性は、只一種の性を指すには非ず。若天下の人、只一種の性ならば、國家の用に、足らぬこと多かるべし、率の字は、率土之濱といへる率の字なり、率は循也と註して、循は物にそひて行くことなり。率土といふは、海濱をめぐるなり。海のへりは、さま〴〵に曲りくねる者なるを、其曲りくねりたるに循て、つたひ行くを、率といふ。性に率ふも其ごとくなり。性にはさま〴〵の性あるを、其さま〴〵なるに循て、これを修治して、人の才德を成就するなり。先王の道は、是を道とする故に率レ性之謂レ道といへり。告子が杞柳の喩これに叶へり。孟子の論は無理なり。次に告子が性猶二湍水一也といへるは、前の杞柳の喩を、孟子領解せぬ故に、又此の喩を說けり。杞柳の喩は、仁義の教を以て君子の德を成就する一邊を明せるなり。湍水の喩は、人の性に善とも惡とも定まらぬ一類あることをいへり。此類の人は、善き教を受れば、善人となり。惡友に交り、惡俗に染らるれば、不善人となる。湍水の喩甚當れり。孟子これを難じて曰く。水の東へも流れ西へも流るゝは、水の本性には非ず。水の性は、下るが性なり。人の性の善なること、水の下き方へ流るゝが如し。水に下らぬ水なし。人に不善の性なしと、此の論、理に當れる樣にて當らず。如何にとなれば、水の下るは、水の動く處にて見ゆ。人の性の善不善は、動かぬ前にて論ず。動く處を取て、動かぬ處の喩とするは、非なり。湍水は縈廻の水なり。くる〴〵廻て、いまだ流れぬ處を、湍水といふ。此水を東へ流せば東へ流れ、西へ流せば西へ流る。東へ流るゝも西へ流るゝも、流るゝとなれば、下き方へ赴くは、固より水の情なれども、流るゝに因て、物の利となり害となること有り、是善惡の辨なきに非ず、告

帶にて身を縛り、繮を着て引き、鞍を置て騎る、其上にも人の心に叶はざること有れば、鞭箠にて打たゝく、或は乘車を輓しめ、或は重任を負しむ、かくの如くせられて、馬の身は飾を加て美しくなれども、野に在し時の本性は皆失せて、死したると同然なり。然れば人の畜ふ馬は、眞の馬には非ず、野に在る馬は、本性は傷害せぬ故に、是眞の馬なりといふ。莊子が意は、人も馬の野に在る時の如く、本性のまゝにて、少も手を着ぬ處を、眞人といふ。此義を明さんとて、馬を譬としたるなり。是老子の道の無爲を喩たり。莊子が此論、面白き樣なれども、無理なり。如何にとなれば、馬の野に在る時は、固より其本性のまゝなれども、人に畜れて馬具に縛られ、車を輓き任を負ふこと、馬の身に本堪がたき事にあらざる故に、人に順て廐に繫がれ、童子の手にも牽れて、出入往來し、如何なる事ありても、逃走て本の野に歸るべき心なし。若虎狼などを牛馬の如くにせば、暫も人に順ふべからず。人に順はざるのみならず、却て人を害すべし。是虎狼には人に順ふ性なく、牛馬には人に順ふ性ある故なり、然れば牛馬の人に使はるゝは、其性を傷害するに非ず、杞柳の桮棬になるも、其性を傷害するに非ず、其本性に具したる所を、人の力にて修治して用るなり。人も其ごとく、性に具したる所を、敎の力にて修治して、其才德を成就するなれば、本性を少も傷害すること無し。然れば是孟子の論は莊子と同意にて、大なる無理なり。さて又人の性に具する所は、仁義のみに限らず、孝悌忠信智勇廉直、其外種種の性あり。聖人の敎は、人の生れつきたる、それぞれの性に順て、其性を養そだてゝ、種種の才德を成就する道なり。是を中庸には、率レ性之謂レ道と說

柳のまゝにて捨置ては、用に立たざるを、人の工にて桮棬となせば、器になりて用に立つ。是杞柳の性しなやかにて、揉れば能く曲る物なる故に、人これを以て桮棬の器を作るなり。人の身に君子になるべき性を生れつくは、杞柳の木の柔順なるが如し。君子になるべき性ありても、道の敎を受ざれば、只常の人にて終るを、敎の力にて仁義を覺悟して、君子の德を成就するなり。柔順なるは杞柳の性なり。桮棬となすは、人の工の力なり。人も君子となるは敎の力なり。性のまゝにて君子なるには非ずとなり。告子が旨かくの如し。孟子これをして難じて曰く。吾子能く杞柳の性を其まゝにて桮棬を作んや、おほかたは杞柳を戕賊して、桮棬となすにてあらん、若然ならば、人も人の性を戕賊して、仁義を行ふべきかと、孟子の此難無理なり。告子がいふ所は、杞柳を揉て桮棬となすは、杞柳の性しなやかなる故なり。これを揉て桮棬となせばとて、杞柳を傷害すること有るに非ず。若杻などの類の堅剛なる木を揉て、桮棬を作んとせば、其木を傷害して、而も桮棬成就すまじきなり。杞柳は其性柔順なれば、縱有心の物なりとも、彼が身に痛むことは有るべからず。譬へば牛馬の人に使はれて、彼が身にさのみ堪がたきこと無きが如し。孟子は常に性善の論を持して、仁義は皆人の性に本來具足する者といふ故に、今告子が論に、仁義は敎學にてなす事といふを破らんとて、此謬論を發せり。孟子の此論は、莊子が馬蹄の篇の意なり。莊子が論に、凡馬の野に在る時は、草を食ひ水を飮み、心に任て奔走馳逐し、或は牝牡相戯れ、或は子母相親み、痛きことも無く、苦しきことなく、安樂にて在るを、人これを捕へて厩に入れて、口には銜鑣をはめ、尾には鞦をかけ、佾帶腹

人も皆有ることを以て、人の本心とするなり。人の敎を受け、俗習に依り、又は中國に有て夷狄には無し、夷狄に有て中國には無しといふ者は、人の本心に非ず。惻隱の心、取捨の心は、人の敎を待たず、俗習に依らずして、內より發する心なれば、これを仁智の端といふべし。義と禮とは、定法なき者なれば、只先王の禮義を規矩として、天下の萬事を正すなり。されば孟子も、非禮之禮。非義之義大人弗レ爲と云り。是却て孔子の旨なり。若禮義に一定の禮あらば、何ぞ非禮の禮、非義の義といふ者有んや。先王の禮義を除て外は、皆非禮の禮、非義の義なり。然れば禮義は先王の道にて、人の本心には無き事なりといふ、其證明白なり。

○問曰。告子と孟子と性を論じたる處を、宋儒は孟子を是として、告子を非とす。近世日本の仁齋も、孟子を是とすること、宋儒と同意なり。徂徠一人告子を是として、孟子を非とす。其說如何。

答曰。性の論は、告子がいふところ皆是なり、告子の篇の最初に、告子が性猶ニ杞柳一也。義猶ニ桮棬一也と云るは、すなはち子思の中庸に率レ性之謂レ道といへる意を譬喩したるなり。前に云る如く、人の性は萬人萬樣なれども、大約を以て分れば、三類あり。三題の中に、勝たる上智と、極まりたる下愚とは、世に甚稀なる者なり、此二類を除て外は、皆中品の性にて、道を以て敎れば君子となる、敎へざれば小人にて終る、敎ても其成立する所は、又其人の生れつきの利鈍に因て、遲速も高下も有れども、敎を得て其材を達し、其德を成すことは、皆同然なり。是を物に譬れば、杞柳の木を以て桮棬の器を作るが如し。諸木の中にて、杞柳は其性しなやかなる故に、これを揉て桮棬となす、杞

所は一なりと說たまへり。又論語に、喪事不ニ敢不ㇾ勉とあり。喪は悲哀の實より起る事なれども、勉强することも有る故に、孔子かくのたまへり。喪事さへ勉强を用れば、其餘は知るべし。勉强して其功を積累すれば、賢人君子の行となるなり。然れば辭讓は是聖人の敎にて、先王の道なり。人の心に本來有る者には非ず。辭讓之心、人皆有ㇾ之と、孟子の云るは、大なる謬に非ずや。孟子は只今日禮敎を聞たる人の心をいへるなり。禮敎なき以前の凡の人の本心に非ず。次に是非之心、智之端也といへるは、無理ならず。物を是とし非とすることは、君子も小人も智者も愚者も、此心なきことは有らず。此是非の心は、聖人の敎を待たずして、人人自然に有ることなれば、人皆有ㇾ之といへる、謬に非ず。但し是非に定まれる是非なし。君子の是非と、小人の是非と同からず。賢者の是非と、不肖者の是非と同からず。吾が聖人の是非と、老莊等の諸子の是非と又異なり。凡是非に定體なきことは、莊子齊物論にこれを論じて、其理至極せり。是非に定體なければ、何れの是非を智者の是非とせんや。然れば是非するを智とはいひがたし。純が愚意におもふには、是非の心といふを改て、取捨の心といはゞ可ならん。己が身に損害ある事を捨て、利益ある事を取るは、人人の情にて、君子小人、皆此心あり。趨避去就、皆此類なり。利に趨き害を避け、苦を去り樂に就く、皆是取捨の心なり。是すなはち自己の便利を求る心なれば、賢き心にて、智の端なり。是を先王の道にて養立れば、君子の智となる、其まゝにて捨置けば、小人の智となるなり。然れば取捨の心を智の端といふべき者なり。凡心術を論ずるには、人の敎を待たず、俗習にも依らず、中國の人も夷狄の

るも、孟子の謬なり。人の心に本來辭讓の心あること無し。是も羞惡と同く、聖人の禮義の教を受て、後に出來れる心なり。凡天下の人、爭競の心なき者は有らず。爭競は、あらそひ、きそふなり、きそふとは、人とはりあふなり、人と爭ては、人に勝んことを思ひ、人と競ては、人に後れじと思ふ、是人情なり。又夏は涼き處を好み、冬は溫なる處を好み、榮利の事には、人を推のけても進みたく思ひ、勞苦の事には、人を出して己は逃たく思ひ、人と物を分る事あれば、自己には少も善き物を少も多く取たく思ひ、利に就くことは、青蠅の肉に集まるが如く、害を去ことは、毒蛇を畏るゝが如く、都て何事も人にかまはず、一己の便利を求る心ある、是天下の人の實情なり。此實情は、賢者も愚者も、君子も小人も、同く有り。若此情を制せずして、其まゝにて捨置かば、天下の亂止むこと無かるべし。古の聖人これを知しめして、禮といふことを建立して、天下の人に教たまふ。禮は辭讓を本とする故に、禮教流布してより、天下の人、皆辭讓の道を知れり。人情なれば、內には爭競の心も起れども、辭讓すべき義を思て、勉强するなり。是よりして、夏は涼き處に人を居き、冬は溫なる處に人を置き、榮利の事には人を先にし、勞苦の事には己先だち、物を分るには、少も善き物を、人に少も多く取らせ、凡何にても、利に就き害を去べき事ある時に、其義を思惟して、必一己の便利を占ぬ樣に料簡する心あり。凡是皆情を抑て勉强するなり。勉强は、詐僞の類なり。自然に非ず。誠に非ずといふは、老莊の見なり。先王の教は、最初勉强より始まる、勉强すること已まずして、習熟ずれば、後には勉强を離て自然になるを、中庸に、安行利行勉强行、其功を成就する

知るべし。姑は母と同じ、姪は女と同じ、姑を妻とし、姪を妻とし、妹を妻とする、是に超たる不義やあるべき、公然として此不義を行て、男女倶に羞る色も無く、人の上を見て惡む心も無ければ、羞惡の心は何方に在るべきや。此の事我が日本のみに限らず、中華とても同然なり。昔聖人の出たまはぬ前、禮義の敎の立ざるほどは、人皆禽獸の行をなせしこと、日本の昔に替ること無しと知るべし。禽獸の如くの心にては、外の女を迎て妻とせんより、内に有あひたる女を、姪にても妹にても、有るに任せて妻とするは、便利なり。女も多淫なる者は、一の夫を守んより、數多の夫に通ずるは、快活なるべし。色欲の一事のみに非ず。禽獸は小なる者を大なる者が苦しめ、弱き者の肉をば强き者が食ふ。人も其ごとく、聖人なき以前は、無力の者をば有力の者が攻て、其財寶等を奪取り掠取て、憚る所なかりしなり。然るに聖人といふ者世に出て、禮義の敎を施し、民に廉恥を知しめたまふ。婚姻の禮を制し、男女の別を正しくして、同族は婚姻せぬ物と敎へ、取與の義を設て、人の物を奪取り掠取り、又盜取る類の事は、人の道に非ずと敎たまふ。是よりして天下の人、義を知り恥を知て、前の如くの禽獸の行を止て、人倫の道を守る樣になれり。其後は禮義の敎、人民の心に染て、賤き者までも、隨分の廉恥は有る故に、禽獸の行をなす者を見ては、傍よりも羞惡するなり。然れば是羞惡の心は、人人の性に本來有る者には非ず、聖人の敎にて出來れる者なり。然るを孟子は只今の人を見て、羞惡之心、人皆有ㇾ之といふ、大なる謬なり。告子が仁は内なり義は外なりといへるは、聖人の旨に叶て、道を知れる言なり。次に辭讓之心。禮之端也といへ

以下を不義とすれば、彼等は却て儒者を不義とす。萬事かくの如し。是にて義に定體なきことを知るべし。旣に定體なき者なれば、人の性に本來義ありといふは、無理なり。然れば孔子の家にて禮義といふは、いつとても先王の定たまへる禮義を指すなり。夏の代にては大禹の立置たまへる禮義、殷の代にては成湯の禮義、周の代にては文武周公の禮義を、其世に居て堅く守るを君子とするなり、然れば是禮義は性に非ず。先王の道なること明なり。孟子仁義禮智は心より出る者といふことを明さんとて、四端を說く、惻隱の心は仁の端なりといふは、誠に然なり。孺子の井に入んとするを見て、怵惕惻隱の心起るは、仁の端なること疑なし。四端の說の中にて、只此一つ理に當れり。羞惡の心は義の端なりといふは無理なり。人の心に本來羞惡あるに非ず、聖人の禮義の敎ありてよりの敎を聞たる上にて、羞惡することを知るなり。天地の中に生れ出たるまゝにては、禽獸と異なること無し。近く日本の古をいふに、神代はさだかならず。人の代となりて、日本武尊は、景行天皇の皇子にて、垂仁天皇には孫なり、兩道入姬（フタミチイリ）は垂仁の皇女にて、景行と兄弟なれば、日本武には姑なり、日本武此の姑を妻として、仲哀天皇を生めり。又敏達天皇は、欽明天皇の太子なり。豐御食（トヨミケ）炊屋姬（カシキヤ）は、欽明の皇女にて、敏達の妹なり。敏達此の妹を后としたまふ、此の后すなはち推古天皇なり。又天智天皇と天武天皇とは兄弟なり、高天原廣野姬は、天智の皇女にて、天武には兄の女なれば、姪なり。天武これを后としたまふ。天武崩じて、此后すなはち位に卽たまふ、持統天皇是なり。此外にも有れども、いふに足らず。箇樣に人主の身にて禽獸の行をなしたまへば、其下は推て

ふ、仁人仁者といふは、仁德ある人なり。然れば仁は本來德の名なること明なり。智も人の生れつきに在る者なれども、學問の養を得て成就する者なる故に、是亦德の名なり。中庸に、智仁勇を三達德といへるにて、其旨明なり。義と禮とは、道の名なり。義は先王の義なり。禮は先王の禮なり。仲虺の言に、以レ義制レ事。以レ禮制レ心といへるは、先王の禮義を以て、規矩準繩とすることなり。人人の心に禮義ありといふには非ず。凡禮義には定まれる體なし。先王の立置たまへる禮義を定法とするなり。若禮義に一定の體あらば、夏殷周三代の禮皆一樣にて、改革すること無かるべし。夏の禮を殷の代に行へば、非禮とす。殷の禮を周の代に行へば、非禮とす。近く言へば、中華にては立つを敬とし。日本にては坐するを敬とす。若中華にて、尊者の前にて、許も無きに坐して、是日本の禮なりといはゞ、人これを責ざらんや。日本にて、貴人の前にて、事も無きに立て、是中華の禮なりといはゞ、人これを是とせんや。此等の理を以て、禮に定法なきことを知るべし。かくの如く定法なき者なるを、人の性に本來禮ありといふは、無理なり。義は禮に附たる者にて、禮を離て別に義といふ者あるに非ず。先王の禮を制したまふは、皆義を本として百禮を建立したまふ。されば一一の禮に必ず一一の義あり。禮に定法なければ、義にも定體なし。たとへば儒者は親を葬るに、堅木にて厚さ七寸の棺を用るを義とすれば、墨翟の桐棺三寸を用て義とするが如し。又莊周は弟子に遺言して、我死せば屍を外野に棄て、烏鳶に食はしめよといひ、漢の楊王孫は其子に遺命して、我死せば、屍を裸にして土中に埋めといふ。釋氏は天竺の法とて火にて焚き、水に流す、儒者より墨翟

氣養を待たずして、自然に剛强なり、是すなはち君子の浩然なり。禮義を守るといはずして、浩然の氣を養ふといふは、是孟子のりきみなり、空論なり、さる故に己も難ㇾ言と云り、孔子にはかくの如くの空論なし。先王の法言にあらざれば敢ていはざるは、君子の道なり。性善養氣の説は、先王の道に無き事なる故に、孟子より前に是をいふ人なし。然るを程子前聖未發の論と思へるは、考へざるの過なり。是にて程子の學術の精からぬを見るべし。

○問曰。孔子の説に仁義禮智を性なりといひ、惻隱羞惡辭讓是非の心を、仁義禮智の端とす。宋儒これを信じて疑はず。仁齋は仁義禮智を德なりといふ。徂徠一人此等の諸説を皆非とす。其説如何。

答曰。徂徠おもへらく、仁義禮智といふこと、孔子の時まで無き事にて、孟子始てこれを言り。此四つを性なりといふは非なり。仁と智とは德なり。義と禮とは道なり。仁と義とを並べていふことは、老子に大道廢有二仁義一といひ、易の説卦に、立二人之道一曰二仁與ㇾ義とある、是のみなり。説卦には明に人の道とあれば、仁義皆道なり。老子も大道廢れて仁義ありといへれば、是も仁義を皆道とする意なり。後世に及ては、仁義といふこと、士君子の常言になりたり。義は固より道なり。仁は心より出る者にて、これを行て成就すれば、人の德となる者なれども、これを行ふに其道あり。道に違へば仁に非ず。さる故に德は德にて、義と並ぶれば道になるなり。説卦に仁義を言るは、天地陰陽剛柔に准じて、人の道を立たる者にて別に子細ある事なり。孔子の常言には非ず。孔子の常言には、いつも仁とばかり説たまひて、仁義とはのたまはず。孔子の仁とのたまふは、皆仁の德をい

思ふこと有るは、小動なり。喜怒哀樂愛惡欲の七情にて、臨時に動くは、大動なり。大小の不同あれども、動かざることは無し。生るゝより死するまで、一息いまだ絶せざる內は、心の動かざることなし。動き止めば、すなはち死するなり。寐ても夢みるは、心の動く故なり。熟睡して夢も見ざる時は、死人と同き故に、其時ばかり心暫動かぬなり。莊周が言に形をば槁木の如くにすべし、心をば死灰の如くにすべしといへるは、是動物を强て死物にする說にて、畢竟無理なり。孟子の不動心といへるは、只常人の如く妄に驚き懼るゝこと無きを言るなり。人に七情なきこと有らず、情なきは人に非ず。情は皆心の動くなり。孺子の井に入んとするを以て、怵惕惻隱するは、心の動くに非ずや。孟子も樂正子が魯國に用られて政をなすを聞ては、喜で寐ずといふ、夜寐られぬは心の動くに非ずや。然れば孟子の不動心といへるは、詐なり、人を欺けるなり、養氣といふ事も、聖人の道に無き事なり。人の身には陰陽の二氣を具す。聖人の道は、禮なり。禮は陰に屬し。樂は陽に屬す。禮は人の身を檢束する者なる故に、禮を以ては人の身の陰氣を養ふ。樂は人の心を發揚する者なる故に、樂を以ては人の身の陽氣を養ふ。然れば聖人の道にて、人の氣を養ふ者は、禮樂なり。禮樂を捨て、別に氣を養ふといふは、空論なり。後世の修養家に、靜坐して陰氣を養ひ、按摩導引して陽氣を養ふといふ者の如し。先王の道に決して無き事なり。浩然の氣といふは、物に屈せぬ剛强なる氣をいふ。是も先王の道には、仲虺の云る、以ㇾ義制ㇾ事。以ㇾ禮制ㇾ心といふこと有て、禮義をさへ守れば、物に屈することも無く、天下の事に、何にても恐懼すること無く、屋漏にも愧ず、心

説くに、孔子傳二之孟軻一。軻之死。不レ得二其傳一焉といひ、又孟氏。醇二乎醇一者也。荀與レ楊。大醇而小疵といふ。三子の中にて、孟子一人を取て、荀楊を取らざれるは何ぞ。答曰。退之が三子の中にて孟子一人を取て、傳道の列に入れて、荀楊を取らざるは、性の説に依ての故に非ず、性の説は退之も孟子を取らず、原性の篇を看るべし。只全體の器量を觀るに、三子の中にて、孟子勝たり。道を論ずる處も、孟子は孔子を去ること遠からぬほどありて、正等の論多し。書を著す處も、孟子の文章、又荀楊二子よりも勝たり。此等の故を以て、荀楊を置て、孟子を取たるなり。然れども進學の解には、荀卿を孟軻と並べ、張籍に答へる書には、夫子孟軻楊雄之所レ傳と連たり。然れば退之が心にも、孟子と荀楊と、甚しき優劣なしと思へるなり。但し孟氏を醇二乎醇一者として、荀楊を小疵といへるは、孟子を譽すぎたり。徂徠は孟子を大醇大疵といふべしと判斷せり。知言なり。工人の刀を以て喩るに、利器は必深入するものなり。孟子は豪傑なる故に、大醇大疵なり。利及の深入したるなり。荀楊は才氣少劣たる故に、大醇小疵なり。

○問曰。孟子公孫丑と心術を論じて、我四十不レ動レ心といひ、我善養二吾浩然之氣一といふ。程子これを悦て、孟子の性善養氣の論は、皆前聖のいまだ發せざる所なりと讚ず。此説如何。答曰。人は動物なり。心も亦動物なり。孟子の言に、心之官則思といへり。人心は思ふを以て職とする故に、心中片時も思ふこと無くてはあらず。人心は小兒の如くなる者なり。小兒寐ざる內は、暫も手足を動さずはあらず。人の心中に思ふこと有るは、すなはち心の動くなり。但し心の動くに大小あり、平日

は、孟荀の二家を合せて、一つにしたる論なり。是告子が湍水の喩の意にて、人の性に本此一類あるを、告子は孟子を曉さんとて、種種に開示する中に、湍水の如くなる一類も有ることを擧て示したるなり。楊子は天下の人の性を、皆善惡混ずといへば、又僻論なり。人の性には善のみにて惡なきも有り、惡のみにて善なきも有り、何ぞ天下の人、皆善惡混じたる性のみならんや、是其謬を見るべし。されば孟荀楊の三子、皆性を知らずして謬說せり、然るを宋儒は孟子の性善の說のみを是として、荀楊二家を非とすることは、佛乘に一切衆生、悉有㆓佛性㆒といひ、草木國土、悉皆成佛といふこと有るを、羨しく思て、儒者にもかくの如くなること有といひて、佛法に敵せんとする故なり。悉有佛性とは說けども、釋迦以來、二千餘年を歷ても、一切衆生、皆佛にもならず、增て草木國土皆佛になりたること無し。是釋氏の人を欺く、虛誕無實の言なり。されば釋氏の佛性といふも、一生にて佛になるとはいはず、幾世も生を轉じて、後に佛になるといふ。又一闡提とて、決して佛にならぬ性も有るといふ。是皆はづしの詞にて、孟子の云る遁辭なり。然るを彼家の佛性に應せんとて、孟子の言を是とするは、宋儒の大なる惑なり。孟子性善と唱ふれども、天下には性惡なる人あり。人皆可㆔以爲㆓堯舜㆒と說けども、孔子より後、堯舜に似たる人も無し、是亦虛誕無實の言なり。畢竟前にいへる勸化門の說なり。勸化門にては、かくの如く說かずして叶はざることも有る故なり。

○問曰。孟子荀子楊子、何れも性を說て聖旨に違へりといふ、然るに韓退之が原道に、道の相傳を

化すれば、天下の人禮義の化に移りて、不善をなさず。善行をなす。師の教と、其身の習熟と、上の化と、風俗の薫陶と、彼此の力にて、性の惡を變じて、善人となる、譬へば蓬は枉る性なる者なれども、麻の中に生ずれは、矯ざるに直なり、青き色をば藍にて染れども、幾入も重て染れば、藍の本色よりも色深くなる、其ごとく人も習はしに由て、生れつきよりも賢くなる。天下の人の子の生れ出たる初は、啼く聲も笑ふ聲も、皆同く一樣なり。一日一日と成長するに隨て、種種のなりたち不同にして、三十四十に至ては、君子になるも有り、小人になるも有り、王公貴人は、王公貴人になり、細民奴隷は細民奴隷になる、高下相去こと、雲泥萬里なり。是皆生れ出たる初は同くて、成長する内の習はしにて、箇樣に各別なる者に變ずるなり。然れば人は教ると學ぶと習ふと、此三つの事なくて叶はぬ道理なり。老莊の說の如く、生れたるまゝにて、一向に手を着けずして捨置ては、皆不善人なるべきほどに、天下は治まるまじきといふ義なり。荀子の書の、最初に勸學の篇を著したる、其主意かくの如し、是をいひつのりて、遂に性惡の篇を著はせり。荀子が意は、性に拘はらず、教學を主とする旨なれば、本は惡からぬ意なれども、子思の率レ性といひ、孟子の性は善といへるを破らんとて、此僻論を立たるなり。子思の率レ性といへるは、告子が杞柳の喩の意にて、聖人の旨に違はず。孟子の性善は、聖人の旨に非ずして、無稽の言なるを、荀子これを矯るとて、矯すぎて又背の方へ枉りたるなり。然らば孟子と荀子と、性の說は相反して同からねども、聖旨に違へる處は、同等の罪なり。孟子は是なり、荀子は非なりといふべからず。其後楊雄が。人之性也善惡混といへるとる

多く受たる者は、其性剛なり。陰氣を多く受たる者は、其性柔なり、されば善をなすにも剛柔あり、惡をなすにも剛柔あり、善惡の事、種種不同なれども、剛柔の二つに分るゝなり、然れば剛柔は、善にも惡にも有て、人の性は萬人萬様不同なれども、大約をいへば、畢竟上に云る如く、善と惡と中庸と三類に約まるなり。是孔子の旨にて、韓退之が、人の性は三品に分たる說、よく是に叶へり、されば孔子より後に、孟子荀子にも勝りて、聖旨を得て、性の說を知たる者は、退之一人なり。さて孟子の性善を言出せる子細は、其ころ老莊の徒の說に、天地に本來大道といふ者ありて、人は其大道より生れ出て、性分に大道を具する故に、仁義といふことも無く、禮樂といふことも無し、仁義は外より附たる者なり、禮樂は人の僞なりといふ。孟子これを惡みて、此說を破らん爲に、仁義禮智は、人の性に本來有る者なりといはんとて、先人の性は善にして惡なき者なりといふ。最初は敵に對して、卒忽に言出したる理窟なるべきが、豪傑なる故に、後まで其說を改めず。告子などとも爭て、始終己が軍を張つめたる者なり。畢竟皆無理なり。荀子が性惡といへる子細は、老莊の方より、人の仁義をなすは、皆僞なりといふに謍（こたへ）て、仁義はいかにも僞なり。人の性は本惡なり、惡なる證據には、人ごとに善をなすには嬾く、不善をなすには心進みやすく、禮を守れば窮屈にて、無禮を行へば、心ゆるみて安樂なり。すべて君子の行義を守ることは甚難く、小人の事はなりやすくして、好む者多し、是にて人の性の本來惡なることを知る。然れども天下の人を、生れたるまゝにて捨置ては、天下治まらぬ故に、聖人禮義の敎を立て、天下の人を導きたまふ。聖人の敎を以て民を

品の庸人なり。家語に見えたり。畢竟孔子の言を以て、其要を總ていへば、人の性には、善と惡と中庸と三類あり。生れつきて善を好み、假にも不善をなさず、人の道を知て、賢人君子となるは、善の性なり。生れつきて惡を好み、假にも善をなさず、尋常の不孝不悌不忠不信はいふに及ばず、或は君父を弑し、或は盜賊放火等の大惡をなし、人の敎訓を聽納れず、國家の刑戮に身を殺すまでに及ても、悔悟すること無き者は、是れ惡の性なり。かくの如く善惡二類ある外に、中庸の性といふ者あり。是は善とも惡とも定まらぬ性なり。善人と同居し、善敎に遇へば、善人となる。惡人と同居し、惡事に染らるれば、惡人となる。又善をなすことも甚しからず、不善をなすことも甚しからぬ者あり。善惡のみに非ず、賢愚明暗も亦然なり。畢竟皆中庸の性なり。凡性は、人の生れつきなり。人の生れつき、十人は十樣、百人は百樣、千人は千樣、萬人は萬樣なり。子產が言に、人心之不レ同。如二其面一焉といへるは、千古の名言なり、人面の同からぬ如く、心も亦異なり。心同からねば、性も亦異なり。性の異なることは、萬事の好惡、口腹の食性の人、人同からぬにて見ゆるなり。されば善をなすも惡をなすも、人人の性の不同に隨て、其事同からず。たとへば人に仁者、智者、勇者、剛者、忠臣、孝子あるは、是皆善の類にて、其性同からず。色を好み、貨を好み、詐僞を好み、人を殺すことを好むが如きは、是皆不善の類にて、其性同からず。然れども人は天地陰陽の氣を受て生ずる故に性にも亦陰陽あり。聖人などは、陰陽の氣を均く受たまふべきが、其下は氣を受るに偏なる處ありて、性も亦偏なり。人の病に陰症陽症ある如く、性にも陰陽ありて、陽氣を

ほどの分れになるといふことなり。孔子の是をおほせられたる意は、習相遠也といふ一句に在り、然れば孔子の意は、性にはさのみ拘はらず、只習を大事とするなり。宋の歐陽永叔、此等の義に依て、聖人之敎レ人。性非レ所レ先と云る、誠に程子朱子に勝りて、古道を知たる人なり。かくの如くの義を知ては、後の學者も、性の說をば言ふまじき義なれども、孟子荀子より性の說起りて、宋儒の徒、これを學問の要とする故に、聖人の道差謬して、浮屠氏と別なき樣になりぬ。是に因て已ことを得ずして、これを辯明せんとすれば、古の聖人の先としたまはぬ性の說を、今は先務として論ずること、狂人東に走れば、逐ふ者も東に走るといふ者にて、歎かしき事なり。漢の太史公司馬遷が言に、六藝をいふ者は、孔子に折衷すと云り。六藝は、六經なり。折衷とは、是非を判斷するなり。六經の道を說くには、孔子の言を以て其是非を定むるとなり。されば何事も、孔子の說を規矩準繩として是非邪正を定むること、後の學者の大法なり。性の說を論ずるに、孔子は有レ敎無レ類とも、習相遠也とものたまひて、人は只敎と習はしとにて、君子にも小人にもなる、君子の種類、小人の種類とて、二つ有るには非ずといふことを、專一に說たまふ。是古聖人の旨なり。然れども又別の語に、唯上智與二下愚一不レ移とのたまふは勝たる上智は、敎を待たずして知る者あり、極まりたる下愚は、敎ても知らず。然れば上智を下愚に移すことも叶はず、下愚を上智に移すことも叶はず、上智は日日に上智に進み、下愚は一生下愚にて終る。是上智と下愚と、兩種の性なり。此外は中庸の人にて、性は相近けれども、習はしにて相遠くなる者、世に多し。是又一種の性なり。中庸の人といふは、中

堯舜の道より尊きこと無く、孔子の敎より明なること無しと思ひ、孔子の敎に從ひ、六經の旨を得ては、何にても事の缺ることと無しと思ふ故に、他の道に於ては、尊きこと少も無しとのみ思ふなり。朱子論語の註に。生ては順ひ死しては安しと云る似にたり。此まゝにて死しても、天地の間に憾ること少も無く、心の遺ること無し、是を樂みて日を送る、仲尼顏淵の樂も是に過じ、釋氏の大安樂の境界といふ者は、是に及ばじと思ふ。かくの如くなるのみなり。然れども、純は性愚なる故に、聖人の道を悟ること容易ならずして、三十年の工夫を用たり、伶俐なる人は、必しもかくの如くなるべからず、若純が論說を聞て、少なりとも此道に信を起し、其上に自己の精力を用て熟思せば、一旦に開悟することも有るべし、旣に開悟しては、孟子の言の孔子に違へること明に見ゆべきなり。

○問曰。性は善なりと云るは、孟子の說甚明白なり。然るに吾子これを破して、先王孔子の道に無き事なりといふ。其義如何。答曰。性善の二字は、孟子の建立したる宗義にて、孟子一生の議論、皆是より出たり。今六經の中を徧く尋るに、性善の二字曾見えず、凡古の聖王の道には、人の性のことを言はず。孔子の言には、性相近也、習相遠也とのたまへるのみにて、性は善とも惡とも說たまはず。孔子も平日性のことを多く談じたまはず。門弟子もこれを聞こと稀なる故に、夫子之言₂性與₁天道₁。不₁可₂得而聞₁也と、子貢云り。性相近也、習相遠也とのたまひし意は、人の性は、大抵似よりたる者にて、大に異なること無し、只幼童の時より、成長するまでの間、父母のそだてがらと、父兄師友の敎と習はしと、此二ッにて、其人の成立する處に、君子小人の不同出來て、後には雲泥

先王の道を六經に求め、孔子の道は卽先王の道なることを悟り、孟子の言の孔子に違へることと多きを知れり。純等徂徠先生に從て、其談論を聞といへども、始いまだ其然ることを會得せざりしが、心を六經に潛て、深く思惟し博く古書を讀て、古人の心を探索し前後相照し、左右源に逢ひ、反復研究すること十餘年にして、疑網始て解たり。凡聖人の道を學ぶに、六經論語孝經等の經書を熟讀しても、博く天下の書を讀み、諸子百家の道までを明むるにあらざれば、聖人の道の妙處を悟ること能はず。今の學者は、宋儒の註したる四書五經のみを讀み、其外も、小學、近思錄、性理大全、朱子語類などの內を論說して一生を過すのみなれば、如何にして古の聖人の道に達すること有んや。純等少年より宋儒の書を讀て心中に疑を起し。其後伊藤氏の說を聞て、又半信半疑なりしに、徂徠の說を聞て頗信を起せしかども、一旦には疑網解けざりき。總じて少き時より、老莊の書、又は釋氏諸家の說までをも講究し、又其後博く諸子百家の書を讀で、取捨斟酌し、三十年の歲月を歷て、年五十に近くなりて、從來の學問、融會貫通し、天下の道、胸中に醞釀して、堯舜禹湯文武周公孔子の道、吾が眼にこれを視ること、靑天に白日を懸たるが如く、今に至ては、毫末の疑も無し。されば純が眼には、老莊楊墨より以下、諸子百家の道術はいふに及ばず、後世の釋氏の道までも、皆先王の道の中の一端と見ゆるなり。若只今にも孔子に拜謁し、純が所見を呈露して、其是非を正さんに、恐らくは孔子も必我を印可したまはんと思ふばかりなり。此眼を開てより、天下の書を讀み、古今の道を視ること、繩墨を執て曲木に臨むが如し、毫釐のゆがみも明に見ゆるなり。されば純が心には天下に

はず、只先王孔子の道を、直に平平に說たる處は、さすがに孔子を去こと遠からぬほど有て、正等の論も多し。然れども胷中に世を矯め俗を憤る心深かりしに故に、言を立る上に過失多きなり。されば後漢の王充は論衡を著はして、孟子を刺たる篇を、刺孟といふ。王充が論ずるところ數箇條、皆至極の義なり。若孟子に遇しめたらば、孟子の辯にても、答話なるまじきなり、韓退之は孟子を尊崇せしかども、只孟子を孔子の徒と稱して、先王の道を衞し處を取て、功不レ在二禹下一と讃たるまでなり。孟子の說を是としたるには非ず。其の證據は、退之が性を論ずるに、三品を立て、孟子の性善の說を用ひざるにて見えたり。宋人には司馬溫公、又孟子を誹れり。此等は皆顯然たる事なり。此外にも、一言一句にて孟子を誹れる者は、古來其人少からず。孟子を尊信する者は、後漢の趙岐、孟子の書を註してより、宋の孫奭正義を作り、孟子を經に列して、十三經に入る。其後程氏兄弟、又孟子を信ずること甚しく、孟子を尊びて聖人の如く思ひしより、朱子又これに依て集註を作り、論語と幷べて、論孟語孟と稱す。それより以來六百餘年、天下の人、孟子を尊信して、孔子と並べて孔孟と稱す。日本の伊藤仁齋は、見識を立て、宋儒をば誹れども、孟子を尊信することは宋儒に替らず。凡古の聖人の道には、心性を談ずること無し。心性の說は、孟子より始まれり。宋儒又釋氏に倣て、心法を以て敎とする故に、孟子の說の己が宗旨に合へるを悅で、これを尊信せる者なり。仁齋は宋儒の理學を嫌しかども、畢竟心法の敎を主とする故に、孟子の說の孔子に違へることを知らずして、孔子と並べて尊信し、孟子の書をば、論語の義疏なりといふ。悲き見處なり。徂徠に至て、

者なり。誣るとは、人にいひかけをすることなり。齊王これを聞て、さては貨を好み色を好むも惡事に非ずと思はゞ、大なる害なり。後世の人主これを聞ては、孟子の敎なりと心得て、好貨好色の病を除く心も有まじければ、誠に萬世までの害なり。孔子の一生人に說示したまへるは、論語家語、其外諸書に載たる中にも、箇樣の語は曾見えず、伊尹の太甲を敎訓せられしこと、書經に載たるを觀るに、三風十愆などの數を擧て、一途に深く戒たるのみなり。孝經に、非二先王之法言一不二敢道一と云るは、孔子の言なり。孟子の言は、先王の法言に非ず。又齊の宣王に告て曰く、君之視レ臣如二犬馬一則臣視レ君如二國人一。君之視レ臣如二土芥一則臣視レ君如二寇讐一と、此言、人の君たる人を戒むるには、其益あるべきが、人の臣たる者に聞せられぬ言なり。古語に、君雖レ不レ君。臣不レ可二以不一レ臣と云るは、先王の法言なり、孔子の言には、君使レ臣以レ禮。臣事レ君以レ忠とのたまへり。若孟子の言を是とせば、臣下其君を怨ること有て、寇讐の如く思て、弑逆の大惡を行ふとも、孟子の言を引て證據とせば、其罪なかるべし。凡君子の一言は、萬世の鑒なる故に、子貢が言に、君子は一言以爲レ智。一言以爲二不智一。言不レ可レ不レ愼也といへり。されば一言を出して、上にも下にも君にも臣にも、父にも子にも、碍なく害なきを、通論といふ。孟子の言の如く、君には益ありて、臣には聞しめがたき言をば、不通の論といふ。世上に推及して敎にならぬ故なり。是皆孟子己が說を人に信ぜられん爲に、其きゝめを尤く見せんとて、前後を忘却して、箇樣の妄說を出せるなり。是又一つの病なり。孟子一部の書の中に、此二つの病ある處は、其義悉非なり。此等の外に、對頭を取らず、人と爭

孟子には二つの病あり。孟子の時は、孔子の世と易りて、楊朱墨翟が門徒、世に多く有て、各其道を說て、天下の人を惑はしける故に、彼を闢かんとて、吾道を說くにつきて、新奇の說を立て、吾道の軍を張り、彼が陣を破らんとす。性は善なりといひ、人皆堯舜となるべしといひ、吾が浩然の氣を養ふといふ類の論、皆先王孔子の道に無き事にて、孟子の始て建立せる宗旨の說なり。佛家にいふ、建立門といふ者なるを、孟子此門を開て人を引入す是一つの病なり、又孟子、齊の宣王梁の惠王等の招に應じて、其國に往き、戰國の世の、攻伐戰爭に薰習したる國王を、强て吾道に引入せんとするにつきて、一旦彼王の心を悅ばしめん爲に、理を枉たることを言て、人を勸たること有り。宣王貨を好むといへば、貨を好むは善き事なりといひ、色を好むといへば、色を好むは善き事なりといふ。此類は皆世の人を勸むる、方便の說にて、佛者のいふ勸化門といふ者なり。譬へば今の世の淨土宗日蓮宗の中の、卑劣なる談義僧等、愚俗を誑惑して、佛法に歸依せしめ、金銀米錢を取んとて、釋迦の法にも祖師の敎にも無き、虛妄の事をいひ、狂言亂語して、鄙俚猥褻なる事をいひて、愚民婦女を欺くが如し。孟子の心は、今の鄙き談義僧の比類にはあらねども、勸化門を開て、人主を誘引する處は、一般なり。如何にとなれば、色を好み貨を好むは、富貴人の大病にて、諸の惡事是より起り、國家亂亡の端となること、古今歷々たり、何ぞ是を助て、其不善を取そだつること有んや。且公劉貨を好み、太王色を好たまひしといふこと、經傳の中に全く蹤跡なき事なり。詩經を引て證據とすれども、詩の詞にも其意見えず、此等の說は孟子の杜撰妄說にて、古人を誣るといふ

聖學問答卷之上

太宰純著

問曰。程子朱子より、孟子を大賢と稱し又は命世亞聖の才と稱して、孔子の後、孔子の道を得たる者は、孟子一人なりといふ。其說昭昭として明なり。日本にて、近時京都の伊藤仁齋も、宋儒をば擊たれども、孟子を尊信することは甚しくして、孔子と並べて孔孟と稱し、其書をば論語と並べて、論孟語孟と稱すること、宋儒と異なること無し。唐の韓退之は、一代の豪傑なりしも、孟子を推尊して、功不レ在二禹下一と云り。然るに荻生先生一人孟子を誹りて、孔子の道と合はずといふ。吾子又孟子論を作て、孟子を誹ること甚し。願はくは其說の詳なることを聞ん。答曰。凡古人も今人も、道を論じ藝術を談ずる者、對頭を取らずして、一己の理窟ばかりを言ふは、善くも惡くも、己が言ふべきすぢを言て、橫道なることを言はぬ者なり。如何樣なる者なりとも、對頭となして、談論すれば、己が義を立んとするに、對頭の方より、これを抑へ、これを破らんとすれば、彼に負じと思ふ心起るは、人情なれば、彼を我に服せしめんとするより、覺へず無理を言ふ者なり。又人を敎化するに、彼を悅ばしめんとては、道理に背きたることを言こと有り。孔子の言は、一言一語も、對頭を取て爭たまふこと無く、又人を敎化せんとて、理を枉たることをものたまはず、直に先王の法言を述て、人の服するにも服せぬにも拘はりたまはず。天下後世の人に詔て、少も害あること無し。

聖學問答後序

道也者。帝王所下以治二天下一安中人民上之物也。作二斯物一謂二之聖一。學者學二斯物一也。後世以レ聖爲レ可レ造。遂以二盡性究理一爲レ學。其說始二乎孟子一。而成二乎宋儒一。卒使下聖學無上レ用二於治一。悲哉。方今兆庶熙々。休二息乎大和之中一。古稱世平主聖。俊乂自生。於レ是徂來先生者出。而樹二風於東都一。以二脩古一爲二己任一。遊二其門一者。皆異能之士也。春臺先生者。信陽人也。少二來翁一十四歲。來翁先唱。而微言絕者復繼。春臺後和。而大義乖者復合。朗雖二不敏一。得レ從二後塵一。不二亦樂一乎。蓋孟子去二尼父一未レ遠。然論レ性說レ心。異二乎闕里之學一。尙且言必稱二堯舜一。則時君以爲二迂遠一。況世之相後數千餘歲。地之相去海濤萬里。邈哉悠哉。物漸亡。名遂遠。諸子喋々。百家聚訟。脩古之難。若レ此其甚也。來翁爲レ之瘦臞黴黑。不二亦宜一乎。嗚呼自二梁木壞一。十二年于茲一矣。春臺善繼二其志一。善述二其事一。以レ覺二後覺一爲レ務。於レ是客歲書肆請梓二其辨道書一。今又刻二此書一。讀者吐二烹猴一。棄二新曲一。其必由二乎斯一哉。其必由二乎斯一哉。

享保丙辰春三月穀旦　大泉　水野元朗謹書

享保壬子上元之日

太宰純書

序終

聖學問答序

自二孔子沒一。而聖人之道。今古有二二大厄一。曰。秦皇焚レ書。一厄也。宋儒說レ理。二厄也。然秦皇之焚レ書也。當時天下咸知二其非一。宋儒之說レ理也。人不レ知二其非一。矧乎書雖レ焚二於秦一。猶有二匿レ之者一。且道存二乎人一。是以漢興。人擧書出。而道由レ是興。易所謂不レ遠復。無レ祗レ悔者也與。自二宋儒說一レ理而來。至二於今一七百年。天下夢夢。人不三復覩二仲尼日月之光一。而其末流。或爲二浮屠一。或爲二天主一。或爲二鬼神一。譬猶下陵舄得二鬱棲一而爲二烏足一。烏足之根爲二蠐螬一。其葉爲中胡蝶上也。變化至レ是。人復誰知三其所二自來一者哉。邈矣乎聖人之道也。由レ此觀レ之。宋儒之禍レ道。過レ焚レ書也。我日本學者。亦入二宋儒理窟一而不レ得レ出。百有餘年。往者有二伊藤氏一。獨能出二理窟一。而首二鄒魯之道一。實爲二豪傑一。惜其所レ見狹小。未レ達下先王所二以道一レ民之故上。是猶未レ免レ爲二義理之學一也。及レ至二徂徠先生一。超乘而上レ之。以二六經一爲レ學。以二孔子一爲レ歸。以二論語一爲二規矩準繩一。而不レ取二孟子以下一。遂能俾三先王之道昭二晰乎萬世之下一。其功豈不レ大哉。雖レ然。三軍之走。非三匹夫所二能止一レ之。雖レ勤何益。不レ如三卷而懷レ之以俟二知者一也。純少之時。亦嘗一入二理窟一心實未レ安焉。後從二徂徠先生一。聞二先王之道一。退而熟二讀六經論語孝經一。皆得二其旨一。迺知下仲尼之可レ尊可レ信。而自二孟子一以下。非中盡孔氏之道上也。於レ是下二視宋儒之學一。猶下飽二太牢一而後就二糟糠一。無上所レ下レ箸也。可レ厭可レ惡。莫二此爲一レ甚。迺者有レ客來投二吾閒一。問以二古道一。予不レ得レ已。答以レ所レ聞。客悅曰。善哉。願子遂筆レ之以爲レ贈。予迺悉次二其語一。釐爲二一編一。以授レ之。書以二國字一者。苟便二初學一也。此爲レ序。

書二辯道書後一

古先聖王統二御宇內一也。以二天下一爲二一家一。以二中國一爲二一人一。當二是之時一。車同レ軌書同レ文。故異行者有レ誅。異言者有レ禁。道豈有レ辯邪。百家往而不レ反。人執二其所レ見。家夸二其所レ長。譬下之耳目鼻口不上レ能二相通一。道豈無レ辯邪。蓋不レ得レ已也。春臺先生有二嘗與レ人辯道書一。書賈須延年適見以爲奇貨可レ居。遂請上レ木云。嗚乎道之裂也。猶二七國自王一也。此書其終成二秦政一統之勳一歟。方今昭代同文之治。輿隷亦能解二國字一。則此書之行。其必遠二於置郵而傳一レ命哉。享保乙卯復月下浣。

大泉莊內　水野元朗書二于東都神門邸一

等は子思孟子より以下を捨て、只一向に孔子を信じ候へば、聖人の道は極て明になり候。純さいつごろ人の爲に著し候假名草紙聖學問答に古學の大意を述候。若御志も候はゞ後日に進覽すべく候。先此答書を反覆して御覽候て、御不審も候はゞ再問を待申候。凡純が申す所は、ことごとく先王の法言に依て孔子の教を述候。胡亂なる說にあらず、一々證據ある事共にて候。疑慮を御止候て、委細に御勘辨あるべく候。不具謹言。

辯道書畢

様に思ひて、天下の事を論ずるにも、佛法を絶さずば國家は治まるまじくなど申候。善く學問して先王の道を明らめたる上にては、諸子百家の道は國家の病を治する良藥にて候。釋氏は國家に預からぬ者にて、僧は古の巫祝の類なる者なれば、上の政たゞしき時は國家の害になる事もなく候。日本の神道は又殊に小さき道にて、政を妨ることあたはず候。されば中華の古代も日本の今の世も、天下はいつも堯舜の道を戴かざれば世に立ことあたはず候。畢竟諸子百家も佛道も神道も、堯舜の道にて治り候。諸子百家を學ぶ者も、僧尼も巫祝も、皆ことごとく王者の民にて、王法の外に出ることあたはず候。若國家を治る人堯舜の道を學ばずして、諸子百家を悦び、或は佛道を好み、或は神道を好むは、其國家の亂るゝ端にて候。譬へば病なき人の妄に吐下攻撃の藥を服するが如くなるべく候。堯舜の道を傳し人は孔子にて候。孔子の敎に從て堯舜の道を學び候得ば、天下の事何にても足らぬ事なく候。貴公も聖人の道をば御好み候へども、宋儒の說を御用ひ候て、古義に通じたまはざる故に、心を治る一事に於て聖人の道を捨て佛道を御信用候は、口惜き御事にて候。禮義を守れば心は治るに及ばずして獨治まる故に、聖人は心を治ることを敎給はず候。若心を治て善き道理あらば、堯舜より孔子まで數多の聖人の中に、前の聖人いひのこしたまふとも後の聖人必これを仰るべく候。三才を極たる聖人の道に、此一事を闕べき道理なく候。よく御考あれがしと存候。先王の道は孔子に至て大成を集て、敎を萬世に垂たまひ候。然るに子思孟子より少づゝ差ふ處ありて、宋儒に至て大に差ひ候。今の學者孔子を信ぜずして程子朱子を信ずる故に、古聖人の道達せず候。我

ざれども、魚の殺されんことを祈る故に、手づから殺すと同科にて候。若佛菩薩の力にて殺生を禁ぜば、佛敎の流布せる處は海邊にも魚の集まることは有まじく候。魚あつまらずは海邊の民は皆産業を失ひて飢寒すべく候。日本の内にても、東西南北の海邊に凡幾千萬の民ありて、魚を捕るを業として耕作をせざれども、衣食に乏しからず、父母を養ひ妻子をはごくみ、其餘慶にて佛を供養し、僧に布施し、寺塔を造り、法會を行ひ、菩提の道を營む故に、昔よりいかなる權化の名僧も、海邊の民の殺生を禁ずる事あたはず、佛法は年を逐て繁昌すれども、海邊に魚の集まる事いつもかはらず、日々に幾恒河沙の數ほどの魚あつまりて網中に入るを見れば、佛も是を厭はざるか、おほかたは佛の力にても禁ずることあたはざるにて有るべく候。然れば今の僧侶は四民の外なる者の樣なれども、妻子を帶せざるのみにて、畢竟民の列を離るゝことはならず候。世俗の心には、僧は常の人より貴き者の樣に思ひ候へ共、大なる寺院に住持して官祿ある僧は、官人の類にて候へば、士大夫の列にて候。其餘は一寺の住持にても、平民と同輩にて、さのみ尊貴なることも無く候。况や諸宗の學徒又は頭陀乞食の僧は、浮雲流水の如くなる者なれば、平民にも及ばず候。然れども今の僧の中にも、書を讀み學問して道理を辨へ、佛祖の法を守て身をたゞしく行ひ、淸淨無欲にして一向に菩提を求る者千百人に一人もあるは、誠に佛法中の君子ともいふべき者にて候へば、貴く殊勝に存候。偏屈なる儒者は、諸子百家を異端邪說と名づけて、其書を讀まざる故に、其道を知らず。一概に取べき處なき樣に存候。佛法も惡むとは、又諸子百家を惡むよりも甚しく、僧をば人類にもあらぬ

偏なることなき故に、人民あるほどの國に行ひて少もさはる事無く候。藥物は性の偏なる者にて候。偏ならざれば病を治することあたはず候。本草に大毒小毒無毒の品をば分たれ共、病に勝つは偏氣の力にて候。偏氣はすなはち毒氣にて候。されば茯苓白朮も惡く用れば人を害し候。諸子百家の道も其如く、先王の道の弊たる時に出て、おもひ〳〵に一家の道を立候。諸人各別の見識なれば、其道もさま〴〵なれ共、畢竟皆亂世を治る道にて候。國家の病を療治する術なる故に、衰亂の世を治るには捷徑なることも候へども、偏なる處ありて、中和の道にあらざる故に、一方に利あれば一方に害ありて、天下後世に行ひがたく候。諸子百家は皆左道なれ共、國家を治る道にて候。釋氏は心法を治るのみにて、天下國家を治る道にあらず候。佛法盛に行はれてより、天子にも佛法を好む人ありて、甚しく尊崇したまへども、天下の政事を佛法にて行はれし事は未あらず候。日本は中華よりも佛法繁昌にて、上より下までこと〴〵く佛法に歸依して、王法とひとしく尊崇する習はしにて候へども、禮義を犯し人倫の道を斷ては一日もたゝず候。僧侶は人間世を離たると心得て、口には界外方外と名のれ共、國家の法令に違ひ世間の禮義を犯しては、是亦一日もたゝず候。佛法には殺生を堅く禁ずれども、海邊の民は耕作せず魚を捕て產業とする故に、其邊に住む僧侶は朝暮に佛を禮し經を誦し、或は大法を修し、或は大般若經を轉讀などして、ひたすら漁家の爲に福を祈り候。漁家の福といふは、魚の多く集りて人に捕らるるにて候。魚多く捕らるれば、漁家は其利を得て產業豊になり、其浦繁昌する故に、佛も僧も俱に其餘澤を受候。然れば海邊に住む僧は手づから魚を殺さ

になりて、是君の惠ぞといふ事を知らず候。況や千萬世の後に及で、其道四方に行はれ、上下萬民ことごとく其敎を受て仁德に化育せられ候へば、昔の聖人といふは如何なる人にて、聖人の道といふは如何なる事ぞと尋る人さへ無きは、尤の事にて候。是すなはち聖人の德義廣大無邊なる驗にて候。周の代の末より諸子百家起りて、種々の道術世に傳はり候。今其書を見れば、皆各天下國家の道を說て、一理なきはあらず候。然れども秦漢以後歷代の天下、諸子百家の道にて治めたるは無く候。是を物に譬れば、聖人の道は五穀にて候。諸子百家の道は醫藥にて候。五穀は人の性命を養ふ物にて、天下の人上より下まで一日も是を絕してはならず候。然れども五穀を多食して腹中に滯り、或はそこねたる物をくひて脾胃を傷れば、病となりて人を惱まし候。其時は醫藥にて治せざればならず候。扨其病を治するには、下す藥あり、吐する藥あり、汗さする藥あり、溫むる藥あり、熱をさます藥有り、醫者各其病症に隨て藥を與れば、其病愈候。病愈て後は又五穀を以て養ひ候。一たび五穀に傷られたればとて、それより永く五穀を絕つ者は無く候。病の愈たるを悅で、五穀をやめて枳實厚朴芒硝大黃の類を常食にする者も無く候。先王の道は大中至正にして、天下萬世に通行する道にて候へども、末の世になりて惡き人出で惡く用れば、弊出來て禍亂の端となり候は、人の咎にて道の罪にはあらず候。譬へばにえざる粥を啜り饐たる飯を食て、脾胃を傷り病を得て死する者あるは、食する人の咎にて、米の罪にあらざるが如くにて候。凡五穀は中和の味にて、毒氣少しも無き故に、常食として性命を養ひ候。聖人の道も其ごとく、大中至正にして少も

據は仁義禮樂孝悌の字に和訓なく候。凡日本に元來ある事には必和訓有レ之候。和訓なきは日本に元來此事無き故にて候。禮義といふこと無かりし故に、神代より人皇四十代の頃までは、天子も兄弟叔姪夫婦になり給ひ候。其間に異國と通路して、中華の聖人の道此國に行はれて、天下の萬事皆中華を學び候。それより此國の人禮義を知り、人倫の道を覺悟して、禽獸の行ひをなさず、今の世の賤き事までも、禮義に背く者を見ては畜類の如くに思ひ候は、聖人の敎の及べるにて候。日本の今の世を見るに、中華の昔に及ばずといへども、天下は全く聖人の道にて治り候と存候。然らば天下の人こと〴〵く聖人の敎に依て禽獸に陷らず、王公は上に居て其富貴を保ち、士大夫は中に居て其祿位を安んじ、庶民農工商賈は下に居て其家業を樂み、奴婢臧獲鰥寡孤獨の輩までも暴虐にあはず、天下平均に四海無事なるは、全く聖人の所爲にて候に、今の人は聖人といふ名をだに知らず候は、淺ましき事にて候へども、是却て聖人の德の廣大なる驗にて候。如何となれば、聖人の德は日月の如くなる物にて候。此世界の人日月の光明に照されぬ者は無く候へ共、一人一家の爲に出たる日月にあらず、萬古以來の日月にて、世界に遍滿する光明なれば、誰にても一人殊更に日月の德を感戴して有がたくおもふ者は無く候。若とこやみの國に日月始めて出候はゞ、人皆奇異の思ひをなして、尊く有がたく存ずべく候。聖人の道も其如く、若海外の遠き國などの人倫の道なき處に聖人始て出たまひて、今の如くの仁德を施したまはゞ、士民等希有の思ひをなして、其德を感戴すべく候。凡聖人の德は廣大無邊なる者にて、一人づゝに賦り與へざる故に、其世の人も恩を受るが常

れば、千百人に一人も異様なる見識の者有つて、ことやうなる道を開くことと、堯舜の世にも有るべく候。譬へば通邑大都に往く者、往還の大道を行かずして問道を見つけて行くが如くにて候。左様の道をば先王の世には左道と名づけて堅く禁じ候。凡堯舜の道の外に奇異なる道を立るは皆左道にて候。禮記の王制に執二左道一以亂レ政殺と有レ之候。左道の徒は先王の世には死刑に行はるゝ故に、其說を口外に出すこともならず候。たとひ人に語りても、大道盛に行はるゝ時なれば、人これを信用せざる故に、世に弘まることなくて止み候。譬へば日中に螢火の光なきが如くにて候。周の世の末に及て、先王の道衰へ天下亂て、左道の禁も立ざりし故に、諸子百家の道起り候。其中に楊朱墨翟老聃莊周申不害商鞅韓非などはすぐれたる者にて、其書其道皆當世に弘まりて、後世までも傳はり候。譬へば日暮て螢火燐火朽木の類まで皆光を發するが如くにて候。然れ共漢の代は先王の世を去こと未遠からず、天子より孔子の道を尊崇し給ひ、五經の博士を立て、百家九流を絀られし故に、天下の人皆左道の非を知り候。譬へば月の夜に螢火の光かすかなるが如くにて候。漢の末より佛法中華に行はれ、南北朝を歷て天下に弘まり、唐の代よりますく盛になり候。老子の道も漢の代より始て行はれ候へども、唐の代より盛になり、天下に流布して佛法と並び候。釋老の二敎の外に種々の左道有て天下の民を惑はす事、多分は唐朝以來にて候。譬へば天曇りて暗き夜に螢火の光甚しきが如くにて候。日本には元來道といふこと無く候。近き頃神道を說く者いかめしく、我國の道とて高妙なる樣に申候へ共、皆後世にいひ出したる虛談妄說にて候。日本に道といふこと無き證

候。側に在る琴瑟を引よせて爪しらべにてもすれば、それに心移りて妄念やむ、是すなはち心を治るにて候。此外に心を治る術は無く候、貴公の仰に心を治ることは佛道勝れたるよし仰候。是は宋儒の心學にくらべて仰候と存候。此御眼はいかにもさることにて候。心法の說は佛道が本にて精微を極め候。宋儒の心法は佛道をまねて杜撰したる物にて候。根本似せ物なる故に、佛道の正眞なるに及ばず候。惣じて何にても專一に修する事は精しき物にて候。佛道は五千餘卷の經論に種々の法を說き種々の敎を立候へ共、つゞまる所は心法を硏くより外の事なく候。然る故に心法を辯じて、精微を盡せること毫釐を遺さず候。是甚奇妙なる事にて候得ども、釋氏の敎に任て心法を研き得て悟を開たる處、只おのが身一つを安うするのみにて、士農工商の業に補なく、增て天下國家の爲に何の益も無く候へば、畢竟無用の敎にて候。聖人の道には心を治ることを敎へざれども、禮義を守れば心おのづから治り候。凡學問は孔子の敎に任て先王の道を學び候へば、我身一つを治るより天下國家を治るに至る迄、何にても足らぬこと無く候に、貴公心を治る一事に於て、佛道のすぐれたることを稱せられ候は不審千萬に候へども、程朱の道を御學び候て、いまだ孔子の道を明らめたまはず候へば、心法の說に御惑ひ候も尤の御事にて候。程朱の道は程朱の開たる道にて候、孔子の道にあらず候。孔子の道は孔子の作り給へるにあらず、二帝三王の道にて候。二帝三王の道は天地自然の道にて、およそ人間の道かくあるべきすぢを聖人見つけたまひて開たまへるにて候へば、天下の道人の道此外に無く候。譬へば通邑大都に必往還の大道あるが如くにて候。然れども人の性萬殊な

なり候得ば、わかげも去り浮たる心もおちつきて、丈夫の魂定り候。かくの如く禮義にて錬固めたる人を成德の君子と申候。德といふは心法を研て作立る物にあらず、身に禮義を行ひて其禮義の凝固りたる物を德と申候。禮義を守て身に行へば、心は治めずしておのづから治まり候。堯舜より孔子に至るまで、聖賢君子皆かくのごとく敎へかくの如く學び候。心性の說は孟子より始りて、其毒後世に流れ、宋の世に及で程子朱子專是を以て宗旨として人に敎へ候。孟子の心性を談ぜられしは、自然の誤にて候。宋儒の心性を說くは、皆佛者のまねにて候。古の聖人は心を治ることをば敎へたまはず候。經書には禮記の樂記の中に致レ樂以治レ心といふ文見え候より外に治心の文字を見ず候。樂記の意は、聖人の道に心を治ることは無く候へども、心は活物にて暫時も只居られぬ物なる故に、何にても善き玩物をもてあそばしめざれば、必放逸してとゞめがたく候。玩物いろ〳〵有る中に、樂にしく者は無く候。樂といふは歌をうたひ舞をまひ鳴物をならす事にて候。歌舞音樂はよく人の心をなぐさむる者なる故に、耳に聞ても目に見ても自身に其わざをなしても、心たのしみて惡念起らず候。但樂に雅樂俗樂の差別ありて、雅樂は人の心をすなほにし、俗樂は人の心をとらかし候。雅樂とは聖人の作たまへる正樂にて候。俗樂とは世俗の淫樂にて候。今の世の三線（さみせん）淨瑠璃の如きは皆淫樂にて候。樂記に心を治ると申候は、雅樂の事にて候。古の君子は平日琴瑟を側に置て、閑暇無事の時は爪ぐらなどしてつれ〴〵をなぐさめ候。すべて人は閑暇無事にてさびしき時妄念起りやすく候。妄念の起るを只やめんとしてはやまず候。其やめんとする心すなはち妄念にて

しがたき物にて候。情欲を恣にすれば、諸の惡これより起りて、繋ぎたる牛馬の放れたる如く、河水の溢れたる如くになり候を、放逸無慚と申候。先王の禮は人の情欲を防がん爲に作りたまへる故に、河の防に譬られ候。されば情欲の起る時禮法を固く守て其欲を恣にせざるを以〻禮制〻心と申候。情欲の起るを只心にて止んとしては止みがたく候。先王の禮を犯して父にあらずと思ひて愼み守れば、情欲これに制せられて放逸することを得ず候。佛道は心を治ることを專とする故に、心中に聊も妄念を起すを罪として、是を戒て一向に惡念妄念を起さぬ樣を學び候。是甚難き事にて候。聖人の道には、心中に惡念起りても、能禮法を守て其惡念をそだてず身に不善を行はざれば、君子と申候。心中に惡念の起るをば罪とせず候。若其惡念に因て禮法を犯て身に不善をなす者を小人と申候。たとへば美女を見て其色を心に愛するは人情にて候。此情に任て禮法を犯て、妄に他の婦女に戯るゝ者は小人にて候。禮法を守り情を抑て、我が妻妾にあらざる他の婦女に戯をもいはざるは君子にて候。是罪の有無は戯るゝと戯れざるとの上にて定り候。情の起る處をば咎めず候。佛法にて假初に妄念を起すをも戒むるにくらべ候へば、禮を守るは甚易き事にて候。扨かやうに禮を守て情欲を制するに、始は忍がたき事も有て、おり〳〵過失も出來候へ共、常々に禮法を守て犯さず、身の行ひを愼て、視聽言動こと〴〵く禮に違はざれば、其習はしにていつとなく身に善き癖つきて、行義ただしくなり候。其時は心も共にたゞしく候。是を務てやまざれば、情欲の忍びがたきも忍びやすくなり、後には忍ぶとも思はず自然に心淸く靜になり候。かくのごとくして年を積て、四十以上にも

ども、仁を本として禮義を行ふより外に道といふ物は無く候。心を治る道は釋氏の法にて、聖人の道に無き事にて候。人の心は活物にて、靜にしがたき物にて候。靜めんとすれば彌動き、治んとすれば彌亂れ候。如何にとなれば、動くも心靜めんとするも心にて候。心は一つならでは無き物にて候へば、心にて心を治る事、決して叶はぬ事にて候。治んとするがすなはち亂るゝにて候。靜めんとするがすなはち動くにて候。心は小兒の如くなる者にて候。小兒には何にても善き玩物を持せ置候へば、それを弄して時を移し候。玩物なければ暫時も其處に靜にして居るとあたはず候。小兒をおしすくめて一處に靜にして居らしめんとすれば、必ず怒り啼てやまず候。それを又强ておさへ候得ば、後には病をおこし候。心も其如く、念慮の起るは心の役にて候。佛法には妄念妄想と名づけて是を制し候。制して制せられぬ物を强て制すれば、後には心に癖つきて病になり候。是を心疾と申候。されば世の中に心法を硏んとて日夜工夫して、終に狂亂して癈人になる者折々有るは、心を攻る故の禍にて候。小兒を攻て病身にすると同事にて候。聖人の敎は禮義を宗として、心法をば沙汰せず候。書經に以レ義制レ事以レ禮制レ心といふは、般の成湯の事をいへる文にて、聖人の道の肝心にて候。以レ義制レ事といふは、天下國家の大事より吾人の自他の小事に至る迄、凡事を取はかるに、一己の私智に任すれば、必其事に過不及ありて宜からず、先王の立置たまへる義を法として其事を料簡すれば、過不及なくして其ほどの宜き所を得るを以レ義制レ事と申候。制は裁制にて、細工人の物のなり形をよきほどにするを制と申候。以レ禮制レ心といふは、人の心には種々の情欲ありて、制

れば、爭奪の事起りて、人間の亂やむ時なし。是すなはち禽獸の行ひにて候。聖人是を患て禮といふ事を立て丶敎へたまひ候。それより人人情欲を制して、我が妻妾にあらざれば人の婦女を犯さず、利を爭ふ心を制して、夏は涼き處に人を居らしめ、冬は溫なる處に人を居らしむ、是讓の道にて、禮の本にて候。此禮と義とは聖人の敎にて、人の心に元來具したる物にては無く候。上古の民は是を知らざる故に、廉恥といふことなくして、禽獸の行ひを行ひ候。聖人出て禮義の敎を施給ひてより、人々廉恥を知て禽獸に遠くなり、人は貴く禽獸は賤き物と心得て、衆人の中に禽獸の行ひをなす者あるを見ては賤しめ惡み候は、聖人の敎の力にて候。聖人の敎は禮義より始り候。五倫をたゞしくするも禮義にて候。禮義の敎行はれてより、人間の亂やみて天下治り黎民安くなり候。民を安うするを仁と申候。仁は聖人の德にて候。盤古燧人は天地開闢の初の聖人にて候。其後伏羲神農黃帝を三皇と申候。少昊顓頊帝嚳帝堯帝舜を五帝と申候。三皇五帝は皆聖人にて、天下の君にて候。然るに三皇より五帝の帝嚳までは、世のいまだうゐ／＼しき時なる故に、聖人の智を用たまふ所、民の爲に禽獸の害を除き、衣食の業を授け、器物を作り、財用を利して、ひたすら民を養育する道を始たまふのみなりしが、堯舜の時に及て、養育の具は大略成就して、萬事の制度いまだ立ざりしを、堯舜聖智を以て多くの聖賢の人を擧用て官人となし、朝廷にて僉議したまひて、萬事の制度を定められ候。是れより天下を治め民を安うする道大きに開けて、萬世の大法になり候。其後夏殷周三代の聖王も、皆堯舜の道を師として天下を治たまひ候。時代の移るに隨て少の損益に有レ之候へ

亂を禁じたまひてより、夫婦の道始り候。禽獸には同產の子數多あれども、兄弟といふ事なし。人も本は禽獸の如く同產なるのみにて、兄を敬ひ弟を愛すること無く、爭鬪して相殺すこと有しに、聖人これを憂て長幼の節を制し兄弟の道を立給ひ候。禽獸には朋友といふこと無し、人も本は禽獸の如く、信もなく義もなく相爭ひ相奪ひ相殺し相害するのみなりしを、聖人是に信義を敎て朋友の道を立たまひ候。君臣父子夫婦兄弟朋友、此五つは人倫の要道なる故に、是を五倫とも五典とも申候。人間に此五つの道、一つも闕ては天下治まらず候。又人に欲なき者は無く候。欲はすなはち情にて候。財寶を見てはほしく思ひ、食物を見てはくひたく思ふ、皆是欲にて候。此欲心を恣にすれば、卑劣なるわざをもなし、搶奪竊盜殺害の惡をも行ひ候。搶奪竊盜殺害は禽獸の行ひにて候。聖人これを愍みて義といふことを立て敎たまひ候。惣じて人の身にすべき事とすまじき事と有るを、上古の愚民これを知らずして、すべき事をばせずすまじき事をする故に、禽獸の行ひになり候。聖人の敎に義といふはすべき事とすまじき事とをわけて、其すべき事をば勉てなし、すまじき事をば身死すれどもせざるを義と申候。此義すなはち聖人の道にて候。男女の欲は人情の常にて、智者も愚者もかはること無之候。此欲を恣にすれば、人其婦女を盜み人倫を亂り禽獸の行ひを恥ず候。又人は必利を爭ふ者にて候。たとへば人と我と物を分ること有るに、少も善き物を少も多く得たく思ひ、夏の暑きには凉き處に居たく思ひ、冬の寒きには溫なる處に居たくおもふ、是皆爭ひにて候。此心を恣にすれば、人を推のけて其利を我身に得んとす、我かくあれば人も亦然なり、人人かくのごとくな

禦ぐ計略をなし候。然るに人の性さま〴〵にて、賢き者あり愚なる者あり、強き者あり弱き者あり、賢き者は能く飢寒を免れ、愚なる者は飢寒を免るゝことあたはず、強き者は弱き者の衣食を奪ひ、弱き者は強き者に衣食を奪はる、是より平民の中に爭鬪といふこと出來候。此時幾億萬人の中に聰明睿智とて神妙なる智慧の人生れ出て、彼愚なる者に衣食の道を敎へ、爭鬪する者をばそれ〴〵に敎訓して暴虐をなさゞらしむ。是より其邊の人漸々に歸服して、何にても分別にあたはぬ事をば持往て尋問ひ、爭鬪する者は其事を告訴て裁斷を乞求む、其體今の世に鄕里の子弟たる者其所の父兄長老に從ふが如し。かやうに近邊の人歸服すれば、其化漸々に遠きに及て、遠方の人も歸服する故に、いつとなく諸人こぞりて君長と仰ぎ奉る、上古の盤古燧人などいふは是にて候。其後伏羲神農黃帝といふも、亦皆聰明睿智仁德の至れる人にて、天下の君となりたまふ、自己より高ぶりて民の君長となり給へるにては無く候。此聰明睿智仁德の至れる人を聖人と申候。此聖人上に立て天下の人に仰がれたまふを天子と稱し大君と申候へば、天下の人は皆臣にて候、是君臣の始にて候。上に大君あれば下にも亦大小それ〴〵に君長を立て其下を治しむ、皆君臣の道にて候。人に父母なき者は無く候。禽獸は乳哺の養を受る時父母を慕ふのみにて、少長じて離別すれば、親は子を忘れ子は親を忘て、後には親と子と食を爭ひ候。人も本は禽獸の如くなりしを、聖人是に親愛の情を示し孝敬の道を敎たまひてより、父子の道始り候。禽獸には雌雄牝牡の情のみ有て、夫婦配偶の道なき故に、父子同產交合して子を生み候。人も本は禽獸の如くなりしを、聖人婚姻の禮を制し男女の別を立て淫

に安樂にするのみの道にて、天下國家を治むる道にあらず、僧はいかほどの學問いかほどの智惠ありても、天下國家の政にあづかることを得ず、却て天下の法制を受け士民の末に列する者にて候。聖人の道はすなはち天道にて、天地の間に行はれずしてかなはざる道にて候を、只佛者の高遠なる事をいふを聞しめして儒者の道と同等に御心得候さへ御誤にて候に、儒者の道より上なる樣に御心得候はゞ、天道に背きたまふと申にて有べく候。儒者の道は聖人の道にて候。聖人の道は聖人の開きたまへる道にて候得共、天地自然の道かくあらで叶はぬことを知しめして、かく定置たまひし故に、是すなはち天地の道にて、聖人少も私意を加へたまふとは無く候。道を開くといふは道なき野山に始て道を開く樣なる物にて候。譬へば日本の名山に昔役小角が道を開たりといふを、今の人其道を履て其山に往來し候。別に近き道も有り易き樣なる道も候へども、其近き道易き道を行候へば、何かは知らずよからぬ事有て害にあひ候。只昔の達人の開たる道を行候へば、迂遠なる樣なれ共危きこと無く迷ふとも無く安穩に往來し候。何故ぞなれば役小角は天性の靈智にて山路を知り、後人の爲に宜き道を開置たる故にて候。聖人も其如く聰明睿智を以て天地萬物の理を知て天下の爲に常行不易の道を開たまひ候。總じて天地開闢の初に人の生ずる所は久しき池に魚の生じ腐たる物に虫の生ずるが如く、自然の氣化にて生じたる者にて候。さる故に其時の人は貴賤上下の品も分れず皆同輩にて候。是を平民と申候。形は人にて候へども心は禽獸に異ならず、男女一處にこぞり居て日を送り候。其內に衣食の求め無くて叶はざる故に、誰敎るともなく人々天性の智慧にて飢を助け寒さを

倫を絶し候へども、かやうの事の出來り候は、自然の理にて人倫の逃れがたき明證にて候。又佛法には衆僧一處に集り和會して學問修行することを一味和合と申候。是すなはち朋友の道にて候。然れば僧家にも君臣父子兄弟朋友の道理は有レ之候。只夫婦なきのみにて候。さりながら釋氏にも後世は妻帶の僧ありて、中華にては火宅の僧と申候得ば、夫婦なしとも申されず候。況や男女の愛は天性にて、生としいける物是を離るゝことあたはず候へば、いかなる大和尚大上人も佛にならぬ内は人間の夫婦を見て心中に羨まずといふ事なく候。又今の僧は寺院に住し候ても、國君より庄園を寄附せられ田祿を給はり候へば、臣下の道を以て國君につかへ候。殊に其中に僧祿本寺觸頭などいふは、上より定め置れて其一宗の政を行ふ者にて候へば、是すなはち國家の官人にて候。其餘の僧は寺院に住するも住せぬも皆民にて候へば、天下の法を逃るゝことはならず候。然れば今の僧は釋氏といへども皆王者の民にて、其中に官祿ある僧は士大夫の類にて候。又僧の佛事を行ひ候にそれ〴〵の儀式あるは禮にて候。梵唄聲明は歌にて候。鐘磬螺鼓を鳴すは樂にて候。是釋氏も禮樂を捨てゝは其道行はれぬ故にて候。釋氏は本世外に出て別に一つの道を立たる者にて候得ば、國家の制をうけず士民の列に入まじき者にて候へども、いつとなく今の如くになり候て、國家の制を受け士民と異なること無き樣になり候は、釋迦の道の變衰したるとは見え候へ共、實は天下の道かくあらで叶はぬ自然の理勢にて候。凡そ天下國家は聖人の道を捨ては一日も治まらず候。天子より庶人まで是を離れては一日も立申さず候。佛法はいかほど向上に廣大に說候ても、畢竟一心を治て獨身を自在

は大なる御誤にて候。釋氏の道は乞食するを正命食とし、士農工商の業をなし其外あらぬ產業をなして渡世するを邪命食と申候。菩薩の五十八戒の中に邪命養身戒といふは是を禁ずるにて候。然るに今の僧は乞食せず、拓鉢とて鉢を持て城市に行て米を餬ひ歸りて飯を炊ぎ食ひ候。釋迦の法は何にても熟食を餬て其まゝ食ふ掟にて候。飯を炊くとをば許されず候。衣服も糞雜衣を着する法なるに、今の僧は綺羅錦繡を着し候。岩穴に住し樹下石上にて坐禪すべきに、今は大なる寺院に住し僮僕を召使ひ、採菓汲水の勞を手づからすることを知らず、中にも大刹に住する富貴の僧は、衣食奉養車馬僕從皆世の王公貴人に擬して榮耀を極むる有樣目を驚すのみにて候。かやうに末世の僧は佛法の本意を忘て俗人に異ならぬ行狀をなし候を、自己には本望と思ふべく候へ共、儒者より見候へば今の僧侶は皆先王の道を受るにて候。如何にとなれば佛法に君臣といふとは無きに、今の僧侶は一寺の住持になり候へば奴僕を召使候。大刹の住持は數多の僕從を畜ひて、偏に士大夫國君の儀式をまね候。其體全く君臣の道にて候。佛法に父子といふことは無きに、今の僧侶は弟子を法嗣といひ、法を授かるを嗣法といひ、法を血脈といふ。皆父子に準じたるにて候。されば弟子を畜ふこと子の如く、是を愛着する事人の父の子を愛するが如く、寺を讓り財寶を讓ると世の人の田宅家產を讓りあたふるが如し、是全く父子の道にて候、弟子の中にて先輩を法兄とし後輩を法弟とするは兄弟の道にて候。師の法兄を法伯といひ、師の法弟を法叔といひ、法兄法弟の弟子を法姪といひ、凡其師の法緣のつゞきたる者を法眷といふ。眷は親眷の眷にて、親眷とは親類の事にて候。佛法には人

是に遠ざかり、一切世間の事に於て少も貪着の念なく、心體いつも明鏡湛水の如くなる迄に至るを覺と申候。禪家に大悟といふも此理を悟るにて候。譬へば狐にばかされて、野山を迷ひありきおかしき事も樂しき事もある內に、忽然として心づきて我は是狐にばかされたるぞと悟りぬれば、それより常の心になりてそれまで面白かりし事皆口惜くなり候如く、佛者も悟り候ては二たび迷はぬ事にて候。此悟りを開たる者を佛と申候。佛は梵語にて本は佛陀と申候。佛陀を漢語には覺者と譯し候。此覺者になり候を修行成就の至極とし候。然らば佛道は只是一心を明むる道にて候。人に敎る所も其人々の一心を明らめしむるに過ず候。佛法にも大乘小乘五時八敎などいふ事有て、五千餘卷の經論に種々の法を演說せられしに、後來の祖師是に依て種々の宗門を立て世の人を敎導し候。今の世にも諸宗の敎法各々にて淺深不同に候へ共、畢竟心法の說のみにて候。但下賤の愚民は心法の敎を領解しがたき故に、念佛誦經等の所作を授て是を行すれば佛になると敎候は。其緣を引ん爲の方便にて候。眞實の敎は坐禪觀念して心法を悟るより外に佛になる道は無く候。心法を學ばずして徒に讀經念佛して佛になるといふ事は決して無く候。儒者の道は二帝三王の道にて候。二帝三王は皆古の聖天子なる故に、其道を總じて先王の道と申候。先王の道は天下を治る道にて候。佛道は五千餘卷に演說して廣大無邊なる樣に見え候へ共、天下を治る道にあらず、獨身の一心を治る道にて候。右に申候如く僧は君臣なく父子なく夫婦無く兄弟なく朋友なく國も無く家もなき者にて候へば、獨身の外に治むべき物なく候。今獨身を治る道を先王の天下を治る道に並べて同等に御心得候

小兒の如くなる物にて候。小兒に玩物をもたする如く、人の心も内に何にても玩弄把持する事なければ妄念妄想やまず候。されば佛家には坐禪して心を靜むる事を習ひ候。坐禪に種々の法あり、數息觀といふは靜室に安坐して呼吸の息を數ふるにて候。息を數ふるに依て心放逸せず妄念起らず候。不淨觀といふは人の身の不淨なることを心に浮べてありありと觀想するにて候。東坡が九相の詩は是を詠じたるにて候。此觀念は男女好色の情を除かん爲にする事にて候。月輪觀といふは胷の前に光明圓滿の月輪を懸て見る體を觀ずるにて候。是は心中の無明煩惱を掃除して明月の如くにする工夫にて候。されば初は月輪を胷の前に在ると觀じ候が、後は我が胸中に入て我が心すなはち月輪に成ると觀じ候。古人月輪觀の功積りて後には暗中に燈なくして書を讀みたりしといふ事を傳候。水想觀といふは我が一身消て水に成ると觀ずるにて候。是は人の身は地水火風の四大假に和合して出來たる物なるが、終には消滅して大空に歸るといふ義を觀ずるにて候。此外或は淨土の莊嚴を觀じ、或は佛菩薩の相好を觀ずる法あり、かやうに種々の觀法あるは、皆心を靜めて妄念を起さず無明煩惱を掃除して菩提を取ん爲にて候。菩提といふは梵語にて、漢語には覺と翻譯し候。覺は覺悟にて和語にはさとると訓じ候。さとるとは一切世間の事皆吾人の迷心より見出せる物ぞと慥に覺悟するにて候。其義は右に申如く、六塵は六根を汚して我が情欲を引起す物なるに、我其色香にめでゝかれを悅ぶ心ある故に煩惱となり無明となりて、貪欲も瞋恚も起り、殺生偸盜の惡をもなし、妄語綺語の詐をもいひて自他の害を生じ候。然るを修行の力にて六塵をば我が身を汚す塵と思ひて

人の棄たる物にて主なき物なる故に、僧の衣服には是を最上第一の法服と定候。糞壤に棄たる物を拾ひ取て袈裟にさへ作り候へば、其餘の衣服は勿論にて候。僧は住處をも定めず、或は樹の陰橋の下などにて風雨を避け、或は岩穴に入て坐禪し、只虚空を宿として浮雲流水の如く一處に留滯せざるを道とし候。扨其學問は世間の情慾を離れて自心を明にする事を肝要に學び候。人の情欲は數の限も無く候へ共、中に就て貪欲瞋恚愚癡を三毒と名づけ、心を害する毒と心得て是を除く工夫をし候。眼耳鼻舌身意を六根と名づけ、色聲香味觸法を六塵と名づけ候。塵は物を汚す者なる故に、色聲香味觸法の我が六根を汚す所を喩へて六塵と名づけ候。六塵は外に在て我が遇ふ所の境界なる故に、是を外境と申候。儒家にては此類を外物と申候。人の六根此六塵に行遇候へば、其品々に隨て種々の情欲起りて心の累となるを煩惱と申候。煩惱纏に起れば心すなはち昧くなるを無明と申候。釋迦の道は最初出家する時に棄恩入無爲眞實報恩者といふ文を唱候。此意は父母の莫大なる恩を棄て無爲の佛道に入るは眞實に報恩する者ぞといふ義にて候。既に父母を棄たれば恩愛の情を離れ候。夫婦なければ男女の情を忘れ候。乞食頭陀を業とすれば衣服の營みに心ひかるゝ事も無く候。家もなく財もなければ水火盜賊を恐るゝ心も無く候。一處に留滯せざれば土地に執着する心も無く候。山林に隱遁して世間に交はらねば六塵の境に遇ふこともなく候。六塵の境に遇ふことなければ六根更に汚るゝことなきを六根清淨と申候。人は動物にて心も亦活物なる故に、必しも外境に觸ざれども心中には種々の情欲發起して止む時なく候。是を佛家には妄念妄想と申候。人の心は

といふ子をもたれ候が、歳十九にて發心出家して道を學ばれ候。國王の太子にて王位を繼べき人なるが、是を厭ひ、父母をも妻子をも棄て出家遁世せられたる意は、人間に居ることを桎梏の如くに思ひて身一つを自在にせんとおもひ、浮世の情欲を病苦の如くに思ひて是を離れて心一つを安樂にせんとおもひ付たる物にて候。出家とは父母の家を出て山林に入り身を浮雲流水の如くにするを申候。釋迦の道を學ぶ者を僧と申候。釋迦の道は國王の位を棄て身一つになりたる道なれば、此道を修する者は士農工商の業をなさず候。上に君なく下に臣なければ君臣といふこと無く候。既に父母の家を出たれば父母なし、妻を棄たれば子なし、是父子といふこと無く候。男女の交はり無ければ夫婦といふことなく候。父母なければ兄弟も無く候。世を離れて人間の交はり無ければ朋友といふことなく候。士農工商の業をなさゞれば衣食を得べき樣なき故に乞食を業とし候。乞食とはすなはち只今の乞丐人の如く、食を人に餬(もらひ)て命をつなぐにて候。僧は家なく食物をも作らぬ掟なる故に、昔の僧は鉢を持出して辻に立候へば、其邊の人家より殘飯を持來りて鉢に入れ候。又施食の志ありて新しき食物を施す者も有レ之候。鉢中の食物其日の命をつなぐほどなれば、それより歸りて其食を食して、明日又その如く出候。衣服も作りて着る事は無く候。天竺の人は清淨を好み不淨を惡むが故に、凡病人死人產婦の着たる物又は火に燒け水に濡れ其外何にても汚るゝ事有たる衣服をば持出て糞壤に棄る習なり。僧たる者は人の糞壤に棄てたる衣服布帛を拾ひ取り歸りて、皂角(さいかち)水にて洗ひ淨めて、錦繡綾羅布帛の嫌なく種々の物を綴り集て袈裟に作る、是を糞雜衣とも衲衣とも申候。

て候。惣じて今の神道といふは唯一三元といへども、皆佛道に本づきて杜撰したる事なる故に、外には佛道と敵するやうにて内は一致にて候。その神道の如くなる事中古までは無き事なる故に、昔の記錄假名草紙の中にも見えず候。是にて聖德太子の時神道いまだ有らざりし事を御得心あるべく候。右に申候如く神道といふ文字は周易に出候て聖人の道の中の一儀にて候を、今の世には巫祝の道を神道と心得候て、王公大人より士農工商に至るまで是を好み學ぶ者多く候は、大なる誤にて、以の外の僻事と存候。巫祝の道は只鬼神に給事するのみにて、吾人の身を修め家を治め國を治め天下を治むる道にあらず候へば、巫祝にあらざる者は知らずして少も事かけず候間、士君子の學ぶべき事にあらずと思しめさるべく候。中華にて周の代の末に墨翟が道盛に行はれて、孔子の道と並ぶほどになりし故に、其世には孔墨儒墨と稱し候。其後墨氏の道廢れて漢の代に黃老の道興り候。黃老といふは老子の道にて候を、其道を尊くせんとて古の黃帝を祖として黃老の道と申候。東漢の時より佛法中華に入て世に弘まりし故に、それより後は孔子の道に釋老の道を並べて儒釋道と稱し候。道といふは老子の敎を道敎といふによりて儒釋道と申候。此三つを三敎と申候。我國には道敎は行はれず、近來神道世に行はれて是を我國の道と思ひ、此神道は巫祝の傳ふる所にて極て小さき道なることを人知らず、儒は唐土の道佛は天竺の道神は日本の道なれば、此三道は鼎の三足の如く同等にして偏廢すべからざるものと心得候は、口おしき事にて候。佛道は釋迦の敎にて候。釋迦は天竺摩竭陀國の淨飯王といふ王の太子にて、幼き時は悉達と申候。耶輸多羅といふ女人を妻として羅睺羅

なる故に、周禮の春官に大祝小祝喪祝甸祝詛祝司巫男巫女巫の官ありて鬼神の事を主司す、此諸官は天子の宗廟社稷以下の祭祀其外國家の大禮に皆それ〴〵の職事ありて其役を務候。此輩は只專鬼神に給事し祭祀祈禳を行ふのみにて、別に其道あるを其家に相傳するにて候、周の代の巫祝の所作は如何なる體といふを今考ふべき樣は無く候へども、大略今の世の阿闍梨陰陽師禰宜神主神子山伏などの所作に似たる物にて有べく候。昔と今と時を異にし、異國と本朝と境を隔つる故に、其儀式名目はかはるべく候へ共、其所作はさのみ大に異なると有まじく候。子細は人情物理古今同情なる故に候。此巫祝の道は君子の道とは別なる物にて、君子よりこれを見れば兒戯の如くなる事も怪しき事もおかしき事も有レ之候へ共、國家の害にならぬ事は其まゝに捨置て、神事の類をば彼等に任せんとて、古の聖帝明王も是を用たまひて、百官の列に入られ候。後世に及て人を牲にする樣の事起り候へば、西門豹が如き者さへ是を治候。況や先王の時に左樣の事は無之候。然れば巫祝には別に一種の道ありて常の道にあらず候を、常の人これを學び候て何の用に立候はんや。今の人神道を學びて、不淨なる家の內に神壇を作り、不淨なる衣服を着し、不淨なる供具を獻じて、朝暮に神を祭り、巫祝の如くの行ひをなして、鬼神に褻れ鬼神を瀆して、終には亂心する者有レ之候。今の神道家にいふ所の神明は佛家にいふ如來にて候。心の神明といふは佛家にいふ唯心の彌陀本覺の如來にて候。根の國底の國といふは死して後の事をいふにて候。內外清淨六根清淨などいふ事は佛家に煩惱を除て菩提を求る道にて候。殊に六根清淨といふ事は法華經に出たるを、神道家に其名目を竊て敎を立たる物に

およそ民を導くには必上帝神明を稱して號令を出され候。是聖人の神道にて候。聖人以二神道一設レ敎とは是を申候。近世理學者流の說に、君子は理を明めて鬼神に惑ふ事無しといひて、一向に鬼神を破り、或は聖人の民を治る術にて假に鬼神を說くといふは、皆神道を知らざる者にて候。君子三畏の第一に畏二天命一と孔子の仰られ候も、天命は天の神道にて、人智を以て測られぬ故に、君子是を畏るゝにて候。周易の繫辭に陰陽不レ測之謂レ神といひ、說卦に神也者妙二萬物一而爲レ言者也といふ、皆鬼神の妙にして測られぬことを說れ候。されば天の命鬼神のしわざは、何の理何の故といふことを聖人も知たまはず、只畏れて敬ふより外のこと無く候。下民を敎たまふも此心にて、少も民を欺き方便して鬼神をいひ立るにては無く候。此義は理學者の知る所にあらず候。よく〱御勘辨候て御得心あるべく候。然れば神道は實に聖人の道の中に籠り居候。聖人の道の外に別に神道とて一つの道あるにてはなく候。今の世に神道と申候は、佛法に儒者の道を加入して建立したる物にて候。此建立は眞言宗の佛法渡りて後の事と見え候。吉田家の先代卜部兼倶より世に弘まり候と見え候。兼倶は神職の家にて佛道に種種の事あるを見て羨しく思ひ、本朝の巫祝(かんなぎ)の道の淺まなるを媿ぢて、七八分の佛法に二三分の儒道を配劑して一種の道を造り出し候。いはゆる牽強傅會と申物にて候。聖德太子の時に決して有まじき事と申候は是にて候。此道太子の時に有べき事にあらず候。今の神道に神事の行ひ祈禱加持などの法を傳授して、眞言宗の阿闍梨護摩師の如なる業を敎るは、是巫祝(かんなぎ)の道にて、神道の肝要にては無く候。巫祝(かんなぎ)といふは鬼神に給事する者にて、國家に有らで叶はぬ者

に粗く候故、釋氏の道をば深く知て好まれ候へども、中華の聖人の道をば未明らめ給はずと見え候。其上述作の書も多くは傳はらず候へば、後世其是非を申がたく候。今の世に太子の說とて申ならし候事は、多分後の人の誣罔杜撰にて信じがたく候。近頃舊事本紀といふ書を太子の著述とて珍重する人有ㇾ之候。其書を見候に、近世の人の僞作なる事證據明白に候。貴公も此等の書を御覽候て、眞實に太子の道はかくの如くなる物と思召候はゞ、大なる御惑にて候。前に申候如く儒佛神道を鼎足に譬へ候事も、決して太子の言にてあるまじく候。若實に太子の言にて候はゞ、太子の妄說にて候。此義數度面談の事に候へば、御得心あるべく候へ共、尙又御所望に因て答述候者也。凡今の人神道を我國の道と思ひ、儒佛道とならべて是一つの道と心得候事、大なる謬にて候。神道は本聖人の道の中に有ㇾ之候、周易に觀ニ天之神道一而四時不ㇾ忒、聖人以ニ神道一設ㇾ敎而天下服矣と有ㇾ之、神道といふこと始て此文に見え候。天の神道とは日月星辰風雨霜露寒暑晝夜の類の如き、凡天地の間に有る事の人力の所爲にあらざるは皆神の所爲にて、萬物の造化是より起り是を以て成就するを天の神道と申候。聖人以ニ神道一設ㇾ敎とは、聖人の道は何事も天を奉じ祖宗の命を受て行ひ候、されば古の先王天下を治たまふに天地山川社稷宗廟の祭を重んじ、禱祠祭祀して鬼神につかへ、民の爲に年を祈り災を禳ひ、卜筮して疑を決するが如き、凡何事にも鬼神を敬ふ事を先とし候は、人事を盡したる上には鬼神の助を得て其事を成就せん爲にて候。又士君子は義理を知て行ひ候へ共、庶民は愚昧なる者にて萬事に疑慮おほき故に、鬼神を假て敎導せざれば其心一定しがたく候。聖人是を知しめして、

辯道書

太宰純

儒佛神道の同異度々面上に論辯候所、大略御領解候へども、其事繁多にて逐一に御記憶なりがたく、再三御工夫候へば又御疑惑起り候て御難義に候間、純平日論辯候趣を委く紙上に書記候て御目に懸候へとの御所望其意を得候。先貴公常に仰候は、聖徳太子の言に儒佛神道は鼎の三足の如くなる物と有レ之候由、此事甚心得がたく候。鼎の三足と申すは、一つを缺れぬ事の喩にて候。太子は佛者にて候へば、佛道を重く思ひたまひ儒道と對せられ候はさる事にて候。神道を一つの道に立る事は後世に起り候て、太子の時に無き事にて候。然るに神道を以て儒佛の二道にならべて、三道は鼎の三足の如く天下に無くて叶はぬ物とし給ふ事信じがたく候。貴公は太子に御歸依深く候へば、かやうの說は御心に障り申べく候へ共、下問に答申ほどにて諛を申すは不忠にて候故、愚意を盡し申にて候。先本朝の古を考候に、神武天皇より三十代欽明天皇の頃までは、本朝に道といふ事未有らず、萬事うゐ〳〵しく候處に、三十二代用明天皇の皇子に厩戸といふ聰明の人生れたまひ、書を讀み學問し給ひて、三十四代推古天皇の時攝政の位に居たまひ、官職を定め衣服を制し、禮樂を興して國を治め民を導き、文明の化を天下に施したまひ候。本朝に於て厩戸の功は制作の聖ともいふべき人にて候。されば聖徳太子と謚せられたるも虛名にあらず候。然れ共太子の學問佛に精しく儒

今日の政務の上明に罷成事に候。四書近思錄等の理學の書計見候人は、事務の違を不ㇾ存候故、正眞の胡椒丸呑とやらん申物にて候。序に申進候。唐太宗の政務宜敷天下治り候驗を斗米三錢と有ㇾ之候。一斗の米を三文に賣申候事に候。近年米價少下直に罷成候へば、武家町人百姓共に困急以の外に候。かやうの違は如何樣の儀に候哉。是皆制度の替りより世界の模樣にも格別に成行候事に候。

官府事務の文字の事被二仰下一候儀能御心付と存候事に候。

一詩作被ㇾ成度由能御心付と存候。上代の詩も後世の詩も同事に候。詩作不ㇾ被ㇾ成候へば詩經は濟不ㇾ申物に候。

一楚辭國語御覽可ㇾ被ㇾ成由一段に存候。其外呂氏春秋淮南子說苑家語戰國策老莊列迄も御覽候事可ㇾ然存候。智見を廣め候爲、博學候事肝要に候。孔子も博學と被ㇾ仰候。然所近代の理學者は雜學とて嫌申事聖言に背き申候。只日蓮宗の類と被ㇾ存候。

愚老が作辨道の事被二仰下一候。辨道辨名兩部有ㇾ之候。此御答幸愚老此間痢病相煩外務を絕居候故、暇にて有ㇾ之是程に相認進候。此以後多用の節は是程の細答成兼可ㇾ申候。先此答を半年も得と御覽被ㇾ成、僉議をも工夫をも付御覽被ㇾ成、其上にて愚老申條如何樣にも道理有ㇾ之樣に思召、愚老手筋に從ひ御學候ても御覽可ㇾ被ㇾ成思召候はゞ、辨道辨名本屋に申付書寫爲ㇾ致差越可二申上一候。左も無二御座一候はゞ爭の端を長じ、不ㇾ入事と存候。以上。

塾生根遜志伯修編錄

徂來先生答問書下 終

の取捌、宋儒の誤の大成處可ニ申進一候。詩勸レ善懲レ惡の爲と申事、是大き成誤に候。誠に勸善懲惡の爲と思召候はゞ、今少よき仕形外にも可レ有レ之候。詩にて勸善懲惡の敎を施すといふ事さりとては聞え不レ申事に候。古聖人の智にて、左樣のつまり不レ申事可レ有レ之候樣無ニ御座一候。詩經は淫奔の詩多く有レ之候。朱註には惡を懲しむる爲と有レ之候へ共、却て淫を導く爲に成可レ申候。是等の所とくと御了簡可レ被レ成候。詩經は曾て夢にも濟不レ被レ申と相見申候。論語に不レ學レ詩無ニ以言一と有レ之、學ニ詩三百一使ニ四方一不レ能ニ專對一と有レ之候。是詩專言語の敎にて御座候。洞に人性に通達する事、詩經の敎にて人性に通達不レ申候へば、物申事は成不レ申物に候。宋儒は理非邪正の見にからめられ被レ居候故、論語聖言に詩經の事有レ之候には從不レ被レ申、是非邪正の見より見候故、勸懲の爲と見被レ申候事に候。是等の所、詩經御覽被レ成候大段の意得に候故申進候。詩經の詩も、後世の詩も全く替目無レ之候。詩經は只詩と御覽被レ成候が能御座候。

一官府事務の文字の事御申越候。通典律令の類御覽不レ被レ成候へば濟不レ申物に候。異朝の歷代は、代々の制法に替有レ之候。皆其代其代の開祖の君の料簡にて世界全体の組立に替り有レ之候故、制法替有レ之候。是を會得不レ申候へば其時代の事濟不レ申候故。歷史を見候ても得と濟不レ申物に候。三代の事經書の上は、周禮儀禮々記濟不レ申候へば見え分れ不レ申候。日本の事跡も、律令延喜式を見不レ申候へば、公家の代の事は濟不レ申候。右のごとく異國代々の制度の替日本の昔の制度の替を存知候へば、今日當代の上も此處異國と替り、其處昔公家の代と替候と申事明に相知れ申候故、

きと致したる事を好み、はては高慢甚敷怒多く成申候物に候。風雅文才ののびやかなる事は嫌ひに成行、人柄惡敷成申候事世上共に多御座候。山崎淺見が人柄も大形御聞傳可レ被レ成候。是學様の惡敷而已にても無レ之候。元來其學流の偏なる所より出でたる事にて候。世上にて俗人の申候は、學問したる人は人柄惡敷と申候事僞にて無レ之候。御兩所共に國政をも御聞被レ成候御家筋の由、一入宋學の害を御受不レ被レ成樣に仕度存候。惣じて學問の道は心を向上に立て、程朱をいかめしく思召候はゞ程朱程に可レ成と可レ被二思召一候。程朱は誰人にもたよらず直に經書を學び候て漸くあの位に成被レ申候。今程朱の跡に付御學び候ては、程朱ほどに可レ成樣曾て無レ之候。程朱の被レ學候通に被レ成御學被レ成、博く學びたる上にて、兎角程朱の說宜敷思召候はゞ、其時に程朱を御用候がよく御座候。只今程朱を信仰被レ成候は只人そやめきと申物に候。愚老が門風は、只如レ此誰にもたよらず直に古聖人の書より見開き候を專途に仕候。

詩書二經御會讀被レ成候半由一段の儀候。孔子の時分は詩書より外に書物は無レ之候、論語孟子禮記等に引有レ之候も、外の書と申物は無レ之、詩云書云と計有レ之候。詩書を御學候は古代の學問にて候故珍重不レ過レ之存候。但し新註ならで其元に無レ之候由、左候はゞ新註にて成共、本文の文面を濟し候迄に御覽可レ然存候。誠に詩經朱傳は朱子の作の內にて不出來なる物故害も少く候。書經新註は、蔡沈が作にてたわひもなき物に候。書經は旁通通考と申物をつけ御覽被レ成候がよく御座候。詩經は世本古義と申物能候へ共和板に無レ之候。せめて說約にて成共御覽可レ被レ成候。詩經

一宋學を御止め被レ成候へと申候儀、第一讀書の爲、扨は文章の爲、扨は經學の爲、扨は御人柄の爲、此四に害有レ之候。第一讀書の爲と申候は、總て書を見候は、上代の書より見申候事に候。上代より唐朝迄は朱子の新註は無レ之候。宋朝も朱子同代の書は新註を不レ用書多御座候。然るを朱註にて經書を見置申候得ば、外の書に經書を引申候所皆義理違申候。然れば宋學を被レ成候故、唐宋以前の書籍濟兼可レ申候。是讀者の爲の害に候。第二に文章の爲と申候は、文章に叙事議論の二體有レ之候。宋儒の書は皆議論にて叙事無レ之候。文章には叙事を第一に仕候故、叙事の體かき不レ被レ得候。且又宋儒の文章は眞にてかきたる假名書に候。詞に風雅なく甚陋敷文字に候故、是に御熟し候得ば、其面影移り、如何程かき候ても註解の極に成行き、誠の文章は書不レ被レ得候。是文章の爲の害に候。第三に經學の爲の害は、前に申候通古言を失候故、經書の文面違申候。理氣天理人欲等の付添有レ之候故、聖人の道の一層の皮膜を隔候。總體宋儒の學は、古聖人の書を文面の儘に解したる物にては無レ之候。程子朱子何れも聰明特達の人にて、古聖人の書をはなれて別に自分の見識有レ之、其見識にて經書を捌き被レ申たる物に候故、宋儒に便りて古聖人の道を得んと求むる事、轅を南にして燕に行かんと求むるがごとし、是經學の爲の害に候。是等の子細を以て損友と申進候事に候。尤見識も定まり、學問も手に入候後は、何れ御覽候ても不レ苦事に候得共、左樣の時節に至り候はゞ、宋儒の書は嫌ひに御なり可レ被レ成候。今程御執着殘候故とやかく被二仰下一候にて御座候。宋儒の經學につのり候人は、是非邪正の差別つよく成行、物毎にすみよりすみ迄は

大夫たる人も、君を輔て國天下を治むる手傳をする人なれば、聖人の道を知らずして、尸祿の譏免れがたく候故道をば學び候。只我身ひとつを佛にも聖人にもなすといふ樣なる物ずき成事にては無レ之と可レ被ニ思召一候。其上聖人に成得れば國天下はをのづから治まるといはゞ、君を輔相せんに其君を聖人に成得んと思ふ内に、年も老日も暮れて、國天下は何れの日にか平治すべく候や。宋儒有レ體而無レ用といへる譏も、其學術の誤より出たる事にて、遁るゝに所なく候。能く御思慮可レ被レ成候。畢竟國天下を治候仕樣を道といふと申候事を嫌ひ候心根は、禮樂刑政を粗迹と見て、道は一段精微なる物と思ふ所病根に候。道は精粗もなく本末もなく、一以貫レ之候。然るに精を貴んで粗を賤んずるは佛老の緒餘に候。此所大切の分れめに候。

一宋儒古言を失候ても道理は古今一般との儀、此御尋は無理の至極に候。古言を失候へば本文の義理違候。本文の義理違候を道理一般とは、あまりに最負過と存候。

一無點の書を讀習候は、僧家の經讀の如く致したるが能候哉の由、夫は如何樣共可レ被レ成候。直讀に成共、返り候て成とも、樣々に可レ被レ成候。指當り一難事と思召の由、尤左樣可レ有ニ御座一候。乍レ去點を御賴候分にては、御學問はいつ迄も同事に可レ有レ之候。只歷史又は五雜俎類の物にても。又は醫書兵書の類にても、何にても兎角讀易き物を御見習候が能御座候。

一五代一覽を眞字に御直し御覽可レ被レ成候由、夫もよく可レ有ニ御座一候得共、左候はゞ先歷史御覽可レ被レ成候。歷史御覽なく、只今の通の材木にて眞字に御直しは何の益も有レ之間敷候。

被ㇾ申候。孔門の直弟にて名目の違は有間敷候。宋儒の註解にては、此道字埒明不ㇾ申候故、朱子は默して過され候。五倫といふ物も、是を立ざれば天下は平治ならぬ事故、聖人の立玉へるにて候。聖人の道は、至極の所天下國家平治の爲に建立なされたる事に候。修ㇾ身事の有ㇾ之候も、身修まらざれば、下尊信せずして道行はれざるゆへ、君子脩ㇾ身候。今日の學者も此所より見識を生じて、聖人の道は天下國家を治むる道といふ所より見開候へば六經は掌を指がごとく候。しかるに後世の儒者見識低く器量小く、何事も我身一つに思ひ取候故、心法理窟の說盛に成行、今日の脩行を以て聖人にならんと求め候。聖人に成得候得ば天下國家はおのづから治まると思取より、事は替れ共佛老の意地に陷候。釋迦は乞食の境界にて、家もなく妻子もなく、まして國天下も持不ㇾ申身故、其道專ら我身一つの事に候。是等の所聖人の道之大段の分れめにて候。帝嚳以前は德を以て天下を治玉へり。堯舜に至りて始て道を建立し玉へる故、孔子も祖ニ述堯舜一、又書經も堯舜より始まる事、我道の元祖たる故也。堯舜も德を以て天下を治め玉はんには、道の建立に及ばざる事也。聖賢なき世にても、此道傳はる時は、聖賢在世のごとく天下國家平治なすべき樣を工夫なし〳〵て、建立し玉へる事にて、禹湯文武周公相繼で脩補まし〳〵たる事也。是によりて孔子も學玉はざれば道は知り玉はず、宋儒は只德を以て天下を治むる事計を會得して、道といふ物を不ㇾ存是によりて孔子の好ㇾ學との玉ひ、博く學び玉へる事、其解不ニ明白一、或は謙詞といひ、或は學者を勉むるの語抔まぎらかし被ㇾ置候也。是己が意を以て聖人を量り、聖言の眞實なるを不ㇾ知也。士

耕すといふは、神農の建立し玉へる事也。宮室を作り衣服を織り出す事は、黄帝の建立し玉へる事也。是又人の性相應に建立し玉へる事故、今は世界に遍滿して天地自然とある事の樣に人々存知候。五倫の道も其如くに候。古聖人の恩如レ此廣大無邊たる事にて、是等の人は聖人の恩とも不レ存候は、あまり德の至極に廣大なるは天地とひとしく、天地日月の恩を人知らざるごとくに候。德合二天地一曰レ帝とは是等の儀を申候。是等の所よく思召入候はゞ、道は當行の理など〻申候は、舌の長き儘に聖人へ印可を出したるに罷成と申處思召可レ被レ當候。如レ此人の性相應に建立なされたる事を、子思は率レ性之謂レ道と被レ仰候。修レ道之謂レ敎と申候は、道を學び候上の事に候。道は廣大無邊にて、是を學ばんと存候ても、中〳〵手に入不レ申候故、道を取てなして學び易きやうに節目を立玉へるを敎と申候。國天下を治むるを敎と申候事は先名目の相違に候。六經論語の内に無レ之事に候。宋儒の例の理學にて、治めも畢竟敎也と道理を以て推ていひたる口上に候。理は聞ゆる樣なれ共、宋儒の理窟と申物に候。古書には無レ之事に候。敎といふ詞は、いづく迄も學に對する敎と可レ被二思召一候。扨又天下國家を治むる仕樣を道といふと申候事御合點不レ參候由、是又宋學に御泥候故左も可レ有レ之候。先我道之元祖は堯舜也。堯舜は天子なり。夫より後聖人と稱し候は禹湯文武周公也。何れも皆天下國家を治たる人なり。孔子は此道を傳へ玉へる人也。故に聖人の道は專天下國家を治むる道にて、禮樂刑政の類皆道なり。論語に子游武城宰として絃歌の聲したるを孔子笑玉へば、子游君子學レ道則愛レ人小人學レ道則易レ使と被レ申候を御覽候へ。分明に樂の事を道と

あるべき筈と淺墓にきはめ行時は、後々は己が心に合たる所計を取りて、己が心に尤と思はぬ所をば棄る事に成行申候故、聖人の道と存候得共、皆々己が臆見に成申事に候。かくのごときの見識長ずるに隨ひて、見識淺露迫切になりて、聖人の道の甚深廣大なる筋とは日々に遠ざかり行、果は高慢甚敷成行事に候。其上事物當行の理といふ詞は、廣く何事へも用ひらるゝ語に候。茶湯立花和歌筆道劍術、或は小笠原の立廻りにも、上下の着なし、大小の指様にも、是はかくあるべき筈、それは左あるべき筈と申、能程位のかねあひはある物に候。是皆聖人の道にてあるべく候や。事は替りても理は同じ事と料簡して、右の樣なる類迄を聖人の道と見申候半は、誠に杜撰の甚敷と云つべし。愚老抔が心は、只深く聖人を信じて、たとひかく有間敷事と我心には思ふとも、聖人の道なれば定めて惡敷事にてはあるまじと思ひ取りて、是を行ふにて候。行ひ熟して後は、習與ㇾ性成、習慣如ㇾ天性ㇾ候故、坦路を行ごとくに成候事に候。且又道は聖人の建立し玉へりといふ事、先道の內にも、おも立たる事は五倫にて候。五倫の內に、父子の愛は天性に候。兄に悌を行ふといふは、幼少より父母のひた物に敎るゆへにこそ存候へ、敎なき者は曾て兄を敬する事は不ㇾ存候。夫婦の倫は、伏羲の立玉へる道なり。洪荒の世は只畜類の如くにこそ候へ。ましで君臣朋友の道に至りては、聖人の立玉へるによりてこそ人是を存候へ。然共聖人甚深廣大の智を以て、人の生れつき相應に建立し玉ひて、是にて人間界といふ物は立候事故、道を學ばぬ人も、今程五倫はたれ〳〵も大體は存知候事に罷成候所より見候へば、生つきたる物の樣に候。たとへば五穀を

候。夫故門弟子への敎も皆其通に候。但し愚老は博く書を見置候故、右のごとく經書の本文計を詠候て會得致し申候。博く書を御覽不レ被レ成候ては、いつ迄も朱註にて御覽なれ候舊見はなれ申間敷候。博く外の書を見候事、經書に不二干涉一事の樣に可二思召一候得共、無用の用と申事有レ之、思はぬ所より得益はある物に候。

一道は事物當行の理にても無レ之、天地自然の道にても無レ之、聖人の建立被レ成たる道にて、國天下を治候仕樣を道といふと申事、御不審致二承知一候。宋學に御泥候故御尤の儀に候。先天地自然の道といふ事は老莊の說に候。有の儘に毫髮の付添もなき天地其儘の道と立て、誠に向上至極に相聞候得共、其說の至極を詰候へば、聖人の道を破却致し不レ申候へば、其理はつまり不レ申候。扨又事物當行の理と申說も、天地自然の道といふ見を底に帶候て說出したる說に候。是皆自信ずる事厚く、古聖人を信ずる事薄き所より生じたる說に候。宋儒の格物致知の修行をして、此事はかくあるべきはづ、其事は左あるべき筈と手前より極め出して、是卽聖人の道と替りなしといふ。是臆見なり。手前の見識昇進するに隨ひて、始めかくあるべしと思ひたる事の後は左あるまじと思はるゝ事のいくらもあるべきをもしらず、早速に欛柄手に入るやうに思はるゝ故、如レ此見識を生ずる事なり。聖人の道は甚深廣大にして、中〱學者の見識にてかく有べき筈の道理と見ゆる事にてはなき事也。しかるを我知り顏に成程尤かくあるべき筈と思ひたらんは、聖人へ此方より印可を出す心根、誠に推參の至極と云つべし。其上聖人の道を己が心のかねに合せて成程尤かく

朱子の新註を除候て、聖經の堂奥に入べき樣なき由被二仰下一候。是は朱子の註にて能濟候と思召候故に候。文面の解は、右に申候ごとく明德格物の類、其外悉古言に違候得ば、聖經のはしごに可レ成樣無レ之候。道理の捌は、右申候ごとく理氣本然氣質天理人欲等、皆古聖人の敎に無レ之事に候。修行の仕形は、知行を分ち格物致知誠意正心持敬などゝて、是又古聖人の敎に無レ之事に候へば、聖經のはしごに可レ成樣曾て無レ之候。左申候はゞ茫然として取入べき樣なく可レ被二思召一候。只先本文計にて淺く御心得被二差置一、左傳史記漢書の類、左迄深き義理に無レ之事計の書を御覽被レ成候がよく御座候。左樣被レ成候内に文字に御なれ候て、文面の義理御取習可レ被レ成候。其後六經を御覽被レ成候はゞ、本文計にても能濟物に候。爰に愚老が懺悔物語可二申進一候。愚老が經學は憲廟の御影に候。其子細は、憲廟の命にて御小性衆四書五經素讀の忘れを吟味仕候。夏日々永に、毎日兩人相對し素讀をさせて承候事に候。始の程は忘れをも咎め申候得共、毎日明六時より夜の四時迄の事にて、食事の間大小用の間計座を立ち候事故、後には疲果、吟味の心もなくなり行、讀候人は只口に任せて讀被レ申候。致二吟味一候我等は、只偶然と書物を詠め居申候。先きは紙を返せども、我等は紙を返さず、讀人と吟味人と別々に成、本文計を年月久敷詠暮し申候。如レ此註をもはなれ、本文計を見るともなく讀ともなく、うつら〳〵と見居候内に、あそこゝに疑共出來いたし、是を種といたし、只今は經學は大形如レ此物と申事合點參候事に候。註にたより早く會得いたしたるは益あるやうに候へども、自己の發明は曾て無レ之事に候。此段愚老が懺悔物語に

下の理は究盡さるべき物に候哉。是皆人のならぬ事を説て人を強ると申物にて候。且又三綱領八條目の委細なる修行の仕形、何として大學に計有レ之六經の内一所にも無レ之候哉。是等の所疑は無レ之候哉。且又程朱之學問は、理氣を分ち、天理人欲を分ち、本然氣質を分ち候より外は無レ之候。如レ此肝要なる事を、何として古の聖人は説不レ被レ申候哉。果して程朱の説是に候はゞ、程朱は孔子にまさる事分明に候。若又古の聖人の敎法至極に候はゞ、程朱の説は別に一流と申物にては無レ之候哉。論こゝに至り候得ば、多くは時代の不同などゝすべらかし候事、後世利口の徒の申事に候。是は古書に熟し不レ申候故、古今之差別は曾て無レ之事と申事を不レ存故に候。古の聖人の智は、古今を貫透して、今日樣々の弊迄明に御覽候。古聖人の敎は、古今を貫透して、其敎の利益上古も末代も聊の替目無レ之候。左無二御座一候では聖人とは不レ被レ申事に候。宋儒理氣の説は、佛家の眞諦假諦に相似候。天理人欲は、眞如無明に相似候。古は聖人賢人と云名目は無レ之候。是又佛菩薩に相似候。道統の傳と申事古は無レ之候。是佛家の血脈相傳に相似候。敎に知行を分つと申事古は無レ之候。佛家には解行と申事有レ之候。豁然貫通と申事古は無レ之候。禪家の大悟徹底に相似候。靜坐と申事古は無レ之候。是又坐禪之眞似と被レ存候。殊に本然氣質の性と申儀、得と詮議をつめ御覽可レ被レ成候。畢竟氣質の性計につまり候事に候。氣質を變化すると申事是又無理の至極に候。人のならぬ事を強ゆるにて候。只々心を平にして今日成べき事かなるまじき事歟古とてもかくあるべき事歟あるまじき事歟と身にとり御思慮候はゞ、宋儒の誤は見え分れ可レ申候。

つけ、言廻し候て聞ゆる様に申候故、曾て疑付不レ申候。只本文計にて文字の付添なく、穏に落着申にて無レ之候得ば、書籍のよく濟たると申物にては無二御座一候。是等の所も、無點の書を自見に御覽不レ被レ成候ては、濟やうの穏なると申事卒度參兼候半歟。扨は大學に八條目と申事、無レ之事に候。子細は在レ明二明德一在レ親レ民在レ止二於至善一と前に有レ之候。在格物と後に有レ之候。然れば格物一條にて濟申事に候。夫故物格而后知至知至而意誠と言て天下平迄、順流直下の文勢に候。然れば格物の一條にて事濟候間、此上に誠意正心修身等の工夫は無レ之事に候。是文面の儘に見候時如レ此に御座候。扨又明二明德於天下一と云註に、使四天下之人皆有三以明二其明德一と有レ之候。心を平にして御覽可レ被レ成候。堯舜の世也共、如レ此事世界に有べき事共不レ被レ存候。殊に朱子の說にも、旣に大學小學を分て、大學は庶人の悉學ぶ事と不レ被レ申候、こゝに至り候ては、又天下の人に皆大學の敎を施すと相見え申候。此等の所御疑は無二御座一候哉。且又孟子に學校の事を說候次に、人倫明二於上一庶民親二於下一と有レ之候。然れば親民は新民と不レ改がよく候。殊に新民の文字は、書經の面革命の事に候。大學の敎は平日の事に候。是等の所齟齬甚敷候。又格物の二字を究二到事物之理一と註有レ之候。是は易の究理の文字を借來て註したる物に候。格は到也物は事なりと註したれば、文面の儘にては究理の義は無レ之候。究二到事物之理一といふ註は、本文にも無レ之候究理の二字を付添て義を生じたる物に候。此段疑敷は無レ之候哉。且易に有レ之候究理は、聖人の易を作給へるを讃歎したる詞にて、全く今日學者の上の事にては無レ之候。心を平にして御覽可レ被レ成候。今日天

道も教もわざにて候故、詞の上にて直に見え分れ申事に候。只々異國人の古の詞を會得する事故、文章を會得する事六借候。以上。

一再往御尋の趣致承知候。學問の仕形道筋の儀は、先達の導なくしては路頭を誤り候事にて候。教示の疑敷にいたり候ては幾度も御尋候が能御座候。兎角愚老存念を御問はし候て、夫にても御合點なく候はゞ、御工夫を被成御覽、又は合點ゆかずながらも暫く教に順て御學御覽被成、兎角愚老が申所不是に極り候はゞ、御用不被成候事是正敷道理に候。枉て愚老が教に御順候得と申事にては曾て無御座候。遠境蒙御尋候故、御志を感じ申入候迄の事に候。御兩所共に程朱の書ならでは今迄御覽不被成所へ申入候故御驚愕尤の事に候。今少博く書を御覽被置候はゞ、愚老不申入候共、程朱の書に御自身より少は疑付可有之候。左樣の所へ申入候はゞ、御會得も早く可有之候。憤悱啓發一隅三隅の章、孔門計にかぎらず、今日に至候ても教法は只如此候。愚老が申進候趣大早計に候故の事と存候。

一學問の仕形、宋朝に至別に一流出來候と申事、御不審致承知候。被仰聞候大學程朱の解大きに違候事に候。明德の二字大學の開卷第一義に候。然處左傳に禹之明德遠矣と有之、又聖人而有明德と申事有之候。是等は朱子明德の解にては一向通不申事に候。其外詩經の内にも明德の字多有之候。朱子の解にて通じ申候哉。枉て理窟を御附候はゞ、言廻し聞ゆるやうにも可有之候へども、惣て文章を會得する事は語路の穩成やうに會得する事に候。今時の講釋學問は、無理に辨を

は文章に候。能文章を會得して、書籍の儘濟し候て我意を少も雜え不ㇾ申候得ば、古人の意は、明に候。聖人の道は聖人の敎法に順はずして可ㇾ得樣曾て無ㇾ之候。其敎法は書籍に有ㇾ之候故つまる所是又文章に歸し申候。然る所文章も字義も時代に隨て致二展轉一候所眼の付所にて候に、後世儒者我物ずきを立候故、道德は尊く文章は卑き事なりと思ひとり、文章を輕看致し候より、右の所に心付不ㇾ申、右の所に心付不ㇾ申候故、古聖人の敎法見え分れ不ㇾ申、我知見にて聖人の道を會得せんとする故皆自己流に罷成候。宋學の輩は識見益鄙陋にて、程朱陽明吾國にて闇齋仁齋等の末師を信ずる事孔子よりも甚敷候。たとへて申候はゞ、佛者の輩釋迦の說をば不ㇾ用して、深く法然日蓮を信ずるがごとくに候。敎に古今なく、道にも古今なく候。聖人の道にて今日の國天下も治り候事に候。外に仕形は無ㇾ之候。聖人の敎にて今日の人も才德を成就候事に候。是又外に仕形無ㇾ之候。古今通貫不ㇾ申候ては、古聖人の道とも敎共不ㇾ被ㇾ申候。道も敎も普く天下の人に被らしむる事にて、天下の人には愚不肖多く賢智少く候事是又古今の替りなく候。然ば古聖人の道も敎も後儒の申候樣なる理の六借(むつかし)事は決て無ㇾ之筈なる事明に候。理の六借事は愚なる人は會得成不ㇾ申事故、古聖人の道も敎も皆わざにもたせ置候事にて、其わざさへ行候得ば、理は不ㇾ知候ても、自然と風俗移候所より、人の心も直り候て、國天下も治り、又一人の上にても、風儀の移る所より自然と知見各別にひらけ行て才德を成就する事に候。是聖人の道聖人の敎法の妙用に候。是故に今日の學問はひきくひらたく只文章を會得する事に止り候。文章を會得して右の詞濟候得ば、古聖人の

候。點付物の濟候程にて無點の濟不レ申事は無レ之物に候。只目に惡敷くせを付置候故無點の物よめ不レ申候。苦勞をこらへ候てくせを付替候迄の事に候。

一書物に濟不レ申所有レ之候故退屈も參候。只飛候て見行候へば、皆々先にて濟申事に候。

一詩文の仕習樣は、只詞を似せ候が能候。後には自然と移候物に候。

一右の外は可二申進一事先無二御座一候。尙御不審に候はゞ可レ被二仰下一候。但士大夫の學問は、國君を輔佐して、家中國中を能治め、文武政務の才を致二成就一候爲の學問に候。此段主意にて御座候。

一武未レ盡レ善と申事は、樂記にて濟候事に候。韶武とこそ被レ仰候へ、舜武とは不レ被レ仰候。堯舜湯武の優劣は不レ論事に候。後世儒者舌の長き儘に聖人の上を評し、無益の至にて、而又其害甚敷候。

一人未レ有二自致者一必也親喪乎と有レ之候は、禮を不レ假而自致者喪レ親の哀情計なりと申事に候。論語一部禮を說候所多候。後儒は聖人の教專ら禮樂なる事を不レ存候故解違候。

一愼レ終追レ遠とは、先王制レ禮の意を說候語に候。今日受用の爲の語にては無レ之候。

一御文章とも被レ遣候。皆宋學に候故直し可レ進樣無二御座一候。

一蘐園隨筆は、不佞未熟の時の書に候。御用被レ成間敷候。仁齋闇齋などの書必々御覽被レ成間敷候。只々末を御捨候て本を御學候事專要に候。以上。

一申殘候趣有レ之候故又申入候。惣て學問の道は文章の外無レ之候。古人の道は書籍に有レ之候。書籍

舜は人君にて候。依レ之聖人の道は專ら國天下を治め候道に候。道と申候は、事物當行の理にても無レ之、天地自然の道にても無レ之、聖人の建立被レ成候道にて、道といふは國天下を治候仕樣に候。扨聖人の敎は專禮樂にて風雅文采なる物に候。心法理窟の沙汰は曾て無レ之事に候。宋儒以來わざを捨て理窟を先とし風雅文采をはらひ捨て野鄙に罷成候。天子之道なる事を忘れ候より、專道理を說候て人を喩候事を第一に仕候。是より理非邪正の爭盛に罷成候。議論一定してかたの極まり候事に成候故、何程學候ても知見の進み廣まる事は曾て無レ之、只片口にぜうのこわき事に罷成候。是皆敎法の違にて候。孔門の敎とは天地雲泥に候。扨は文章も宋儒の文章は眞にてかき候假名物に候故、文章も鄙俚淺露に罷成候。如レ此の書籍に心を染候得ば、漢以前三代の書籍は濟不レ申物に候。此差別當分は御合點參間敷候得ば、申進候も不レ入事の樣に候得共御深志故申進候。

一文字は中華人の言語に候。日本の言語とは詞のたちはに替有レ之候事に候。且又中華にても詞に古今の替有レ之候。宋儒の註解は失二古言一候。古言は其時代の書籍にて推候得ば知れ申候。後世の註解は違多候。依レ之老莊列の類も益有レ之候事に候。但六經は道にて候故、詞濟候ても道の合點不レ參候ては濟不レ申候。依レ之初學は左傳史記前漢書の類易レ解候て益多候。

一同鄕にて候得ば、朋友聚候て會讀などいたし候得ば、東を被レ云候て西の合點參り候事も有レ之候得共、遠境無二朋友之助一御學問はか參間敷候。獨學の仕形は無點を御覽被レ習候にしくは無二御座一

の子細は、其門に入候得ば門風と申事有ㇾ之。様々の事にて其風儀に染候所より思致過半候事に候。從ㇾ古師友と申事有ㇾ之、師教よりは朋友の切磋にて知見を博め學問は進候事に候。當時大名高位の稽古埒明不ㇾ申候事、よき師をば引付學被ㇾ申候得共、位貴候故朋友無ㇾ之。依ㇾ是何藝も不ㇾ致ㇾ成就ㇾ事是明證に候。朋友に交り門風に染候事是第一の事に候。然れば遠境にて傳授難ㇾ成事顯然に候。然共御深志に御座候間、其師友の代に成申事可ㇾ申進ㇾ候。責ては是にて成とも可ㇾ被ㇾ償ㇾ御志ㇾ候。其師友の代に成申儀は書籍にて候。損友を遠け益友を近付候事取ㇾ友の道に候。然ば損の參候書籍は目に總て御覽有間敷候。益に成候書籍に御心を可ㇾ被ㇾ染候。是より外に別に師友の代に成候事無ㇾ之候。被ㇾ仰下ㇾ候筋にて相考候得ば、只今迄專宋學を被ㇾ成候と相見え候。學問の仕形宋朝に至候て別に一流出來候て、古聖人の敎法と各別に罷成候。依ㇾ是宋朝の窠窟に落候ては、學問の進候事曾て有ㇾ之間敷候。四書五經の新註大全等、宋儒の語錄類、詩文にては東坡山谷三體詩瀛奎律髓の類、歷史にては通鑑綱目の書法發明等、皆損友と可ㇾ被ㇾ思召ㇾ候。經學は古註、歷史は左傳國語史記前漢書、文章は楚辭文選韓柳迄は不ㇾ苦候。惣て漢以前の書籍は、老莊列の類も益ㇾ人之知見ㇾ候。是も林希逸解は惡敷候。詩は唐詩選唐詩品彙、是等を益友と可ㇾ被ㇾ思召ㇾ候。明朝の李空同何大復李于鱗王元美詩文宜敷候得共、是は遠境書籍有ㇾ之間敷存候。先有增右の通と可ㇾ被ㇾ思召ㇾ候。

右只今迄の思召と替候故、定て驚愕可ㇾ被ㇾ成候。依ㇾ之、子細を申進候。吾道の元祖は堯舜に候。堯

に妙道は無レ之事と可レ被ニ思召一候。然共小量なる人は何事も皆我一己の上に思ひ取り、ちいさく構へを拵へて有レ之候故、己が智分に似せて一色にて事濟候手近き術を好む物にて候。是によりて右の如なる小道共世界に出來り、是を好む人多御座候。是皆小量のなす所なれば、先王の代とてもかくのごときの類は可レ有レ之候。聖人とても如レ此の見識の世間にたえ候樣に被レ成候事は不レ能事に候。又それ〴〵に相應の得益も有レ之候故、是をたやし可レ申御料簡にも有レ之間敷候。尤國天下を治め候に、右の類の小道を用ひ候は害多き事に候得ば、たゞ下たるもの丶一己の好みにいたし候半事は、己が職分家業をさへ怠らず、孝悌忠信をさへ失ひ不レ申候はゞ、不レ苦事に御座候。其外の一藝一能も、學得候へば、皆一種の器をなして、治國の役人のひとつにはなり申候。茶湯立花棋象戲蹴鞠の類は無益なる事に候へ共、是をするはやむに勝れりと申事の有レ之候。總じて人はたゞわられぬ物にて候。心のよせ所なければ惡事をする物にて候故、小量なる人は孝悌忠信にて候。其外の儀は好みに任せ候事候。此方より御定め候て、小量の人の心を安んじ候道をきはめ被レ置度思召候は無レ詮事に候。何もかも手前の流義に被レ成度樣に相聞え候。此段國家を治め候て人の上に御立候には以の外成儀と存候。以上。

一學問仕樣の事御尋被ニ仰下一候。此段中々書中にては被ニ申盡一不レ申事に候。遠境投贊の義從來何方へも一切御斷申入候儀此故に候。其元へは多年の御深志承及候故任ニ御望一今更御答に致ニ迷惑一候。先は遠境より傳授は難レ成事是事理の當然に候。依レ是孔門之諸子も何も被レ致ニ從學一候事に候。そ

官にて候得ば、古の書に申候士君子と申類にては無ㇾ之候。しかるに國郡の主家老職奉行抔の、己は武士なりと存候は取違へにて候。又平士の輩の少し學問もいたし候者の士君子也と覺え、上﨟らしき身持をいたし、軍法の練習をすてゝ、武藝も私闘の術ばかりを習はすも、是又取違へにて候。聖人の道國の治めは、其國の風俗に從ひ候事に候得ば、武士の風儀は、源平より以前の風儀をば先其儘にして、戰國以來の惡習を除き、人の上たる人は武の本は仁なりといふ事を知りて、文德を專らにし、武士をば悉く土著せしめ、孝悌忠信の德をやしなひ、禮義廉恥の風俗をなし、時時は軍法を練習せしめて、公戰には勇に、私闘には臆なるやうにせん事は、上たる人の導きにて如何樣にも可ㇾ成事に候。只理學といふものゝ世にはやりて、戰國の餘習の上に、理窟だけく候事をくはへ候は、「薪を以て火を救ひ候にかはり無ㇾ之候。以上。

一治國政事の器も無ㇾ之、人の下に付て一生を可ㇾ送人の爲には如何樣の敎可ㇾ然哉の由、幷に世上に有ㇾ之候禪法道敎朱子學陽明學抔の內、心法を取納候て、諸事に付て心の憂も恐も物の惑も少く成候樣成術抔も可ㇾ有ㇾ之思召候由、「又右の品々の外にも手近く小量の人の身心を治候に益ある術も有ㇾ之候哉の由、蒙ㇾ仰候趣致二承知一候。其段は先生の敎には孝悌忠信を中庸の德行として民の務むべき事にいたし有ㇾ之候。上たる人の學可ㇾ申君子の道も是を土臺にいたし候て、此上に君子の大道を學候事にて御座候。此外に何も手近き事は愚老は不ㇾ存候。心の憂も恐も惑も薄く成心の安樂なる事は、天命に安んじ候より外には先王の道には何も無ㇾ之候。先王の道に無ㇾ之候上は、是より外

付け申習はし候にて候。され共武官家を世々し候得ば、一種の風俗自然に出來り候。大抵勇を尙び死をいとはず、恥を知り信を重んじ、むさときたなく候事を男子のせざる事と立候習はし、源平の時分此通りに候。それより世久しく戰國になり候故、世皆軍中の法令を以て國を治め候。其後天下一統しても、何れも文盲にて古を稽へ文德に返る事をしらず、太平の今に至るまで、官職も軍中の役割を其儘に用ひ、政治も軍中の法令を改めず候。是によりて武威を以てひしぎつけ、何事も簡易徑直なる筋を貴び候事を武家の治めと立て、是吾邦に古より傳はり候武道に候など、文盲なるものゝ存候にて御座候。軍者抔と申候者、儒書のかたはしを學び、乾元剛健の德など、申樣なる事を取つけ、戰國名將の上に附會し、或は武道はすなはち神道也といひ、向上に建立し候得ば、何とやらんさもあるべきやうに聞え候得共、是皆戰國以來の事にて、源平の時代まではいまだなき事にて候。治世久敷續き、風俗移り候得ば、結句此頃は源平の時分の武士の風俗は衰へ候て、只戰國の時に附添たる風俗のかた計世にさかんに候。所詮武と申候字は戢レ亂也と訓し候事にて、亂逆を靜め候を武と申候。されば武の本意は民を安ずる仁心より逆亂を靜めて國土を安んじ候爲にて是則聖人の道の一端にて候。治まる時は文を用ひ、亂るゝ時は武を用ひ、只一箇の道にて、道に文道武道と申事は無レ之候。人の生付には氣質の偏御座候故、文德武德有レ之候。官職にも掌り別に候故文官武官有レ之候。物頭侍大將の類は武官にて候故武德ある人尤に候。家老職奉行抔は文官なれば文德なくて難レ叶候。平士の類は其職掌軍伍に編るゝ上卒にて、平生の時も侍衞宿衞の

偶治國平天下の業を論候にも、只其理を知る心計になり、是を行ふ上には心付不レ申候。甚敷は人智人力のとゞき不レ申天命の上も理にて參候事の樣に存候。是よりして聖人の卜筮を御用候事は御合點參不レ申候。御學問の功積り、次第に大量に御成候はゞ、御疑ひ有間敷候。まづ粗増右之通に御心得可レ被レ成候。以上。

一世上に武士道と申習し申候一筋、古の書に有レ之候君子の道にもかなひ、人を治むる道にも成可レ申哉の由御尋候。何事も道理を申つのり候へば、國天下を治め候道にもかよひ申候物に候。老莊の自然、申韓が刑名は、元より國を治むる道に候。許行が農圃盧扁が醫術、郭橐駝が種樹、柳子厚が都料匠の類御覽可レ被レ成候。殊に世上に申候武道と申候は、多くは戰國の時分の名將の筋を說傳へて軍者抔の申にて候。元より國をも治め、士卒を引廻し被レ申候人の道にて候へば、よき事なきにしもあらず候。然共聖人の道にたくらべ候はゞ何としてまさり可レ申候哉。其道を論じ候はゞまづ其人を論じ候にしくは無二御座一候。古の賴朝尊氏正成等より、近くは信玄謙信に至るまで、其人の賢否得失は明かなる事に候得ば、其道といたし候筋も押て知られ申候。古の書に有レ之候太公望より以下孫子吳子韓信諸葛孔明李靖が類は、此方にても兵家者流には是等は師とし尊び候事に候。されども此人々も別に武道といふ事を被レ立候事は無レ之候。事の起り、吾國の俗說に文武二道と申詞有レ之候。是は中古より公家武家とて家別れ候より、公家の傳へ候藝を文道と覺え、武家の傳へ候藝を武道と名付候俗說迄の事に候。詩歌も弓馬も藝にて候を、文盲なるもの丶道と名

たしおて候事候へば己が智力にてなし得候と存候へ共、左にては無二御座一候。皆天地鬼神の助けにて成就いたし申候事に候。其人智人力のとゞき不レ申場にいたり候ては、君子は天命を知りて心をうごかさず、我なすべき道を勤候故、をのづから天地鬼神のたすけを得候に、をろかなる人はわが智に見え不レ申候故、疑ひ生じ心を専らにしてはげみ候事なく、つとむる力よはり候故、其事破れ候て成就いたし不レ申候。たとへば船頭の舟に乘候に、船の上のわざは其道筋御座候て隨分に智力を盡し候得ども、大洋に押出し、風波に逢候ては、智力も盡果、只佛神の力を賴候より外他事無レ之候。されども佛神の力を賴み候計にて、櫓械をもすて船底にひれふし居候計にては、生路を得べき樣無二御座一候。佛神の力を賴み候上に、猶々己がつとむるわざを勵候故、十死一生の難を凌ぎて生路を得候事に候。又戰場に赴き候はんに、いかなる名將なり共上手の碁の手の見ゆるやうに明かに見えていたし候事にては曾て無二御座一候。碁を打候には、碁枰と申物有レ之、目を十文字にもり、三百六十一目に限りたる死物にて、是を打候石も死物に候。しかも靜に案じ候故、上手は先の手を明かに見ぬき候得共、戰の道はさやうに限りたる碁枰の上にて致し候樣なる事にては無二御座一、活物の人を大勢あつかひ候事にて、しかも火急なるわざにて候。是によりて、いにしへより兵法には雲氣風角占筮厭勝の道有レ之候事、是皆衆愚の心を一つにして其わざを勤しむる道古今一轍に候。理學の過はいづれも皆小量に成、蟹の甲に似せて穴をほるごとく、何事をも皆己が身ひとつに思ひ取候故、聖人の道は國天下を治め候道と申事をばいつのまにか忘れはて、

徂徠先生答問書下

一占と申事聖人の書にも有レ之候得共御信用被レ成がたく候由被二仰下一候。是は理學の習弊にて小量に御入候故にて御座候。何事も理窟にて濟候事と思召候故、占は不レ入事に被成レ候。まづ卜筮は稽疑の道の由相見え候。稽疑とはうたがひをさだむると申事にて御座候。今時世間にて女子わらはべの好見候占は、只行先の吉凶仕合せ不仕合を知り可レ申爲にて、たとひ明日死候事を今日慥に存知候共何の益も無レ之事に候。古の卜筮は左にては無二御座一候。たとへば岐路御座候半に、左へ往て吉候半哉、右へ往て能く候半哉と申事、道理見え不レ申了簡つき不レ申候時に、卜筮を以て鬼神に問ひ候事に候。是によりて何事もなき時に先達て今年の吉凶を知ると申樣なる事は曾て無レ之事に候。是を稽疑と申候。又開レ物成レ務と申事相見え候。開物と申候は事を始め候事にて御座候。今迄世間に有レ之民のいたしなれ候事は、皆人の合點の外に候故何も入不レ申候。今迄なき事を取始め候は民のいたしなれ不レ申事故、心を合せ力を合せ候人無レ之候。何事も勤むれば成就し、勤めざれば成就不レ致事道理の常にて候。卜筮を以て其吉利を明らかにしらせ候へば、衆人心をひとつにしてはげみ候故、其事成就いたし候。是を開物成務と申候。總じて世間の一切の事、人智人力のとゞき候限り有レ之事に候。天地も活物、人も活物に候故、天地と人との出合候上、人と人との出合候上には無盡の變動出來り、先達て計知候事は不レ成物に候。愚かなる人はたまたま一つ二つい

こなれ無ニ御座一候故、道理わらくこはくるしく御座候事にて候。依レ是日本の學者には詩文章殊に肝要なる事にて御座候。此方の和歌抔も同趣に候共、何となく只風俗の女々しく候は、聖人なき國故と被レ存候。足下抔の上には右に申候程の事無ニ御座一候得共、只風雅と申候事を御存候はゞ。是計にても君子の心位を御失ひなく、人の上に御すはり候には其益不レ少候。總て理學の薰習世に久敷候故、人多く無用の用と申事不レ被レ存候て、事々迫切緊急に成行き聖人の道に背き候事共多く御座候。御心を可レ被レ付候。以上。

祖徠先生答問書中　終

て更に別の道は無二御座一候。よく〳〵御工夫可レ被レ成候。以上。

一詩文章の學は無益なる儀の樣に被二思召一候由、宋儒の詞章記誦などゝ申候を御聞入候事年久敷候故、左樣思召候にて可レ有二御座一候。まづ五經の內に詩經と申物御座候。是はたゞ吾邦の和歌などの樣なる物にて別に、心身を治め候道理を說きたる物にても、又國天下を治め候道を說きたる物にても無二御座一候。古の人のうきにつけうれしきにつけうめき出したる言の葉に候を、其中にて人情によく叶ひ言葉もよく、又其時その國の風俗をしらるべきを、聖人の集め置き人に敎へ給ふにて候。是を學び候とて道理の便には成不レ申候得共、言葉を巧みにして人情をよくのべ候故、其力にて自然と心こなれ、道理もねれ、又道理の上ばかりにては見えがたき世の風儀國の風儀も心に移り、わが心をのづからに人情に行わたり、高き位より賤き人の事をもしり、男が女の心ゆきをもしり、又かしこきが愚なる人の心あわはひをもしらるゝ益御座候。又詞の巧なる物なるゆへ、其事をいふとなしに自然と其心を人に會得さするの益ありて、人を敎へ諭し諷諫するに益多く候。殊に理窟より外に君子の風儀風俗といふ物のある事は是よりならでは會得なりがたく候。後世の詩文章は皆是を祖述いたし、殊に時代近候故會得成易き筋多く候故、右の心持にて學候へば、其益多御座候、殊更吾邦にて學問をいたし候は、聖人と申候も唐人經書と申候も唐人言葉にて候故、文字をよく會得不レ仕候ては聖人の道は難レ得候。文字を會得仕候事は、古の人の書を作り候ときの心持に成不レ申候得ば濟不レ申儀故。詩文章を作り不レ申候得ば會得難レ成事多御座候。經書計學候人は中々文字の

申候も、中庸と申候も、孝弟忠信と申候も、ひとつ事にて御座候。其內にも孝弟を專らと相見え候は、幼少なる人のいまだ親の家內に居候內は、君臣朋友の上はさしあたらぬ事故に候。孝弟の內に孝を第一といたし候は、兄弟なき人は候へども父母なき人は無之故に候。孝弟の敎は幼少なる人にも入やすく。是よりしては忠信五倫の道もをのづからに得候事故、先王の敎にも殊に專一に被成候事に候。扨是を中庸の德行と名付候事は、いかなる愚なる人も、又才智すぐれ候人も。たれにてもなり申候事にて、別に高妙なる儀にて無御座候故名付候事に候。君子の道も是を土臺といたし候事は、君子の道は仁にて候。仁は國天下の民を安じ候事にて、もと人の上たるものの道にて候。孝弟忠信中庸の德行は、分に相應にたれにてもなり申候事にて、上たる人ばかりの道にては無御座候。孝は父母を養ひ安んずる道にて候。弟は兄弟を養ひ安んずる道にて候。忠は君につかへて君を安んじ養ふ道にて候。信は朋友を安んじ養ふ道にて候。されば何れも皆仁の小わりと可被思召候。たゞ人々の量の大小御座候故、大量の人ならでは仁をわが任といたし候事なりがたく候。量の大小にかゝはらず、たれにても仁の心をおこなひ候事は、孝弟忠信中庸の德行と可被思召候。是により孝弟忠信を土臺といたし、是よりのぼり候へば、君子の仁もよく相應いたし、齟齬いたし候所無御座候。若又孝弟忠信を土臺といたさず候て、國天下を安んずるわざをのみ求め候はゞ、却て邪術にはせ候あやまりも出來可申事故、子思などの書を作り其ふせぎをいたされ候事にて御座候。たゞ量の大小に隨ひ敎の名目は別にて候得共、道は一箇の道に

半と思召候。人は活物にて候。夫故に國家を治候も、人を教訓いたし候も、又は我心我身を治め候も、木にて人形など割見候ごとくにはならぬ物に候。醫者の病を治し候も同事に候。見えわたりたる上にて、咳を止め瀉を止め、熱をもさまし、食をも進め、積塊をも退候半と存候は下手の仕事に候。道を存候醫者は左樣には無二御座一候。故に聖人の道を大道術と申候。國家を治候も、直に善惡邪正を正し、見えわたりたる上にてさつぱりと仕候事にては無二御座一候。俗人の思ひかけぬ所より仕かけを致し候て、覺えず知らず自然と直り候樣に仕事に候。人才を養候も同事に候。世に詐術と申物御座候を嫌ひ候より、術の沙汰消失候て、宋儒の説のごとくに成行申事に御座候。兎角に後世の諸説を御用不レ被レ成、六經論語の間を御熟讀被レ成候はゞ、自然と御會得可レ被レ成候。以上。

一孝行の儀御尋に候。成程聖人の敎には孝弟忠信を中庸の德行と名付け、是を貴賤によらず人たる者の勤め行ふべき事といたし申候。君子の道も、是を土臺にいたし不レ申候得ば、高きにのぼるに楷梯なきがごとくに御座候。舜の契を司徒の官になされ、五倫を敎へしめ給ふも、孔子の民に中庸の德なき事を御なげき被レ成候も同意にて御座候。孝は父母によくつかへ候事、弟は兄長によくつかへ候事、忠は君につかゆるにても、又たれにても、人のためになし候事をば我身の事のごとくに如在なく身にかけ申候事に候。信と申候は、朋友其外あまねくの人にまじはり申候には言語を愼み僞り違候事なきやうに致し候を申候。是にて父母兄弟君臣朋友の道こもり申候故、五倫と

たる通りを成就いたし候が學問にて候。たとへば米にても豆にても、その天性のまゝに實いりよく候樣にこやしを致したて候ごとくに候。しいなにては用に立不ㇾ申候。されば世界の爲にも、米は米にて用にたち、豆は豆にて用に立申候、米は豆にはならぬ物に候。豆は米にはならぬ物に候。宋儒の說のごとく氣質を變化して渾然中和に成候はゞ、米ともつかず豆ともつかぬ物に成たきとの事に候や。それは何の用にも立申間敷候。又米にて豆にもなり、豆にて米にも用られ候樣にと申事に候はゞ、世界に左樣なる事は無ㇾ之事に候。是皆聖人になり候はんと求めしより起り候妄說に候。聖人は聰明睿智の德を天よりうけ得て神明にひとしき人にて候を、何として人力を以てなり可ㇾ申候哉。さる程に古より聖人になりたる人無二御座一候へば、妄說なる事明白に候。聖人の教には聖人になれと申候事は無ㇾ之候。聖人の教に順ひて君子になり候事に候。宋儒の說は、佛法にて佛になり候と申候を能事と存じ、其眞似をいたしたる事にて候。宋儒の說には人欲淨盡て天理渾然なる人を聖人と立候へ共、其分にては聖人とは申されず候。己が心にて聖人はかくのごときと了簡をしてこしらへたて候は、雷又鬼などを繪がき候に相似候。見もせぬ物を推量にて繪がき候を誠と存候て、雷は大皷をたゝく、鬼は虎の皮の下帶をいたしたる物と存候兒女子の心と、宋儒の說に從ひて聖人を思ひやり申候と、左迄は違不ㇾ申と存事に候。聖人の教に順ひ候と、宋儒の教に從候とにて、かやうほどの相違は出來申候。能々御思量可ㇾ被ㇾ成候。以上。

一前書に申進候通、道を御存知なく候故、深遠の思慮無二御座一、只指當り候鼻の先にて物を御直し候

わが心よりさとるとさとらざるにて了簡は替る物にて候を、さとらぬ人を口上にて申すくめ候半はいやがり候も理に候。孔子も諷諫をよしと被レ成易にも納レ約自レ牖と御座候は、先のをのづからにひらけ候をよしと致候事に候。其事となしに外の事より申候へば得道まいる事も有物に候。其事の是非を爭ひ候へば、先の氣立て居候故相手立候て必爭になる物に候。爭にかち候はんは合戰に勝がごとくに候故、怒はやみ不レ申候。ましてわれを深く信仰したまはんには諫も行はれ可レ申候。若君より諫を御求め候はゞ各別の事に候。又兼てわれを信仰せざる人に向ひて道理を說候事何の益も無レ之事に候。今世に君を惣じて諫に限らずわれを信仰せざる人に向ひて道理を說候事何の益も無レ之事に候。今世に君を諫め人に異見を申候は、大形は傍人を聞手に立候心多く御座候。是は專ら公事人の心に候へば、爭の眞中に候故に、諫は大形は君の惡を激する事に罷成り、身も死し諫も行はれず、只諫臣といふ名を取り候事に止り候。然れば忠臣にてはなくて名聞の甚歟にて候。先如レ此心得可レ申事に候。然共其職分にはなりて我身の事のごとくに存候人は、時にとりては申さで叶はぬ事ある物に候。それは其時の事に候。已上。

一御氣質惡敷候由、殊の外氣の毒に思召候由被二仰下一候。己が非を知ると申候は能事に候得共、餘りに氣質を氣の毒に存候事は不レ宜儀に存候。氣質は天より稟得、父母よりうみ付候事に候。氣質を變化すると申候事は宋儒の妄說にて、ならぬ事を人に責候無理の至に候。氣質は何としても變化はならぬ物にて候、米はいつ迄も米、豆はいつまでも豆にて候。只氣質を養ひ候て、其生れ得

進候。頓首。

一御號令の文言御見え被レ成候。事の宜不宜は差置御文言不レ宜存候。餘りに被二仰分一共相聞え申候。號令は如レ此には不レ認物に候。畢竟無理御座候故、下の人得心仕間敷歟と御疑有レ之候に付、事の子細を手をわけて被二仰分一候事と相見え申候。果て無理に候はゞ號令不レ被レ成がよく御座候。若又下の爲宜事に候はゞ、得心不レ仕候共押て被二仰付一可レ然存候。仰分けは不レ入儀に候。其子細は民は愚かなる物にて候故、如何樣共上たる人了簡を極め申付候事に候。吾爲能事と申候事は、後にならでは合點は不レ仕候物に候。たとへば幼少なる子どもに物のわかちを一々に得道させんとするがごとくに候。是無益の事にて候。上下の位違候故必害多御座候。惣て近年如何の儀に候哉かやうなる事はやり申候。下たる人にわが才智を譽られ德行を譽られ度被レ存候事、上たるの位を失ひ候事に候。論語に人不レ知を不レ慍を君子に御座候も君子は上たる人の事に候。上たる人は只天を相手に仕候故、下に知られ度と存じ候心は無二御座一候。下たる人は上に知れず候へば、其位を得がたく、其道を行ひがたく候故、人に知らるゝ事を求め候事に候。古の人は其位なく共上たるの德を備へぬれば人にしられず候共何とも不レ存候事なるを、其位を踏ながらみづからわれとおやまり候事、下に下知を聞れぬ本と可二被成一候。以上。

一諫は大形は申さぬがよく御座候。しば〳〵すれば辱らるゝと申事御座候。其故は言語を以て人を喩さんとする事大形はならぬ事にて候。此方より申候程の儀は大形は先も合點なるものに候。只

へば、君子の信用すべき事に無レ之候。冥々之中を見ぬき候て、鬼神はいかやうの物に候と申候事を存候事は人のならぬ事に候。たとひ存候ても、聖人の教の外に別に鬼神の治様あるまじく候得ば、曾て不レ入事にて御座候。以上。

一被ニ仰聞一候を承候へば、去々年之號令と違申候。此段如何可レ有ニ御座一候哉。民に信を失ひ候は悪敷御事に候。民上を信じ不レ申候へば、上に服せぬ物に候。又々だまされ候やと存候故、すなはに聞入不レ申、用心致しけすみ申候。民にけすみをつけ候ては、號令の行はるべき様無ニ御座一候。民は賤きものに候へば如何樣にも畏入候を、上たる人は御存知不レ被レ成、心より畏り入ると思召候も、あまりに愚かなる事に候。孔子も輗軏の喩を被レ仰候。君も民に信ぜられ不レ申候へば、政は行はれ不レ申候。師も弟子に信ぜられ不レ申候ては教は行はれ不レ申候。朋友の間、惣じて人と人との間は、うたがふを以てはなれ、信ずるを以て合申候事人情の常に候。聖人の道如レ此に候。以上。

一しかじかの儀被ニ仰聞一候趣尤には候へ共、餘り御仰天過候と存候。只今迄の政務天心に應じ不レ申候はゞ、御仰天被レ成候とも天罰は御遁れ有間敷候。天を御敬候て過を改め德を脩るにしくは無ニ御座一候。聖人の教の外に別に祈禱の法は有間敷候。左候はゞ天心は返り不レ申候。返り不レ申候共天命は遁るゝ所無ニ御座一候。仰天は無益に候。妖不レ勝レ德といひ、また妖由レ人興と相見え候。人心の騒動より妖怪はおこると申事に候。大將の心騒動候はゞ、下の騒動は止申間敷候。不レ知レ命無ニ以爲ニ君子一と孔子も被レ仰候。天命を不レ存候へば覺悟はすはり不レ申候。任ニ下問一不レ顧ニ慮外一申

に候と存候。此段任二御懇意一申進候。以上。

一輪廻轉生の事樣々御尋被二仰下一候。愚老は儒學は仕候得共、佛學は不レ仕候。輪廻轉生の沙汰は佛說に出候儀に候間、佛者に御尋可レ然存候。但宋儒の說に理氣の論を以て輪廻を破候は理窟に候。宋儒も直に冥府とやらんを見候にては無レ之、只理窟にて輪廻は無レ之と申たる事に候。佛者も大形は理窟にてある筈と申候。儒佛に不レ限、理窟にて申候は皆推量の沙汰に候。推量の沙汰は慥なる事にては無レ之候。所詮僉議の詰り候所は、釋迦の詞を信じ候て輪廻は有レ之と申事に候。愚老は釋迦をば信仰不レ仕候。聖人を信仰仕候。聖人の敎に無レ之事に候得ば、たとひ輪廻と申事有レ之候共、とんぢやくに不レ及儀と存候。其子細は聖人の敎にて何も角も事足候間不足なる事無レ之と申事を愚老は深く信じ候故、如レ此了簡定まり申候。され共愚老が了簡を足下も御用被レ成候へと申事にては曾て無二御座一候。御尋故愚老が了簡を申進候迄に御座候。以上。

一鬼神有無の事御尋候。古今の間此論やかましく候。何れも理窟にて候。理窟は申次第の物に候間信用成不レ申候。聖人の經書の趣は、成程鬼神はある物と相見え申候。宋儒は理氣陰陽を以て樣々と被レ申候得共、それは宋儒の了簡と申物にて聖人の御詞には無レ之候。宋儒の說に從ひ候て見候へば、畢竟鬼神はなき物と申に成申候。此段聖人の敎と相違に候間信用難レ仕御座候。聖人の書には鬼神を治むる道御座候て、それにて鬼神は世界の利益になり害には成不レ申候。是にて相濟候事に候。佛老巫覡の說に鬼神の治め樣有レ之候へ共、國家を治むる道に害有レ之候。聖人の書と違申候

き別に候故、十分によくは直され申間敷候。こゝの柱をぬけ、かしこの引物をとれとて、當分の物ずきに任せて直候時は、思ひの外なる所の根駄落ち柱ゆがみ、夫より家の弱みとなり、直さぬ前よりは惡敷成候事多き物に候。愚老ごときの貧者の古家に住なれ候者ならでは、此喩をも御存知有間敷候。又愚老ごときの年はや五十にも成候人の、身の内に疝氣つかへも痰も有レ之。氣血も弱成候人を、扁鵲に見せたり共廿歳計の頃の健さには返されぬ物に候。身の内に年久敷有レ之候病は、如何に療治仕候ても、のけられぬ物にて候。粗忽なる醫者は、當分の見處に任せ、こと〴〵くに治せんと仕候故、病は愈不レ申、元氣をそこなひ命を縮むる類多御座候。此道理を能々會得仕候得ば、祖宗の法は改めぬ物と古人の被レ申候は誠に名言と存候。治亂盛衰の道も御明らめなく、人情世態に熟練なく候て、當分の是非目前の利害を思召候分にては、國の古法を改め候事は不レ宜事の至極に候。民は習るゝに安んずる物に候。久しく仕習候事は、數代の前生れぬ先より染入候事故、たとひ惡敷事にても勝手宜敷物に候。世界の人は相持なる物にて、彼是融通いたし一つらぬきに候故、年久敷なれ來候事は、方々ねざしひろごり、それに便り候て人の得用も多く候。それを急に改候へば、處々に思ひの外なるかけひづみ出來申候事思慮あるべき儀に候。周公の深く物を思案被レ成候事書傳に相見え候。聖人の智にてはさも有間敷事に候。殊に開國の初に候へば、御心儘に制作はなり可レ申にさへ、如レ是候は如何之儀に候哉。是非を理の儘に御さばき候は、眞の是非にては無二御座一候。皆手前の物ずきに被レ成候。畢竟理學の餘習御除不レ被レ成候故、御智慧短促

身を我身と不ㇾ存候事は妾婦の道にて候。女は人に身を任せ候ものなるが故、己が了簡を出さず、夫に打任せ候事に候。臣は君の命をうけて、其職分をわが身の事と存じ務むる事に候。若己が存念に合不ㇾ申、わが了簡に落不ㇾ申事なれば、其職を辭し候事は、不忠に成候を恐れ候故に候。身を我物と不ㇾ存候はゞ、わが了簡を出さず、いかやう共主君の心まかせに可ㇾ仕候。しかれば君一人にて候。臣ありても臣なきがごとくに候。臣は君の助にて、使ひものにては無二御座一候を、奴僕を使ふごとくに思召候上の過より起りて、聖人の道には背き申候事に候。君の上にてはまかすとまかせざるとの違に候。臣の上にては、わが身の事と存候と不ㇾ存候との違に候。君の思召次第にて、此方よりはいろはぬ事と存候は、上下心を二つにすると申物に候。是皆忠の字の義理分れ不ㇾ申候より起り申候。能々御勘辨あるべき事と存候。以上。

一被二仰下一候政務の儀共、尤の樣に相聞え候得共、根に入不ㇾ申事と存奉候。聖人の道は、天を敬し祖宗を敬し候事を本と致し候。天より附屬被ㇾ成、祖宗より傳へたる國に候。自分の物と思召候事以の外なる儀に候。古より祖宗の法は改ざる物と相見え申候。開國の時に御生れ候はゞ如何樣とも御心次第に候得共、御先祖より傳へ候國を、御心儘に法を御立替候半事は自由の至に候。是御先祖を御敬ひ申事にては無二御座一候。其害甚敷事に候。其子細は、新たに國を賜りて諸侯となる人は、あらたに家敷取をして家を造るが如くに候。先祖より持傳たる國をうけたる人は、人の造りたる古家に住がごとくに候。今其古家の住居を仕直し候半事は、如何樣に直し候共、元來の物ず

ごとくに成行申候。皆戰國の餘習をうけて苟且の制度と可レ被二思召一候。以上。

一被二仰聞一候趣全體便利を先とし流通を專らに被レ成候。至極よき御了簡にて又及ぶ人も無レ之相見え候得共、大きに道に違候事に候。便利を先として、何事も滯さしつかへなくさばき候事、當分は才幹の樣に相見え候へ共、深遠の思無レ之候故、後道の害多御座候。如レ是仕候へば、畢竟の所。末々の成行は見えぬ物にて候。智に似て愚の至と可レ被二思召一候。流通を專らに仕候へば、商人に制せらるゝ物にて候。流通は天性商人の職分に備りたる道に候ゆへ、諸侯の力にても商人には不レ及候。是によりて流通を專らに仕候得ば、財用の權は必商人の手に落候と可レ被二思召一候。皆々當座の便利を御好み被レ成候所より起り申候。一層深遠の思を加へ申度事に存候。以上。

一御身は主君へ被二差上一無物と被二思召一候由、是は今時はやり申候理窟に候得共、聖人の道に無レ之儀に候。畢竟阿諛逢迎の只中と可レ被二思召一候。宋儒も忠の字を見誤り如レ此解し申候。忠と申候は、總て人の事を吾身の事の如くに存じ少も如在無レ之事に候、是にて忠臣之道に餘蘊無二御座一候。尤義に依て命を棄候事も、吾身の事の如くに存候內にて相濟申事に候。畢竟聖人の道は國家を治め候道故、忠の立樣世俗の了簡とは違申候。其分れ所は、上より下に任せ候と、下より上に任せ候にて分れ申事にて御座候。今の世の風俗にて、上より打まかすると申事無二御座一候故、臣たる者皆其日ぐらしの日用取の了簡の樣に成行、重き役人も月番切の仕のきにて、跡の事には構不レ申候は、其職に有ながら尸位素餐と申物に候。身はなき物と存候しるし如レ是にて御座候。其子細は

兵賦を以て名付候もこの道理に候。漢律に賊盗の律を最初に置候も、盗賊と反逆は同類の物に候。盗賊を鎮むる爲に武備を設け候事急務にて候故に御座候。治平無事の時は兵威を以て民心を鎮壓して、盗賊起る時は早速にからめ取る備なくて不レ叶事に候。今時の代官は古の縣令にて候に、此備なきのみならず、其所を治むる事を職分とせず、只年貢の取立計を肝要と仕り、書算の鄙人を其役とし候故、職位も卑く、心もをのづから鄙劣にて、贓罪の徒も多出來候。一二萬石二三萬石計の領主は、兵士の數も少く、領内も狹候へば、其儀に不レ及候へども、七八萬石十萬石にも上り候諸侯は、必代官に武備を加へ、不レ申候ては不レ叶事に候。撿見と申事世上に有レ之候より、斗筲の人ならで代官はならぬ事に被成候。貢賦の法は、常免を至極に仕候。三代の法、夏は貢法、般は助法、周は徹法に候。徹法は貢助の外に無レ之候。助法は公田私田を分ち候故後世に難レ用候。貢法は常免の事に候。大禹の御定めにて候故、是に踰候良法無レ之候。聖人はよく人情に通達し、古今の情弊を洞見被レ成候て御立候事に候。世上に撿見と申事御座候よりして、吏の種々の奸曲は生じ候事に候。定免に仕候へば、賄賂の道斷候て、奸曲を防がずしてをのづから無レ之候。日本の古も、異國は秦漢より元明までも、皆定免に候。撿見を以て見取に致し候よりして、國の財用は吏の囊橐に入候と可レ被ニ思召ニ候。其上定免に致し候へば、入に定額御座候て、定額を以て國用を制候故却て簡便に候。とりかを定免に致し候へば、誰にても代官は勤まる事に候。代官を鄙職に定め候故、其家にてしかと致したる士をば申付がたく、是よりして果は卿大夫皆民間の情にうとく、木偶人の

候事に候。古は士皆采邑に住居候を、いつの比よりか城下に聚置候故、武士皆公家に成申候。城下は旅宿なる故物入多く、勝手次第に不如意に被ㇾ成候。國中は皆公領なる故、士に國中を自由に游行さすれば不法多きとて、是を禁ずるによりて、地理を諳んぜず、民間の事に疎き故、奉行役人になりても下情を知らず候。小身者采邑に居らざれば、百姓との交りは、只取ると取らるゝとの爭計なる故、士と民と恩義相結ばず、讎敵の思ひをなす。采邑に住すれば恩義相結びて、民は皆家人になる故、一國の上下末々まで一致する事に候。夫に頭を付て、獄訟水利等、其所切に取行へば、事情を失はず、士にも民にも社倉を立て贏餘を積で急難に備る時は貧困の患なし。民は愚かなる物にて、只今まで己が仕習れたる事ならではせぬ物に候。渡世のわざをも見計ひ、其土地になくて事缺る草木を植させ、山をたて、或は百工を集め、商賈を通じ、本輕く末重ければ國衰ふる物にて候故、商人多きは國の害となり候。又貧國は商人を以て富すとも有ㇾ之候。何れに商賈の通塞に心を付くべき事に候。民の衰ふるは奢と賭博なれば、嚴刑を以て賭博を禁じ、衣服器皿の制度を立べく候。如ㇾ是心を用候はゞ、國を富す事心の儘に可㆓被成㆒候。專ら主とする所は、國民の四方に散去せざる樣にすべき事に候。此上に各義方をしらしめ廉恥を養ふを誠の武道と申候。弓馬鑓太刀の術は上の催促に及ばざる事に候。以上。

一被㆓仰下㆒候通武備は國の根本にて候。國郡を領候人は君より其土地を預り居り候事に候。然れば先其土地を人に奪はれ不ㇾ申備第一に候。古天子を萬乘と申、諸侯を千乘と申、卿大夫を百乘と申、

とて其人をあげつおろしつ終日まふり居たればとて、占歟人相歟、扨は神通は各別の儀、只にては其人の長所は知られ申間敷候。人は活物に候へば、事に懸け候て見候へば、今迄無レ之才智も出る物にて御座候。兎角用て見不レ申候得ば聖人とても御存知無レ之候。依レ是書經には釆々と御座候は、事をさせて見よと申事にて御座候。先長所を知りて後に用可レ申存候はば、人は用られ申間敷候。用ひてならでは知れぬ物と可レ被二思召一候。但用るに就て又次第御座候。此方より指圖を致し候て使ひ候へば、其人必其事にはまり不レ申候故、十分の才能は出ぬ物にて候。小々の過失をゆるし不レ申候得ば、たとひ指圖を致不レ申候共、はまり無レ之物に候故に、用ざれば知らず候。ゆだねざれば誠に用ゆるにては無レ之候。是皆常の道理にて、是より外に又妙道は無二御座一候。古の聖人の御相傳の道如レ此御座候。毛頭御疑ひ被レ成間敷候。以上。

一武備の儀共被二仰聞一候。軍法は周禮大司馬の職分にて聖人の道に殊に講明可レ申儀に候。出師行軍布軍城守等の法は、軍者の申候品共、大形は國風にも合候て能御座候。得と不レ致事も有レ之候得共第二段の儀に候。戰鬪の機變は、彼等が申候は多くは古戰の舊局を守り、太平の世に疊の上にて拵候事共に候。無用の空論と可レ被二思召一候。只第一と可レ仕候儀は仁政に過不レ申候。上下一致不レ仕候て軍に可レ勝樣曾て無レ之候。されば一國の主は、一國の士民を天より附屬被レ成候眷屬にて、見放不レ被レ申ものと思入、我苦に致し其國を樂候樣に仕候事、是軍法の根本第一義と可レ被二思召一候。其苦世話に致し申候最初の手當は、士をも民をも其所にありつけ、黨をわけ、頭をつけ治め

よく療治をいたし候は、石膏附子抔をば調法なる藥と存候。下手醫者は疵物に致しのけ置、石膏附子の能有て石膏附子の害なき藥を求め候へども、左樣なる藥は古より今に至るまで無レ之事に候。よく其長所を用なれ候へば疵は目に懸り不レ申候。藥は皆毒にて候へ共、毒と名を付不レ申候事は長所を用候故に候。前書に疵物と申進候は、今世の習俗より名を付候て。御合點參やすき樣に申進たるにて御座候。其實は天地の間の物何によらず、各長短得失御座候て、其長所を用候時は天下に棄物棄才は無二御座一候へ共、長所を御存知不レ被レ成候故、短處にばかり御目つき申候て疵物と思召るゝにて候。人を用候には、其長所を取て短所に目を付不レ申候事聖人の道にて御座候。されども氣質を變化して、渾然中和の德に至るなどゝ申候樣なる邪說世にはやり候故、下手醫者は陳皮甘草抔を集め候て病をいやし候半と存候事に御座候。以上。

一愚老が說に從ひ、疵物を御用ひ被レ成度思召候へ共、兎角人の長所御見え不レ被レ成との儀、成程〳〵左樣可レ有二御座一候。得と御工夫不レ被レ成候故、御目覺兼候と存候。左候はゞ御自身の長所御存知被レ成候哉。此御段承度存候。是も大形御存知被レ成間敷候。加樣に申候愚老も自身の長所は存知不レ申候。但學問の道は幼少より致二修練一候故、是計は長候と自負も有レ之候。其外の儀は致し見不レ申候故存知不レ申候。足下も指當候御役儀の上の御取捌、公邊の立廻り等の儀は定て御得物と存候。其外侍大將の職分、右の高坂彈正が如くに候哉。內藤修理に似申候哉。山縣馬場が內何れか長所に候哉。此段決て御存知有間鋪候。是にて御合點參り候事にて御座候。人の才能知惠の程を知らん

候。疵もなく才も長じ候人を御尋候はゞ、最前申候御物ずきの注文と申物にて、疵なき人は郷原か巧言令色か扨は庸人と可レ被ニ思召一候。以上。

一疵物の使ひにくき由被ニ仰下一候。成程〳〵尤なる御不審と存候。人情世態に歷練不レ被レ成候故、其疵の害をなし候は、如何程の儀と申候程位御心に落不レ申候て、御氣遣ひ止不レ申にて御座候。御學問未熟にて小量なる故と可レ被ニ思召一候。此闘打不透に候内は國の治はなり不レ申事に候。疵物と申候は、たとへばくせ馬のごとくに候。彼がくせを致し申候時の取納の仕様合點不レ參候内は氣遣にて被レ乘不レ申候。是も尤には候得共、坐ながらに其取納の仕様合點參る物にて無ニ御座一候。馬屋の者ばくらう抔に能くせ馬をのり候者有レ之候。一々に馬術鍛錬致したるにても無ニ御座一候。又何程馬術鍛錬いたし候共、馬も活物に候へばくせの程位たしかに知れ申候に極りたる物にても無ニ御座一候。只氣遣の心つよく御座候故、とにかくに埒明不レ申にて候。押こなしのりつけ候へば、左迄の氣遣はなき物と申候事合點參る物に候。三度も五度もなげられ候心得にて無ニ御座一候ては、くせ馬にはのられ不レ申候。今時の人は人の過失を咎むる心つよく候故、自分も過失なき樣にと存候。是により使ひそこのふまじきと思召候御心故、疵物の使ひにくき事被レ仰候にて御座候。馬に乘そこなふ人ならでは馬はのり得ぬ事に候。人を使ひそこなふ人ならでは人をば使ひ不レ得候。堯の鯀を使ひそこなひ、周公の管蔡を使ひそこなひ給ふにて御會得可レ被レ成候。人の使ひそこなひなき樣にと思召候ば、聖人に勝らんと思召候にて御座候。大なる惑と可レ被ニ思召一候。賢者の

座ハ下たる人皆阿諛逢迎に罷成候物に候。今世の通病此事にとゞまり候。能く御了簡可ㇾ被ㇾ成候。

以上。

一兎角人の御見分け無二御座一候由被二仰下一候。誠に御親切なる御尋と存候。左様迄に打わり被二仰下一候儀に御座候間、尚又委細に可二申上一候。前書に申進候手前の御物ずきを御立被ㇾ成候と申候も、見えぬ故の事に候。畢竟は御一人の誤にても無二御座一、世俗の惡習にて候。世俗の惡習にて人人自分にぬりかくし申候故、滿世界霧の内の如く罷成候。國初の諸將は皆艱阻險難を歴練したる人故、治亂盛衰の道こそは暗く候共、人情世態には能々諳んじ被ㇾ申候て、今時の人のごとく物を氣遣ふ心は無ㇾ之候。治平久敷續き、世祿の人上に居、幼少より富貴に成長して、人情世態を歴練なく、物やはらかにそだてられ、心次第に細膩になり、物を氣遣心つよく、それよりして仕置次第に細になり、過失を咎むる事甚しくて、下をも過失なき樣に押へかゝへするを今時はよき役人と申候。是故に面々も過失なき樣にと心懸け、子共をも其樣に敎いれ候。是今世の習俗にて、此心得故、人々物毎に踏込深入する事なく、上をぬり隱す事を第一と仕候。されば人々如ㇾ此心懸候故、見え兼るもことわりにて候。足下も御先祖樣の時代の事御聞可ㇾ被ㇾ成候。今の世より見候へば、其時分に名を申候能人と申候は皆疵物にて候。是別の子細に無二御座一候。其時分はぬり隱し申候事無二御座一候故、疵見え申候。疵見え申候得ば、人才は見え申候。今時も世上の惡俗に染不ㇾ申候人は疵多く御座候間、疵物にならでは人才はなき物と被二思召一、疵物の内にて御ゑらび可ㇾ被ㇾ成

一前書に付て再蒙二御尋問一候は、人無レ之に御難儀被レ成候由、此段は御失言と奉レ存候。乍レ去今時の人少學問仕候へば、大形は其如く被レ申候へば、實に左思召候事も可レ有レ之候得ども、文レ過の御言葉の樣に被レ存候。若實に其如く思召候はゞ、大きなる間違にて御座候。國土に五穀を生じ、材木萬物を生じ候事、古も今も替事無二御座一、世界の用事にさしつかゆる事は何れの世とても無レ之物に候。人とても其如くに候。尤聖賢敎養の內より生候人と、敎を缺たる代の人とは替り候得共、其時代の用に立候程の人才は必有レ之物に候。國無レ人と申事有レ之候を御覽誤候にても候や。夫は朝廷に人なきと申にて候。朝廷に人なきは用ひざるが故に候。朝廷に人なき世は、賢才下僚に沈み、或は民間に埋れ候事、道理の常にて御座候を、人なきと被レ仰候事、孟子に有レ之候歲を罪するの類にて、天道に對し勿體もなき事と奉レ存候。畢竟前書に御答申候通、自分の才智を御用候御病根、翳膜となり候て、ある人の御目に見え不レ申候にて可レ有二御座一候。御書面の趣にて察候へば、人才と被レ仰候は、定て御望の注文可レ有レ之候。其注文に合不レ申をば人才には不レ被レ成候と相見え申候。宋儒抔も手前より注文を出し候病有レ之候故、通鑑綱目を見候へば、天下古今に一人も朱子の心に合申候人見え不レ申候。皆々咎人にかき被レ成候。綱目を御覽候事惡敷候と常々申候は此義にて候。手前より注文を出し人を御さがし候は、手前の御物ずきを御立候にて御座候故、その御注文に合候人は天下古今盡未來際まで無レ之物に候。子細は人心不レ同如レ面候。足下の御面の樣なる人無レ之候。是慥なる證據に候。左樣に六借く御尋候へば、御望の人無レ之而已に無二御

徂徠先生答問書中

一經濟の儀何角と御穿鑿被ニ仰聞一候。但法と人との差別御勘辨被レ成候哉無ニ心元一存候。成程被ニ仰下一候ごとく、法もよき法有レ之候。とくと不レ仕法も有レ之候。依レ之法の吟味もなくて不レ叶事に候得共、經濟を談候人、多くは只仕形の善惡計を吟味仕候は、道を不レ存候過にて候。苟非ニ其人一道不ニ虚行一と申事有レ之候。法よりは人猶肝要にて御座候。たとひ法は惡敷候共、人能候へば相應の利益は有レ之物に候。法計の吟味仕候て人惡鋪候へば何の用にも立不レ申候。又人に隨て法は違候物に候。法は先王の法ほど吟味つまり候事は無レ之候へども、王莽王安石が周禮は毒を天下に流し申候。經濟の法計を御穿鑿被レ成候て、人の僉議無レ之候は、白人醫者の名方を集め候類にて候。何程よき藥方にても、醫者下手に候へば病は愈不レ申候。名方は不レ存候ても、醫師功者に候へば病をば相應に愈し申候。又名方にても、用覺へ不レ申候得ば難レ用物に候。其醫者の器量により、用不レ得方も有レ之候故に、古の聖賢は人を得ることを務被レ申候。よき人を得る時は法は人より生じ申候。人の御僉議無レ之候て、法の御穿鑿計被レ成候御病根は、御自分の才智を御用候事を御このみ被レ成候故に候。是既に大臣の量にて無ニ御座一候。秦誓の斷々兮無ニ它技一と申候は、書經百篇の終にて、孔子の被レ用ニ御心一候事と相見え申候。此段得て御會得被レ成候樣に有レ之度存候。御求には答不レ申、外の事を申進候は、多年の御懇意に付呈ニ愚志一にて候。已上。

手にも足り不ㇾ申候物に候を、相手にいたし目にかけ申候事、世俗に申候職仇とやらんに相似申候、宋儒の學問は元佛法より出候故、似たることを嫌ひ候て爭ひ候事もことはりにて候。古學をも被ㇾ成候仁の、其餘習に御ひかれ、不孝の罪に御陷候事、無㆓勿體㆒儀と存候。孔子は博奕をもやむに賢れりと被ㇾ仰候。人は只ひまにてゐられぬ物にて候。ひまにて居候へば、さびしきまゝに種々の惡敷事出來候物に候故、孔子も如ㇾ此被ㇾ仰候事、聖人は人情をよく御存知候故に候。此所より御見ひらき候はゞ、天下國家を治め候事も、掌に運らすごとく可ㇾ有㆓御座㆒候。年寄候ては、奉公の勤をも辭し、聲色の好も薄くなり、年頃かたらひ候朋友も次第に少くなり、若き人はわが同士にあらず候。家事は子供に讓りぬれば再いろふべきにも無ㇾ之、次第に無聊に成行候事に候。あるひは棋象戯雙六にても打ち、寺參談議參、宿に候時は、念佛にても申候より外はさりとては所作無ㇾ之事に候を御制當候はゞ、何を所作として寂寥を御慰可ㇾ被ㇾ成候はん哉、老後の境界思召やらるべく候。其上佛法世上に行はれ候事千年に近く候て、僧も天下の民に候。聖人の道は民を安んずるを本に仕候。疝氣積聚の痼疾になり候は、扁鵲に療治をいたさせ候とも、是を除き申候配劑は施し不ㇾ申事に候。蛇蝎毒虫も天地の化育をもれ不ㇾ申候。まして佛法も末の世には相應の利益も有ㇾ之候。たゞ是非邪正の差別つよく御入候故、如ㇾ此御誤有ㇾ之候と存候。從來蒙㆓御懇意㆒候儀に候故、不ㇾ顧㆓思召㆒申入候。以上。

徂徠先生答問書上 終

沙汰、一草一木の理までをきはめ候を學問と存候。其心入を尋ね候に、天地の間のあらゆる事を極め盡し、何事もしらぬ事なく、物しりといふ物になりたきといふ事迄に候。中庸に雖二聖人一有レ所レ不レ知と御座候を、凡人の智慮にて何として知り盡すといふ事可レ有レ之候哉。宋儒の說は、人のならぬ事を立てゝ人を強ゆるにて候。是よりして一物不レ知を恥とすといふ事を儒者盛んに申候。皆高慢の心入にて、聖賢の道には曾て無レ之事に候。風雲雷雨に限らず、天地の妙用は、人智の及ばざる所に候。草木の花さきみのり、水の流れ山の峙ち候より、鳥のとび獸のはしり、人の立居物をいふまでも、いかなるからくりといふ事をしらず候。理學者の申候筋は、僅に陰陽五行などゝ申候名目に便りて、おしあてに義理をつけたる迄に候。それをしりたればとて誠に知ると申物にては無レ之候。其樣に知候をしりたりと覺候淺猿さに、國家を治むる道をも只其樣にこそ知りたらめと存候。神妙不測なる天地の上は、もと知られぬ事に候間、雷は雷にて可レ被二差置一候。以上。

一御兩親樣佛法御信仰に候を御制當被レ成候由傳承候。日頃の御孝行とは相違なる御儀以の外なる次第と奉レ存候。末世之儒者は、聖人の道を我私物の樣に存候故、不レ覺一家を立候て、孟子は楊墨と爭ひ、宋儒は佛老と爭被レ申候。其心入を尋候得ば、畢竟嫉妬之心にて淺增き次第に候。聖人の道は、國家を平治する大道に候故、佛法抔と肩をならべ申候樣なる事にては無二御座一候。佛法は其一人の身心を治め候事を敎へ申候へば、曾て聖人の道の構ひに成候物にて無二御座一候。然れば相

力を盡し候ても、大風水旱は人力の及ばざる所明らかに候。よき人の子をそだて候には、御乳めのとをつけ候て、怪我さするなあやまちさするなと詞に詞を添へ、目に目を付重ね候へども、大名の子も怪我致し候事有レ之候。又賤き者の子供は、其母さへ渡世に暇なく候得ば、はだへ薄く、日に照させ雨にうたせ、心儘にくるひありかせて、誰守に付人も無レ之候へども、さりとて溝堀にも落ず、牛馬にも踏殺れずそだち行候を、產土神のまほりめとかや申候も、げにさる事と被レ存候。こゝの境をよく得道いたし候はゞ、畢竟の所は天命に落着すると申候事合點可レ參候。天命に明かに候へば、一天下の事に心を動し申候儀は無二御座一候。孟子に集義を被レ說候は仔細有レ之事にて、元第二等の事と可レ被二思召一候。集義の工夫にては、理窟強く片意地に成候失有レ之物に候。又理窟をはなれ候場に至り候ては、却てとらへ物を失ひ候故、勇氣出不レ申物に候。孔子の不レ知二天命一無三以爲二君子一と被レ仰候は、知仁勇の三德へ通じ候事と可レ被二思召一候。六經に載候堯舜禹湯文武周公孔子の道は、皆天命を主といたし候事にて御座候。以上。

一總じて風雲雷雨は天地の妙用にて、殊に雷には發生の德備り候事に候。是より外の儀は愚老は不レ存候。古より陰陽之氣共申、或は鬼神之所爲共申、或は獸之類共申候。畢竟天地は活物にて神妙不測なる物に候を、人の限ある智にて思計り候故、右のごとくの諸說御座候得共、皆推量の沙汰にて手にとり候樣なる事は無二御座一候。所詮君子の學問と申候は、國家を平治する道を學び候事にて、人事の上の事學び盡しがたく御座候。格物致知と申事を宋儒見誤り候てより、風雲雷雨の

をはや取出して用ひたくなる物に候。是皆うはきの沙汰、若輩なる事に候。此戒め肝要に候。以上。

一被仰下候勇氣の不足の儀、武門には尤なる御僉議に候。聖人の道も、知仁勇を三達德と申候て、君子は勇なくて不叶事に候。大抵はしらぬ事をあやぶみ、なれぬ事には氣遣申事、人情の常にて御座候。たとへば船頭の風波を恐れ候はぬは勇に似候へ共、馬にのせ候へば恐れ候。世に武篇者と被申候人も、禮法の場に至り候へば。殊の外に臆候事有之候は、皆しらずなれぬ事故に候。又幼兒の、晝の間は遊び戯れ候坪の內を、夜中になれば恐れ候は、物の分ち目に見え不申故に候。然ども道理を知れば危ぶみ不申物と存じ、道理をしらんと計致し候へば、知れば知るほど疑生じ氣遣多く成申物に候。只何となくなれ候事第一に候。初の程は先こらへ候て其事になれ候へば、後には氣遣も危ぶみも次第にうせ行候事は、習れ候へば、其事にわたりてよく存候故に御座候。さればなれ不申儀に臆し申候とて、元來の勇氣の不足にては無御座候。大概右の通に候へども、世の中の事、人智人力の及ばざる所有之候。こゝに至り候ては、右の分にては必勇氣くじけ申事に候。其人智人力のとゞき不申場にては、天命に打まかせ候より外更に他事無御座候。此故に勇怯の根本と申候は、天命を知ると知らぬとに落着仕候事にて御座候。世の人の富を得貴を得候を、己が智力の營にて成得たると思なる心に存候得共、天の助を得故也と申候事をば不存候。いとなむ時は成就し、すつる時は何事も破れ候事は一定の理にて候へ共、至極の場にいたり候へば、天道の助なくて成就するといふ事は無之事に候。たとへば農民の田を耕がごとくに候。隨分に農作の

を抑へ、咳を止め、瀉を止め申候配劑を、ひとつも不ㇾ殘加減して、尤なる樣に聞え候療治は、大形は下手醫者のする事に候。功者なる療治はまづ元氣を補候て、後に痰火を治する事も有ㇾ之候。先痰火を消し候て、後に元氣を補ふ事も有ㇾ之候。元氣を補候計にて、外には構不ㇾ申、をのづからに諸症愈候も有ㇾ之候。元來の病根疝氣と見て疝氣を治候へば外はをのづから愈候も有ㇾ之候。又疝氣は久敷痼疾にて候故病根疝氣と見ても疝氣も治せず只何となく調理いたし候へば、自然としらけなをりに愈候も有ㇾ之候。標症ながら、急なるに取つき、先瀉を止め、其上にて誠の療治をするも有ㇾ之候。如ㇾ是療治をするに至り候ては、功者により手段一途に無ㇾ之物に候。されども白人の了簡には、「明細に一つも殘不ㇾ申候を尤と聞請候事和漢一同に候故、多くは人に聞請さすべき爲に、紙上の論を明細に認候事有ㇾ之候。是等は書候人も虛にて認候を、尤と思召候事も可ㇾ有ㇾ之候。孔子の御詞に、君子其言也訒と御座候を、其故を尋候へば、爲ㇾ之難と御答被ㇾ成候。君子の國を治め民を安んずる事はむづかしき事故、よく其わざをなし得たる君子は、心安く埒明候樣には申さぬ事と申意にて御座候。誠に世俗の諺に、手たらはずのくちつるぎとやらん申類も、經濟の論には多く有ㇾ之事に候。され共わざはわざの上がよく御座候故、經書計にては國を治むるわざは參兼候事も多候間、見聞を廣むる爲には、經濟の書をも御覽候事學問にて候。學問は只廣く何をもかをも取入置て、己が知見を廣むる事にて御座候。經濟の論共を面白く思召し、直に政務に御取出し候半事は、穴賢御無用と存候。己が知見小きなれば、珍しからぬ事をも珍く思ひ、己が量小きなれば、知りたる事

わりくれ候て、天子の直御治めは僅の事に候。諸侯の臣は、皆世祿にて代々知行所を持候て有レ之候。尤賢者を擧用る事にて候へ共、大體は人の分限に定り有レ之候て、士大夫はいつも士大夫に候。諸侯はいつも諸侯に候故、人の心定り落着く世にて候。法度も粗く候て、只上下の恩義にて治まり、廉恥を養ふ事を先といたし候。諸侯も大夫も、皆わが物に致し候て國郡を治め候事にて御座候。郡縣の世は、諸侯を立ず士大夫皆一代切に候。知行所もなく皆切米取にて祿薄く候。下司を多くつけ候て、それにてはたばりを持つ事に候。天下の國郡を治め候太守縣令と申候は、皆代官の樣なる物にて、三年替りに候故、威勢薄く候間、法度の立樣三代と替り嚴密に候。天子の國郡を預り候て、しかも三年替りに候故、急に驗の見え候事を第一に致し候風俗に候。士民より起りて宰相迄も立身致し候事成候事故、士大夫の立身を求め候心盛んに候。是三代と後世との大段の分れにて御座候。日本も古は郡縣にて候へども、今程封建に被成候故、唐宋諸儒の說には取用がたき事共御座候。唐宋諸儒の說は多くは紙上之論にて御座候。紙の上に書つらね候所尤と聞え候迄にて、實には取り行ひがたき事をも、道理の見えわたり候に任せあまさずもらさず書立て、己が才智をあらはし、事實に構はず、只聞濟よき樣にと心懸候事と相見え候。殊に學者の認候物に候へば、今其書を御覽被レ成候はゞ、皆皆尤の樣に可レ被二思召一候へども、左は無二御座一事に候。國を治め候は、たとへば醫者の病を治するがごとくに候。元氣虛し候て、痰も有火も有食積も有、疝氣も持病に有レ之、咳出て腹下る病人御座候半に、元氣を補ひ、痰火を靜め、食積を消し、疝氣

の事ならでは不レ存候。何程國を多く見候共、六十餘州は見盡され不レ申候。是にて御了簡可レ被レ成候。經書を御覽候共、古の事實を御存知無レ之候へば、今世の事にて聖人の時代を思召やり候故、違候事のみ多く御座候。文盲なる軍者の申候を承候に、賴朝卿の事を今の將軍家の樣に存候。秩父和田抔をも今世の大名の樣に覺え申候も、時代を不レ存故に候。國土の替り時代の替りをよく不レ存候へば、治亂盛衰の道理、古今の差別なく、聖人の道は末世までも用候樣聖人の御立候と申候事は、慥には被レ知不レ申事に候。其上歷代の間、樣々の事變樣々の人物御座候故、我知見を廣め候事限り無二御座一候。是皆歷史の功にて御座候。歷史の內にて、史記左傳は良史の筆にて、事の有樣を今目に見るごとくかき取り候故、第一面白く覺え、見る內に事の情心に移り、感發いたし候德御座候。殊に上代の書にて御座候故、古學の風儀殘り候て、宋學の學問の窠臼に落不レ申候益も有レ之候。資治通鑑は綱目より勝り申候へども、文章拙く候故、事の情心に移りがたく、感發の益無レ之候。乍レ去遠國は書籍も乏敷候へば、何れなり共、只國々を遍歷なされ長壽にて古今を御見わたし候心にて、理窟をば何共御つけなく、ひたもの御覽被レ成候はゞ、何れもく得益むなしかる間敷候。以上。

一唐宋諸儒の經濟の書共御覽被レ成候由、事實は事實の上が能候間、能御心付と存候。就レ夫御心得御座候事ども御座候。三代の時分は封建の世にて御座候。秦漢以後は、唐宋明までも皆郡縣の代にて候。封建の世と郡縣の世とは、天下の制法の惣體別にて御座候。封建の世は、天下を諸侯に

故、被レ成ニ御覽一候内早く理窟たち候て、御學問の風朱子流の理窟に罷成可レ申候。此段氣の毒に存候事に候。俗學者は、綱目にては道理よく分れ候と思ひ候へ共、夫は實學と申物にては無ニ御座一候。綱目に有レ之候歷代の人物の評判をよく覺候て評判致し候分にては、悉皆覺事にて、人のうはさ計に候。人のうはさを致し候を學問と存候故、人柄の能人も、學問いたし候へば人柄惡敷成候事多く御座候は、皆朱子流理學の害にて御座候。通鑑綱目を見候得ば、古今の間氣に入候人一人も無レ之なり申候。此見解にて今世の人を見候故、人柄惡敷成候事ことはりに候。其上綱目の議論は、印判にて押たるごとく、格定まり道理一定しておしかた極まり申候。天地も活物に候。人も活物に候を、繩などにて縛りからげたるごとく見候は、誠に無用の學問にて、只人の利口を長じ候迄にて御座候故、事實計の資治通鑑はるかに勝り申候。其上四書近思錄にて惡舖理窟つき申候を、又其上に綱目御覽候へば、古今の事跡の上へおしわたし候て、朱子流の理窟を彌習熟いたし候にて御座候。總じて學問は飛耳長目の道と荀子も申候。此國に居て見ぬ異國の事をも承候は、耳に翼出來て飛行候ごとく、今の世に生れて、數千載の昔の事を今目にみるごとく存候事は、長き目なりと申事に候。されば見聞廣く事實に行わたり候を學問と申事に候故、學問は歷史に極まり候事に候。古今和漢へ通じ不レ申候へば、此國今世の風俗の内より目を見出し居候事にて、誠に井の內の蛙に候。常ていの世上の人も、功者なる人ならでは物の用には立不レ申候。功者と申候は老人に有レ之物に候。國を多く見候老人殊に宜候。然共無學の人はわが年に限有レ之候故、五六十年以來

程心を治め身を修め、無瑕の玉のごとくに修行成就候共、下をわが苦世話に致し候心無二御座一、國家を治むる道を知り不レ申候はゞ、何の益も無レ之事に候。依レ是民の父母と申所より見開き不レ申候はゞ、何程の金言妙句も、孔子の御相傳被レ成候堯舜禹湯文武周公の道とは、雲泥萬里の相違にて御座候。聖人の道と佛老の道との分れめ、只此處と可レ被二思召一候。以上。

一前答にて、最前申入候趣も御疑とけ、其外兼々の御疑網共も散し候事多御入候由珍重存候。數年御學問の功積り候て、御疑共數多御蓄へ被レ置候故、右樣の御得益有レ之候と相見え、御志の程感入候。總じて學問と申候物は、自身にわれと合點いたし候事にて御座候。孔門の敎皆此通にて御座候。末世にいたり候ても、敎方も學びかたも皆々如レ此に候。今時の講釋などは、一座の上にて能申取候を詮に仕候故、疑もつき不レ申、得益少く候。久敷承候へば、一種のこはぐるしき理窟たち候て、其害甚敷候。これにより候て、聖人の道は人情には遠き事に候今の世には合不レ申儀に候と人々存候樣に罷成候。聖人の智は、智の至極に候故、聖人の道は、何れの世にてもなり申候事と申候儀を深く御信じ可レ被レ成候。左樣に思召入候はゞ、尙又樣々の疑出可レ申候。以上。

一此間歷史を御覽被レ成候由、一段の思召と存候。通鑑綱目を御覽被レ成候由、同じ事にて資治通鑑よく御座候。資治通鑑はかきつゞけにて候故、渺々といたし候て御覽被レ成がたく可レ有二御座一候。其時は目錄を御覽可レ被レ成候。通鑑綱目の、綱は目錄にて候、目は本文にて候。されば資治通鑑と別に替候事も無二御座一候へども、綱の書樣目錄と違候て、一字之褒貶と申ことを立候て書申候

候故、仕手脇拍子揃ひ候て、狂言の仕組も出來申候事に候。然れば臣たるものゝ道は、君たる道を不ㇾ存候ては了簡皆違ひ申候事明らかに御座候。是のみに限らず。世界の惣體を士農工商の四民に立候事も、古者聖人の御立候事にて、天地自然に四民有ㇾ之候にては無二御座一候。農は田を耕して、世界の人を養ひ、工は家器を作りて世界の人につかはせ、商は有無をかよはして世界の人の手傳をなし、士は是を治めて亂れぬやうにいたし候。各其自の役をのみいたし候へ共、相互に助けあひて、一色かけ候ても國土は立不ㇾ申候。されば人はものすきなる物にて、はなれ〴〵に別なる物にては無ㇾ之候へば、滿世界の人ことご〴〵く人君の民の父母となり給ふを助け候役人に候。如ㇾ是御覧候はゞよく相濟可ㇾ申事に候。此故に士大夫の事を君子と申候。君子と申候は、子は男子の通稱にて君德ある男子と申事にて候。孔子の君子仁を去ていづくんぞ名を成んと被ㇾ仰候も、君子といふ名は仁よりつけたる物と申事にて御座候。莊老の道は山林に籠居候一人ものゝ道にて候。釋迦と申候も、世を捨て家を離れ乞食の境界にて、夫より工夫し出したる道にて候故、我身心の上の事計にて、天下國家を治め候道は說不ㇾ申候。此故に聖人の道も專ら己が身心を治め候にて相濟み、己が身心さへ治まり候へば、天下國家もをのづからに治まり候と申候說は、佛老の緒餘と可ㇾ被二思召一候。尤聖人の道にも身を修候事も有ㇾ之候へ共、それは人の上に立候人は、身の行儀惡敷候へば、下たる人侮り候て信服不ㇾ申候事、人情の常にて御座候故、下たる人に信服さすべき爲に身を修候事にて、兎角は天下國家を治め候道と申候が聖人の道の主意にて御座候。たとひ何

前書申進候趣は、數百年來の儒者の誤候處にて御座候得ば、容易には御得心も出來申間敷候間。今一往根元の處より具に可㆓申述候㆒。堯舜禹湯文武を古の聖人と申候。皆古の人君にて御座候。道と申候は、天下國家を平治可ㇾ被ㇾ成候爲に、聖人の建立被ㇾ成候道にて候。是を天地自然の道と見申候事は、元老莊の說より起り申候事にて、儒書には無ㇾ之事に候。尤聖人の廣大甚深なる智慧にて、人情物理にさかはぬ樣に御立候へば、無理なる事は毫髮も無ㇾ之候へども、聖人出給はぬ以前より、天地に自然と備はり有ㇾ之候道理にて今日の人も我心に立歸り求め候へば、をのづから見え申候事と說候は誤りにて候。されば古之人君の天下國家を平治可ㇾ被ㇾ成候爲に建立被ㇾ成候道にて御座候故、仁を根本と仕候。依ㇾ是仁心より見開き不ㇾ申候へば、聖人の道の上は、事々に了簡の付樣皆ちがひ行申候。是聖人の御本意を忘れ候故にて御座候。士太夫の君に仕へ候も天下國家を君の御治めに相手手傳をいたし候事故、民の父母と申所より了簡を付不ㇾ申候へば、それ〴〵の職分も濟不ㇾ申事に候。たとへば鷹野に出候に、鷹を使ひ候人も有ㇾ之候。犬を牽申候人も御座候。犬を牽申候へば、犬を己が職分に致し候て、鷹には少も構ひ不ㇾ申候へ共、鷹を助候爲の犬と申候事を心付不ㇾ申候へば、其職分違ひ申候。又子供を敎訓いたし候に、せつかんいたし候人も有ㇾ之候。とりさへ候人も有ㇾ之候。せつかんの役人はおそろしき貌をいたし候へ共、心より惡み候にては無ㇾ之、敎訓の主意を失ひ申さぬ事に候。取さへ候人は、其子供の味方になり候樣に見え候得共、實はせつかん致し候人を助け候役人にて候。其わざ別に候へども、互に心をよく會得いたし

しと云ふ流義廣ごり候故、王公大人も學問なされ候へば彌小量になり行候。殊に百年以來世の人便利を先として、出替者を召仕候事世の風俗となり候故、主從共に、只當分のやとはれ人と思ひ候心ゆき、一切の事に薫じわたり、はては親類をも苦にせず、主人の事を身にかけず。只吾身ひとつと思取候を、今の世には能了簡の人に仕候。天より附屬被ㇾ成候眷族は、則天より與給へる福分に候を、思放見捨候はゞ、其福分は消行可ㇾ申候。勿体なき事の至極と可ㇾ被㆓思召㆒候。只民の父母と申語をよく提撕被ㇾ成、それより工夫を御つけ候はゞ、聖人の道にはおのづから御叶可ㇾ被ㇾ成候。孔子も吾道一以貫ㇾ之と被ㇾ仰候へば、何事も〳〵雖ㇾ不ㇾ中不ㇾ遠可ㇾ有㆓御座㆒候。以上。

一民の父母と申候語は、下を治め候には相叶候得共、上に仕ゆる道、其外一切の事にわたり候ては漏候事多御座候由、御不審の趣致㆓承知㆒候。乍㆓慮外㆒御利發に候故、指當り候理窟を能御取廻し被㆓仰遣㆒候。然共被ㇾ任㆓御利發㆒候て御工夫をば不ㇾ被ㇾ成候と存候。如ㇾ斯理の當候儘に御捌被ㇾ成候はゞ指支候事も無㆓御座㆒候得共、一生只世上の利發と申物にて御暮候て、學問の御昇進は有間敷候。此段乍㆓慮外㆒笑止なる御儀に存候。遠境御尋被㆓仰下㆒候程の御志に候はゞ、卒度（そつと）御工夫も被ㇾ成可ㇾ被ㇾ成㆓御覽㆒儀と存候に尤と御聞受被ㇾ成候儀は御用被ㇾ成、又尤と御聞受不ㇾ被ㇾ成候儀は早速に御不審被㆓仰聞㆒候は、畢竟御手前の知見を定規に御立被ㇾ成候故に候。然ば何を申遣候ても、今迄の御知見の上に毫髮も御得益有間敷存候間、御對は不ㇾ仕候。以上。

一再三被㆓仰聞㆒候趣致㆓承知㆒候。如何樣にも只今迄の御學問邪魔に成候て御了簡も付不ㇾ申と存候。

つとも時時はしかり打擲をもいたし候事にて、さのみ慈悲をするとも不ㇾ存候得共、見放し候心は曾て無ㇾ之、一生の間右の者共を苦にいたし候事、是天性父母の心はかくのごとく成物にて、たれだれも賤き民には珍しからぬ事に御座候に、最早百石二百石もとり、千石二三千石にもなり、夫より國郡の主、天下を知召候御方には、か樣の御心無ニ御座ㇾ候は如何なる事にて御座候哉。賤き士民の心には遙に劣候は、無下に口惜き事に候。是如何なる所謂に候へば、全く量の大小より起り申候。賤き士民にいたし候はゞ誰々もかく可ㇾ有ニ御座ㇾ候を、士大夫諸侯となり候へば、をのが家内領内を右のごとく苦にいたし、家内の者領内の民をすてられず見放されぬ眷屬と存候心の付不ㇾ申候事、其心ちいさくて己が分内にゆきわたり不ㇾ申、其力かひなくて己が分内を引うけ申さぬにて候。されば量の大小は力の强弱のごとくにて、非力なる者に强力の眞似をさせ候とも叶ふまじく候へば、小量の人の何として大量に成可ㇾ申候やと可ㇾ被ニ思召ㇾ候。小身の人に一國をも苦にいたし、天下をも苦に致し候へと申候事は、誠に分に應ぜぬ事に候へば、俄に大量にも成兼可ㇾ申候。士大夫の家內を苦にいたし、諸侯の一國を苦にいたし、天子の天下を苦に被ㇾ成候程の事は、元來天よりそれ程の福分を附屬被ㇾ成候て、其程の身上に御生れ候へば、其人の本分にて不ㇾ珍事にて御座候を、惡敷風俗に染て心のつかぬ故にて候。堯舜孔子の道世に行はれ不ㇾ申候より、是非邪正の爭ひ盛んになり候を靜めん爲のかりの方便に、佛老の輩、人にかまはず、わが心をすまし候事をとき致候。小量の儒者それを妙道と思ひ、其眞似をして、聖人の道は己を治むるより外な

徂徠先生答問書上

一何にても平生御提撕被レ成候て利益多候儀を可ニ申進一候旨御求め被ニ仰下一候。遠境御深切の儀感入候。聖人の道廣大無邊なる儀に候。就レ中君子の道を申候はゞ、仁の外に又肝要なる儀無ニ御座一候。仁は慈悲の事と大形は心得候得共、慈悲に様々御座候故、的切の訓解にては無ニ御座一候。天理人欲の說は後世の見識にて、大なる相違に候。惻隱の心は仁也と申候事も、孟子は子細有レ之被レ申候事に御座候。惻隱の心は、大形は尼御前などの慈悲に被レ成候故。今日難ニ取用一候。詩經に民之父母と申候語御座候。是に踰候よき註解無ニ御座一候。民之父母とは如何心得可レ申候や。まづ父母とは其家の旦那の事と御心得可レ被レ成候。賤き民家の旦那を申候はゞ、其家内には火車なる姥も御座候。引ずりなる女房も御座候。うかといたしたる太郎子も御座候。いたづらなる三男も有レ之候。うゐ〳〵しき媳婦も有レ之候。又譜第の家來には、年より用にたゝざる片輪なる下部も御座候。幼少より其家にそだてられ恩にあまへ候て、申付をも聞ざる若き奴も有レ之、さりとては埒もなき家の內にて、理非にて正し候はんには、手もつけられぬわきはてたる事に候。され共其家の眷屬に天より授かり候者共にて、何方へも逐出し可レ申様なく候ゆへ、其家の旦那ならん者は、右の様なる者共をすぐし可レ申爲には、炎天に被レ照、雨雪を凌ぎ、田を耕し、草を刈、苦しき態を勤め、人に賤しめらるゝをも恥辱共不レ存、家內をば隨分に目永に見候て年月を送り候。も

答問書序

子遷所レ按徂徠先生答問書成。子遷蓋謂經生家專修レ心爲レ敎。浮屠氏何別。人皆曰天下國家。惟聖人生知不レ可レ尙已。自レ非二聖人一則何以哉。禮樂刑政。以至二百爾所レ具。六經所レ載。窮レ年不レ可レ盡。若以レ修レ心足矣。則曇摩氏可矣。何必讀レ書然後行レ道。世之耳學者。亦復經生家是守。即稍稍取二古經一視レ之。皆已經生家附以爲レ說者。乃謂聖人之道。六藝之奥。亦惟如レ此。而後遂與レ古違矣。則亦不レ知下聖人之道雖二百世一無中不レ可レ行者上。即以二名高一私二慕徂來先生一者。亦不レ得レ窺レ之。則猶尙以二世之經生一視レ之。見レ以三爲迂二事情一。子遷蓋憂レ之也。余語二子遷一曰。傳焉哉。登レ高必自レ卑。此書雖下以二國字一行上。豈不三裨二益後世一哉。且夫非レ入二其門一。不レ可レ覩二室家之美一。雖二先生之門牆大高一哉。如三我與二吾子一。亦皆得三與二聞其說一。而如二先生他所レ著。亦未レ可二遽以レ暗投レ人。則此書庶乎爲二先容一焉乎。以二余忝二在邦君之末一。不レ得下延二後生一而一諭上レ之。乃序二其端一。以善二子遷之舉一。且以言二志之同一。乙巳之春。西臺滕忠統撰。

親在二先生塾中一。每レ所レ見輒從レ旁私レ之。以秘二乎帳中一。余既探而得レ之。遂相與校而授二之梓人一。其文辭不二修飾一者。不レ請二之先生一也。雖レ不レ請レ之。旣レ之。亦恃二先生之不一レ吝二成事一也。此書也雖二緒言一也。亦擧二一隅一之道也。學者乃以二三隅一反。則知二先生之學之所由一也。知二先生之學之所由一也。則知下先生所二奉承一。六籍所レ載。先王聖人之道上也。此謂レ知レ本。先生所レ著。有二辨道辨名論語徵諸書一未レ行也。其詳今不二具列一云。享保甲辰春三月。平安服元喬序。

徂徠先生答問書序

自二洙泗之道散而大義乖一。後世不レ出二聖人一。吾誰從也。無レ已則六籍已。漢收二秦餘燼一。而詩書多缺。然學者猶考二信於是一。自三吾非二聖人一。信而好レ古。君子義也。古也者三代先王聖人之道。六籍所レ載者是已。其所二損益一雖二百世一可レ知也。輪不レ斵。不レ得レ爲レ車。木不レ刳。不レ得レ爲レ舟。後世雖二機利者一。陸行可レ舟與。水行可レ車與。有レ所レ不レ行也。而舟車猶有レ倫。天道恢恢。道其則レ之。七十子沒。而諸家殽亂。瞋目語難。察焉自好。彫龍炙轂。懼然顧化。擾擾絲棼。道將爲二天下一裂。或謂吾可三以爲二聖人一。或謂通二性命之道一。可三以坐二治天下一也。後世祖二述此說一者。曷嘗不レ謂二聖人之道具レ是矣。雖四陽爲三推二尊六藝一。然事有レ所レ不レ合。則亦陰斷二之諸子一。甘二心其所一レ徵焉。所レ謂詩書恒言者。子焉爲二芻狗一。曰三吾之可二以爲一レ聖。則孔子而後數千餘年。圜冠方屨。逢衣博帶。巍然稱レ儒者。莫レ不レ謂二吾是聖一也。是何聖。抑何多也。曰下有二此理一蓋可中學而爲上。則孔子而後數千餘年。寥寥乎不レ見二一人造焉者一。而欲レ造焉。抑何迂也。則吾不レ信也。至二性命之說一。後世滔滔者皆以爲レ言。推二歸至微一。割レ膚分レ理。要亦濫也耳。靜言庸違。其奈二天下國家何一。而其徒誦レ義無レ窮。此何以稱焉。夫道也者先王之道也。治二天下一焉。唯其治二天下一。而國家而身。舉二大者一而小者見焉。聖亦王者稱也。周公孔子果遵二何德一哉。君子傳二其道一。奉承唯謹。用レ之則行。舍レ之則藏。是爲レ得耳。非レ誦二古文一。安能知レ本二之大義一哉。以三余既受二業徂徠先生一也。從遊者時時多問二先生所レ傳如何一。唯是後世多岐。不レ知二所由一。瞽者無レ相。倀倀何之。有下社友根伯修所二私錄一者上。蓋先生所レ答二遠人一書也。伯修

刊徂來先生學則跋

徂徠先生作二學則一。蓋志レ學者。乃欲三超然之二古之道一乎。則使二人知レ所レ由。元啓不佞。雖レ未レ能レ窺二先生宮室之美一。忝在二門牆之末一。亦得レ與二受而誦一レ之。乃不三敢私一。刊傳二之同志一。其書五篇偶且所レ錄。亦先生與レ人論レ學者。附以刻云。

享保丁未春正月

藤　元　啓　謹　跋

傍二其拘一矣。甚者如二正字通諸書一。乃至下於止注二譌字一而不上レ注レ爲二何譌字一。字音轉者。亦以二己心一掃而去レ之。是安在三其爲二字書一乎。魏校六書精蘊。以二點畫一說二性命之理一鑿哉。是皆不レ識二六書本旨一者。其陋可レ醜。數學亦不佞未二之學一。然觀二於今數學者流一。設二種種奇巧一。以誇二其精微一。其實無レ用二於世一。故知古法必簡也。且如二圓率一。乃積レ方以測レ之。雖三積至二數萬一。亦有二數萬微塵弧不レ入レ算。豈足レ爲二圓率一哉。往歲淸人獻二朱載堉樂書一朝廷俾下不佞考閲上。中有二圓率一。本二諸周禮周髀一。其法如レ可レ據。然未レ審二其如何一。

○承レ問。孔孟之稱。是宋儒所レ俶也。韓愈始尊二孟子一。然尙猶以二荀揚一並稱。至二於宋儒一。躋二其人於孔子一。嬈二其書於論語一。而孔孟論孟。爲二儒者常言一。昉二于此一也。其說蓋本二諸道統一。而道統之言。古無レ之。毋三乃倣二浮屠一乎。夫子路者曾子所レ畏也。後世躋二曾子四配一。而坐二子路廊廡一。鄉黨尙レ齒。學校序レ齒。曾子之神其享レ諸。後儒乃以二己之心一黜二陟古人一。不佞則謂二之僭妄一已。

徂徠先生書五道終

山變黃鍾。亦妄說。何則律有十二者。以隔八相生。終而復始。循環無端也。若以變黃鍾則其數至數十百千萬。莫有底止。其以爲十二者。非自然之數矣。其誤起自不識圍數已。又如本邦一越最長。則有說存矣。古歌吹殊調。歌黃鍾必吹一越。故堂下樂以爲記號。後人不識。直以爲律名故爾。樂家此類極多。不足怪已。既以一越和黃鍾。則其管最長。亦其所也。曆。不佞未之學。然以臆道之。古法必簡易。觀於堯命羲和。分處四方。以親驗合不。隨而改之。不亦簡乎。後世必求以法盡之。然愈精愈舛者。以其人所推驗不過三四十年之久耳。必得數百千歲之壽。目擊親見。而後得其梗槩。此乃世所無。故堯典聖人之智。乃爲至矣。授時曆。世所推崇。然僅以三四十年之推驗者。與它曆同。是以不佞未之能信。如歲差。古來未有定數。以不佞思之。日月有盈縮。一年而復初。故曆家能言之。如歲差。安知其非天之盈乎。自堯至今日。人見其盈而未見其縮。安知數千歲之後必不縮乎。何則天地日月皆活物也。又授時法。已往。歲增一。將來。歲減一。吾不知數千萬年之後算盡時何如也。大氐不知其始。不知其終。吾處其中間。以蜉蝣之年量之。其愈精愈舛者以此。

○承問。書數一技。誠民用之大者。如足下之言。但六藝之書。識字形與音耳。豈後世書學者流比哉。然禮樂主觀美。考工記所載。鍾簴諸器。亦欲精工。則字形孅惡。古亦當論之定其工拙。是常情也。不佞觀博古圖所載鼎彝古文。其古雅不可言。較諸後世名書家篆籀。迥別。譬諸近體李杜詩與三百篇。非不美矣。只好尙不同耳。如字學者流。不佞所惡也。其辨正僞覈偏

徒所レ敎之目。非レ盡ニ乎禮一也。此意考ニ于戴記一自明矣。以レ此觀レ之。周官之爲ニ周禮一亦古言無レ疑。不佞之求レ古。必以ニ事與一レ辭。事則莫レ詳ニ於三禮一。故不佞以爲士不レ通ニ三禮一。不レ足ニ以爲一レ好レ古也。

○承レ問。左傳魯左史作。非ニ丘明一。明儒亦有ニ此說一。按丘明作ニ左傳一。其說尙矣。論語左丘明亦同人。古來無ニ異說一。乃宋儒泥ニ韓愈浮誇之言一。而疑下耻ニ巧言令色一者非中其人上。由レ此而後。異說紛如。蓋六經之外。文章之妙。無下過ニ左傳一者上。古之文章。乃先王禮樂之化所レ生。故其絢爛乃爾。如ニ左傳易傳禮運樂記一是也。至ニ於孟子時一。禮樂之化漸漓。其辭質勝。是爲ニ變調一。韓祖ニ孟子一。務去ニ陳言一。故貶ニ左氏一爲ニ浮誇一。此文人競レ長常態。豈足ニ援以爲一レ斷哉。宋儒皆韓奴隸。其所レ見正同。以ニ不佞一觀レ之。所レ謂巧言者。乃變ニ亂是非一以惑ニ聽者一之謂。吾未レ見ニ左傳有一レ之。孟則有レ之。大氐古來所レ傳。丘明作ニ左傳一之類。存レ之何害。强辨ニ其非一。古書皆廢。適見ニ拗戾一已。足下所レ引。竊比ニ於我老彭一同レ類者。誠然。然又有下我與レ汝有レ是哉。願爲ニ之宰一之類上。竊比云。我云。尊崇甚至者。自非ニ丘明匹一矣。

○承レ問。律曆古法甚簡。甚愜ニ鄙衷一。不佞好レ樂。由レ是推ニ敷聲律之說一。頗得レ盡ニ其蘊一。夏書曰。詩言レ志。歌永レ言。聲依レ永。律和レ聲。是律本以ニ人音一爲レ準。後世乃以ニ尺度累黍一求レ之。所ニ以失一也。今本邦所レ傳黃鍾。乃古黃鍾。誠如ニ足下之言一。樂家有レ譜。試唱レ之。則知ニ人口中之音最濁者爲ニ黃鍾一。何必紛紛。如ニ三分損益一。亦大槩言レ之。何則必以レ耳聽乃定也。如下後世以ニ尺度截中律管上。必有ニ毫忽之數一。目不レ能レ睹。刀不レ能レ截。將何益乎。故古來大槩言レ之者。反臻ニ妙理一也。如ニ蔡西

〇承レ問。禮樂古未二必有一レ書。以二樂正四術四敎一證レ之。是亦卓見。足レ破二後世膠固之習一。不佞嘗謂。四敎云者。詩則諷詠。書則誦讀。禮則節文度數。樂則歌舞八音。其爲レ敎各別。而大非二後世專以レ挾レ策爲レ敎者比一。後世乃專以二讀レ書講一レ理爲レ學。故其於二四者一。亦皆以二讀書之法一求レ之。所三以不レ得二先王敎法之妙一也。如下以レ詩爲二勸善懲惡之設一。以二金聲玉振一疑爲二樂經殘簡一者上。信如三足下所二指摘一也。如二孔子以前一。則詩存二人口一。禮樂皆以レ人傳レ之。所レ謂文武之道未レ墮レ地而在レ人是也。是皆未二嘗有一レ書者審矣。而禮之有レ書。自二孔門一始。其事見二戴記一。今觀二儀禮十七篇一。直錄二升降進退器數之詳一。而未三嘗言二義理一。迥異二於後儒所一レ見。則所レ謂禮經者。眞耳。以レ此推レ之。樂亦譜已。祇古譜亡失。故謂二樂亡一者。不レ可レ謂レ非也。詩亦至二孔門一始載二諸簡策一。書則史官所レ錄。自レ古有レ之。蓋古無二它書一。書唯是已。故得レ專二書名一。論語易傳左氏戴記家語孟荀晏墨諸家所レ引詩書。與二今存者一適同。則其爲二古經一。豈容レ疑乎。足下絀レ詩爲二琴歌一。絀レ書爲二古史一。詩乃彈レ琴可レ歌。書亦史官所レ錄。豈足三以レ此病二二者一邪。至三於以レ書爲二文字之學一。則大不レ然矣。論語曰。何必讀レ書。易傳曰。書不レ盡レ言。言不レ盡レ意。然則聖人之意不レ可レ見乎。孟子曰。盡信レ書。豈可下以二文字之學一爲上レ書哉。如二易春秋一。則觀二韓宣子之言一。乃魯國所レ傳。故孔門傳レ之。而其實非下樂正四敎廣被二天下一者比上。故論語孟荀晏墨諸書。不二多引用一。其非二士子通用者一審矣。足下之疑二莊子經解之言一。亦與二不佞一符。周禮則周官。然禮之體統甚大。而凡先王所三以經二紀天下一全在レ此。而道之大。禮盡レ之矣。左氏所レ稱是禮也之類。可二以想一焉。世儒泥二五禮六樂之言一。而止以二吉凶軍賓嘉一爲レ盡二乎禮一。殊不レ知五禮六樂乃大司

緣飾吏術云爾。豈能法先王哉。祇漢法尙疎濶。吏多得便宜從事。爲近古也。隋脩宇文周之律。唐宋明皆因之。申韓之法。至是始臻其極。夫復讎者。先王之道也。律無之。可以見已。此後世吏治經術所以岐爲二途者。昉於秦漢。成於隋唐也。文章亦然。禮樂亡而言不君子。漢承楚風。辭賦始盛。迨於五胡猾夏而古今之言遂判。佛老淸談乘之。士遂鄙經術而事辭藻。隋因之設科擧。而下迨宋明。士非此不得顯仕。中間雖韓愈倡古文。程朱二公倡古學。亦皆以今言視古言。而郡縣法律科擧者。時王之制也。不可得而違焉。人生其世。耳目爲積習所錮。則經術吏治。文士武人。至今不可得而合焉。要之其德與材。不從詩書禮樂來。而經術政事文章。皆與世推移。滔滔乎莫能返故也。士之生於今。禮殘樂亡。無如之何。苟非聖人復生。孰能制作。故學者唯能涵濡于詩書與禮。優游厭飫。久而化之。習以成性。而德慧術知。由此以出。則其所見。濯然習俗澒洞之中。庶足以弗悖耳。傳曰。詩書者。義之府也。禮樂者。德之則也。不佞謂。詩書辭也。禮樂事也。義存乎辭。禮在乎事。故學問之要。卑求諸辭與事。而不高求諸性命之微。議論之精。則有所憑據。可識後世紕繆所在焉。不爾。徒以己之心與理言之。泛然莫有底止耳。然世自好者。多謂古自古。今自今。何必學古。自以爲達。殊不知古有聖人。而今無聖人。則其人所爲今。誠弗誣。而其能弗悖聖人之道者。吾未之信。其人自以己之心斷之。謂是弗悖古聖人。則其人自以爲聖也。豈不妄乎。乃溺其所習。往往乎語之不能通。故不佞未嘗爲人言之。惡爭也。今足下所見。與不佞符。故詳言之爾。

而能乎。史遷既稱。身通二六藝一者。七十二人。可二以見一已。故予嘗斷二論語原思琴張作一。何者。它家語諸書所レ載孔子言。比二諸論語一。不二甚雅馴一。乃載レ筆者有二工拙一耳。且載レ筆之與レ矢レ口不レ同。驗二諸今一可レ見已。喜怒見二於貌一。疾徐見二於氣一。故直錄二其言一者。有レ所レ不レ足也。故載レ筆者。足レ之以レ文。今觀二諸書所一レ載。一時之言。字之同音者多也。是何辨乎。載レ筆者。兼以レ目睹。豈不レ辨乎。且六藝各有レ事レ事。不レ爾。有レ德者。不レ學二其事一。能乎。故有レ德者有レ言。非二是之謂一也。足下之援レ此。不佞故以爲二強詞軋一レ理也。大氐古今人不二甚相遠一。今之所レ有。古亦有レ之。豈若二今道學先生所一レ言邪。夫賦者。古詩之流也。然辭賦與而文章之道濫矣。隋設二科擧一。而後世無二不文之儒一。然濫亦益甚也。覩二其濫一而欲二掃而除一レ之。亦懲レ羹吹レ氷耳。足下思レ之。它面晤。不備

對二西肥水秀才問一

○承レ問。先王之敎。不レ過二詩書禮樂一。各成二其德一。各達二其材一。而後世經生文士之習。與レ此相反。治敎異レ撰。儒吏殊レ用。此自足下卓見。深慨二鄙夷一。不佞中年。始祛二舊習一。足下妙齡。旣能言レ之。何其有智無智相校之至レ此也。後生可レ畏。豈不レ信乎。不佞謂。孔門四科。亦有下長二政事一者上焉。有下善二文學一者上焉。人之材。豈與二後世一殊哉。各以レ性異。是正所レ謂成レ德達レ材者。而其學。一在二詩書禮樂一。是其與二後世一殊也。蓋古之學者。皆以二禮樂一成二其德一。均之君子人也。而其政事文章。皆繇二詩書一出。所三以不レ悖二聖人之道一也。秦漢而下。以二郡縣一代二封建一。以二法律一代二禮樂一。其言二吏治一者。亦孰不レ援二經術一。而郡縣之治。凡百制度。不レ與レ古同。而先王之道不レ可レ用。故亦僅用以

同邪非邪。故知古所レ謂氣者。與二足下所一レ指殊也。若必以二怒張喧嘩者一爲レ氣邪。孔子以前無レ之。故足下所レ言者。乃世俗之言。酒色財氣之氣也。非二儒者之言一也。孟子浩然之氣。說之術也。故古無レ之。古曰。仁者必有レ勇。禮樂得二諸身一。謂二之强有力一。豈別有二養氣之方一乎。又以二韓歐之文一爲三根二柢六經一者。大謬矣。但韓歐喜用二道德仁義之字一。辨二析是非一耳。必以レ此爲三根二柢六經一。則明人經義八股。愈二於韓歐一遠矣。朱子語類。更爲レ勝レ之。且詩書禮易春秋。何嘗有レ之乎。是皆足下理學所レ錮。不レ覺二其言刺謬至一レ此已。世儒醉レ理。而道德仁義　天理人欲。銜レ口以發。不佞每レ聞レ之。便生二嘔噦一。乃彈レ琴吹レ笙。否則關關雎鳩。以洗二其穢一。於レ是又愧二柳下惠之不一レ可レ及已。足下疇昔之論。不佞一一了了。然不三逐句爲二之辨一。特發二其根由一。以使下足下一思上レ之。足下乃謂不佞不レ達。又何弗レ思也。非二不佞之不一レ達也。足下之不レ達也。所レ引經文。其義皆差。行將レ知レ之。故不二復辨一。足下曰。不レ得レ已已。亦不レ思已。思則已矣。悠悠天地。有二何急遽一。足下乃爾。不備。

又

古無二文人一論。甚佳。然終是强詞軋レ理。宋人類耳。世道學先生。率藉レ此以文二其陋一。足下過取爾。修レ辭尙レ辭。於レ傳有レ之。孔子曰。言以足レ志。文以足レ言。言之不レ文。不レ足二以行一レ遠。又曰　詩三百。與二今存者一。其數適同。故知刪レ詩者　乃刪二潤字句一之謂。非レ芟二三千一也。不レ爾　田畯紅女之言。豈若レ是其美乎。孔門弟子。唯游夏文見存　子游作二禮運一。其稱二言偃一者。自稱詞明甚。世儒鹵莽。不三深考二其然一也。四科稱二文學一。豈非レ善二文章一邪。若謂レ通レ經。則德行政事言語。不レ通レ經

朋黨諸篇皆爭論之言也。足下既以レ無二爭心一見レ告。而其所レ愛乃爾者。不佞亦未レ知二其何故一也。然其無二爭心一者。豈誣レ我乎。意者足下之所レ貴。在レ氣。故不三自覺二其言之如一レ是已。且何得レ已云者。孟子闢二楊墨一之言也。而足下之爲二此言一。其崇二信韓歐一。比二諸聖人之道一。亦何甚也。亦不レ擇レ言之過也。世儒崇二信程朱一。過二於孔子一。猶下之今佛氏崇二信法然日蓮一。過中於釋迦上。豈不レ類乎。足下思レ之。不佞僻惰一病夫。與レ世相遠。所二朝夕一唯一二從游之士。未下嘗以二勸レ人敎一レ人爲上レ事。況與レ人爭哉。而足下乃謂二海内從レ風而靡一者。雖二不佞一亦怪焉。豈耳食之士。初未レ識二不佞之所一レ爲レ學者。傳レ響雷同歟。不レ爾。亦時運之使レ然也。豈不佞之所二能知一哉。亦惟人心如レ面。陳レ所レ見以酬二來意一耳。如二其取舍一。足下裁レ之。時暑涼雜至。伏惟自重。卽月二十一日

與二平子彬一書

辱レ書。申以二曩昔之論一。亦何嗜レ學之甚也。近者或人之言。多下類二足下一者上。然其所レ習不殊。故不佞不二敢與校一レ之。習殊則不レ能レ通。不レ能レ通斯窒。窒斯爭。勢所二必至一。惡二其呶呶一也。足下乃吾黨之士。是以盡二我心一焉耳矣。夫辭與レ言不レ同。足下以爲レ一。倭人之陋也。辭者。言之文者也。言欲レ文。故曰尙レ辭。曰脩レ辭。曰文以足レ言。言何以欲レ文。君子之言也。古之君子。禮樂得二諸身一。故脩レ辭者。學二君子之言一也。足下所レ稱。昌黎以還。質勝而文亡。豈足二以爲一レ文邪。是無レ它。不レ知二脩レ辭之道一。乃積レ字成レ句。所二以質一也。是謂二野人之言一。非二君子之言一也。孟子以後。旣有二是過一。論語左傳戴記則否。足下玩レ之自見。文章主レ氣。發レ自二曹丕一。足下試觀二不文一。其與二韓歐洵軾一。

之一。猶如二韓公一。而二公不レ顧二人非笑一。寧不レ見レ知二於世一。藉レ此得レ禍。而竢二千歲之鍾期一者。亦猶如二韓公一。是其心獨何邪。學問之道。本二諸古一也。夫立レ志如レ此。豈摸擬剽竊是爲乎。以レ此觀レ之非二妒口一而何。且學之道。傚傚爲レ本。故孟子曰。服二堯之服一。誦二堯之言一。行二堯之行一。是堯而已矣。而不レ問二其心與レ德何如一者。學之道爲レ爾。禮樂之敎。左則左。右則右。宮則宮。商則商。必如二其師一。而不二敢違以レ分。故孔子拱侚レ右。則門人亦拱侚レ右。孔子謂二之嗜レ學。可二以見一已。習レ書者。必摸二蘭亭黃庭一。豈求レ爲レ贗乎。學之道爲レ爾。謂下吾旣得二其心一。吾旣得二其理一。不丙必拘乙其似不似甲者。莊禪之遺也。故方二其始學一也。謂二之剽竊摸擬一。亦可耳。久而化レ之。習慣如二天性一。雖二自レ外來一。與レ我爲レ一。故子思曰。合二內外一之道也。故病二摸擬一者。不レ知二學之道一者也。況吾邦之學二華文一。假使學二韓歐一。非二摸擬一而何。其必惡二摸擬一乎。國字之文可耳。且此方之儒。不レ與二國家之政一。終レ身不レ遷レ官。如二贅旒一然。豈有下立レ功策レ名。顯二其父母一之願上哉。治レ經爲レ文。各從二其心所一レ欲レ爲。而官不レ爲二之制一。豈復有下利害之切二於己一。如中鄕者所レ言明人上哉。豈復有二所レ謂今文者一哉。而猶且以二古今一立レ說者。吾未レ知二其何故一耳。豈以媚二時師一歟。豪杰之士決不レ爾。不佞雖レ寡レ交乎。然以二其所一レ嗜。頗得レ窺二今世作者一。洛有二伊原臧一。海西有二雨伯陽一。關以東則有二室師禮一。未レ聞レ有二足下一。知レ有二足下一者。自二此書一始。是足下之葆レ光自晦。不レ競二譽于時一。何其家風之未レ衰也。是豈有二阿レ時之心一乎。祇人安二其所一レ習。其所レ不レ習者。怪而尤レ之。亦常情爲レ爾。則足下以レ非二其所一レ習。而怪尤之先存二乎中一。是以驟見二妒者之言一。以爲レ當レ理而取レ之耳。且足下所レ稱佛骨爭臣本論

得レ窺ニ經術之一斑一焉。是不佞所四以俾三從游之士上學ニ二公之業一者。亦以下其所レ驗ニ於已一者上致レ之也。豈有ニ它意一乎。足下既以ニ文章一見レ怪。不佞乃旁引ニ經術一以復レ之。是足下之怪且尤レ我者。將ニ愈益甚一已。亦唯人心如レ面。各陳レ所レ見耳。初未下嘗與ニ足下一爭上。亦豈必求レ俾ニ下足下一信上邪。且古言簡而文。今言質而冗。雅言之於ニ俚言一也。華言之於ニ倭言一也。亦猶如レ是歟。夫華言之可レ譯者。意耳。意之可レ言者。理耳。其文采粲然者。不レ可ニ得而譯一矣。故宋文之與ニ俚言倭言一。其冗長脆弱之相肖。亦必從ニ事古文辭一。而後可レ醫ニ倭人之疾一。是來喩所レ云。適與ニ不佞意一同也。來喩又以ニ二公一爲ニ淺易一。亦唯人心如レ面。非ニ不佞所レ知也。不佞以爲レ深。足下以爲レ淺。其足下之以爲レ深者。不佞則謂レ淺。豈不ニ氷炭之相反一乎。亦習異耳。來喩又似レ謂下文不ニ必學一者上。孔子固曰。有レ德者有レ言。然又曰。言以足レ志。文以足レ言。修レ辭尚レ辭。於レ傳有レ之。文學之科。其謂ニ之何一。故擧レ一而廢レ百。孟子所レ惡。然非ニ必足下之言一焉。世稱ニ道學先生一者。多藉レ此文ニ其陋一。足下過取耳。來喩又以ニ摸擬剽竊一病ニ二公一。以ニ古自古今自今一立レ論。是乃當ニ二公之時一妒忌者之言也。非ニ足下之言一也。明以ニ經義一策レ士。必以ニ朱注一。非レ此則不レ得レ第ニ進士一。其文必以ニ八股一。非レ此則亦不レ得レ第ニ進士一。是時王之制也。以ニ時王之制一故謂ニ之今文一。非三專指ニ韓歐一也。韓歐亦自稱ニ古文一。其謂ニ之今文一者。自レ我言レ之也。足下何不ニ深考一乎。夫士之生ニ其世一。非レ此則不レ能下出行ニ其道一。策レ功立レ名。以顯中其父母上。雖レ無ニ千秋之志一。是亦可レ恕已。二公之倡ニ古文辭一。皆在下第ニ進士一之後上。而二公之興。從游過ニ於時師一。所三以來ニ時師之妒一也。然二公不レ能レ勝ニ朝廷之功令一。亦不レ能レ勝ニ人人功名之心一。故人之非ニ笑

其手指焉。能出諸其手指。而古書猶吾之口自出焉。夫然後。直與古人相揖於一堂上。不用紹介焉。豈如鄉者徘徊乎門墻之外仰人鼻息以進退者邪。豈不愉快哉。且二公之文主叙事。而于鱗則援古辭以證今事。故不諳明事制者。雖熟古書。亦不能讀焉。夫六經。皆事也。皆辭也。苟嫻辭與事。古今其如眎諸掌乎。於是回首以讀後世之書。萬卷雖夥乎。如破竹然。辟諸良工必先攻堅木焉。吾之亦。試諸盤根錯節。而其餘脆材柔木。易易耳。世人乃擇其易者讀之。習以爲常。古書則束之高閣。辟諸古鼎彝之可貴重而不可狎用也。仁齋之言。豈不然乎。夫學者載籍極博。然其出於宋以後者。十八九。故愈讀愈憚古書之難。習之罪也其謂典謨論語爲易讀者。乃緣自幼習讀傳注之久。是以覺其易耳。假使無傳注而驟視之。豈易乎。如二公之業。俾不習者驟讀之。亦必假訓詁。粗通其指。其以謂故爲難讀者、不亦宜乎。宋儒傳注。唯求理於其心以言之。夫理者。無定準者也。聖人之心。不可得而測矣。唯聖識聖。宋儒之所爲。豈不倨乎。不佞則不敢。夫道則高矣美矣、駑劣之資。不可企及。故卑卑焉求諸事與辭。其心謂。儒者之業。唯守古聖人之書以詔後世。其斯可也。後賢之說。雖高妙乎。其於事辭有不合也。何以知其於聖人之心與道必合哉。君子於其所不知。蓋闕如焉。且聖人之敎。被諸天下。天下之人。愚與不肖。亦夥哉。故卑卑焉者。何必繫於聖人之指。是不佞之心也。如陽明仁齋。亦排宋儒者也。然唯以其心言之。而不知求諸辭與事。亦宋人之類耳。故不佞不取焉。李王二公沒世用其力於文章之業。而不遑及經術。然不佞藉其學。以

歐蘇。學韓柳者也。但不求諸古。而求諸韓柳。所以衰也。其文以理勝。不必法。而其紕辭者自若。夫文以道意。豈患無理。西漢以上。深矣。俾人思而得之。宋人乃欲瞭然乎目下。是以淺矣。蹊逕皆露。其所長議論耳。縱横馳騁。肆心所之。故惡法之束也。況辭乎。紕辭。故不能叙事。夫明瞭是務。欲瞭然乎目下者。注疏之文非邪。是以末流之弊。語錄不啻也。明李王二公。倡古文辭。亦取法於古。其謂之古文辭者。尙辭也。主叙事。不喜議論。亦矯宋弊也。夫後世文章之士。能卓然法古者。唯韓柳李王四公。故不佞嘗作爲四大家雋。以誨門人。而其尤推李王者。尙辭也。雖然。不佞所以推二公者。不特此耳。夫學問之道。本古焉。六經論語。左國史漢。古書也。人孰不讀。然人苦其難通。古今言之殊也。故必須傳注以通之。猶之假倭訓以讀華文邪。尙隔一層。髣髴已矣。且傳注之作。出於後世。古今言之殊。彼亦猶我也。彼且以理求諸心。而不求諸事與辭。故其紕謬。不可勝道。且如明德異端。其解豈不美乎。然至於詩左傳家語。有不合者焉。里仁者。居仁也。主皮。非貫革也。何有於我哉。謂謙辭也者。其說至於康衢之謠而窮焉。君子人與。君子人也。作問答解。亦至於戴記而悖焉。夷狄之有君。素以爲絢兮。皆枉辭以從己之見焉。凡如此類。更僕何罄。不佞從幼守宋儒傳注。崇奉有年。積習所錮。亦不自覺其非矣。藉天之寵靈。暨中年得二公之業以讀之。其初亦苦難入焉。蓋二公之文。資諸古辭。故不熟古書者。不能以讀之。古書之辭。傳注不能解者。二公發諸行文之際渙如也。不復須訓詁。蓋古文辭之學。豈徒讀已邪。亦必求出諸

事也。訟者陳二己之是於不レ信レ己者之前一。以求二其信レ己者也。吁。亦難矣哉。雖レ然。有レ官臨レ之。庶乎足二以斷一已。今學問而用二訟者之道一。乃無二聖人之臨レ上。將孰聽而孰斷レ之乎。若或欲下以三天下之所二同是一而斷上レ之邪。則播二諸衆一而欲訟二己之是一。欲レ訟二己之是一。則暴二人之非一。亦不情之甚也。況獨得之見。有二衆所レ不レ及レ知者一乎。夫學問者。君子之事也。君子無レ所レ爭。爭斯害二乎德一。問者。弟子之事也。秉二弟子之禮一而用二訟者之鬩一。鬩斯害二乎禮一。害二乎德與レ禮者。君子不レ由也。自三孟子好レ辨闢二楊墨一。雖二其時之不一レ得レ已乎。亦非二古之道一也。不佞竊惜焉。爾後稷下市レ學。田巴一日服二千人一。流風所レ扇。是非蠭涌。紛二呶乎百世一。悲哉。若三彼浮屠有二勸辨一。則亦聽レ訟者之道也。儒之黠者。陰操二其術一。以窺レ人而自憙。乃名教之罪人也。不佞懲二其若レ是。凡每レ値下非レ有二師友之素一而來相問難者上。一切不レ置レ對。是不佞之常也。不佞往歲作二蘐園隨筆一。其時。識見未レ定。爭心未レ消。然隨筆之作。自書以自警。聊以消レ閒。初非二以示一レ人也。獨奈誤墮二剞劂之手一。遂公二諸海内一。海内諸君子。因謂二不佞好レ辯者一。非二不佞之心一也。今觀二來喩一。亦在二不レ置レ對之例一。雖レ然。足下既以レ無二爭心一見レ告。而君家先生。乃不佞自二髫年時一私心所二鄉往一。則何必忍然乎。亦唯人心如レ面。不佞豈能喩二諸足下一哉。但言下不佞所三以取二李王一之故上。以酬二來意一。如二其取舍一。乃在二足下一。唯足下擇レ之。夫六經辭也。而法具在焉。孔門而後先秦西漢諸公。皆以レ此其選也。降至二六朝一。辭弊而法病。韓柳二公。倡二古文一。一取二法於古一。其紬レ辭者。矯二六朝之習一也。然非二文章之道本然一。故二公亦有レ時乎修レ辭。如二韓進學解。毛穎傳。諸碑銘。柳天對。段太尉逸事。永州諸記一。何其絢爛乎乃爾。宋

西漢一。大體謂二治道大體一也。時殘暑尙在。伏以自愛。不備。八月十三日

答二屈景山一書

東都物茂卿。謹復二書西京屈君足下一。七月中元日。李陰菅君致二足下所レ賜書一。拆レ封讀レ之。具言地欲下一造二艸廬一相見上而藩法嚴不レ能者狀天。縷縷幾二乎千有餘言一。其降挹之恭。傾倒之懇。優渥特至。誦二其辭一。則雄渾雅健。不レ乏二采縟一。不レ覺レ令三人起敬嘆嘖弗二已。余不佞髫年時。聞二之先大夫一。昔洛有二惺窩先生者一焉。其高第弟子若二羅山活所諸公一者五人。名聞二海內一。皆務以二辨博一相高。而屈先生者。獨爲二溫厚請者一。乃詘二然於四人之間一。退讓自將。不レ求二名高一。其來二東都一。先大夫亦嘗一二接見云。夫儒者斷斷。自レ古爲レ然。而乃能爾者。千百人中一人耳。安得下從二其徒若子孫戚屬一以聞中其行誼之詳上邪。藏二諸中心一。時時憶レ之弗レ忘。及二乎菅童子西游一也。聞二足下周旋甚勤一。李陰君喜以見レ語。且言足下亦有レ意二於不佞一焉。因扣レ之。以識二其爲二屈先生之裔一。則予不佞亦喜甚。及レ聞下足下從二五馬一東下上也。懸レ榻以竢者久之。詎意竟外之交。足下不レ得二斯須以長一乎。是日乃得レ接二尺一一。愈益信二遺範之弗一レ泯。而幸二素願之有一レ愜哉。書中又言二文章好尙之異一。而欲レ聞二不佞之一言一。乃以レ無二爭心一見レ告。亦何詳悉顧慮之至二于此一也。夫人心如レ面。好尙各殊。雖レ然。徒自信而不レ問。將何以知二其未一レ知。而廣二己之見一乎。故學之道。問爲レ大焉。問者。弟子之事也。發レ難相切磋者。朋友之事也。故非レ有二師友之素一。而輙相問難者。爭之道也。臣諫レ君。子諍レ父者。榮辱休戚之相關也。故非レ有二君臣之義一。父子之親一。其心如三秦越人相二視肥瘠一。而諫二其不是一者。亦爭之道也。爭者。訟之

聖人之治不上難也。而宋儒乃求三身爲二聖人一。然程朱既不ㇾ能ㇾ爲二聖人一。而孔子之後無三復有二聖人一。則是懸二空言一以强二人所ㇾ不ㇾ能也。至三於變二化氣質一。亦經無二此言一。氣質天之所ㇾ賦。豈可ㇾ變乎。人各隨二資禀一。以達ㇾ材成ㇾ德。用二諸國家一。辟下諸刀鋸椎鑿。各殊二其用一。以成中大廈上。雖二三代一亦然。豈必須ㇾ變乎。如ㇾ禮者。經所ㇾ言皆禮樂之禮。程朱以爲ㇾ性。仁齋以爲ㇾ德。豈非ㇾ强乎。六經之言。本自平穩。故聖人之道。萬世可ㇾ行。至二於宋儒一。則務爲二新奇之說一。以强二人之所ㇾ不ㇾ能焉。要ㇾ之昌黎好二議論一。務言ㇾ理。其風至ㇾ宋益盛。程朱二公生二于其世一。習以爲ㇾ常。不ㇾ知ㇾ求二諸事與ㇾ辭。亦不三自覺二其與ㇾ古背馳一耳。上之所ㇾ言。皆宋儒之說。且擧二其綱要者一。亦萬分之一。其它紕繆不ㇾ可二枚擧一焉。不佞直據二經文一。以二事與ㇾ辭證ㇾ之。不三復須二訓注一。故其所ㇾ見與二隨筆時一時大有二逕庭一也。夫不佞以二宋儒一爲二新奇一。而足下少服二文恭先生之敎一。意者必習二於宋說一者。則必以二不佞一爲二異端邪說一。唾而罵ㇾ之。是以不佞之爲二此書一握ㇾ筆踟躕者久之。然是而不ㇾ言。足下必以二隨筆一爲二不佞終身之見一耳。匿二其蘊一以阿ㇾ人者。不佞於二交義一恥ㇾ之。故敢陳ㇾ之。乃以ㇾ此而獲二罪於足下一。亦所ㇾ不ㇾ辭也。惟足下亮ㇾ之。如下處二佛氏一之說上。不佞近有二對問一篇一。附覽。又如二譯筌一書一。不佞二十四五時從學之士錄二不佞口語一。其後十年許。頗有二增損一。現今印行。若夫寫本。則舊稿耳。要皆兎園冊子。豈足ㇾ掛二齒牙一乎。又承ㇾ問。雖字法。及猶尙。尙猶。不祥莫大焉。無不祥大焉。不佞竊意。其義全同。但語勢異耳。凡學二文章一。要ㇾ識ㇾ體。故學二左氏文一。則用二左氏法一。學二孟子文一。則用二孟子法一。若混而用ㇾ之。則緝ㇾ錦以ㇾ布者類也。柳儀曹論二石鍾乳一。其與二左氏一異同亦如ㇾ此。隨筆中西京。乃指二

而宋儒句爲二之解一。字爲二之詁一。是強二其所レ不レ知以爲レ知者也。其謬不二亦宜一乎。不佞則以爲道之大。豈庸劣之所二能知一乎。聖人之心。唯聖人而後知レ之。亦非三今人所二能知一也。故其可二得而推一者。事與レ辭耳。事與レ辭雖二卑卑焉一。儒者之業。唯守二章句一。傳二諸後世一。陳レ力就レ列。唯是其分。若二其道一。則以竢二後聖人一。是不佞之志也。大氐漢儒注。雖三亦有二紕繆一。距二孔子時一未二甚遠一。其說皆出二於七十子門人相傳授一者。如二宋儒之時一。則歷レ世彌久。且自三昌黎去二陳言一。而古辭之不レ傳二於世一者久矣。皆以二今言一視二古言一。且不レ識二古文體勢一。是以穿鑿甚多。又疎二於禮一。如二濮議一。諸儒聚訟。雖二程朱二公一。莫レ有二明辨一。今求二諸儀禮一。不レ竢二多言一。本自了了。又如二家禮神主制一。長尺有二寸。象二十二月一。凡禮用二十二一。唯天子爲レ然。祭二四代一。唯諸侯爲レ然。伊川乃用二諸庶人一。豈非レ僭邪。大氐孔子時學問。專用二力於禮一。而宋儒不レ爾。其所二主張一理氣之說。六經無レ之。唯易有二形而上下之言一。然所レ謂器者。亦制レ器尙レ器藏レ器之器。本文可レ證。豈氣之謂乎。天理人欲。出二於樂記一。而不レ言下去二人欲一以盡上レ之。夫人欲淨盡。豈人之所二能爲一乎。克己之己爲二己私一。然六經無二此例一。且下文由レ己。乃人己之己。孔子一時之言。豈若レ是乖張乎。解二格物一爲三究二到於事物之理一。是加二究理二字一。其義始成。殊覺二牽強一。且究理。本贊二聖人作一レ易之言。豈可レ望二之學者一乎。且天下之理。豈可二究盡一哉。明德之解雖レ美乎。至二於詩左傳一。而有二不レ合者一焉。且使下四天下之人上皆有三以明二其明德一。雖二堯舜之世一。豈有二此事一哉。本然之性。氣質之性。本爲レ苦二孔孟之言不一レ合而設焉。然胚胎之始。氣質在焉。故古無二此言一。而孟子性善亦大槩言レ之耳。舜何人也。吾何人也。本言下循二聖人之敎一以行二道於天下一。則

附錄先生書五道

答二安澹泊一書

岡君致二足下前月書一。捧讀知二其矍鑠者狀一。欣慰曷勝。書中又言二及文章之業一。諄諄弗レ已。下問數事。何其謙虛之至二于此一也。夫文章者。經國大業。不朽盛事。抗レ顏爲レ師。豈識劣如二不佞一者之所二企及一乎。前承下以二貴亭記一見上レ徵。欲二勉强塞一レ命。而有レ所レ不レ能。故敢陳二己見一。以明下其所二以不一レ能之由上。然文章之道。亦多端焉。人各有レ所レ好。豈容レ强乎。故曰。非三以爲二它人作一レ文之法一云レ爾。足下盍レ察レ諸。如二蘐園隨筆一者。不佞昔年。消レ暑漫書。聊以自娛。本非三以公二諸大方君子一。誤墜二剞劂一遂背二本心一。且其時。舊習未レ祛。見識未レ定。客氣未レ消。自レ今觀レ之。懊悔殊甚。忽承二奬借一。不二啻泚一レ顙。蓋不佞少小時。已覺下宋儒之說於二六經一有中不レ合者上。然已業レ儒。非レ此則無二以施一レ時。故任レ口任レ意。左支右吾。中宵自省。心甚不レ安焉。隨筆所レ云。乃其左支右吾之言。何足レ論哉。何足レ論哉。中年得二李于鱗王元美集一以讀レ之。率多二古語一。不レ可二得而讀一レ之。於レ是發レ憤以讀二古書一。其誓曰不レ涉二東漢以下一。亦如二于鱗氏之敎一者。蓋有レ年矣。始レ自二六經一。終二于西漢一。終而復始。循環無レ端。久而熟レ之。不下啻若中自二其口一出上。其文意互相發。而不三復須二注解一。然後二家集。甘如レ噉レ蔗。於レ是回レ首以觀二後儒之解一。紕繆悉見。祇李王心在二良史一。而不レ遑レ及二六經一。不佞乃用二諸六經一。爲レ有レ異耳。然六經殘缺。其不レ可二得而識一者。亦復不レ鮮。君子於二其所一レ不レ知蓋闕如也。豈足二以爲一レ恥乎。

焉。道之不レ弃也。潁達作レ疏。乃執二一家之言一。明作二大全一。而潁達亦廢矣。學之益陋。所三以弗レ及レ古也。故學問之道。苟立二其大者一。貴二乎博一。不レ厭レ雜。寧闕レ疑。以竢二夫生一。

右學則　六

雖レ然。不レ知レ命。無三以爲二君子一。豈翅處レ世。雖二學問之道一。莫レ不二皆然一已。天命之謂レ性。人殊二其性一。性殊二其德一。達レ財成レ器。不レ可三得而一二焉。孔門諸子。各得二其性所レ近者。豈仲尼之敎有レ所レ不レ足乎。譬如二時雨化レ之。莫レ不レ生焉已。大者大生。小者小生。豈不レ欲二小者大生一邪。實命不レ同。君子知レ命。故不レ强レ之。及二乎器之成一也。雖二聖人一有レ所レ不レ及焉。故聖人不二敢强一レ之。是故人可三皆爲二聖人一者。非也。性可レ易者。非也。君子之不レ器。水可レ舟而陸可レ車者。非也。世俗所レ尙。人也。非レ天也。故務二世俗所一レ尙。以求二人知一者不レ知レ命也。夫六經殘缺矣。生二於今世一。孰見二其全。命也。僻邑無二師友一。命也。家貧無レ書。命也。雖レ然。心誠求レ之。天其佑レ之。仕不レ優。無レ暇。命也。故己不レ能レ學者。喜二人之學一也。力能使三人學一者。使三人學一也。雖レ不レ學猶レ學也。何必才知德行出二諸己一。而後媮快乎。故命也者。不レ可二如之何一者也。故學而得二其性所一レ近。亦猶若レ是夫。達二其財一。成レ器以共二天職一。古之道也。故學寧爲二諸子百家曲藝之士一。而不レ願レ爲二道學先生一。

右學則　七

徂徠先生學則 終

長乎。亦舊耳。無術之過也。自秦以功令治天下。禮樂泯焉。其流風餘烈。被百世未已。中韓之道。移人耳目以至今日。長養之道斷。而殺伐之氣塞宇宙。後賢人君子。皆生其中。所以差也。故學道者立其大者。而小者從之。

右學則　五

君子不輕絕人。亦不輕絕物。所以成其大也。睹夫生已。凡天地萬物之情。棼縕交結。雜以成文。陰陽相仍。禪易弗居。辟諸糾繩。剛柔相苞。曾曾無盡。喩如剝蕉。不可得而窮詰已。故是非淑慝。無適無莫。大氐物不得其養。惡也。不得其所。惡也。養而成之。俾得其所。皆善也。娥人虎狼。糅稗莠於穀。惡已。雖然。天地不厭虎狼。雨露不擇稗莠。聖人之道。亦猶若是夫。其不得已而去之遠之抶之殺之。惡其害於仁也。非惡其惡也。故惡不仁之甚。好仁之不至也。舜選於衆。擧皐陶。其誅四凶。非所稱也。聖人之世。無弃材。無弃物。堯舜之民。比屋可封。豈皆公侯之材哉。亦非愍而宥之。謂其有裨乎治也。察邇言。采芻蕘。其人豈皆賢邪。毒已疾。荼有時乎帝。它山之石攻玉。不善人善人之資。是聖人之所以成其大也。故善惡皦皦。先王之封疆朘矣。邪正誾誾。仲尼之區域削矣。皆儒者之罪也。是故諸子百家九流之言。以及佛老之頗。皆道之裂已。亦莫有不由人情出焉。故有至言。夫聖人之道。盡人之情已矣。不爾。何以能治而安之哉。故苟立其大者。撫而有之。孰非聖人之道也。漢顓門之學。人殊其說。亦傳所聞於師。七十子自出。豈無繆誤。失得更有之。並存而兼

右學則　三

古有二聖人一。今無二聖人一。故學必古。然無レ古無レ今。無レ今無レ古。今詎可レ廢乎。世世相望。孰匪レ古而孰匪レ今。故通レ古以立レ極。知レ今以體レ之。差二世世一以觀二其來一。其於二民俗人情一。猶レ眎二諸掌一邪。夫古今殊矣。何以見二其殊一。唯其物。物以レ世殊。世以レ物殊。蓋自二秦漢一而後。莫レ有二聖人一。然亦各有レ所レ建焉。祇其知不レ周レ物。所三以無二聖人一也。雖レ然。業已有レ物。必徵二諸志一。而見二其殊一。以レ殊相映。而後足三以論二其世一。不レ爾懸二一定之權衡一。以歷二詆百世一。亦易易焉耳。是直レ己而不レ問二其世一。乃何以レ史爲。故欲レ知レ今者。必通レ古。欲レ通レ古者。必史。史必志。而後六經益明。六經明而聖人之道無二古今一。夫然後天下可二得而治一。故君子必論レ世。亦唯物。

右學則　四

聖人之道。猶二和風甘雨一邪。物得二其養一以生。生斯長。豈有二窮已一乎。君子以成レ德。小人以成レ俗。天下錯二諸陶鈞之中一。聖人之道爲レ爾。故君子錯二身于斯一。藏焉。脩焉。息焉。游焉。鄉レ道而行。中レ道而廢。德慧術知。於焉而出。博厚高明。於焉而至。日躋月烝。不レ知レ然而然。故曰。於レ我何有哉。譬三諸植二草木一。枝葉華實。豈一一而傅レ之哉。所レ務本根之培已。棘猴玉楮。雖レ巧乎。非二人人所レ能也。雖レ有二巧人一。亦不レ能レ周レ物也。故曰。大德不レ踰レ閑。小德出入可也。又曰。本立而道生。貴二夫生一也。彼謂レ窮二天下之理一。謂レ察二一念之微一。皆不レ知レ道之言也。故辨二是非一。別二淑慝一。疏瀹澡雪。剔抉以盡。不レ俾二一毫人欲之存一者。皆非也。假使盡レ之。苟不レ有レ所レ養。其介然小者。安能

所二以錯レ辭者亦殊耳。吾奉二于鱗氏之敎一眎レ古修レ辭。習レ之習レ之。久與レ之化。而辭氣神志皆肖。辭氣神志皆肖。而目之眎。口之言。何擇。夫然後千歲之人。旦莫遇レ之。是之謂下置二身仲尼之時一。從二游夏一親受上レ業也。是之謂二與レ古爲一レ徒也。亦何假二彼之故一爲。

右學則 二

數レ車無レ車。而有二車之名一。古之道也。非二聃言之失一也。道可レ道。非二常道一。聃言之失也。夫自二聖人一而有二道之名一。聃豈非邪。祇其知弗レ及二聖人一。敎之無レ術也。務求レ喩レ之。不レ竢二乎生一。乃舍レ物而言二其名一。言レ之雖レ巧乎。孰二若目睹一。且也。徒名無レ物。空言狀レ之。故其言愈繁愈舛。言レ之者以レ臆。聽レ之者以レ臆。曼衍自恣。莫レ有二底止一。徒翫二其華一。弗レ食二其實一。是無レ它也。以二聖人之敎一爲レ不レ足。欲二勝而上一レ之。多見二其不一レ知レ量也已。雖レ然。聃之言レ禮。諄諄乎度數之弗レ遺。故棄レ聖絕レ學。非二其本心一者。彰彰乎明哉。祇其操レ心之銳。務求レ言レ之。其於レ人也。急欲レ傳二之知一。不レ竢二乎生一也。夫六經物也。道具存焉。施二諸行事一。深切著明。聖人之惡二空言一也。天何言也。四時行焉。百物生焉。敎之術也。不レ憤不レ啓。不レ悱不レ發。竢二夫生一也。不レ知焉者謂二之愛一也。生斯無レ禦。非二自レ外鑠一也。非二襲而取一也。故聖人之敎。貴二乎格一。求レ行レ之者也。故唯其物。聃也者。務言レ之者也。夫言レ之者。明二一端一者也。擧レ一而廢レ百。所二以害一也。後儒乃非レ聃。而傚二其尤一。言レ之弗レ已。名存而物亡。仁義道德之說盛。而道益不レ明。方今之世。滔滔者天下皆聃之徒哉。又安知二聖人之敎莫一レ尙焉。是豈有二古今一哉。故吾退而求二諸六經一。唯其物。

令之肯一。則嬴氏之呂者。以レ此而操レ觚乎。籀斯之迹。粲然盈レ簡。而彼不レ可レ讀。吾不レ可レ讀。吾必從二事夫黃備氏之所一レ爲。句有レ須。丁有レ尾。纍纍乎星羅。擾擾然蜉蝣之來集。而後可三得而言二也已。是迺黃備氏之詩書禮樂也。非二中國之詩書禮樂一也。則其禍殆乎有下甚二於侏離鴃舌一者上也哉。然則如之何可也。亦唯言語異レ宜。其於二黃備氏之業一。可二訓以故一。不レ可二誦以傳一。暫則假。久則泥。筌乎筌乎。獲レ魚舍レ筌。口耳不レ用。心與レ目謀。思レ之又思。神其通レ之。則詩書禮樂。中國之言。吾將二聽レ之以一レ目。則彼レ彼吾レ吾有レ有無レ無。直道以行レ之。可三以咸被二諸橫目之民一。則可三以通二天下之志一。何唯東方。則叚使仲尼乘レ桴。子路從レ之游。旦暮遇レ此。則迺謂三之東海出二聖人一也。良不レ誣已。是謂二之學則一。迺申レ之以レ戒曰。若能不レ爲二黃備氏一者。迺能爲二黃備氏一者。嘻。若何必黃備氏之爲。

右學則　一

宇猶レ宙也。宙猶レ宇也。故以二今言一眡二古言一。以二古言一眡二今言一。均之侏離鴃舌哉。科斗貝多何擇也。世載レ言以遷。言載レ道以遷。道之不レ明。職是之由。處二百世之下一。傳二百世之上一。猶三之越裳氏重二九譯一邪。重譯之差。不レ可二辨詰一。萬里雖レ夐乎。猶當二其世一。孰三若奘之身游二身毒一邪。故之又故。子孫雲仍。烏識二其祖一。千歲逝矣。俗移物亡。故之不レ可レ恃也。烏能置二身仲尼之時一。從二游夏一親受レ業邪。宇與レ宙果殊矣。雖レ然。不レ朽者文。其書具存。方三夫世之未二載レ言以遷一也。管晏老列亦類也。何惡二其道不一レ同也。不レ求二諸道一而求二諸辭一。不レ味者心邪。朱離鴃舌。何啻言與レ言殊。其

徂徠先生學則

門人　竹溪平義質子彬
南昌滕元啓維迪　同校

東海不ㇾ出二聖人一。西海不ㇾ出二聖人一。是唯詩書禮樂之爲ㇾ敎也。古之時楚雖二大邦一。其左史倚相所ㇾ爲ㇾ誦。三墳五典九丘八索之書。舍ㇾ是無ㇾ爲ㇾ學。而後豪傑自二陳良之徒一。蓋皆北學二於中國一云。則吾東方之民又奚適。亦唯言語異ㇾ宜。鐘呂之饗二爰居一。彼謂二之侏𠈝鴃舌一者。吾眎猶ㇾ彼。假使仲尼乘ㇾ桴。子路從ㇾ之游。亦未二如之何一已。有二黃備氏者出一。西學二於中國一。作二爲和訓一以敎二國人一。亦猶易ㇾ乳以ㇾ穀。虎廼於菟。顚二倒其讀一。錯而綜ㇾ之。以通二二邦之志一。於ㇾ是乎吾謂二之侏𠈝鴃舌一者。吾眎猶ㇾ吾。是則詩書禮樂之爲ㇾ敎也。庶足三以被二諸海表一邪。黃備氏之有三功二德東方一。民至ㇾ今賴ㇾ之。雖ㇾ然。易ㇾ乳以ㇾ穀。虎廼於菟。顚二倒其讀一。錯而綜ㇾ之。吾謂二之侏𠈝鴃舌一者。吾眎猶ㇾ吾。吾視猶ㇾ吾。而詩書禮樂不三復爲二中國之言一。則叚使仲尼乘ㇾ桴。子路從ㇾ之游。目ㇾ之則是　耳ㇾ之則非。彼廼猶三鐘呂之饗二爰居一也已。或曰。一匹錦覆以眎ㇾ之。背面而殊。均之是物庸何傷乎。則安知夫中國無ㇾ象。尙且象ㇾ之。江北無ㇾ橘。或者假ㇾ之以ㇾ枳乎。以ㇾ此而誦二夫楚人之頌一。能不ㇾ惑二其臭味一者幾希。夫中國之所ㇾ有。四海之所ㇾ無。亦猶ㇾ是邪。詩書禮樂。中國之言。而吾眎猶ㇾ吾。是其究必至下於巴二歛詩書一兜中昧其禮樂上也哉。副墨之子。洛誦之孫。執以廢二其祖一。不ㇾ知二其可一。而況之子之孫。非二冥

以レ刑。道レ之以レ德。齊レ之以レ禮。是文武桓文之辨也。然桓文時。先王之澤未レ斬。先王之禮尙存。其所レ用亦得レ人。故雖レ用二政刑一。亦非レ若二申韓商鞅之比一。祇其所下以與二先王一殊上者。乃在下急二功利一之意勝。而不上レ用二禮樂一也。孔子小二管仲之器一。亦是意已。後世儒者雖三口能言二以レ德化一レ之。然不レ知下所二以化一レ之之術上。是其過本在下以レ道爲二當然之理一。而不レ知三其爲二安民之術一焉。故又以レ德爲二仁義孝悌之類一。而不レ知下擧二用有德之人一以導上レ民也。故其務欲下以二己德一導上レ之。是其意既急迫。自用而無レ術。何以能使三民嚮二其風一乎。又誤以レ禮爲レ法。而以二上下尊卑等威明白不二少差忒一爲レ說。則不レ出二名家者流之意一。豈足下以爲中先王陶二鑄天下一之術上哉。夫桓文雖レ不レ及二先王一。猶有二其術一。豈若二後世儒者不學無術之倫一哉。吁。不レ知二古言一之失。一至レ于レ斯矣。悲夫。

辨名下 終

レ覇。其所二以異一者。時與レ位耳。當二春秋時一。豈有二所レ謂覇道一哉。使二孔子見レ用レ於レ時。亦必爲二管仲一也。管晏書今在焉。其間不レ無二後人附託者一。其文辭較然自殊。故擇二其眞者一讀レ之。則儒者何別也。是其時莫レ有二所レ謂覇者之道者一審矣。及レ於二戰國時一。孔子之徒。誦二說二帝三王之道一。時君厭二其迂遠濶レ於二事情一。則有下飾二管晏之說一進者上。是其人之道。而非二眞管晏之道一也。孟子之與二其人一爭。亦以下其人所二稱說一者上爲二覇道一耳。何則。孟子曰。以レ力假レ仁者覇。以レ德行レ仁者王。以レ力服レ人者。非二心服一也。力不レ贍也。以レ德服レ人者。中心悅而誠服也。是言下五覇德劣。故其道不上レ足二稱說一已。何則。以レ力言レ之。是言下其號二令諸侯一者上。而非レ言二治レ民者一也。所レ謂仁。亦言下其仁二鄰國一者上。而非レ言二仁レ民者一也。夫爲二方伯一者。欲下約二諸侯一共輔中王室上。德不レ足而假レ於レ力。亦不レ得レ已之事。豈可三以罪二其人一乎。且湯假二七十里一。文王假二百里一而興。孔子無二尺土之封一。則不レ能レ興矣。是雖レ有レ德。豈必不レ假レ力乎。故桓文之罪。不レ在二以レ力假レ仁。而在下尊二王室一爲レ名以濟中其私上。而孟子不レ言者。在二戰國時一無下尊二王室一之事上故也。故孟子之言。止言此以見三其道不下レ足二稱述一耳。亦爭二宗門一之言也。後世儒者不レ察二其文意所レ在。囂然以謂二王覇之辨。儒者第一義一。豈不レ謬哉。甚乃至乙與下任二法術一者上竝稱甲。亦不レ知レ倫之甚也。何則。任二法術一者。以レ治二其國一言レ之者也。以レ力假レ仁者。以三號二令諸侯一言レ之者也。所レ指各殊。豈可二比竝一乎。仁齋先生曰。王者以レ德爲レ本。而未二嘗無レ法。覇者假レ德以行レ之。而不レ能三眞有二其德一焉。及レ乎二其衰一。而專任二法術一。不二復知レ假レ德。於レ是有二刑名之學一焉。是皆不レ知二文義一之言也已。若論下治二其國一之道上。則孔子所レ謂道レ之以レ政。齊レ之

久。故又曰行有レ恒。其義一矣。

君子小人　二則

君子者。在レ上之稱也。子男子美稱。而尙レ之以レ君。君者治レ下者也。士大夫皆以レ治レ民爲レ職。故君尙レ之子以稱レ之。是以レ位言レ之者也。雖レ在二下位一。其德足レ爲二人上一。亦謂二之君子一。是以レ德言レ之者也。古之人。學而成レ德。則進二之士一。以至二大夫一。故曰君子者成德之稱。後世儒者。老莊內聖外王之說。淪二其骨髓一。遂忘三先王之道爲二安民之道一。故其所レ謂君子者。多外レ仁以言レ之。其失之遠甚焉。孔子曰。君子去レ仁。惡乎成レ名。豈不レ然乎。然其所レ謂仁。或以二慈愛一言レ之。或以二人欲淨盡天理流行一言レ之。則雖レ有二孔子之言一。無二能救一レ於二其謬一。豈不レ悲乎。學者以下論語諸書言二君子一言レ仁諸章上。求二諸古義一。庶或不レ失焉耳矣。大氐古之學。詩書禮樂。故君子修レ辭達レ政。禮樂以文レ之。是謂二之成德一。外レ乎レ此而語二成德一。以レ心以レ理。皆非下三代論二君子一之義上也。

小人。亦民之稱也。民之所レ務。在レ營レ生。故其所レ志在レ成二一己一。而無二安民之心一。是謂二之小人一。其所レ志小故也。雖レ在二上位一。其操レ心如レ此。亦謂二之小人一。經傳所レ言。或主レ位言レ之。或主レ德言レ之。所レ指不レ同。而其所三爲稱二小人一之意。皆不レ出レ此矣。後世諸老先生所レ爲レ道。皆淑レ身之說勝。而無二安民之心一。亦小人之歸哉。學者察レ諸。

王覇　一則

王覇之辨。古所レ無也。觀レ於下孔子稱三管仲如二其仁一。書載中秦誓上。則孔子未三嘗以レ覇爲二非焉。王與

謂レ不レ容レ力也。鄭玄解二大學一。訓レ格爲レ來。古訓尙存者爲レ爾。朱子解爲二究理一。究理聖人之事。豈可レ望二之學者一哉。且其解曰。究二至物理一。是格物加二究理一而後義始成焉。可レ謂二文外生一レ意。豈非レ妄乎。且古所レ謂知至者。謂下得二諸身一而後知始明上也。而朱子欲下究二在レ外者一而致中吾知上。可レ謂レ强已。且如三中庸曰二成レ己仁也。成レ物知也一。亦謂二學問之道一也。學而成二德於一レ己。以二其後來統會者一言レ之。故曰仁也。所レ受レ敎件有二成功一。是所レ謂物格也。物格而后知至。故曰知也。又孟子曰。萬物皆備レ於レ我矣。反レ身而誠。樂莫レ大レ焉。亦謂レ此也。敎之條件。其數甚多。故曰二萬物一。皆有レ於レ我之事也。故曰皆備レ於レ我。習之熟而後爲二我有一。爲二我有一則不レ思而得。不レ勉而中。是謂二反レ身而誠一。不レ爾。謂二天地間之萬物備一レ於レ我。則孟子時豈有二此荒唐之論一乎。是皆不レ知二古言一之失也。又如二其次致レ曲。亦謂下學二曲禮一而有中諸身上也。曲禮在レ彼。習之久而身有レ之。亦如二自レ彼來至一。故曰レ致。古學問之道。可二以見一已。又如下大象傳曰二言有レ物。而行有一レ恒。緇衣曰中言有レ物而行有上レ格也。蓋古之君子。非二先王法言一不二敢道一也。所レ言皆誦二古言一。如下左傳卿大夫之言。克レ己復レ禮。出レ門如レ見二大賓一之類上。皆孔子所二以爲一レ敎也。如丁陽貨曰丙日月逝矣。歲不二我與一。懷レ寶迷乙其邦甲。又如下宋玉曰中口多二微辭一。所レ學レ於レ師也上。可レ見古人學レ詩。其言爾雅如レ此。是皆所レ謂言有レ物也。言下其不二任レ臆肆一レ言。必誦二古言一。以見中其意上已。古言相傳。存レ於二宇宙間一。人記二憶古言一。而在二其胸中一。猶如レ有レ物然。故謂二之物一。若任レ臆肆レ言。則胸中莫レ有レ所二記憶一。莫レ有二一物一。是無レ物也。曰下行有二格者一。言不レ待レ格。徒記二憶古言一而言上之耳。至レ於レ行。則必求レ得二諸身一。故曰行有レ格。格則恒

殊故也。後世胡安國作二春秋傳一。程子作二易傳一。朱子作二詩傳一。蔡沈作二書傳一。皆取二諸其臆一。果何所レ傳。可レ謂レ妄已。

權。漢儒以レ經對言。程子非レ之。是矣。仁齋先生據二孟子一而謂レ當二以レ禮對一レ權。亦是矣。是漢儒解レ經爲レ常。故誤耳。經者國家立二制度大綱領一。夫經而可レ反。豈可三以爲二經乎。禮節目甚繁。故至二其末節一。則變而從レ宜已。仁齋先生乃曰。禮可二隨レ時損益一。殊不レ知孔子所レ謂損益者。聖人制レ禮時之事也。且所レ謂權。禮亦有レ之。喪服四制曰。喪有二四制一。變而從レ宜。取二之四時一也。有レ恩有レ理有レ節有レ權。取二之人情一也。後世儒者汨二沒四書一。故有二種種贅言一耳。先儒曰。如三湯武放伐。伊尹放二太甲一。是權。仁齋先生曰。若三伊尹之放二太甲一。固是權。如二湯武放伐一。可レ謂二之道一。不レ可レ謂二之權一。妄哉。所レ謂權者。如二舜不レ告而娶一是也。伊尹放二太甲一。大臣之道爲レ爾。豈得レ謂二之權一乎。湯武放伐。聖人之事也。聖人者道之所レ出。故古無下論二湯武一者上。後世儒者傲然自高。以二聖智一自處。妄意謂道先二天地一生。故有二是妄說一。豈不レ僭乎。

物　一則

物者。教之條件也。古之人學以求レ成二德於一レ己。故教レ人者教以二條件一。學者亦以二條件一守レ之。如二鄉三物。射五物一。是也。蓋六藝皆有レ之。成レ德之節度也。習二其事一久レ之。而所レ守者成。是謂二物格一。方二其始受一レ教。而物尙不レ有レ於レ我。辟二諸在レ彼而不一レ來焉。及レ於二其成一。而物爲二我有一。辟二諸自レ彼來至一焉。謂二其不一レ容レ力也。故曰二物格一。格者來也。教之條件得レ於レ我。則知自然明。是謂二知至一。亦

皆謂三體レ順與二用レ禮已。

經權　四則

經者大綱領也。以三夾二持衆緯一言レ之。如二經禮三百。威儀三千一。經禮者禮之綱。其中兼二有許多節文威儀一。如二經持レ緯然。故謂二之經禮一。如下爲二天下國家一有中九經上。此九者爲下治二天下國家一之大綱領上。其中亦各有二許多方法一。故謂二之九經一。或解爲下亘二萬世一不レ可レ易者上。殊爲レ不レ通。

經國。經界。皆以二法制一言レ之。經國者開國之君所レ立。大法制。大矩矱。凡百禮儀制度。皆藉レ是以立。亦如二經持レ緯然。故謂二之經一。經界亦井田之大界分。故謂二之經一耳。

經傳。後世有二聖經賢傳之說一。以二聖人所レ作爲レ經。賢人所レ作爲レ傳者。非矣。詩書禮樂。謂二之四敎一。謂二之四術一。是誠聖人所レ立。然書紀二于史官一。詩或出二田畯紅女一。禮樂固聖人作レ之。而其筆二諸書一。昉レ於二孔門一。豈得レ謂二之聖人所一レ作哉。漢諸儒皆各作レ傳。豈自以爲レ賢乎。且經之名。古未レ聞也。觀レ於二莊子十二經墨經之言一。則昉レ於二七十子之後一邪。蓋古稱二本業一爲レ經。亦持二衆緯一之謂也。經之文至簡。含二蓄衆義一。故以爲レ名。漢儒解爲レ常。謂二聖人之經。萬古不一レ易。非矣。學記曰。一年視レ離レ經。說者謂三離二析章句一。非矣。方二其始受レ業時一。章句既析。豈俟二一年之久一。俾二其自析一哉。離麗同。如二麗レ於レ刑之麗一。法律家以二罪名一與レ律相比附。學者亦然。義各隨二其所一レ取。與經相比附。是謂二之離經一。視三其善用二古法言一也。觀レ於二此文一。則似二亦自レ古有一レ之耳。至レ於レ傳。乃弟子記二其師所一レ傳。故謂二之傳一。如下春秋有二左氏一。有二公羊一。有二穀梁一。詩有レ齊。有レ魯。有レ韓。有上レ毛。皆所レ傳

所レ引就レ禮而言二文質一者上殊也。又如レ曰下禮與二其奢一也寧儉上。以二人行一レ禮言レ之。奢者務二備レ物而侈一レ用也。儉者務レ節レ用也。是非三其所レ行之禮有二質文之殊一矣。均行二此禮一。而務レ備レ物者爲レ奢。務レ節レ用者爲レ儉。觀レ曰二今也純儉一。則其義自明焉。後世儒者不レ察二其辭義所一レ在。以二文質一爲レ解。所二以失一也。大氐君子所三以爲二君子一。乃以レ文。文即中也。非レ取二文質之中一也。是聖人立レ敎本意爲レ爾。學者察レ諸。

有二對レ禮言者一。如レ曰二博學レ於レ文。約レ之以一レ禮。是也。是文指二詩書禮樂一言レ之。然詩書禮樂在レ外。苟欲レ成二德於一レ己。則在二以レ禮守一レ之。是禮乃文中一物。其言若レ不レ倫然。古言爲レ爾。如下禮與二其奢一也寧儉。喪與二其易一也寧戚上。亦喪是喪禮。亦吉凶軍賓嘉之一。而禮與レ喪對說。可二以見一已。

有二對レ武言者一。武謂レ戡レ亂。而禮樂之治在二平日一。故對言レ之。非レ若下後世岐二文武二一レ之者比上。

如三論語。夫子之文章。及堯煥乎其有二文章一。皆指二禮樂一言レ之。是聖人之功業也。

質有二不レ對レ文言レ之者一。如レ曰二質直好一レ義。亦謂二其爲レ人愨一已。

本末。猶二源流一也。凡所レ謂本者。皆謂二其施レ功所一レ始也。如二天下之本在レ國國之本在一レ家。皆是也。後世有二本體本心之說一。古書所レ無。如二孝弟也者其爲レ仁之本與一。亦言下行二仁政一必自二孝弟一始上也。如下喜怒之未發。謂二之中一。中也者天下之大本也上。乃言下聖人之立レ道。率二人性一以立上レ之。亦語三道所二由始一已。

體用之說。古所レ無也。仁齋先生辨レ之。爲レ是。如下禮運曰二仁者順之體也一。燕義曰中和寧禮之用也上。

レ文。自二後人一比二竝三代之禮一觀レ之。乃有二是言一也。豈容下據二是言一而謂中夏殷無上レ文哉。先儒又據二是言一以爲下文質如二循環一。夏殷損二唐虞之文一爲上レ質者。皆益非矣。表記曰。虞夏之質。殷周之文。至矣。可レ見三忠質文本非二一定之論一已。又如丁禮器曰丙。有二以レ文爲レ貴者一。有乙以レ素爲レ貴者甲。是論下說周公所二以制一レ禮之意上。而言下周禮有二此數者一不上レ同也。又如レ曰二禮有レ本有一レ文。是亦論下說所二以制一レ禮之意上。而就二一禮一言レ之。本者禮所二由起一也。文者脩二飾之一以成レ禮者也。假如レ射。其所二由起一。在三弧矢之利以威二天下一。是本也。後來聖人以二禮樂一文レ之。是文也。射不レ主レ皮。則聖人之意。專在下習二禮樂一以成上レ德。而其失二本意一與レ否。則有二不レ暇レ問者一焉。如二燕饗之禮一。其始亦唯在三飮二食之一耳。後來聖人以二禮樂一文レ之。則酒淸人渴而不二敢飮一也。肉乾人饑而不二敢食一也。其意非三專爲二飮食一也。是所レ謂文也。是聖人之意。全在レ文而不レ在レ本焉。後世儒者狃二老莊之說一。貴レ精賤レ粗之見一。乃以レ本爲レ體。以レ文爲レ用。又不レ知二古言一。直以レ本爲レ質。可レ謂レ謬矣。

有二對レ質言者一。如レ曰二質勝レ文則野。文勝レ質則史。文質彬彬。然後君子一。又曰。文猶レ質也。質猶レ文也。皆以レ人言。質者質行也。謂二孝弟忠信類一。文者謂下學二詩書禮樂一。其言辭威儀煥然上也。唯質而無レ文。鄕人而已。學而成レ德。然後爲二君子一。但其有二質行一而文不レ足者。未レ免二鄙野之誚一。文而無二質行一者。其所レ學不レ能レ成レ德。唯記憶耳。故以爲レ史也。如下曰乙行有二餘力一則以學甲レ文。曰中十室之邑。必有二忠信如レ丘者一。焉不レ如二丘之好一レ學也上。皆言下雖レ有二質行一。不レ學未上レ免レ爲二鄕人一焉。如丁曰二禮後乎一。曰丙忠信所乙以進甲レ德。皆言下苟無二質行一。雖レ學レ文不上レ能レ成レ德焉。此皆非二論說之言一。與下前

序一。春誦夏弦。大師詔二之瞽宗一。秋學レ禮。執レ禮者詔レ之。冬讀レ書。典レ書者詔レ之。禮在二瞽宗一。書在二上庠一。内則曰。有虞氏養三國老於二上庠一。養三庶老於二下庠一。夏后氏養三國老於二東序一。養三庶老於二西序一。殷人養三國老於二右學一。養三庶老於二左學一。周人養三國老於二東膠一。養三庶老於二虞庠一。虞庠在二國之西郊一。是庠。序。學校。瞽宗。皆所レ習之禮不レ同。故其宮室之制亦異。是其所三以殊二名也。大學具二庠序瞽宗之制一。亦可レ見已。朱子一槩岐爲二大小學一者。豈非レ謬乎。王制曰。凡入レ學以レ齒。將レ出レ學。小胥大胥小樂正簡二不レ帥レ敎者一。以告レ于二大樂正一。大樂正以告レ于レ王。王命二三公九卿大夫元士一皆入レ學。不レ變。王親視レ學。不レ變。王三日不レ擧。屛二之遠方一。是古所レ謂入レ學。謂レ適レ學也。非下若三後世養二生徒於一レ學者上也。朱子昧レ乎二古禮一。皆謬矣。

文質體用本末　八則

文者。所三以狀レ道而命二之也。蓋在レ天曰レ文。在レ地曰レ理。道之大原出レ於レ天。古先聖王法レ天以立レ道。故其爲レ狀也。禮樂粲然。是之謂レ文。論語曰。文王既沒。文不レ在レ茲乎。是直指レ道爲レ文也。中庸曰。文王之所三以爲二文也。是形二容聖人之德一。而言二其能法一レ天也。堯典曰。欽明文思。是道雖二自レ古有一レ之。禮樂未レ立。堯之思深遠。乃始作二禮樂一。故曰二文思一也。是堯舜以後所レ謂道。皆文也。如二夏尙レ忠。殷尙レ質。周尙一レ文。世儒見以爲三至レ周始文二矣。殊不レ知是論說之言。就レ禮而論三三代所二以殊一已。夏殷皆因二堯舜之道一。制二作禮樂一。故三代之道。均之文矣。而其所三以爲二文者。乃有二三者之異一。是其時風俗所レ尙自不レ同。然當二其時一。夏以二夏禮一爲レ文。殷以二殷禮一爲レ文。周以二周禮一爲

若二迂遠不レ近二人情一者上存焉。乃後儒好自用二其智一。而信二聖人一之不レ深。故其意謂上古之法不レ合二今世之宜一。遂別立二居敬究理主靜致良知種種之目一焉。是皆其私智淺見所レ爲耳。殊不レ知道無二古今一一也。設使四聖人之教不三レ合二今世之宜一。則亦非二聖人一焉。故學者苟能一意遵二聖人之教一。習レ之久。與レ之化。而後能見下聖人之教亘二萬世一。有中不レ可二得而易一者上也。

讀レ書之道。以下識二古文辭一識中古言上爲レ先。如二宋諸老先生一。其稟質聰敏。操レ志高邁。豈漢唐諸儒所二能及一哉。然自二韓柳出一而後文辭大變。而言古今殊矣。諸先生生二於其後一。以二今文一視二古文一。以二今言一視二古言一。故其用レ心雖レ勤。卒未レ得二古之道一者。職此之由。及レ於二明滄溟先生一。始倡二古文辭一。而士頗能讀二古書一如レ讀二後世之書一者亦有レ之。祇其所レ志。僅在二丘明子長之間一。而不レ及二六經一。豈不レ惜乎。然苟能遵二其教一。而知三古今文辭之所二以殊一。則古言可レ識。古義可レ明。而古聖人之道可二得而言一焉。學者其留二意諸一。

大學。小學。學校之名也。朱子以爲三學問有二大小之分一者。非也。賈誼所レ言。唯以二大事小事大節小節一言レ之。內則所レ載。十歲至二二十歲一。其所レ學次第可二以見一已。六藝亦終身之業。而朱子以屬二小學之事一。而別以二格物致知誠意正心脩身一爲二大學所一レ教。豈然乎。大學所レ言。工夫唯在二格物一。而致知以下。皆其效驗已。大學在レ郊。小學在二公宮南之左一。而鄉曰レ庠。術曰レ序。家曰レ塾。是小學與二庠序校一殊焉。庠序校塾爲二鄉術州里人所一レ游。而小學乃世子所レ習レ禮處。賈誼所レ言。亦世子之禮。則朱子之說。豈非レ謬乎。文王世子曰。凡學。世子及學士必時。春夏學二干戈一。秋冬學二羽籥一。皆於二東

死一爲レ學。而生死不レ可二出離一。故有二大悟之說一。今推以合二諸聖人之道一。豈有レ之乎。果其說之是乎。非二行之艱一。知之艱也。其於二經文一。豈不二相反一乎。致知誠意正心脩身。皆格物之功效。可レ見四其不三必分二先後一已。陽明先生知行合一之說。可レ謂二聽敏之至一矣。然亦不レ知レ遵二先王之敎一。豈不レ惜乎。

朱子居敬究理之說。其過在レ不レ遵二先王之敎一。求二理於レ心。而心昏則理不レ可二得而見一レ之。故又有二居敬之說一。以持二其心一。心豈可レ持乎哉。皆臆度以言レ之。而未三嘗親爲二其事一者也。故其說如レ可レ聽。爲二俗人所一レ悅。皆出レ於二私意妄作一。非二古之道一也。

孔子好レ學。論語屢以自道。宋儒不レ知二其義一。以爲二謙辭一。仁齋先生以爲二稽レ古補一レ偏。皆非也。夫道者。先王所レ立。非二天地自然有一レ之焉。生民以來數千載。更二數十聖人之心力知巧一所レ成。而非三一聖人終身之力所二能爲一。故雖二聖人一。不レ學不レ能レ知レ道。是孔子所二以學一也。後儒狃二聞老氏之說一。以爲道者天地自然有レ之。苟有二聖德一。則道擧而措レ之。故其說皆窒碍不レ通矣。

仁齋先生曰。學問以二道德一爲レ本。見聞爲レ用。非レ若乙今人專以下讀二書册一講中義理上爲二學問一者比甲焉。殊不レ知學者學二先王之道一以求レ成二德於一レ已耳。故道德之外。豈有レ它哉。何本末之有也。且子路曰。何必讀レ書。然後爲レ學。則孔子惡二夫佞者一。今以レ讀二書册一爲レ非。世所レ謂道學先生。自有二此俗態一。豈不レ醜哉。且所レ謂見聞爲レ用者。引二子張干一レ祿。是自干レ祿之道。豈學問之法哉。舍二六經一而求二諸見聞一。其不二肆然自恣一者幾希。

學問之道。以レ信二聖人一爲レ先。蓋聖人知大仁至。而其思深遠也。其所レ立敎レ人之法。治レ國之術。皆有下

至二孔子一。始斬新開闢。猶三日月之麗レ于レ天。而萬古不レ墜。故三代以前之書。當下以二三代以前之說一求上レ之。孔孟之書。當下以二孔孟之旨一解上之。果其說之是乎。孔子所二苦心訪求一者。乃爲二無用之長物一。而門人孟子之功。反大レ於二孔子一。豈不二妄說之甚一夫。故不レ本二諸先王敎法一。而別立二學問之方一者。皆非二孔子之旨一。學者其思レ諸。

朱子知行之說。本レ於二博文約禮一。然古所レ謂知行。與二博文約禮一。所レ指不レ同也。博學レ於レ文。文謂二詩書禮樂一。故其所二學而知一者。在レ知レ言。在レ知レ禮。在レ言則謂レ知二其文義一已。在レ禮則謂レ知二其節文度數一已。不五必求四深知三天地萬物之理一。性命道德之奧。與二禮樂之原一也。約レ之以レ禮。謂レ踐レ禮已。其所二學而知一者。在レ外而不レ在レ已。至レ於二踐禮以行一レ之。而後其散而在レ外者。收斂以歸二諸身一。故曰レ約レ之。亦不三必求二諸心一也。是博文約禮先後之序爲レ爾。至レ於二知行一則不レ然。知者謂二眞知レ之也。行者謂二力行レ之也。力行之久。習熟之至。而後眞知レ之。故知不二必先一。行不二必後一。如レ曰下非二知之艱一。行之惟艱上。行必力レ之。故曰レ艱。知不レ容レ力。貴二默而識一レ之。故曰レ非レ艱。古之道爲レ爾。朱子又據二大學格物致知誠意正心脩身一。以立二知先行後之說一。殊不レ知大學所レ謂格物者。亦謂下習二其事一而熟上レ之。自然有レ所レ得而後知生上已。如二孟子德慧術知一亦然。唯德生レ慧。唯術生レ知。亦古言也。朱子以二究理一解二格物一。殊不レ知究理者贊二聖人作一レ易之言也。豈學者之所レ能哉。天下之理。不レ可二窮盡一。故立二一旦豁然之說一以濟レ之。夫小道小藝。亦皆有レ悟。然一事有二一事之悟一。一節有二一節之悟一。嚮者所レ不レ知。今者忽然知レ之。謂二之悟一。然豈有二所レ謂大悟者一哉。浮屠以三出二離生

其說具レ於二論語中庸一。學者所レ當レ竭レ力也。是孔門之敎。非四故求三勝於二先王之敎一。蓋世衰賢者不レ用。退而獨善二其身一者。不レ爲レ鮮矣。則或忘三斯道爲二先王安民之道一者。勢之所レ至也。故孔門之敎。以レ依レ於レ仁爲二成レ德之要一焉。世衰民不レ興レ行。中庸之德乃鮮矣。基之不レ立。何以能學。故孔門之敎。又以二孝悌忠信一爲二進レ德之本一焉。是以離二千萬世之後一。學二聖人之道一者。必以二詩書禮樂一爲二本業一。以三依レ仁與二中庸一求レ成二其德一。則亦爲レ不レ畔レ於二先王孔子之敎一已。

朱子論語集註曰。學之爲レ言效也。後覺者必效二先覺之所一レ爲。仁齋先生曰。學者效也覺也。有レ所二效法而覺悟一也。學字之訓。兼二此二義一。而後其義得レ盡矣。所レ謂效者。猶丁學レ書者。初只得丙臨二摹法帖一。效乙其筆意點畫甲也。而所レ謂覺者。猶四學レ書既久。而後自覺三悟於二古人用筆之妙一也。是二先生。皆不レ務レ學二聖人之道一。而務レ學二聖人一者耳。故欲下效二法聖賢所レ言所レ行以悟中聖賢之心上。辟丁諸大匠授二人規矩一。而其人不下遵二其規矩一以學上レ之。乃欲丙效二法大匠之所一レ爲。以悟乙其用斤之妙甲。則其不二傷レ手創一レ鼻者幾希矣。豈不レ謬乎。且學之爲レ言効。本言三効之音轉爲二學之音一已。然効學一分。豈可二即以レ學爲一レ効乎。徒以二字義一爲レ解。苟使レ無二先王敎法一猶之可也。今舍二先王敎法一。而欲レ從二其所一レ好。乃旁二援字義一爲二之解一。適足三以見二其不學之過一已。且孔子之所レ傳。非二六經一乎。當二其時一。亦安知レ有二所レ謂論語孟子者一哉。蓋宋儒以二論語孟子一合二諸大學中庸一。命曰二四書一。加以二小學近思錄之類一。以立二一家之學一。其意既已弁二髦六經一。尙且有レ所二忌憚一。而未三敢明二言之一。今觀下世之傳二其學一者上。可二以見一已。至レ於二仁齋先生一。乃公然抗言而曰。三代之時。敎法未レ立。學問未レ闢。直

道生二天地一。得レ言二一生一レ二。天地生レ人。豈得レ言二二生一レ三乎。亦不レ知而妄說已。漢儒以二兩儀一爲二天地一。亦其意。而傅會以二乾元坤元一。故曰太極者元氣也。夫乾元坤元。傳既分而言レ之。豈有二一元氣一乎。且一元氣渾渾爾。何以得レ謂二之極一哉。凡古所レ謂極者。皆所二以示一レ民也。必不レ然矣。宋儒貴レ精賤レ粗。故立二理氣之說一。而以レ理爲二太極一。然大傳三極之文。其謂二之何一。其妄可レ知已。大氐極皆以二易レ見者一言レ之。使二人不一レ惑。而諸老先生乃以二其高妙難レ見者一言レ之。使二人惑一。亦不レ知二古言一故也。

學　九則

學者。謂レ學二先王之道一也。先王之道。在二詩書禮樂一。故學之方。亦學二詩書禮樂一而已矣。是謂二之四敎一。又謂二之四術一。詩書者義之府也。禮樂者德之則也。德者所二以立一レ己也。義者所二以從一レ政也。故詩書禮樂。足二以造一レ士。然其敎之法。詩曰レ誦。書曰レ讀。禮樂曰レ習。春秋敎以二禮樂一。冬夏敎以二詩書一。假以二歲月一。隨二陰陽之宜一以長二養之一。使五學者優三柔厭四飫于二其中一。藏焉脩焉息焉游焉。自然德立而知明焉。要在二習而熟一レ之。久與レ之化一也。是古之敎法爲レ爾。論語所レ謂博文約禮者是也。雖レ然。先王之道所二以安一レ民也。故學二先王之道一。而不レ知三其所二以然一。則學不レ可二得而成一矣。故孔門之敎。必依レ於レ仁。苟其心常依二先王安民之德一。造次於レ是。顚沛於レ是。終食之間。不二敢與一レ之離一。則德之成也速。而可三以達二先王之心一也。雖レ然。先王安民之德大矣。故孔門之敎。又必依二中庸一。所レ謂孝弟忠信是也。辟如二登レ高必自一レ卑。行レ遠必自一レ邇。由レ此以進。庶乎足三以馴二致高明廣大之域一。

極者。謂先王立是。以爲民之所準據者也。詩曰。思文后稷。克配彼天。立我烝民。莫匪爾極。又曰。商邑翼翼。四方之極。大學曰。是故君子無所不用其極。周禮曰。以爲民極。洪範曰。皇建其有極。祭義曰。因物之精。制爲之極。皆是也。漢儒訓極爲中。蓋先王建之。以使賢者俯就。而不肖者企而及之。故極有中之義。非直訓中也。朱子以爲至極之義。是其意謂人君躬行人倫之極。以爲萬民標準也。先王之道。立人所皆能者爲敎。豈至極之義哉。祇人所皆能者莫至焉。則亦在所見如何耳。然極字之義。以準據爲主意。它皆傍意。如北極。亦人所以爲準據也。

易有太極。漢儒以爲元氣。宋儒以爲理之尊稱。皆非也。易謂六十四卦。三百八十四爻也。太極者謂聖人所立以爲準據者也。易六十四卦。三百八十四爻。皆莫非示民所準據者。是則又其統會者。故曰太極。卽說卦傳所謂立天之道。曰陰與陽。立地之道。曰柔與剛。立人之道。曰仁與義。是也。故大傳又曰。六爻之動。三極之道也。豈不然乎。蓋伏羲仰觀而俯察。以見夫無適非陰陽剛柔者。河圖之數。五十有五。見夫無適非奇偶者。六十四卦。三百八十四爻。豈它哉。以見夫陰陽剛柔之中。又有剛柔陰陽。無有窮盡。故畫之耳。故唯陰陽剛柔。易所由出。讀易者。亦必以此爲準據。可以得其義也。由是而畫一畫者二。是兩儀也。又畫二畫者四。是四象也。又畫三畫者八。是八卦也。老子亦學易者。故多說謙損卑退之道。其所謂一生二二生三者。亦是義。解其書者乃曰。道生天地。是一生二。天地生人而三才立。是二生三。夫

徵。以類相感。醫書五運六氣及聲色臭味。以察人臟腑。皆似實有其理者焉。意者殷人貴鬼。巫咸巫賢世爲大臣。洪範蓋巫者所傳。其所以藉是箴人君。必別有其術。而今失傳也。如醫書五運六氣。借支干以明天地之氣感人生疾耳。聲色臭味。亦借五行以爲藏府之紀耳。故醫之拘五行者。不能療病。而諸史五行志。祇使人不信天道。豈非泥五行之故乎。又如易本以二四八立數。而不與五行相干焉。其所謂天數五。地數五。亦未嘗言五行。而漢儒乃以五行傳會。謬之甚者也。後世弗之察。陰陽五行。遂爲儒者常言。其說牽强、殆乎不可通焉。

五常　一則

五常始見泰誓。未審何謂也。仁義禮智竝言者。始見孟子及喪服四制。然未以爲五常。然荀子譏子思孟子造五行。則豈昉孟子邪。至於漢儒。始以仁義禮智信爲五常。以配諸元亨利貞。木火土金水。而宋儒因之。然史記樂書。以仁義禮智聖配宮商角徵羽而無信孟子亦曰。仁之於父子也。義之於君臣也。禮之於賓主也。知之於賢者也。聖人之於天道也。則與之合焉。王弼以貞配信爲水。則與諸家殊焉。孔安國註孝經。以父慈子孝兄友弟弟婦順爲五常。則大殊焉。可見皆出於一時論說之言而古所不傳已。至於宋儒。則元亨利貞。仁義禮智信。四德五常。爲儒者第一義。而未有敢議之者。皆不知古之失也。

極　二則

故四象八卦六十四卦三百八十四爻。不レ出二奇偶一。則亦不レ出二陰陽一。判以爲レ二故也。聖人之道主レ行レ之。行レ之者貴レ一。是其所下以不中與二它經一同上也。學者察レ諸。

五行始見二虞書一。水火金木土穀。謂二之六府一。是言二地上之六物一也。利レ用厚レ生之道。所レ用之材。不レ出二是六者一。然五行之名。則至二洪範一始有レ之。曰一五行。一曰水。二曰火。三曰木。四曰金。五曰土。水曰潤下。火曰炎上。木曰曲直。金曰從革。土爰稼穡。潤下作レ鹹。炎上作レ苦。曲直作レ酸。從革作レ辛。稼穡作レ甘。二五事。一曰貌。二曰言。三曰視。四曰聽。五曰思。貌曰恭。言曰從。視曰明。聽曰聰。思曰睿。恭作レ肅。從作レ乂。明作レ哲。聰作レ謀。睿作レ聖。曰休徵。曰肅時雨若。曰乂時暘若。曰哲時燠若。曰謀時寒若。曰聖時風若。曰咎徵。曰狂恒雨若。曰僭恒暘若。曰豫恒燠若。曰急恒寒若。曰蒙恒風若。傳二其學一者。遂以二五行合二諸五事庶徵一。以爲二人君之德感レ天之事一也。其以二五行一配二諸五味一。則傳記所レ謂五聲五臭五色之類。洪範時既有レ之。而所レ謂雨暘燠寒風。亦似下始以二天之五氣一言上レ之。蓋天地之間。物無レ算。而不レ出二水火木金土五者一。動物無レ算而亦不レ出二羽毛贏鱗介五者一。聲色臭味亦無レ算。而不レ可二得而端倪一也。聖人各以レ五紀二其類一以象レ之。而後人始得二以別一焉。日月亦無レ算也。以二干支一紀二其名一。而後人始得二以命一焉。物之數不レ可二得而窮極一也。聖人立二一二三四五六七八九十之名一。而後人始得二以算一焉。以レ此觀レ之。五行者聖人所三立以爲二萬物之紀一者也。辟下諸富商以二記號一別中其貨上。豈必有二其理一哉。亦御レ繁之術已。然聖人之道。奉二天命一以行レ之。故其立レ數紀レ物。亦有レ所下法二象天地一。以神中明其德上。是五行之說所二以興一也。祇洪範五事庶

天理者。指下人之所二以殊一レ於二禽獸一者上而言。卽所レ謂天之性也。亦非下若二宋儒所一レ言者上矣。人生而靜者。謂下其嬰孩之初。好惡未三若レ是其甚一之時上也。是非レ貴二嬰孩之時一矣。其所レ謂靜者。亦非レ若二宋儒所レ謂寂然不動一矣。亦指二其好惡未レ甚之狀一。以形二夫後來好惡之躁動一也。唯樂道二性情一。故以二好惡動靜一言レ之。如二下文所レ謂樂由レ中出。故靜。禮自レ外作。故文一。可二以見一已。是皆論下說先王制二作禮樂一之意上也。豈以二天理人欲一爲二工夫之條目一哉。以二天理人欲一爲二工夫之條目一者。自二程子一始。

按程子與二邵子一善。而服二其聰敏一。蓋見二邵子之數加一倍法一。陰師二其術一。以御二聖人之道一耳。邵子之學。數也。本レ於レ易。易以稽レ疑決レ幾。故萬物觸レ目析爲二兩片一。固其所也。程子之學。貴レ知。主レ見レ之。而苦二夫聖人之道渾渾爾一。故借二邵子加一倍法一。析以二レ之。取二諸樂記之文一。以飾二其言一。自レ是之後。遂爲二後世儒者之常言一也。然其所三指以爲二天理人欲一者。既非二樂記之意一。而其以爲二工夫之條目一者。亦大戾レ於二先王孔子之敎一焉。蓋先王孔子之敎。養以成二其德一。則惡皆化爲レ善矣。豈有二二者之目一哉。宋儒之學。貴レ知。主レ見レ之。專以二是非之心一見レ之。故必欲三析爲二兩片一者。亦勢之所二必至一也。故欲レ闢二佛氏一。反陷レ於二彼眞如無明菩提煩惱之說一。豈不レ哀哉。

陰陽五行　二則

陰陽者。聖人作レ易。所三立以爲二天之道一者也。所レ謂極也。學者以二陰陽一爲レ準。以レ此而觀レ乎二天道之流行。萬物之自然一。則庶或足二以窺一レ之也。然至二人事一則不レ然。何則。聖人不三立レ此以爲二人之道一。故也。後世說二陰陽一者。其言曼衍。遂至レ被二之人之道一。謬矣。且易主二占筮一。以稽二其疑一。以決二其幾一。

成二其材德一。及レ治レ邦安レ民。設中其方畧上。亦皆器之喩也。然苟非三先明二變通之爲一レ道。則不レ能レ爲レ之。是形而上下之義也。本非下語二造化一者上焉。夫學レ易固當三廣推二一切一。然其文各有レ所レ指。豈容レ淆乎。故易道與二天道先王之道一。所レ指自別。後世不レ知二古言一。主レ理不レ主レ辭。所二以失一也。

浩然之氣。始見二孟子一。其所レ謂氣者。非二天地之氣一矣。又非レ若二宋儒所レ謂理氣之氣一矣。乃勇氣之氣也。如二史傳所レ謂使レ氣恃レ氣負レ氣云者一也。本主レ說二大人一言レ之。家語載二曾子之行一曰。見二大人浩浩一。是其所二祖述一已。古之君子禮樂以成二其德一。自然不四隕三穫於二貧賤一。不レ充三詘於二富貴一。故不レ待レ養二浩然之氣一焉。觀二孟子集義所一レ生。則其時禮樂既壞。故有下養二浩然之氣一之說上也。孟子方二戰國之世一。後車數十乘。從者數百人。傳三食於二諸侯一。攘レ臂張レ膽。以與二百家一爭衡。故浩然之氣亦言下其所二自得一者上。乃所三以爲二孟子一也。學者察レ諸。

天理人欲。出二樂記一。其言曰。是故先王之制二禮樂一也。非三以極二口腹耳目之欲一也。將丁以敎丙民平二好惡一而反乙人道之正甲也。人生而靜。天之性也。感レ於レ物而動。性之欲也。物至知知。然後好惡形焉。好惡無レ節レ於レ內。知誘レ於レ外。不レ能レ反レ躬。天理滅矣。夫物之感レ人無レ窮。而人之好惡無レ節。則是物至而人化レ物也。人化レ物也者。滅二天理一而窮二人欲一者也。於レ是有二悖逆詐僞之心一。有二淫泆作レ亂之事一。是故强者脅レ弱。衆者暴レ寡。知者詐レ愚。勇者苦レ怯。疾病不レ養。老幼孤獨。不レ得二其所一。此大亂之道也。是論下先王制二禮樂一以治レ民之意上。乃論說之言也。所レ謂人欲者。卽性之欲也。卽好惡之心也。味二其文意一。唯言下禮樂以節二耳目口腹之欲一而平中其好惡上而已。初非レ求二人欲淨盡一也。所レ謂

積氣也。日月土石人物草木皆氣也。則其所謂氣者。亦非古言矣。如仁齋先生所謂天地之間一元氣而已。要之皆非聖人敬天之意。則君子所不取也。

大傳曰。形而上者謂之道。形而下者謂之器。宋儒理氣之說。又據此文。以道爲理。以器爲氣。可謂大謬已。凡大傳所謂器者。皆器用也。如曰乘也者君子之器也。曰以制器者尙其象。曰備物致用立成器以爲天下利。莫大乎聖人。曰隼者禽也。弓矢者器也。射之者人也。君子藏器於身。待時而動。又曰象事知器。是豈氣之謂哉。如包犧氏爲網罟。蓋取諸離。神農氏爲耒耜。蓋取諸益。易本有取象作器之義。故云爾。形而上者。謂器未成形以前。唯有易道耳。至於其成形之後。始有其器也。皆主制器言之。下文遂曰。化而裁之。謂之變。推而行之。謂之通。擧而措之天下之民。謂之事業。是皆賛易之言。道器變通事業。皆以易言之耳。如上章曰。闔戸謂之坤。闢戸謂之乾。一闔一闢謂之變。往來不窮謂之通。見乃謂之象。形乃謂之器。制而用之謂之法。利用出入民咸用之謂之神。是又不以道器對言。其義可以見已。豈非大謬乎。如仁齋先生以生風是扇之道。喬骨之類是器。亦昧乎形而上下之文。皆不知求諸辭之失也。學易之道。固當廣推一切。而後易始成用。然苟不先明其辭義。而欲廣推一切。謬之所以生也。人見道字。動輒曰。是聖人之道也。曰是天道也。如曰一陰一陽之謂道是也。殊不知下文所謂一闔一闢謂之變。往來不窮謂之通。豈非所謂一陰一陽者乎。合二者觀之。所謂道者變通之謂也。非易道而何。其所謂器者。凡如先王制作禮樂。君子學以

知不レ至焉者。則孔子曰。民可レ使レ由レ之。不レ可レ使レ知レ之。是雖二聖人一亦不レ能レ使二皆知一也。今必欲レ使下學者先知二其理一而後行上レ之。則亦欲レ使三學者人各操二聖人之權一也。是安用二夫聖人一哉。故究理之失。必至レ於レ廢二聖人一也。仁齋先生曰。道以レ所レ行言。活字也。理以レ所レ存言。死字也。聖人見レ道也實。故其說レ理也活。老氏見レ道也虛。故其說レ理也死。又曰。道本活字。所三以形二容其生生化化之妙一也。若二理字一本死字。從レ玉從レ里。謂二玉石之文理一。可三以形二容事物之條理一。而不レ足三以形二容天地生生化化之妙一也。此等議論。皆如二痴人說一レ夢。夫道者聖人所レ立。豈容二以レ見レ道言一乎。又豈容下與二老氏一對言上乎。夫道者所二以安一レ民也。又豈容下以二生生化化一言上乎。理從レ玉從レ里。亦倉頡制字時。且以レ此便二記憶一耳。豈容レ泥乎。且道亦本二諸道路一。豈有二死活一乎。祇道主レ行レ之。理主レ見レ之。老莊及宋儒皆主二其所一レ見。故喜レ言レ理耳。若以二死活一爲レ說。則老莊亦言二道德一。其謂二之何一。要レ之理豈容レ廢乎。苟遵二聖人之敎一。以二禮義一爲二之極一。則理豈足二以爲一レ病乎。仁齋先生可レ謂二懲レ羹吹一レ虀已。學者思レ諸。

氣古不レ言レ之。然論說之言則或言レ之。如二易傳曰。陽氣潛藏。禮記曰。天地之盛德氣也。尊嚴氣也一。是也。理氣對言者。乃昉レ自二宋儒一矣。其意謂二陰陽之化。往者過。來者續一。是氣也。往者過。來者續。而有二萬古不レ易者一存焉。是理也。是以二生滅者一爲レ氣。以下不二生滅一者上爲レ理。乃老氏二二精粗一之見。亦佛氏色空之說也。其所レ謂萬古不レ易者。亦唯四德之貞耳。更有二元亨利一。則是豈足三以盡二天道之全一哉。故能默而識レ之者。精粗本末一以貫レ之。何必以二理氣一爲レ說乎。且其說必至レ謂二天地

而不レ言レ理。是豈廢レ理哉。苟能執二先王之義一以推二其理一。則所レ見有二定準一而理得故也。理者人所二皆見一。故不レ待レ言レ之也。老莊之徒盛言レ理者。廢二先王之道一故也。貴二自然一故也。孟子亦好レ辯。而欲下言二先王孔子之所レ不レ言者一以喩上レ人。故曰。理義之悅二我心一。猶三芻豢之悅二我口一。但其以レ義連言者。孔子之澤未レ斬耳。及レ至二宋諸老先生一。生二於千載之後一。其操レ志之銳。直求レ爲二聖人一。而不レ得二其道一也。昧二於古言一而不レ得二其說一也。獨喜二孟子之若一レ易レ讀。而求二諸己心一。則不レ得レ不レ求二諸其理一焉。是其以レ理爲二第一義一者。勢之所二必至一也。夫理者事物皆有レ之。故理者纖細者也。宋儒之意。謂丁合二其細一可丙以成乙其大甲矣。豈其然哉。銖銖而求レ之。至レ鈞而差。寸寸而求レ之。至レ丈而差。何者。凡人所レ見者小。而聖人所レ見者大也。所レ見者大。則小者不レ遺。聖人之所二以不一レ可レ及也。人苟循二聖人之敎一而得二其大者一。則小者自不レ失焉。其或雖レ失レ之。亦無二大害一焉。何則。不レ失二其大者一故也。大者何。禮與レ義是也。聖人之所レ立レ極也。宋儒之尙レ理。其究歸レ於下不レ師二聖人一而自用上。是其所二以失一也。故雖二不學之人一。苟能思。則不レ爲二非理之事一。若夫非禮之禮。非義之義。則非二君子一不レ能レ辨レ之者。不學故也。世之爲二宋儒一者。猶且不二以爲一レ然。必將レ曰。禮義者誠聖人所レ立也。然苟不レ知下聖人所三以立二禮義一之理上。而徒守二其所レ謂禮義者一。則非禮之禮非義之義所二由生一焉。是宋儒務二究理一之意云レ爾。殊不レ知是其欲下勝二聖人一而上上之者。亦不二自揣一之甚者焉。何也。是不レ循二聖人之敎一。而先欲レ獲二聖人之心一者也。天下豈有レ之哉。聖人之敎。詩書禮樂。習而熟レ之。默而識レ之。則聖人所三以立二禮義一之理。亦可二得而見一レ之已。然人之知。有レ至焉。有レ不レ至焉。安可レ强也。其

明辨レ之。篤行レ之。管子曰。思レ之思レ之。思レ之而不レ通。鬼神將レ通レ之。是學問之道。思爲レ貴也。洪範曰。思曰レ睿。睿作レ聖。是聖人之德。以二其善思一也。孟子曰。心之官則思。是人之所二以爲レ人。亦以二其能思一已。後儒之無二深遠之思一。乃以二三思一爲二大過一。妄哉。

慮亦思之精也。有二委曲詳悉意一。多以レ處レ事言レ之。故亦有二危懼意一。然如レ曰二士四十始仕。出レ謀發一レ慮。謀以二方略一言レ之。慮主二我心一言レ之。謀者有レ所二營爲一也。或爲レ人謀。或就レ人謀。皆必有下所二營爲一之事上。而論下定其所二以處置一之方法上也。如二嘉謀嘉猷及出レ謀。皆指下其所二處置一之術上言レ之。孔子曰。好レ謀而成 則聖人之貴レ術也。自二後世詐謀詐術之說興一。而儒者諱レ言二術字一。遂務欲下說二其理一以喩上レ人。拙哉。

理氣人欲 五則

理者。事物皆自然有レ之。以二我心一推二度之一。而有レ見三其必當レ若レ是與二必不一レ可レ若レ是。是謂二之理一。凡人欲レ爲レ善。亦見二其理之可一レ爲而爲レ之。欲レ爲レ惡。亦見二其理之可一レ爲而爲レ之。皆我心見二其可一レ爲而爲レ之。故理者無二定準一者也。何則。理者無二適不一レ在者也。而人之所レ見。各以二其性一殊。辟則飴一焉。伯夷見レ之而曰。可二以養一レ老。盜跖見レ之而曰。可二以沃一レ樞。是無レ它。人各見二其所一レ見。而不レ見二其所一レ不レ見。故殊也。故理苟不レ究レ之。則莫二能得而一一焉。然天下之理。豈可二究盡一乎哉。惟聖人能盡二我之性一。能盡二人之性一。能盡二物之性一。而與二天地一合二其德一。故惟聖人有三能究レ理而立二之極一。禮與レ義是也。故說卦所レ謂窮理者。聖人之事。而凡人之所レ不レ能也。故先王孔子之道。言レ義

耳。如ニ虛受一レ人。亦以下受ニ人言一納ニ人諫一時上言レ之。虛者謂下虛ニ其心一而不上レ有ニ一物一也。豈語ニ其常一哉。仁齋先生以レ無ニ私心一爲レ虛。亦非矣。假使無ニ私心一。當ニ其受ニ人言一。先有レ所レ見橫ニ其胸中一。則必不レ入。故當三其受ニ人言一。則必心不レ有ニ一物一。是其道也。豈無ニ私心一之謂乎。

孟子曰。盡ニ其心一者知ニ其性一也。是謂下盡ニ其心力一以思上レ之耳。正與ニ梁惠王所レ謂寡人之於レ國也。盡レ心焉耳矣一同意。言但人不レ思耳。思レ之則能知ニ性之善一。知ニ性之善一則知ニ天道之與一レ善。孟子本意。不レ過レ若レ是矣。宋儒不レ識ニ先王敎法一。故就ニ論語孟子字面一。以求ニ學問之方一。遂謂盡レ心者盡ニ心之量一也。妄哉。豈有ニ所レ謂心之量者一乎。仁齋先生曰。謂下擴ニ充四端之心一而至上ニ于其極一也。果其言之是乎。則當レ曰下知ニ其性一者盡中其心上也。其言之倒置。豈非レ强乎。亦欲レ爲ニ聖人一故耳。

志者心之所レ之。此說文之訓也。是以ニ字偏傍一爲レ說。字學家之言耳。仁齋先生曰。心之所ニ存主一也。得レ之。腎書腎藏ニ精與一レ志。亦可レ見已。

意者謂レ起レ念也。人之不レ可レ無者也。雖ニ聖人一亦爾。如ニ子絕レ四毋一レ意。本以ニ孔子行一レ禮言レ之。孔子之心。與レ禮一矣。故當ニ其行一レ禮。若ニ全不一レ經レ意然。是形ニ容其動容周旋中一レ禮者一爾。後儒不レ識ニ語意所一レ在。或謂レ無ニ私意一。或謂三聖人盛德之至自無ニ往來計較之心一也。皆泥矣。如ニ大學誠意一。乃以ニ好惡一言レ之。意之誠。格物之功效也。朱註以來。皆不レ解ニ文意一。

思謀慮　二則

思者思惟也。論語曰。學而不レ思則罔。子夏曰。切問而近思。中庸曰。博學レ之。審問レ之。愼思レ之。

乎遂忘二其仁一。而徒以爲レ藝。德之所二以難一レ成也。故孔子敎以レ依レ於レ仁。亦衰世之意也。豈出レ於二禮之外一哉。然先王之仁不レ可レ見者。其在二今世一。亦甚レ於二春秋之時一。則仁禮二言。永爲二千萬世治心之道一也。學者思レ諸。

存レ心之說。昉レ於二孟子一。對二放心一言レ之。宋儒持敬所レ祖。然究二孟子之意一。亦其性善之說已。何則。其所レ謂心者。謂二惻隱羞惡辭讓是非之心一也。放心者。謂學者不レ察二仁義禮智根一レ於レ心遂失レ之也。故曰レ放曰レ求。皆論說之辭。而非下若二宋儒所一レ言者上焉。宋儒以爲二工夫一。可レ謂レ默已。仁齋先生辨レ之是矣。

本心亦出レ於二孟子一。觀二其以レ鄉與レ今對言一。其意但謂二其初時之意一耳。宋儒以爲二心之本然一。仁齋先生爲二良心一。皆不レ知レ辭者已。

惻隱羞惡辭讓是非之心爲二四端一。端猶レ言二一端一也。亦謂二其微者一已。朱子以爲二端緖一。其意謂仁義禮智全レ於レ性。而四者乃其端緖發二見於一レ外也。是佛書覆藏心之說耳。仁齋先生以爲二端本一。其意據二孟子擴充之言一。而謂レ有二引而伸之意一。豈然乎。孟子亦曰。養レ性。是自有二先王敎法一。養以成二其德一已。如二其擴充之言一。亦如レ曰二天昭昭之多一也。論說之言爲レ爾。雖二孟子一豈必求下擴二充四端之心一以成中仁義禮智上哉。而固泥二其擴充之言一。以レ此爲二工夫一。遂有二端本之說一。亦非矣。

宋儒曰。聖人之心。如二明鏡止水一。是不レ知三心之爲二動物一。仁齋先生駁レ之者是矣。又曰。廓然大公。物來順應。是或一道也。如二不レ逆レ詐。不レ億不一レ信。亦是意。然專以レ此爲レ至。則亦明鏡止水之見

多材多藝。盆成括小有レ才。是也。後世才字。皆唯訓レ能耳。

心志意　九則

心者。人身之主宰也。爲レ善在レ心。爲レ惡亦在レ心。故學二先王之道一以成二其德一。豈有二不レ因レ心者一乎。譬二諸國之有一レ君。君不レ君則國不レ可二得而治一。故君子役レ心。小人役レ形。貴賤各從二其類一者爲レ爾。國有レ君則治。無レ君則亂。人身亦如レ此。心存則精。心亡則昏。然有レ君而如二桀紂一。國豈治哉。心雖レ存而不レ正。豈足レ貴哉。且心者動物也。故孔子曰。操則存。舍則亡。出入無レ時。莫レ知二其鄉一。惟心之謂與。是言雖二操則存一。操レ之不レ可レ久。不レ得レ不レ舍。舍則亡。操レ之無レ益レ於レ存也。何則心者不レ可レ二者也。夫方二其欲一レ操レ心也。其欲レ操レ之者亦心也。心自操レ心。其勢豈能久哉。故六經論語。皆無二操レ心存一レ心之言一。書曰。以レ禮制レ心。是先王之妙術。心不レ待レ操而自存。心不レ待レ治而自正。舉二天下治心之方一。莫二以尙一焉。後世儒者僅知二心之可一レ貴。而不レ知レ遵二先王之道一。妄作二種種工夫一。求三以存二其心一。謬之大者也。學者思レ諸。

孔子曰。依レ於レ仁。又曰。其心三月不レ違レ仁。是孔子敎二學者一。使下其心常依レ於二先王安民之德一。不上相違上也。又曰。擇不レ處レ仁。焉得レ知。言レ居二其心於一レ仁也。其言雖レ殊。其義實同。蓋皆古語也。夫仁者先王所二以制一レ禮也。苟爲レ禮而不レ知三禮之所二以制一。則德難レ成焉。然當二三代之隆一。士學而成。則舉而用レ之。一世之人。游三泳於二先王之仁一。默而識レ之。豈有下不レ依焉者上哉。及レ於二春秋之時一。大夫世レ官。賢者不レ用二先王之仁一。遠而不レ可レ見。則士之學二先王之道一獨善二其身一者。比比皆是。於レ是

或以二其性一殊。故七情之目。以レ欲爲レ主。順二其欲一則喜樂愛。逆二其欲一則怒惡哀懼。是性各有レ所レ欲者見レ於レ情焉。故如下曰二情欲一。曰中天下之同情上。皆以レ所レ欲言レ之。性各有レ所レ殊者亦見レ於レ情焉。故如下曰二萬物之情一。曰中物之不レ齊。物之情上也。皆以二性所一レ殊言レ之。又如三孟子曰二。是豈人之情也哉一。直以爲レ性。又如下曰二訟情一。曰二軍情一。曰上レ用二其情一。皆以二其不一レ匿二內實一言レ之。所レ謂訓レ實是也。亦以二情莫一レ有レ所二矯飾一故轉用耳。且訟情軍情。亦各有二一種態度一。而得レ之則瞭然者。亦如二情以レ性殊一。故有二是言一焉。自二宋儒以レ性爲一レ理。而字義遂晦。性情之所二以相屬一者。不レ得二其解一。至レ於二仁齋先生一而後始明矣。

仁齋先生曰。於レ心則曰レ存曰レ盡。於レ性則曰レ養曰レ忍。志則曰レ持曰レ尙。若二情與一レ才。皆不三必用二工夫一。先儒有二約レ情之語一。非也。是其人專守二孟子一。而不レ知二先王禮樂之敎一。故以爲情不レ理可也。觀三其論二顏子不一レ遷レ怒而曰。舜殛二四凶一。猶當レ有二餘怒一。豈不レ然乎。夫情者不レ涉二思慮一者也。樂之爲レ敎。無二義理之可一レ言。無二思慮之可一レ用。故理二性情一以レ樂。是先王之敎之術也。豈理學者流所二能知一哉。伊川先生所レ謂約レ情而適レ中。其言豈非哉。然亦不レ知下所二以約一レ之之方上。而欲下就二情上一用上レ功則過矣。

才材同。人之有レ材。譬二諸木之材一。或可三以爲二棟梁一。或可三以爲二宗桷一。人隨二其性所一レ殊。而各有レ所レ能。是材也。如下孟子所レ謂非二才之罪一。天之降レ才。不レ能レ盡二其才一。皆謂レ性也。仁齋先生訓二性之能一。爲レ是。如三高陽氏有二不才子一。則如レ云二棄材一也。謂二其不一レ可レ用也。又有二唯訓レ能者一。如二周公

成二宋儒之陋一。王氏伊藤氏又據二宋儒之解一而讀二古文辭一。識三其非二孔門之言一者何邪。大氏性與レ習不レ可二得而別一者也。故古者語レ性。多以二嬰孩之初一言レ之耳。豈以二嬰孩一爲レ貴哉。又如下孟子曰中大人者不レ失二其赤子之心一者也上。亦宋儒復初之說所レ本也。殊不レ知大人乃大舜之誤耳。

仁義禮智爲レ性。昉レ於二漢儒一。而成レ於二宋儒一。緣二五行之說一也。然孟子亦曰。君子所レ性。仁義禮智根レ於レ心。又曰。口之於レ味也。目之於レ色也。耳之於レ聲也。鼻之於レ臭也。四肢之於二安佚一也。性也。有レ命焉。君子不レ謂レ性也。仁之於二父子一也。義之於二君臣一也。禮之於二賓主一也。智之於二賢者一也。聖人之於二天道一也。有レ性焉。君子不レ謂レ命也。是其所二祖述一也。仁齋先生務言二仁義禮智之非一レ性也。可レ謂三善獲二孟子之意一已。孟子固以二仁義禮智根一レ於レ心爲レ性。非下以二仁義禮智一爲上レ性。然其說本出レ於下爭二內外一立中門戶上焉。觀下其與二告子一爭上レ之。議論泉湧。口不レ擇レ言。務服レ人而後已。其心亦安知三後世有二宋儒之災一哉。是其褊心之所レ使。乃有下不レ能レ辭二其責一者上矣。夫仁智德也。禮義道也。皆先王之所レ立也。孟子亦謂下先王率二人性一以立中道德上已。仁齋先生以二四者一爲レ德。亦非矣。」

情者。喜怒哀樂之心。不レ待二思慮一而發者。各以レ性殊也。七情之目。醫書曰。喜怒憂思悲驚恐。此就下其發レ於二五藏一者上立二之名一。儒書曰。喜怒哀懼愛惡欲。或止言二喜怒哀樂四者一。此皆以二好惡兩端一言レ之。大氏心情之分。以下其所二思慮一者上爲レ心。以下不レ涉二思慮一者上爲レ情。以二七者之發不一レ關レ乎レ性爲レ心。關レ乎レ性者爲レ情。凡人之性皆有レ所レ欲。而涉二思慮一則或能忍二其性一。不レ涉二思慮一則任二其性所一レ欲。故心能有レ所二矯飾一。而情莫レ有レ所二矯飾一。是心情之說也。凡人之性皆有レ所レ欲。而所レ欲

豈悖レ理哉。至レ於三蘇子瞻無二善惡一。則佛氏之意矣。歐陽子謂性非二聖人所一レ先。卓見哉。仁齋先生釋二孟子性善一而曰。人之生質。雖レ有二萬不一レ同。然其善レ善惡レ惡之心。無二古今一無二聖愚一一也。可レ謂三善說二孟子一已。然雖レ有二善レ善惡レ惡之心一。豈必可レ使レ爲レ善乎。其人必曰。吾雖レ好二好色一。未レ能レ爲二宋朝一。則亦何益哉。苟能信二先王之道一。則聞二性善一益勸。聞二性惡一益勉。苟不レ信二先王之道一。則聞二性善一自用。聞二性惡一自棄。故荀孟皆無用之辯也。故聖人所レ不レ言也。其病皆在レ欲下以二言語一喩中不レ信レ我之人上。使二其信一レ我焉。不三唯不二能使二其信一レ我。乃啓二千古紛紛之論一。言語之弊。豈不レ大乎。學者猶且不レ能レ求二諸先王之敎一。而唯議論是務。悲哉。

樂記曰。人生而靜。天之性也。宋儒本然復性之說本レ諸。石梁王氏。及仁齋先生。皆以爲老氏之意。而非二孔門之言一也。蓋樂者理二性情一之道也。先王之敎。能養二人性一以成二其德一者。莫レ尙レ焉。且其爲レ敎。無二義理之可一レ言。無二思慮之可一レ用。不レ識不レ知。順二帝之則一。故性情之說。古唯詩與レ樂有レ之。喜怒哀樂。亦人之所二必有一者也。然其動之偏勝而不レ中レ節。則必至下傷二中和之氣一。以失中其恒性上。德之所二以難一レ成也。故立レ樂以敎レ之。性者人之所レ受レ天。所レ謂中是也。故以二其嬰孩之初。喜怒哀樂未レ用レ事之時一言レ之。所レ謂人生而靜者是也。是非レ謂下必求レ復二嬰孩之初一也。又非レ謂下以二靜慮一爲上至也。爲下樂能制二其躁動一。防中其過甚上。故以二其未レ甚時一言レ之耳。如二中庸未發之中一。亦非下以二未發之時一爲二大本一。爲中施レ功之地上。但謂人之性。稟二天地之中一。故先王之道。率二人性一以立レ之耳。後儒不レ知二古言一。不レ知二古文辭一。又不レ知二先王之敎之術一。妄以爲二本然之德一。務以二義理一說レ之。遂

虞九德。周六德。各以㆓其性㆒殊。豈不㆑然乎。先王之敎。詩書禮樂。辟如㆔和風甘雨。長㆓養萬物㆒。萬物之品雖㆑殊乎。其得㆓養以長㆒者皆然。竹得㆑之以成㆑竹。木得㆑之以成㆑木。草得㆑之以成㆑草。穀得㆑之以成㆑穀。及㆓其成㆒也。以供㆓宮室衣服飮食之用㆒不㆑乏。猶㆘人得㆓先王之敎㆒。以成㆓其材㆒。以供㆗六官九官之用㆖已。其所㆑謂習㆑善而善。亦謂㆘得㆓其養㆒以成㆖㆑材。辟㆓諸豐年之穀可㆑食焉。習㆑惡而惡。亦謂㆘失㆓其養㆒以不㆖㆑成。辟㆓諸凶歲之秕不㆑可㆑食焉。則何必求㆘變㆓其氣質㆒以至㆗聖人㆖哉。是無㆑它。宋儒不㆑循㆓聖人之敎㆒。而妄意求㆑爲㆓聖人㆒。又不㆑知㆓先王之敎之妙㆒。乃取㆓諸其臆㆒。造㆘作持敬究理擴㆓天理㆒去㆓人欲㆒種種工夫㆖。遂以立㆓其本然氣質之說㆒耳。仁齋先生活物死物之說。誠千歲之卓識也。祇未㆑知㆓先王之敎㆒。區區守㆓孟子爭辯之言㆒。以爲㆓學問之法㆒。故其言終未㆓明鬯㆒者。豈不㆑惜乎。

孔子曰。性相近也。習相遠也。本勸學之言。而非㆓論㆑性者㆒焉。蓋言君子與㆑民。方㆓其未㆑學。不㆓甚相遠㆒。及㆘習㆓先王之道㆒。以成㆗君子之德㆖。而後見㆔其於㆑民有㆓霄壤之異㆒耳。故其所㆑謂性相近者。亦語㆓中人㆒已。中庸曰。率㆑性之謂㆑道。本爲㆘老氏之徒以㆓先王之道㆒爲㆖㆑僞。故子思言㆘先王率㆓人性㆒以立㆑道。非㆖㆑强㆑之耳。亦非㆑謂㆓率㆑性則自然有㆒㆑道也。孟子性善。亦子思之意耳。覩㆘其曰㆗服㆓堯之服㆒。誦㆓堯之言㆒。行㆓堯之行㆒。是堯而已矣㆖。則所㆑謂人皆可㆔以爲㆓堯舜㆒者。亦非㆑謂㆔聖人可㆓學而至㆒矣。曰㆓仁義禮智根㆒㆑於㆑心。則所㆑謂性善。亦非㆑謂㆘人性皆與㆓聖人㆒同㆖矣。祇如㆓告子杞柳之喩㆒。其說甚美。湍水之喩。亦言㆓人之性善移㆒。孟子乃極言折㆑之。以立㆓内外之說㆒。是其好㆑辯之甚。遂基㆓宋儒之謬㆒焉。其與㆓荀子性惡㆒。皆立㆓門戶之說㆒。言㆓一端㆒而遺㆓一端㆒者也。子雲善惡混。退之性有㆓三品㆒。

性情才　七則

性者。生之質也。宋儒所レ謂氣質者是也。其謂下性有二本然一有中氣質上者。蓋爲二學問一故設焉。亦誤二讀孟子一。而謂人性皆不下與二聖人一異上。其所レ異者氣質耳。遂欲下變二化氣質一以至中聖人上。若使三唯本然而無二氣質一。則人人聖人矣。何用二學問一。又若使三唯氣質而無二本然之性一。則雖レ學無レ益。何用二學問一。是宋儒所三以立二本然氣質之性一之意也。然胚胎之初。氣質已具。則其所レ謂本然之性者。唯可レ屬二之天一。而不レ可レ屬レ於レ人也。又以爲理莫レ有レ所レ局。雖二氣質所一レ局。實有二所レ不レ局者一存。則禽獸與レ人何擇也。故又歸二諸正通偏塞之說一。而本然之說終不レ立焉。可レ謂二妄說一已。書曰。惟人萬物之靈。傳曰。人受二天地之中一以生。詩曰。天生二烝民一。有レ物有レ則。民之秉レ彝。好二是懿德一。孔子釋レ之曰。有レ物必有レ則。民之秉レ彝也。故好二是懿德一。文言曰。利貞者性情也。大傳曰。成レ之者性。是皆古人言レ性者也。合而觀レ之。明若レ觀レ火。蓋靈頑之反。然亦非二宋儒虛靈不昧之謂一。中偏之對。然亦非二宋儒不レ偏不レ倚之謂一。皆指二人之性善一移而言レ之也。辟下諸在レ中者之可二以左一可二以右一可二以前一可中以後上也。物者謂レ美也。美必倣レ效。是人之性也。是亦言二其善移一也。孔子又曰。上知與二下愚一不レ移。亦言二其它皆善移一也。貞者不レ變也。謂二人之性不一レ可レ變也。成レ之者性。言下其所二成就一各隨中性殊上也。人之性萬品。剛柔輕重。遲疾動靜。不レ可二得而變一矣。然皆以二善移一爲二其性一。習レ善則善。習レ惡則惡。故聖人率二人之性一以建レ敎。俾二學以習一レ之。及二其成一レ德也。剛柔輕重。遲疾動靜。亦各隨二其性殊一。唯下愚不レ移。故曰民可レ使レ由レ之。不レ可レ使レ知レ之。故氣質不レ可レ變。聖人不レ可レ至。而

也。乃其爲二理學一所レ錮。而不三自覺二其言之非一者。豈不レ悲乎。漢以來。佛老之道滿二天下一。而莫二之能廢一者。先王鬼神之敎壞故也。是豈理學者流所二能知一哉。

仁齋先生又曰。卜筮之說。世俗所二多悅一。而甚害レ於二義理一。何者。從レ義則不三必用二卜筮一。從二卜筮一則不レ得レ不レ舍レ義焉。義當レ生則生。義當レ死則死。在レ己而已。何待二卜筮一而決レ之也。君子去就進退。用舍行藏。惟義所レ在。奚問二利不利一爲。夫卜筮者。傳二鬼神之言一者也。無二鬼神一則無二卜筮一。有二鬼神一則有二卜筮一。旣以レ尊二鬼神一爲レ非二孔子之意一。則廢二卜筮一亦其所也。祇觀二其所一レ言。專以レ己言レ之。是予所レ謂後儒忘三先王孔子之道爲二安民之道一。而動求二諸己一者。豈不レ然乎。宋儒謂當レ言レ義。而命不レ足レ道。則仁齋先生譏レ之。至レ於二其自爲一レ說。則亦唯言レ義而已。乃問二其知レ命之說一。則唯以レ不レ動レ心言レ之。孟子所レ闢楊氏爲レ我者。豈它哉。大氐後儒貴レ知。主言レ之。先王孔子之道不レ然。主二行レ道施一レ於レ民。大氐民之爲レ事。疑三沮於二天之不一レ可レ知者。人情爲レ爾。故卜筮禱請。亘二萬古一而不レ能レ廢者。亦人情爲レ爾。聖人能盡二人之性一。故率二人之性一。立以爲レ道。豈爲レ己而設レ之乎。學者其思レ諸。

孟子有二天吏一。亂世之辭也。天下有レ君。則人以レ君爲レ天。唯君奉二天命一以行レ之。天下無レ君。則無レ所レ稟レ命。故君子直奉二天命一。是謂二天吏一。如三湯伐レ桀。武王伐二紂。皆稱レ天。卽此義也。故孔子時尙不レ稱レ之。六經唯胤征有二天吏一。乃指二義和一。以三其爲二天官一故也。不レ爾。逸德不レ可レ解。舊注以爲二天子之吏一者非矣。

哉。鬼神合レ謀。吉無レ不レ利。其知至矣哉。

仁齋先生曰。三代聖王之治二天下一也。好二民之所一レ好。信二民之所一レ信。以二天下之心一爲レ心。而未下嘗以二聰明一先上于二天下一。故民崇二鬼神一則崇レ之。民信二卜筮一則信レ之。故其卒也又不レ能レ無レ弊焉。及レ至レ于二孔子一。則專以二敎法一爲レ主。而明二其道一。曉二其義一。使二民不一レ惑レ於レ所レ從焉。孟子所レ謂賢レ於二堯舜一遠矣。正謂レ此耳。是其臆度之見。盭レ道之甚者也。何則。鬼神者先王立焉。先王之道。本二諸天一。奉二天道一以行レ之。祀二其祖考一。合二諸天一。道之所二由出一也。故曰。合二鬼與一レ神。敎之至也。故詩書禮樂。莫レ有下不レ本二諸鬼神一者上焉。仁齋之意。蓋謂三代聖王。其心亦不レ尙二鬼神一。唯以二民所一レ好。而姑且從レ之。妄哉。是不レ知レ道者之言也。是或見二孔子獵較之類一妄作二是言一耳。夫雖二聖王一。其卽位之初或然。及二其化之成一也。如二陶鑄以出一レ之。果其言之是乎。則聖王之於レ民。亦不レ能レ若レ之何一已。聖人之道。豈若レ是孱哉。且三代之道。所三以謂二之有一レ弊者。乃謂二其所一レ損益一已。夫聖王之尊二鬼神一。三代皆然。若謂二之有一レ弊。則其所レ因者爲レ有レ弊也。果使三所レ因者有二レ弊。則安在三其爲二聖人一哉。觀レ於二王安石三不一レ畏。則其所レ謂明二其道一曉二其義一者。豈無レ弊哉。且其所レ謂孔子以二敎法一爲レ主者。以二口諄諄言一レ之爲レ敎已。陋哉。是講師之事也。豈孔子而若レ是哉。且其言曰。明二其道一。曉二其義一。使二民不一レ惑レ於レ所レ從焉。其言則是。而其意則非矣。若使下明二先王之道一。曉二先王之義一。一意從二先王之敎一。而無中他岐之惑上。則可也。然先王之敎。禮焉耳。今不レ遵二先王之禮一。而欲下以二言語一明中其理上。則君子尙不レ能。況民而戶說レ之。使下喩二其理一不上レ惑二於鬼神一。是雖二百孔子一亦所レ不レ能

則可見。不祭則散。散則不可見。不可見則幾乎亡矣。精氣爲物。謂聚若有物也。游魂爲變。謂魂氣游行爲厲也。立之壇墠。立之宗廟。祭祀以奉之。儼然如在。是謂爲物。然其祭之也。曰迎之。曰送之。曰於彼乎。於此乎。是豈必其在于此哉。亦聖人立其物耳。是雖言鬼神。然易亦有之。大傳又曰。乾陽物也。坤陰物也。六十二卦。孰非陰陽。聖人特立之物曰乾坤。天地位而造化行。乾坤立而易道行。乾坤毀。則無以見易。鬼神之道亦然。故傳曰。明命鬼神。以爲黔首則。聖人之立其物也。是敎之術也。故知易則知鬼神之情狀也。聖人能知鬼神之情狀。故立幽明生死之禮。是又仰以觀天文以下。其義所以相因者爾。京房易有歸魂遊魂之卦。是游魂爲變。亦易有其義。而古來相傳也。後儒不就先王之禮與易以求知鬼神之情狀。而直求諸鬼神。豈能知之哉。多見其不知量也已。

鬼神之德。中庸以誠言之。左傳以聰明正直言之。其言雖殊。其義一矣。皆謂其無思慮勉强之心也。天地無思慮勉强之心。故必待聖人參贊而後天地位萬物育。鬼神無思慮勉强之心。故必待聖人爲之禮立之極。而後游魂不爲變。

易又曰。聖人以此洗心。退藏於密。吉凶與民同患。是言卜筮者也。君陳曰。爾有嘉謀嘉猷。則入告爾后于內。爾乃順之于外曰。斯謀斯猷。惟我后之德。嗚呼臣人咸若時。惟良顯哉。夫聖人豈無嘉謀嘉猷。然洗其心退藏於密。乃順之于外曰。是鬼神之命也。洗其心者。悉致諸鬼神。而不敢留以爲己謀猷也。密者。謂不洩于外也。是其意吉凶與民同患故也。其仁至矣

前無レ所レ因。直取二諸天地一。是在二禮樂未レ作之先一也。幽明之故者。謂二鬼神與レ人之禮一也。不レ曰レ禮而曰レ故。猶二故實之故一。謂二上世相傳者一也。堯舜未レ制レ禮之前。蓋已有二其故一。堯舜亦因レ之制作耳。學者苟明レ易。則知下所二以制作一之意上。取二諸天地一。故曰レ知二幽明之故一。宋儒乃謂レ知下人與二鬼神一所二以然一之理上者。非也。原レ始反レ終者。亦易道爲レ然。始則終。終則始。循環無レ端。易者所二以知一レ來也。故原二其始一。以反三之於二其終一。故知レ來。學者苟能原二人之始一。以反三之於二其終一。則知二幽明之禮之說一也。死生幽明。互二其文一耳。說猶レ云二禘之說一。故亦謂二禮之說一也。夫人受二天地之中一以生。詩曰。天生二烝民一。是也。故聖人作二事レ鬼之禮一。亦原レ始以反二之於一レ終而歸二諸天一。故詩曰。文王陟降。在二帝左右一。人死復。則升レ于レ屋。祭有二降神一。凡傳謂二某神降一レ於レ某者。皆在レ天之辭也。聖人功德如レ天。故配二之天一。群下則不レ配已。孔子曰。敬二鬼神一而遠レ之。祭雖レ妻拜レ之。凡事レ死如レ事レ生。語二其心一。而禮則殊者。皆以三其歸二諸天一也。惟天也不レ可レ知矣。惟鬼神也不レ可レ知矣。詩曰。神之格思。不レ可レ度思。矧可レ射思。傳曰。於レ彼乎。於レ此乎。禮或求二諸陽一。或求二諸陰一。皆謂二其不一レ可レ知也。敬之至矣。天邪鬼邪。一邪二邪。是未レ可レ知也。故聖人制レ禮。雖レ曰レ歸二諸天一。亦未二敢一一レ之。敬之至矣。敎之術也。自下佛氏以二諸天餓鬼及地獄天堂之說一溷上レ之。而後人始輕三視天與二鬼神一也。鬼神有無之說。所二以與一焉。宋儒見二聖人尊レ天之至一也。乃陰以二法身如來一擬レ之。而謂二天理一也。而其輕二視鬼神一自若焉。仁齋先生則固執二遠レ之之言一。而欲三一切棄二絕鬼神一。皆不レ知下以二先王之禮之意一求中諸易上故也。精氣爲レ物。游魂爲レ變者。卽所レ謂幽明之故。死生之說也。鬼神之情狀。祭則聚。聚

不レ敢。以レ此觀レ之。帝是五帝。合二諸天一也。尊二聖人一之至。豈不レ然乎。鬼神者。天神人鬼也。天神地示人鬼。見二周禮一。古言也。不レ言二地示一者。合二天神一言レ之。凡經傳所レ言皆然。後世所二以レ鬼屬レ陰神屬一レ陽者。以二易有一レ之也。是不レ知レ易者也。古人有レ疑。問三諸天與二祖考一。蓍龜皆傳二鬼神之命一。是易所三以言二鬼神一也。後儒乃謂稟二命蓍龜一。蓍龜雖レ靈。亦白叢大王耳。聖人而豈若レ是其陋乎。是義不レ明。遂以三易鬼神爲二陰陽之靈。造化之迹一。外二人鬼一而爲レ言。謬之甚者也。

仁齋先生曰。凡天地山川宗廟五祀之神。及一切有二神靈一能爲二禍福一者。皆謂二之鬼神一也。得レ之。祇沿二宋儒之謬一。而不レ能レ正二鬼神之名一。非也。又曰。今之學者以二風雨霜露日月晝夜一爲二鬼神一者誤矣。亦得レ之。然是皆神之所レ爲也。故傳曰。神氣風霆。說卦曰。神也者妙二萬物一而爲レ言者也。下文遂言二雷風火澤水艮一。可二以見一已。

鬼神之說。所二以紛然弗一レ已者。有鬼無鬼之辨已。夫鬼神者聖人所レ立焉。豈容レ疑乎。故謂二無鬼一者。不レ信二聖人一者也。其所二以不一レ信レ之故。則以レ不レ可レ見也。以レ不レ可レ見而疑レ之。豈翅鬼乎。天與レ命皆然。故學者以レ信二聖人一爲レ本。苟不レ信二聖人一。而用二其私智一。則無レ所レ不レ至已。凡言二鬼神一者。莫レ善レ於レ易焉。其言曰。仰以觀レ於二天文一。俯以察レ於二地理一。是故知二幽明之故一。原レ始反レ終。故知二死生之說一。精氣爲レ物。游魂爲レ變。是故知二鬼神之情狀一。是三者皆贊レ易之言也。人皆知三其言二鬼神一。而不レ知レ贊レ易。乃舍レ易爲二之解一。故失二其義一已。蓋易者。伏羲仰觀俯察以作レ之。

先生不レ疑而已矣。安而已矣。是也。嗚呼。聖人之心。安可レ窺乎。且如二仁齋之說一。徒言レ不下以二名利一動中其心上已。嗚呼不下以二名利一動中其心上豈足三以盡二聖人一乎。亦以二己心一窺二聖人一已。陋哉僭哉。僭哉陋哉。

帝亦天也。漢儒謂二天神之尊者一。是古來相傳之說也。宋儒曰。天以レ理言レ之。帝以二主宰一言レ之。其意以レ理爲二主宰一。則帝天何別。亦難二其解一已。蓋上古伏羲神農黃帝顓頊帝嚳。其所二制作一。畋漁農桑衣服宮室車馬舟楫書契之道。亘二萬古一不レ墜。民日用レ之。視以爲二人道之常一。而不四復知三其所二由始一。日月所レ照。霜露所レ墜。蠻貊夷狄之邦。視傚流傳。莫レ不レ被二其德一。雖二萬世之後一。人類未レ滅。莫二之能廢者一。是其與二天地一同二功德一。廣大悠久。孰得而比レ之。故後世聖人。祀レ之合二諸天一。名曰レ帝。如二月令所レ載五帝之名一是也。夫人死。體魄歸レ於レ地。魂氣歸レ于レ天。夫神也者不レ可レ測者也。何以能別二彼是一乎。況五帝之德。侔レ于レ天。祀以合レ之。與レ天無レ別。故詩書稱レ天稱レ帝。莫レ有下所二識別一者上。爲レ是故也。如二堯舜以下一。作者七人。既祀二之學一。萬世不レ替。而五帝之德若レ是之大。豈泯泯乎不レ祀。先王之道。斷乎不レ然矣。所レ謂祀二其始祖一。配下諸所二自出一之帝上者。卽五帝也。卽上帝也。可レ知已。至レ於二漢儒一。以二上帝一爲二天神之尊者一。又就二五帝一別三五行之神與二人帝一。則臆說耳。大氐古之禮。祀二后土一。以レ禹配。祀二祖先一。既立レ主。又立レ尸。祀レ天亦然。是先王之道。合二天人一而一レ之。故傳曰。合二鬼與レ神。敎之至也。制レ禮之意如レ是夫。且帝之名奚昉也。若是天子之名。而推以命二諸天一。則先王尊レ天之至。必不レ敢。若是天之名。而推以命二諸天子一。則先王之恭。必

其道得之不處也。貧與賤。是人之所惡也。不以其道得之不去也。是得富貴之道仁。而得貧賤之道不仁也。君子行仁以致命。故書曰。祈天永命。易曰。致命遂志。又曰。正位凝命。唯君子無致貧賤之道。故孟子云爾。

仁齋先生曰。何謂知命。安而已矣。何謂安。不疑而已矣。本非有聲色臭味之可言。蓋無一毫之不盡。處之泰然。蹈之坦然。不貳不惑。方謂之安。方謂之知。豈見聞之知哉。伊川云。知命者。知有命而信之也。此視知字太淺。所謂知命者。處乎死生存亡窮通榮辱之際。泰然坦然。煙銷氷釋無一毫動心。而後謂之知命。所謂知有命而信之。是不待君子而能知之。是仁齋先生得意之言也。然以予觀之。亦與伊川何擇也。祇敷衍其言與否之異耳。且孔子所謂不知命無以爲君子也者。本謂知天之命我以此道也。先王之所以安民爲心立斯道者。亦以知天命也。故非知此則無以爲君子也。宋諸老先生忘先王之道以敬天安民爲本。而專求諸己。遂陷於莊周內聖外王之說。自爾以來。雖有俊民。迷而不悟。如仁齋先生之聰敏。亦爲其餘習所痼。故究其所見。豈與達磨惠能相遠哉。可惜之至。

孔子五十而知天命。知天之命孔子傳先王之道於後也。孔子又曰。下學而上達。知我者其天乎。是孔子自言我能下學而上達。故天命我以傳道之任者。爲知我也。它如儀封人言亦爾。孔子學先王之道。以待天命。五十而爵祿不至。故知天所命。不在行道當世而在傳諸後世已。不爾。孔子知天命。何待五十乎。後儒之解。不能直斥其事。而徒論其心。如仁齋

古聖人所不言者。可謂戾道之甚者已。宋儒曰。生死聚散。理爲之主宰。是以知天自負者也。仁齋先生曰。天地之道。有生而無死。有聚而無散。死便生之終。散便聚之盡。天地之道一於生故也。是亦以知天自負者也。夫有聚有散者。其說必至於十二元會而極矣。一於生者。其說必至於今日天地即萬古天地而極矣。是皆喜推己所見以言己所不見。而求人之信己者也。夫孰信之哉。是皆自聖者也。不信古聖人者也。不敬天者也。夫天也者不可知者也。且聖人畏天。故止曰知命。曰知我者其天乎。而未嘗言知天。敬之至也。至於子思孟子。始有知天之言。然僅言人之性命於天。故以誠爲性之德。是已。孟子亦僅言知天之與善。是已。然二子知天之言一出。而後諸老先生囂然以言天。豈先王孔子敬天之意乎。亦二子好辯之流弊也。易傳有統天御天之文。皆稱帝云爾。先天而天弗違。後天而奉天時。皆贊聖人之德云爾。大氐後世君子。既已傲然求爲聖人。亦復不知古文辭。不能讀古書。皆遷就以從己故爾。學者思諸。

命者。謂天之命於我也。或以有生之初言之。或以今日言之。中庸曰。天命之謂性。是以有生之初言之者也。書曰。惟命不于常。是以今日言之者也。仁齋先生引子夏孟子之言。必以命定於有生之初者非矣。殊不知子夏孟子。皆以在彼者爲天。以至于是者爲命。其實則命是天之所命。天與命豈可岐乎。因是而遂以五十而知天命爲知天與命。豈有是乎。且孟子所謂莫之致而至者。亦以貧賤言之耳。孔子曰。富與貴。是人之所欲也。不以

レ妄已。夫天之不二與レ人同一レ倫也。猶下人之不中與二禽獸一同上レ倫焉。故以レ人視二禽獸之心一。豈可レ得乎。然謂二禽獸無一レ心不可也。嗚呼天豈若二人之心一哉。蓋天也者。不レ可二得而測一焉者也。故曰天命靡レ常。惟命不レ于レ常。古之聖人。欽崇敬畏之弗レ遑。若レ是其至焉者。以二其不一レ可二得而測一故也。漢儒災異之說。猶二之古之遺一矣。然其謂二日食若何。地震若何一者。是以二私智一測レ天者也。宋儒曰。天卽理也者。亦以二私智一測レ天者也。仁齋先生所レ謂當レ求三之於二冥冥之中一。自有二陰隲之理一者亦然。夫陰隲者天心也。豈可下以レ理言上レ之乎。故其說終歸レ於下以二有心無心之間一命上レ之。悲哉。詩曰。維天之命。於穆不レ已。本言下天之所三以降二大命於一レ周者。雖二深遠不一レ可レ見。亦滾滾無上レ所二底止一已。子思以二至誠無一レ息論レ天。是其所二特發一。古書所レ無。故借二引此詩一以爲レ證。豈詩之本旨哉。宋儒弗二之察一。遂以爲二天道之本體一。亦其所レ見爲レ爾。夫誠者天之一德。豈足二以盡一レ天哉。朱子曰。陰陽非レ道。所二以陰陽一者是道。仁齋先生曰。陰陽非レ道。一陰一陽往來不レ已者是道。說卦傳曰。立二天之道一。曰二陰與一レ陽。是陰陽豈非レ道邪。夫聖人立二陰陽一爲レ道。而二先生乃欲下勝二聖人一而上上之。豈不レ妄乎。以レ余觀レ之。其所レ謂所二以陰陽一者。亦陰陽耳。往來不レ已者。亦陰陽耳。二先王皆岐二精粗一而二レ之。故皆曰二陰陽非一レ道。夫道無二精粗一。無二本末一。一以貫レ之。故子思以レ誠論レ之。且大傳所レ謂一陰一陽之謂レ道者。本語二易道一也。故又曰。闔レ戶謂二之坤一。闢レ戶謂二之乾一。一闔一闢謂二之變一。往來不レ窮謂二之通一。豈非二易道一邪。且天道豈可下以二一言一盡上乎。然古以二福レ善禍一レ淫論二天道一。而不レ及二其他一者。敎之道爲レ爾。諸老先生聖知自處。以レ知レ天自負。故喜言二精微之理一。

レ大。亨或爲レ通。或爲二聘亨一。利或以爲三我得二其利一。或以爲レ利レ人。貞或以爲レ不レ變。或以爲レ當レ位。是易之不レ可レ爲二典要一。所下以與二他書一殊上也。然至レ於二後世儒者一傅會以二天道一。又以二仁義禮智一配レ之。則牽强遷就。不レ成二文意一。妄亦甚哉。

天命帝鬼神　十七則

天不レ待レ解。人所二皆知一也。望レ之蒼蒼然。冥冥乎不レ可二得而測一レ之。日月星辰繫焉。風雨寒暑行焉。萬物所レ受レ命。而百神之宗者也。至尊無レ比。莫二能踰而上一レ之者一。故自二古聖帝明王一。皆法レ天而治二天下一。奉二天道一以行二其政敎一。是以聖人之道。六經所レ載。皆莫二不レ歸レ乎レ敬レ天者一焉。是聖門第一義也。學者先識二斯義一。而後聖人之道可二得而言一已。後世學者。逞二私智一而喜二自用一。其心傲然自高。不レ遵二先王孔子之敎一。任二其臆一以言レ之。遂有二天卽理也之說一。其學以レ理爲二第一義一。其意謂聖人之道。唯理足二以盡一レ之矣。以二此其所一レ見。而曰二天卽理也一。則宜レ若レ可三以爲二其尊レ天之至一焉。然理取二諸其臆一。則亦曰二天我知一レ之。豈非二不敬之甚一乎。故究二其說一。必至レ於二天道無一レ知而極矣。程子曰。天地無レ心而有レ化。豈不レ然乎。易曰。復其見二天地之心一乎。天之有レ心。豈不二彰彰著明一乎哉。故書曰。惟天無レ親。克敬惟親。又曰。天道福レ善禍レ淫。易曰。天道虧盈而益謙。孔子曰。獲二罪於一レ天。無レ所レ禱也。豈非下以二天心一言上レ之乎。仁齋先生駁二宋儒一者至矣。然其學猶二之後世之學一也。其言曰。以二有心一視レ之。則流レ于二災異一。若二漢儒一是也。以二無心一視レ之。則流レ于二虛無一。若二宋儒一是也。可レ謂下善爲二調停一者上也已。果其說之是乎。則天也者有心無心之間者也。可レ謂

行一言レ之。利主下行二其事一有中成功上言レ之。是其異已。假如下以二聘享一言上レ之。則藉レ此而諸侯和順。國被二其福一是利也。故經文主二受レ利者一言レ之。而至レ於二文言曰一レ利レ物。則主二施レ利者一言レ之。利レ物者。利二益萬物一。是仁也。必以レ義濟レ之。而後物可三得而利二益一。故曰利レ物足二以和一レ義。和者如二五味相和之和一。謂以レ異濟レ同也。仁大矣。苟非三義以差二別之一、則仁不レ可レ成焉。是文言皆以二君子之道一解レ易已。

貞者。存レ乎レ中者不レ變也。曰二開レ物成一レ務。曰レ成二天下之亹亹一。是卜筮之道。本在レ使下人能勤二其事一不上レ怠也。凡天下之事、人力居二其半一。而天意居二其半一焉。人力之所レ能。人能知レ之。而天意所レ在。則不レ能レ知レ之。不レ知則疑。疑則怠而不レ勤。怠而不レ勤、則併二其人力一不レ用レ之。事之所二以壞一也。故聖人作二卜筮一。以稽二其疑一。藉レ是而人得レ知二夫天意所一レ在。亹亹爲レ之不レ已。事之所二以成一也。故曰レ成レ務。曰レ成二亹亹一。是之謂也。然其人存レ乎レ中者渝。則終亦怠已。故諸卦皆曰二利貞一。謂二不レ變者之必成一也。不レ恒二其德一。或承二之羞一。孔子曰。不レ占而已矣。亦此意。它如二變曰レ悔。不レ變曰レ貞。貞勝。貞觀。貞明。貞夫一。及君子貞而不レ諒。及貞女之貞一。皆不レ變之義也。又如二傳多訓レ貞爲レ正者一。本謂二位當一爲レ正。陽居二陽位一。陰居二陰位一。是也。陽居二陰位一。陰居二陽位一。如下移二魚鼈於一レ山。植丙草木于乙河海甲。則必失中其性上已。凡天下之物。唯性不レ可レ變矣。故曰利貞者性情也。然物與レ位不レ當。必至レ於レ失二其性一。失レ性則變。不レ得レ爲レ貞。是訓レ貞爲レ正之義也。志不レ挫則百事皆可レ成。故文言曰。貞固足二以幹一レ事。亦以二君子之道一解レ易者也。元或爲レ首。或爲

公不レ及二管仲之仁一。高祖不レ及二三傑之能一。而皆能爲二之君一。是君レ人之德別有レ之。而命レ之曰レ元已。然則何謂レ元也。書曰。元首明哉。謂二能知レ人而任一レ之也、其能知二善人一而任レ之。足三以爲二衆善人之長一。故曰元者善之長也。然善人難レ知。苟非レ躬二安民之德一。則不レ能レ知レ之。故曰體レ仁足三以長レ民也。是皆取二義於一レ元。而引而伸レ之。觸レ類以長レ之者也。故以レ仁爲レ元者非矣。人君之德。不レ在レ知二庶務一。而在レ知二善人一。不レ在二身親一レ之。而在レ任二善人一。是知之大者也。故易傳皆訓レ元爲レ大。爲レ是故也。

亨者。謂二其道盛行一。無レ所二擁閼一也。元亨者。大者之道行也。小亨者。小者之道行也。辟如レ烹レ物。水火之氣。莫レ所レ不レ達焉。辟如二聘亨之禮一。講二信脩睦之道一。莫レ所レ不レ通焉。亨本聘享之享。借以言二其通一也。蓋聘享之禮行。而諸侯無レ不レ至者焉。通之盛也。後世誤レ音聘享之享爲二食饗之饗一。然聘禮有二享與一レ饗。音同許兩反。當時將二何以別一乎。故聘享之享。元亨之亨。皆許庚反。食享之享。乃許兩反。其於レ文。聘享作レ亨。則食饗作レ享。聘享作レ享。則食饗作レ饗。聘享唯獻二璧馬一。食饗則宴。故易曰。公用亨レ于二天子一。王用亨レ于二西山一。皆作レ亨。可二以見一已。

利有二數義一。如下曰二君子喩レ於レ義。小人喩一レ於レ利。曰二放レ於レ利而行一。曰中見レ利思上レ義。皆謂二營レ生而有一レ所レ得。是財利之利也。如下曰二利用厚生一。曰中利器上。皆謂丁善治二其器一。使丙輕乙便於甲レ用レ之。用亦器也。是銳利之利也。如三易曰二利レ有レ攸レ往。利レ涉二大川一。皆謂下作二其事一有中成功上。是吉利之利也。如三利レ物。利二天下一。謂レ使二其得一レ益被レ澤。是利益之利也。故易亨利。其義相似。亨主二其道之

辨名下

日本　物茂卿　著

元亨利貞　四則

元亨利貞者。卦德之名也。諸儒以爲三天有二斯四德一者謬矣。如二乾爲レ天。亦後人取二其象一云レ爾。其實乾自乾。天自天。豈可レ混乎。如レ曰下易有二天道一焉。有二人道一焉。有中地道上焉。亦後人玩二其象一。則見三易有二三才之道一耳。豈必天道哉。大氐易之爲レ書。主二占筮一。故其設レ辭不下與二它書一同上。讀レ之之道。亦不下與二它書一同上。曰觀。曰玩。曰不レ可レ爲二典要一。可二以見一已。故乾元亨利貞。當二以レ易觀レ之。不下必引二天道及聖人之道一解上レ之。至二其用一レ之。則以爲二天道一亦可矣。以爲二地道一亦可矣。以爲二聖人之道一亦可矣。以爲二君子之道一亦可矣。以爲二庶人之道一亦可矣。故曰不レ可レ爲二典要一也。元者。首也。如下元首明哉。勇士不レ忘レ喪二其元一。牛曰中一元大武上。皆然。以二君卽位之年一爲二元年一。亦首之義。而首轉爲レ始也。乾坤二卦。爲二易之頭一。故曰二乾元坤元一。以二乾與レ坤爲二六十二卦之元一也。故大哉乾元。至哉坤元。皆連二乾坤一以言レ之。亨利貞則否。可二以見一已。元者。善之長也。是引二聖人之道一爲レ解。元者德之名也。如二一人元良一是也。蓋謂二君レ人之德一也。亦首象也。君レ人之德。如三堯之蕩蕩乎民無二能名一焉。是其至者也。以二堯之允恭克讓一。比二諸舜之任レ智。禹之任レ功。則可下以見中君之所二以爲レ德者上矣。湯師二伊尹一。則亦不レ及二伊尹一。武王不レ及二周公之多材多藝一。下焉者則桓

レ之。孟子既言二惻隱羞惡辭讓是非之心一。以明下先王之道率二人性一立上之。而又言レ此。以明乙不三嘗四端一。人各隨二其材質所一レ近。自然有レ所二知能一耳。皆所三以語二道之不一レ遠レ人也。王氏不レ知レ之。乃立二致良知工夫一。專求二諸己一者。謬矣。

辨名上終

曰二時中一者。謂二以レ時進退求レ合二禮義之宜一也。與二時措之宜一同意。中去聲。非二中和中庸之中一也。
衷者正也。書曰。上帝降三衷於二下民一。若レ有二恆性一。又曰。天佑二下民一作二之君一。作二之師一。言天立二
君師一。以表二正其民一。民順二其敎一。則不レ失二恆心一也。降者如下禮運降レ於二祖廟一。降レ於二山川一。降レ於二
五祀一。內則後降三德於二衆兆民一之降上。稱下君師之表二正其民一而歸二之天一者上。如二天叙天秩之天一。奉二天
道一以行レ之。古之道爲レ爾。它如三天誘二其衷一。與三天奪二之魄一相反。其人忽悟爲レ善。驁以爲レ殆二天
意一歟。故言レ天引二之正一也。折三衷於二孔子一。亦取三正於二孔子一也。謂以二孔子之言一爲レ正也。

善良　三則

善者惡之反。泛言レ之者也。其解見二孟子一。曰可レ欲之謂レ善。雖レ非二先王之道一。凡可二以利レ人救一レ民
者。皆謂二之善一。是衆人之所レ欲故也。先王之道。善之至者也。天下莫レ尙焉。故至善者賛二先王之
道一之辭也。又有二以レ人言焉者一。如丁曰二惟善以爲レ寶。曰二善則得レ之。不善則失レ之。曰丙擧レ善而敎乙
不能甲。皆指二善人一言レ之。雖レ非二聖人一。然能立レ法定レ制。可二以治レ國安レ民者。皆得レ稱二善人一焉。
有二對レ美而言者一。美以下其有二光輝一而可上レ觀言レ之。善以二其當レ義合レ宜言レ之。如二盡レ美盡レ善是也。
皆以レ樂言レ之。舊說謬矣。如二先王之道。斯爲レ美。及孟子善信美大聖神一。皆可三以觀二其字義一已。
良者謂レ無二瑕疵一也。以二其材一言レ之。如二良相。良醫。良材。良馬。三良レ 器之精良一。可二以見一
已。朱子解二易直也一。是見レ有二易直慈良之字一。妄爲二之解一已。果使三良爲二易直一。則古人何言二易直慈
良一哉。又如二良知良能一者。謂下人隨二其材質一各有中自然知能上也。非下指二惻隱羞惡辭讓是非之心一而言上

周禮又有二樂六德一。孝友祗庸中和。是樂復兼二有中和一。蓋八音五聲。相和相濟。則自然無二過不及之病一也。如丁中庸曰丙。喜怒哀樂之未レ發。謂二之中一。發而皆中レ節。謂乙之和甲。亦中和相因焉。所レ謂中者性之德也。人之稟質。本非レ若二禽獸之偏一。雖レ知愚賢不肖之有レ異。皆有二相生相長相輔相養之心一。運用營爲之才一。而隨二其所一レ習。能移二化之一。猶如下在レ中者之可二以左一可二以右一可二以前一可中以後上。故謂二之中一焉。如レ曰下人受二天地之中一以生上。亦是也。喜怒哀樂之未レ發者。謂下方二其生之初一。侗然無知之時。既有中是德上。而以見乙人之性所下以能與二先王之道一相應上故甲已。非レ謂下其不レ偏不レ倚不中與二聖人一殊上也。謂二之天下之大本一者。乃謂下聖之建レ道。乃率三人有二是性一而立レ之。天下萬事莫上レ不レ本レ焉已。發而皆中レ節者。謂下禮樂之敎。以養二人之德一。故能使中喜怒哀樂之發皆中レ節。而以見下先王之道與二人性一相和順不上レ悖已。故曰和也者天下之達道也。即率レ性之謂レ道意。非レ謂二喜怒哀樂中レ節爲レ和也。宋儒昧レ乎二古言一。又不レ知二古之道一。故其解皆誤矣。學者察レ諸。

如二周禮六德之和一者。德之名也。言人學以成レ德。有二此六德之別一也。如二柳下惠之和一。亦同。皆謂下其與レ物相和順而不中忤違上也。以爲二司空之材一者。司空掌二水土百工之事一。百工皆順二金木皮革百物之性一以作二其器一。故非三巽順相入。能和二物性一。則不レ能レ掌二其事一也。

如レ曰三允執二其中一者。謂レ行二天子事一也。古以レ執レ中爲二人君之道一。故亦稱レ行二天子之事一爲レ執レ中。不レ爾。堯曰禹謨。文意皆不レ協矣。

如レ曰三中養二不中一者。稱二美質一爲レ中。蓋世俗之言也。

不レ可三以不二勉强一者。中之謂也。祇先王之知大仁至。而其思之深遠。不三唯圖二安於一レ今。亦必養レ之成レ之以俾二永安一レ之弗一レ傾也。其所レ爲レ道。乃復有乙若下迂遠而不レ近レ乎二人情一。幽眇乎不上レ易レ識焉者甲。是聖人之所二以爲一レ不レ可二窺測一也。後世儒者其智也小。其思也淺。而其操レ志也鋭。是以不レ能レ務下遵二先王之道一。以成二德於一レ己。成中治於上レ民。顧求下以二言語一盡上レ之。其如下程朱二先生不レ偏不レ倚無二過不及一以極レ乎二精微之至一。仁齋先生唯取二易レ行者一爲レ中。而有上レ所レ擇レ乎二先王之道一者。皆坐二是病一故也。

如レ曰二中庸。中和一。皆德之名也。中庸者。謂下不二甚高一而可二常行一者上。如二孝弟忠信一是也。孔子時。禮樂不レ興。而民鮮レ有二中庸之德一。故孔門之學。以二中庸一爲レ要。辟レ諸行レ遠必自レ邇登レ高必自レ卑。所レ謂高明精微廣大者。皆自二中庸一導レ之。故子思曰。道二中庸一。雖レ有二中庸之德一。苟不レ學レ道。則不レ足三以爲二君子一。故孔子以レ民言レ之 又有下小人之中庸及擇二中庸一之文上。戰國時。又有下其材不レ及二中庸一之言上。世俗流傳。雖レ非二其本義一。亦可三以見二古言一已。如二庸字一。樂德亦有二祇庸一。用二之神祇一者爲レ祇。用二之民一者爲レ庸。書所レ謂庸庸祇祇亦然。民功曰レ庸。豈不易之義哉。宋儒昧レ乎レ辭。務爲二精微之解一。亦以命二聖人之道一。誤矣。

中和者。禮樂之德也。周禮以レ禮敎レ中。以レ樂敎レ和。和者和順之謂也。先王之制レ禮。使二賢者俯而就一レ之。不肖企而及一レ之。是中也。其制レ樂。八音五聲。相和以相濟。猶二五味之和一。以養二人之德一。以感二召天地之和氣一。亦率二人情所一レ悅。而和順以導レ之。以俾下天下之人。和二順道德一以成中其俗上。是和也。

之義一耳。仁人君子道大德宏者。其所レ行乃有三似レ枉似レ汚者一。如下孔子獵較。見二陽貨一欲上レ適二佛肸公山不狃一。皆然。後儒狹中小量。固二執孟子之言一。推二諸一切一。非矣。大氐直雖二美德一。亦一德也。如二伯玉卷而懷一レ之。其不三必直一者可レ知矣。故君子惡三舉レ一而廢二レ百。

中庸和衷 八則

中者無二過不及一之謂也。或以爲二道之名一。或以爲二德之名一。或以爲二性之名一。如下舜用二其中於一レ民。湯建二中於上レ民。是道之名也。其解見二君牙一。曰民心罔レ中。惟爾之中。蓋天下之理以レ無二過不及一爲二其至一。故人無二賢知一無二愚不肖一。惟中是求。自二生民一以來爲レ然。然人殊二其性一。所レ見以レ性殊。人殊二其居一。所レ見以レ居殊。而中不レ定焉。天下之所二以亂一也。於レ是先王建レ中以爲レ極。使二天下之民皆由一レ此以行一焉。故極或訓レ中。是中也者聖人之所二獨知一。而非三衆人所二能知一也。凡先王之所レ建。禮樂德義。百爾制度。是皆中也。是皆極也。然先王之所二以爲一レ中者。亦非レ以二己所一レ見。故建下夫不レ偏不レ倚無二過不及一精微之理上。以强二天下之民一使レ從二我所一レ好也。亦非下建二斯極一而使二學者由一レ是以求中夫不レ偏不レ倚無二過不及一精微之理上也。唯其以レ安二天下一爲レ心。故建二斯中一以爲レ極。使二天下之人皆由一レ此以行一。然後天下可三得而統一不二レ亂耳。故先王之所レ建。莫レ非下不二甚高一而人皆可二勉强行レ之者上焉。賢知者俯而就レ之。愚不肖者企而及レ之。是所レ謂中也。辟如レ建レ都。建二諸東一則西諸侯弗二之便一。建二諸西一則東諸侯弗二之便一。唯建二諸中土一。而後天下諸侯道路均矣。道路雖レ均矣。豈能一一均哉。雖レ不二一一均一矣。然亦不二甚相遠一。而人皆可二勉强以至一焉。故先王之道雖レ不レ遠レ人。而

正者邪之反。循二先王之道一。是謂レ正。不レ循二先王之道一。是謂レ邪。如二邪謀邪說一。可二以見一已。辟二諸規矩準繩一。所二以爲レ正之器也。循レ規則圓者正。循レ矩則方者正。循二準繩一則平直者正。先王之道。規矩準繩也。故循二先王之道一而後爲レ正。曾子曰。吾得レ正而斃焉斯已矣。以二大夫之簀非禮一也。經解曰。禮之於レ正レ國也。猶下衡之於二輕重一也。繩墨之於二曲直一也。規矩之於中方圓上也。詩曰。其儀不レ忒。正二是四國一。孔子曰。其身正。不レ令而行。其身不レ正。雖レ令不レ從。皆以レ禮言レ之。後世理學興焉。舍二先王之禮一而以レ理言レ之。以レ理言レ之者。取二其臆一已。取二其臆一爲レ正。是人自爲レ正。可レ謂レ妄矣。易有二中正一。其義不下與二它書一同上。宋儒蓋混レ之。是其所二以失一也。又如二大學正レ心。亦謂二心一レ於レ禮爲レ正。其書本二說下養老禮上之義一。方二其行レ禮時一。先有二忿懥恐懼好樂憂患之事一。則心不レ得レ一レ於レ禮。故曰心不レ得二其正一。養老飮食之禮。故曰食而不レ知二其味一。宋儒不レ知二以レ禮解レ之。誤矣。仲虺之誥曰。以レ禮制レ心。古之道爲レ爾。仁齋先生遂以二大學正レ心爲二佛老之歸一。皆不レ知二古言一故也。

直者曲之反。其於レ德。謂下伸二己之義一。不上レ曲二從人一也。直レ道者謂レ不レ枉二其道一也。如下三代之所二以直レ道而行一也上者。謂レ無レ所三低二昂於レ道也。仁齋先生喜言二直字一。乃以レ不レ僞爲レ直。倭人之陋也。蓋誤三解父爲レ子隱子爲レ父隱直在二其中一矣。是葉公以レ訐爲レ直。故孔子以レ隱言レ之。如二史魚之直一。豈無二隱之義一哉。擧レ直錯二諸枉一。是以二積材之道一爲レ喩。材木以レ直爲レ良。以レ枉爲二不良一。故直以喩二善人一。枉以喩二不善人一。不レ爾。皐陶伊尹之德。豈史魚之倫哉。孟子枉レ尺直レ尋。本語二出處レ

則孰若ニ浮屠之戒レ殺乎。孟子所下以ニ仁術一言上之者。欲三以誘ニ齊王一。其好レ貨之失。率如レ是耳。如下禮與ニ其奢一也寧儉上。亦謂ニ節用一也。觀レ於ニ今也純儉一。可ニ以見一已。又曰。富而好レ禮。子路曰。傷哉貧也。生無ニ以爲レ養。死無ニ以爲レ禮也。曾子曰。國無レ道。君子恥レ盈レ禮焉。國奢則示レ之以レ儉。國儉則示レ之以レ禮。子思曰。有ニ其禮一無ニ其財一。君子弗レ行也。有ニ其禮一有ニ其財一無ニ其時一。君子弗レ行也。蓋禮必備レ物。貧則不レ可レ備矣。雖レ不レ貧。然節ニ其用一而不ニ必盈レ禮。是儉也。必欲下備レ物而侈中其用上。是奢也。後儒不レ知レ本ニ諸古言一。徒謂ニ儉者不レ及之謂一。而欲三就レ禮爭ニ過不及一。其論遂致レ弗レ通。學者察レ諸。

公正直　三則

公者私之反。衆所ニ同共一。謂ニ之公一。己所ニ獨專一。謂ニ之私一。君子之道。有ニ與レ衆共焉者一。有ニ獨專焉者一。書曰。無レ偏無レ黨。王道蕩蕩。無レ黨無レ偏。王道平平。大學曰。平ニ天下一。中庸曰。天下國家可レ均也。論語曰。不レ患レ寡而患レ不レ均。又曰。公則說。是均平皆公也。內則曰。由ニ命士一以上。父子皆異レ宮。所三以全ニ其私一也。論語曰。父爲レ子隱。子爲レ父隱。孟子曰。吾聞レ之也。君子不下以ニ天下一儉中其親上。八議有レ議レ親。皆私也。是公私各有ニ其所一。雖ニ君子一豈無レ私哉。祇治ニ天下國家一貴レ公者。爲ニ人上一之道也。故孔子曰。奉ニ三無私一以勞ニ天下一。言三聖人之法ニ天道一也。及レ於ニ宋儒一以ニ天理之公人欲之私一立レ說。則求レ之太深。幾レ乎レ無レ恩焉。仁齋先生譏レ之者是矣。然遂至レ欲下併ニ論語公字一删上レ之。則亦懲レ羹吹レ虀之類已。學者察レ諸。

之二一。其爲二二德一者審矣。可レ謂レ妄已。蓋其爲レ人果敢烈烈。不レ可レ干レ之。是剛也。如二子房之勇一。豈然乎。是可三以知二剛勇之辨一也。如二易剛柔一以語二卦爻之德一。而易之道尙レ玩二其象一。玩レ象以求レ之。所レ包甚廣。故其所レ謂剛柔。不下與二宅書一同上。宋儒混而一レ之。故有二是失一已。學者察レ諸。

毅亦剛之類。以二其力有レ所レ堪言レ之。

清廉不欲　一則

清者謂レ不三爲レ惡所二汚也。如二伯夷陳文子一。可二以見一已。不欲者寡欲也。謂レ不レ汚二財利一也。廉者廉隅之義。故謂二取舍分辨截然一也。後世遂以レ不レ汚二財利一爲レ廉。後世之廉。卽古之不欲也。學者察レ諸。

節儉　二則

節者禮義之節也。禮義皆有レ所レ限而不レ可二踰越一者。是之謂レ節。節之云者。守二其限一而不二敢踰越一也。大節者。乃謂二禮義之大限一也。皆道之目也。自レ有二聖達レ節次守レ節之言一。而後世遂有二節士節婦之稱一。以命二其人之德一已。

儉者節用也。如二溫良恭儉讓一。宋儒誤以爲二聖人威儀一。遂謂二儉不一レ止二節用一者。非矣。蓋儉者仁人之道也。王者之大德也。堯舜茅茨不レ剪。土階三尺。禹惡二衣服一。菲二飲食一。卑二宮室一。豈不レ然乎。孟子所レ謂仁レ民而愛レ物。蓋古言也。謂三愛二惜物一也。因三孟子又有二愛レ牛之說一。而宋儒誤以爲二慈愛之愛一者。非也。數罟不レ入二洿池一。斧斤以レ時入二山林一。皆不レ暴二天物一之義也。若徒以二慈愛一言レ之。

見一已。周官有二大司馬一。六卿有レ事而出。皆爲二將軍一。藏二兵於一レ農。文射禮樂。男子生懸レ弧。三代君子皆帶レ劒。詩曰。文武吉甫。孔子曰。有二文事一者必有二武備一。傳曰國之大事。在二祀與一レ戎。豈不レ然乎。然君子者爲レ將者也。其勇豈武夫兵卒之比哉。是其所三以養レ勇成二其德一者。必於レ仁。必於二禮義一。故孔子曰。仁者必有レ勇。子路問二上勇一則答以二上義一。又曰。勇而無レ禮則亂。晉選レ將。郤縠以レ敦二詩書一見レ選。傳曰。勇敢强有レ力者。天下無レ事。則用三之於二禮義一。天下有レ事。則用三之於二戰勝一。用三之於二戰勝一則無レ敵。用三之於二禮義一則順治。外無レ敵。内順治。此之謂二盛德一。古之道爲レ爾。及レ於三子思作二中庸一。以二知仁勇一爲二三達德一。專用三之於二學問之道一。是或一道也。戰國而後文武殊二其術一。秦漢而後文武殊二其官一。唐宋而後又殊二其政一。故今學者習以爲レ常。謂三武非二逢掖之事一。而古意隱矣。遂執二子思之言一。而謂四儒者之勇專用三之於二學問一者。是執レ一而廢レ百者也。學者察レ諸。武以レ戡レ亂言レ之。戡レ亂不二常有一。故多言レ勇而不レ言レ武。

强勇相似。强弱之反。勇怯之反。强弱意廣。而勇怯義狹。故子路問二强者一勇也。大象曰。君子以自强不レ息。强者勉强也。上聲爲レ是。陸氏以爲二平聲一者。蓋古來以レ乾爲二聖人之德一。而其意謂二聖人無レ所二勉强一故也。嗚呼聖人亦人耳。豈無レ所二勉强一哉。亦不レ知二聖人一已。且自强平聲。不レ成レ言也。

剛柔之反。與二强勇一殊レ義。辟如二木與一レ金。木柔而金剛。至レ於レ水則至柔而物莫二能與レ之爭一。是强也。非レ剛也。剛强之分。可二以見一已。朱子曰。勇者剛之發。剛者勇之體。孔子既以二剛勇一爲二六言

諸書又有二恭敬連言者一。亦其義相關故也。先王之道。敬レ天爲レ本。故不三敢自高一。是恭敬所二以連言一故也。蓋堯舜之所四以不三敢輕二視其下一者。爲二天意不レ可レ知故也。夫或誘二其衷一。則穌驩兜。何必昔日之穌驩兜哉。芻蕘之言。豈必出二我下一哉。孔子之不三輕棄二天下一。亦天意之不レ可レ知也。故聖人之恭。敬レ天之至也。

莊。專主レ容。以レ臨レ下言レ之。上天照臨。日月星辰森如。爲二人上一者法レ之。是莊也。

謙讓遜不伐　一則

謙與レ恭相似。但恭不二敢高一也。有二卑意一。謙不二敢當一也 有二退意一。如三陳子禽曰二子爲レ恭也一。則謙也。讓爭之反。推以與レ人也。辭讓相似。辭者不レ受耳。遜不レ爭也。有二柔順意一。多以レ出レ言言レ之。其言柔順。不三與レ物忤一也。如二遜レ位揖遜一則讓也。不伐者。有レ功而不レ伐二其功一也。皆盛德之事也。君子學二禮樂一以成二其德一。則和順積レ乎レ中而其英華發レ乎レ外者如レ此。夫不伐者。禹之德也。讓者。堯舜泰伯之德也。禹之功賴二萬世一而不レ伐。大矣哉。堯讓レ舜。舜讓レ禹。正德之道於レ是乎成。而萬古帝王之道立焉。大矣哉。泰伯讓而文武之澤被二一代一。亦大矣哉。是皆非レ以二一己之節一也。非二聖人一其孰能レ之乎。自二孟子好レ辯。歸三重於二舜禹之受一。而堯舜之讓不レ明矣。悲哉。

勇武剛強毅　五則

勇。亦聖人之大德也。謂下於二天下之事一無上レ所レ懼也。蓋聖人之德。擧二其大者一。仁智盡レ之矣。而又擧レ勇以參レ之者。以二君子不レ可レ無二武備一也。故於レ經在二商書一。贊二湯之德一。始有二勇智之稱一。可二以

主宗廟朝廷之上行大禮言之。至於居不容。申申夭夭。則有不必然者焉。宋儒不知一張一弛之道。專務矜持。至於有不近於人情者焉。亦不知敬之本於敬天。而徒持其敬故耳。夫先王之道。敬天爲本。詩書禮樂。莫不皆然。故學者苟識是意。則學習之久。自有不期然而然者。何必持爲。若或以念念敬天言之。則亦與持敬何擇也。

愼獨者。謂務成德於己也。大氐先王之道在外。其禮與義。皆多以施於人者言之。學者視以爲道藝。而不務成德於己者衆矣。故又有愼獨之言。其見於傳者。唯大學中庸禮器有之。獨者對人之名。愼者留心之謂也。言道雖在外。然當留心於在我者。而務成我之德。是愼獨之義也。本非敬之謂矣。又非有未發已發之說矣。宋儒之不知學聖人之道。而直欲學聖人也。見夫至誠無息。而急欲學之。遂立未發已發之目。欲其無間斷。故有戒懼愼獨之說。又其專求諸心也。故以獨爲人不知而我獨知者。而急欲就一念之微以施其力。是皆杜撰妄說。先王孔子之道所無也。其意蓋以動容周旋中禮者爲聖人。是豈足以爲聖人哉。假使其果爲聖人。然其動容周旋所以中禮者。亦習以成德。則有不期然而然者已。豈容直就心施其工哉。夫先王之敎。如化工生物。習慣如天性。豈容力哉。宋儒之敎。如工人作器。夫玉石土木。可攻以爲器。心豈玉石土木之倫哉。故先王之敎。唯有禮以制心耳。外此而妄作。豈不杜撰乎。是其未發已發戒懼愼獨之說。自以爲動靜不遺精密之至。而終莫有遵其敎以造聖人之域者。可以知已。

肅齊莊寅恭欽畏一。其言雖レ殊。皆敬也。究下其所二以然一之故上。蓋先王之道。以レ敬レ天爲レ本。奉二天道一以行レ之。人之奉二先王之道一。將三以供二天職一也。人唯以レ天爲レ本。以二父母一爲レ本。先王之道。祭二祖考一配二諸天一。是合三天與二父母一而一レ之。是謂二一本一。君者先王之嗣也。代レ天者也。故敬レ之。民者天之所二以命レ我使一レ治レ之者也。故敬レ之。身者親之枝也。故敬レ之。是先王之道所三以敬レ天爲レ本故也。先王之道。敬レ天爲レ本。故君子之心。毋レ不レ敬。故經傳言二恭敬一。亦有レ不レ言二所レ敬者一焉。如二居處恭。居敬而行簡。脩レ己以敬一。是也。居云居處云者。如二居レ仁之居一。亦謂レ居二身於レ敬也。宋儒之學。主レ理貴レ知。故其見二六經言レ敬居レ多。而不レ得二其說一。則歸二諸心一。持敬之說、所二以生一也。蓋主レ理貴レ知者。不レ信二鬼神一。不レ敬レ天。以爲。天理也。鬼神。陰陽之靈也。理在レ我。苟能盡レ理。則天在レ我矣。是其心既傲然不恭矣。以レ此而求二敬之說一。所二以不レ得二其解一也。故徒持二其心一。不レ使二出入一。命レ之曰レ敬。夫持二其心一者亦心也。以レ心持レ心。兩者交戰弗レ已。是浮屠之下焉者猶且所レ不レ爲也。故徒欲レ持レ敬者。未レ有二能成者一矣。朱子晚悟二其非一。乃曰。有レ所レ畏而然。然未レ悟二其主レ理貴レ知之非一。則雖レ悟猶不レ悟。豈不レ哀哉。仁齋先生負二英邁之資一。抱二特見之智一。然其不レ知二古文辭一也。是以不レ能レ讀二六經一。則不レ知下敬レ天敬二鬼神一先王之道以レ此爲上レ本。故能知二朱子持敬之非一。而不三自知二其猶未レ離二宋儒之域一也。猶且傲然自高。獨任二其臆一。而岐二先王孔子之道一而二レ之。是其論レ敬而曰徒謂レ敬二民事一者。所二以有レ所レ不レ通也。豈不レ惜乎。學者察レ諸。

按經傳所レ言。有乙曰下正二其衣冠一。尊二其瞻視一。儼然人望而畏上レ之。曰二齊明盛服。非レ禮不動者甲。此

謂レ無二虛妄一已上。其所レ謂春當レ溫而反寒。夏當レ熱而反冷。夏霜。冬雷。桃李華。五星逆行。日月失レ度之類。豈可レ爲二虛妄一乎。東坡所レ謂人無レ所レ不レ至。惟天不レ容レ僞。謂二其不一レ容二人僞一已。非レ謂二天不一レ僞也。嗚呼天豈可下以二僞不僞一言上乎。是其於二今言一猶未レ知レ之。況於二古言一乎。

恭敬莊愼獨　六則

恭者。德之名也。謂レ不二自高一也。倨之反也。宋儒乃有二恭主レ容敬主レ心之說一者。非矣。凡見レ於レ貌者本レ於レ心。未レ有下心無二恭敬一而能貌恭敬者上矣。故恭敬皆在レ心。皆見レ於レ貌。恭敬之分。恭主レ己。敬必有レ所レ敬。爲レ異耳。故敬曰レ敬レ之。恭不レ曰レ恭レ之。堯之允恭。舜之恭レ己。皆謂下不二自高一。不二自聖一。不丙敢輕乙視人甲也。如下堯知二鯀之方レ命圮一レ族。四岳曰二試可乃已一。則用レ之。欲レ作二禮樂一。則登中庸舜上。是恭也。如二舜之好レ問。好レ察二邇言一。是恭也。如下孔子稱二子產一曰中。其行レ己也恭。其事レ上也敬上。恭敬之分。可二以見一已。孟子曰。責二難於一レ君。謂二之恭一。陳レ善閉レ邪。謂二之敬一。亦以レ不三輕二視其君一爲レ恭。以レ敬二其事一爲レ敬。孟子交際何心也。曰恭也。曰卻レ之爲二不恭一。何哉。曰尊者賜レ之。曰其所レ取レ之者義乎不義乎而後受レ之。以レ是爲二不恭一。故弗レ卻也。亦不三輕二視人一也。孟子稱二柳下惠不恭也一。惠之意謂天下無二有道之君一。故曰焉往而不三三黜一。其視二鄉人一。如三蜾蠃與二螟蛉一。故曰爾焉能浼レ我哉。是皆輕二視人一之甚。故謂二之不恭一。恭字之義。可二以見一已。

敬者。謂下有レ所二尊崇一而不中敢忽上也。如下敬レ天。敬二鬼神一。敬レ君。敬レ上。敬二父母一。敬レ兄。敬中賓客上。皆以レ有レ所レ敬言レ之。仁齋先生駁二宋儒持敬一者是矣。祇歷二觀六經一其言レ敬者居レ多矣。如二祇

然其意謂誠者天地之德也。鬼神之德也。性之德也。聖人之德也。天地鬼神。皆無思慮勉强之心者也。故以誠爲其德。雖匹夫匹婦之愚不肖。其所得於性者。皆不思而知。不勉而能。故曰性之德也。性者人之所得于天。故曰誠者天之道也。聖人之於道。皆不思而得。不勉而中。故以至誠稱之。誠之者。謂學先王之道。久與之化。習慣如天性。則其初所不知不能者。今皆不思而得。不勉而中。是出於學習之力。故曰誠之者人之道也。道在外。性在我。習慣若天性。道與性合而爲一。故曰合外內之道也。故其大要在學以成德。成德則能誠。是中庸言誠之大略也。大學誠意亦爾。謂物格則知至而自然意誠也。其用功全在格物。而知至以下。皆其效已。文言所謂修辭立其誠。亦謂學禮樂以成德已。宋儒昧乎古言。加以好尙之偏。故其解二書。皆失文義。或以誠爲實理。爲實心。爲眞實無妄。種種之解。益精益鑿。皆不得於辭之失也。如仁齋先生以誠意與誠身爭其優劣。殊不知身者我也。凡身心相對。出于佛書。如吾聖人之敎。凡言身者。皆對道藝言之。道藝雖在外。習之熟。則成德於我。是謂誠身。德成則知自至。知至則其好仁。如好好色。如惡惡臭。其用功全在習道藝而熟之。大學中庸。豈有異義哉。如誠於中形於外。學者難其解者。緣孟子性善所錮已。中庸所謂生知安行者。何唯聖人哉。匹夫匹婦。皆有所生知安行。如饑而食。渴而飮。皆不思而得。不勉而能。亦生知安行也、故習惡成性者惡亦誠矣。是誠本非先王所以爲敎者。子思爲欲闢老氏。故始發此義。豈必執以爲美德哉。又如仁齋先生以無妄無僞爭其優劣。亦不知朱子意

王之道爲二安民一設レ之。而長レ之成レ之輔レ之養レ之之意。無二往不一レ在。則不二唯恕字爲一レ然已。乃懲レ於二宋儒刻薄之弊一。故有二是說一耳。又不レ知下論語多中注入二正文一者上。故於下曰二其恕乎一、曰中己所レ不レ欲勿上レ施レ於レ人。而疑二其意重複一也。至レ於レ引二子貢所一レ謂我亦欲レ無レ加二諸人一。則亦自不レ知レ蹈二宋儒之誤一也。大氏忠信僅足レ爲二學問之基一。而忠恕乃爲二依レ於レ仁之方一。故古人言二忠恕一者。大レ於二忠信一。學者思レ諸。

誠　一則

誠者。謂發レ於二中心一。不レ待二思慮勉强一者也。纔欲レ誠則涉二思慮勉强一。故誠者不レ可二得而爲一者也。故先王孔子之敎。有二忠信一而無レ誠。以二其不一レ可二以爲一レ敎也。其見二傳記一者。曲禮曰。禱二祠祭祀一供二給鬼神一。非レ禮不レ誠不レ莊。是誠者天地之德也。鬼神之德也。故禱二祠祭祠一貴レ誠。然誠者不レ可二得而爲一者也。由レ禮行レ之。自然誠至。故云レ爾。檀弓曰。伯高之喪。孔氏之使者未レ至。冉子攝二束帛乘馬一而將レ之。孔子曰。異哉。徒使二我不一レ誠レ於二伯高一。是伯高既死。死者無レ知。故孔子惡レ不誠。又曰。喪三日而殯。凡附レ於レ身者。必誠必信。勿二之有一レ悔焉耳矣。三月而葬。凡附レ於レ棺者。必誠必信。勿二之有一レ悔焉耳矣。是言凡有下發二我中心一所レ欲レ爲者上。則爲レ之而無二復顧慮一。是誠也。信謂レ不レ疑也。凡心有二所一レ不レ安者。則不レ爲。是信也。皆待二死者一之道也。郊特牲曰。用レ犢。貴レ誠也。是祭レ天。與三天子適二諸侯一。膳皆用レ犢。犢無知者也。天之德誠。故用レ之。尊二天子一。比レ於二天一。故亦用レ之。僅此類已。及レ於三老氏之徒謂二先王之道爲一レ僞。而子思作二中庸一。言レ誠者始盛焉。

必罰之類一。則別爲二約信之解一。可レ謂レ蔓已。仁齋先生又曰。忠信皆就二接レ人上一言。是措辭之未レ善也。忠在二事レ君及爲レ人謀一。豈特交際乎。又曰。忠信有下朴實不レ事二文飾一之意上。是亦見三彼忠信之人可二以學一レ禮而妄解者也。不レ可レ從矣。至レ於下先儒以二忠信一如二形影一者上。則仁齋先生駁レ之是矣。

恕　一則

恕之解。見二論語一。曰己所レ不レ欲。勿レ施レ於レ人。是也。此八字。一見レ於レ答二仲弓一。是正文也。再見レ於レ答二子貢一。是註入二正文一也。上文曰其恕乎。傳二論語一者。乃以二此八字一解二恕字一耳。故中庸曰。忠恕違レ道不レ遠。施二諸己一而不レ願。亦勿レ施レ於レ人。是也。祇恕於レ文。如心爲レ恕。故己之所レ欲。以施レ於レ人。亦恕也。然其事廣大。非二學者所一レ能。且人心不レ同。所レ欲或殊。故止以二己所一レ不レ欲言レ之耳。孔子曰。能近取レ譬。可レ謂二仁之方一也已。近譬二諸己心一。是恕也。仁者己欲レ立而立レ人。己欲レ達而達レ人。是乃未レ能二立レ之達一レ之。則僅不レ施二其所一レ不レ欲已。故曰仁之方也。忠恕連言者。忠亦以レ恕行レ之。爲レ人謀代二人之事一者。亦近譬二諸己心一。而後能視二人之事一如二己之事一也。程子以レ推レ己爲レ解。無二不可者一。祇己所レ不レ欲。勿レ施レ於レ人。此古來相傳之説。何更爲レ解。而程子更爲レ解者。乃嫌二其止言レ所レ不レ欲。而不レ言レ所レ欲。其義似レ窄故已。然槩以レ推レ己爲レ説。則或至レ於下以二小人之腹一窺中君子之心上者。亦有レ之。唯務二明白齊整一。而不レ能二深長思一レ之。宋儒之病皆爾。仁齋先生曰。有二寛宥之意一。又有二忖度之意一。言每忖二度人之心一。而不下以二刻薄一待上レ之。乃引二書札中恕宥恕察等文一。然其義皆盡レ於二己所レ不レ欲勿レ施レ於レ人八字之中一矣。且所レ謂寛宥不二刻薄一者。先

忠信連言。亦以ニ爲ㇾ人謀與ㇾ人言者一言ㇾ之。如ㇾ主ニ忠信一。亦以ㇾ此爲ㇾ主也。忠信之人。亦謂ニ能ㇾ此之人一也。曰主ニ忠信一徙ㇾ義。曰忠信之人。可ニ以學一ㇾ禮。禮義者。先王之道也。忠信者。中庸之德也。登ㇾ高必自ㇾ卑。行ㇾ遠必自ㇾ邇。故學ニ先王之道一。必以ニ忠信一爲ㇾ基。如下易文言曰中。忠信。所ニ以進一ㇾ德也。脩ㇾ辭立ニ其誠一。所ニ以居一ㇾ業也上。脩ㇾ辭謂ㇾ學ニ詩書一也。立ニ其誠一謂ㇾ學ニ禮樂一也。詩書者義之府也。故與三徙ㇾ義可ニ以學一ㇾ禮。其意相發。孔子曰。十室之邑。必有ニ忠信如ㇾ丘者一焉。不ㇾ如ニ丘之好一ㇾ學也。則雖ㇾ有ニ忠信一。不ㇾ學未ㇾ免ㇾ爲ニ鄉人一也。祇學ニ先王之道一。不ㇾ依ニ中庸之德一。則基之不ㇾ立。欲ニ行ㇾ遠登一ㇾ高亦不ㇾ可ㇾ得矣。是孔門所三以貴ニ忠信一之意也。孝悌忠信。均爲ニ中庸之德一。乃舍ニ孝悌一。獨以ニ忠信一言ㇾ之者。蓋其人未ㇾ學而能孝悌。是得ニ諸性一者也。其人或厚ㇾ於ㇾ內而薄ㇾ於ㇾ外。則未ㇾ可ニ以施一ㇾ於ㇾ人焉。先王之道。爲ニ安民一設ㇾ之。故多主ニ施ㇾ於ㇾ人者一言ㇾ之。忠信皆施ㇾ於ㇾ人者也。且有下以ニ它人之事一爲ニ己任一意上。故特以ニ忠信一言ㇾ之者。近ㇾ於ㇾ道也。程子曰。盡ㇾ己之謂ㇾ忠。以ㇾ實之謂ㇾ信。此見下彼主ニ忠信一等之言上。而謂下徙以ニ爲ㇾ人謀與ㇾ人言者一言ㇾ之嫌上乎ㇾ狹。故作ニ是解一。亦不ㇾ知下先王之道爲ニ安民一設上ㇾ之。而動求ニ諸己一故已。且盡ㇾ己未ㇾ足三以盡ニ忠字之義一。今人爲ニ宋儒之學一者。爲ㇾ人謀而不ㇾ聽。則多皆舍去。不ニ復顧一ㇾ之。曰我既盡ニ我之心一矣。是不ㇾ知三忠字有ニ懇到周悉之意一故也。以ㇾ實亦非ニ信字之義一矣。程子動求ニ諸心一。故作ニ是解一已。古止就ニ言語上一言ㇾ之。豈必求ニ諸心一乎。仁齋先生曰。凡與ㇾ人說。有便曰ㇾ有。無便曰ㇾ無。多以爲ㇾ多。寡以爲ㇾ寡。不ニ一分增減一。方是信。卽宋儒之說也。亦不ㇾ知下古止以ニ施ㇾ於ㇾ人者一言上ㇾ之。故至ㇾ於ニ信近ㇾ於ㇾ義。信賞

傳。小大之獄。雖レ不レ能レ察。必以レ情。忠之屬也。可二以見一已。子以レ四教。文行忠信。忠爲二政事之科一。政事者代二君之事一。故以レ忠命レ之。

信者。謂二言必有一レ徵也。世多以三言無二欺詐一解レ之。苟以二言必有一レ徵爲レ心。則無二欺詐一不レ足レ道。如二信近レ於レ義言可レ復也一。是其言雖レ有レ徵。必欲レ合二先王之義一。若言不レ合レ義。則雖レ欲レ踐二其言一亦有二不レ可レ得者一。其究終至レ無レ徵也。朱子引二約レ信曰一レ誓而訓レ信爲レ約。是不レ知二其解一已。又如二民無レ信不一レ立。謂三民信二其上一也。愼二其號令一。不二敢欺一レ民。則民信レ之矣。然信レ之而畏。不レ如二信レ之而懷一。故必能爲二民父母一。而後民信レ之至焉。它如下人而無レ信。不レ知二其可一也。及言忠信。行篤敬。雖二蠻貊一行上矣。皆主レ爲レ見レ信而言レ之。大氐先王之道。爲二安民一立レ之。故君子之道。皆主レ施レ於レ人焉。苟不レ見レ信レ於レ人。不レ見レ信レ於レ民。則道將安用レ之。然不レ見二信之本在一レ我。君子貴レ信者。爲レ是故也。如下與二朋友一交。言而有上レ信。亦雖二朋友之交一。非レ若二事レ親竭レ力事レ君致レ身之比一。故淺乎言レ之。然朋友者。所下以游二揚其聲譽一。達中之於上レ上者也。故中庸曰。獲レ乎レ上有レ道。不レ信レ乎二朋友一。不レ獲レ乎レ上矣。是先王所下以立二朋友之道一命レ之爲上レ信也。後之君子或嫌下其有レ所レ求而爲上レ之。故止責二其信一。而不レ及二見レ信之意一。其弊或至レ於二獨立絕レ物以爲一レ高也。矯枉之言終非下先王爲二道不一レ遠レ人之意上。學者察レ諸。又如二文行忠信一。信爲二言語之科一。言語之道。貴レ有レ徵。故以レ信命レ之。如レ曰二言有一レ物。是君子之言所二以有一レ徵故也。如二後世諸儒一。議論雖レ美。空言無レ徵。豈敢望二宰我子貢言語之科一哉。

孝悌不レ待レ解。人所二皆知一也。但古稱二至德一者三。泰伯之讓。文王之恭。及孝稱二至德要道一。是也。人無二貴賤一。莫レ不レ有二父母一。父母生二之膝下一。如二它百行一。或强壯乃能行レ之。唯孝。自レ幼可レ行。它百行。或非レ學無二能行一レ之。唯孝。心誠求レ之。雖レ不レ學可レ能。親者身之本。身者親之枝。故人君必以下繼二其志一述中其事上爲二孝之至一。臣下必以下立レ身揚レ名顯中其父母上爲二孝之至一。唯孝可三以通二神明一。唯孝可三以感二天地一。是其所三以爲二至德一也。和二順天下一。必自二孝弟一始。故先王立二宗廟養老之禮一。以躬教二天下一。是其所三以爲二要道一也。孝弟忠信。孔門蓋謂二之中庸一。以下其爲中不二甚高一人皆可レ行之事上。故學二先王之道一。必由二孝弟一始。辟レ諸登レ高必自レ卑。行レ遠必自レ邇。孟子曰。堯舜之道。孝弟而已矣。是之謂也。謂四其可三以馴二致仁賢之德一也。雖レ然。後儒喜二論説一之甚。遂以二仁孝一一レ之。非也。孝自孝。仁自仁。君子惡二擧レ一以廢一レ百。假使二一孝而足一矣。則江革王祥既爲二聖人一焉。故孔子曰。行有二餘力一。則以學レ文。言雖レ有二孝弟一。不レ學未レ免レ爲二鄉人一也。是又學者所レ當レ知焉。雖レ然。周官師氏既立二至德一。敏德。足三以盡二一切一。更立二孝德一以教レ之。可レ見雖レ有二它不善一。苟有二孝德一。則先王所レ取也。先王之重レ孝若レ是夫。

忠信　三則

忠者。爲レ人謀。或代二人之事一。能盡二其中心一。視若二己事一。懇到詳悉。莫レ不レ至也。或以レ事レ君言レ之。或專以レ聽レ訟言レ之。聽訟亦事レ君居レ官之事。然五刑之屬三千。至爲二繁細一。而民之懷レ詐。獄訟之情難レ得。彼此構レ怨。苟非三能體二其情一。則不レ得二其平一。故周禮六德。忠爲二司寇之材一焉。左

言一。自取二諸其臆一。以求レ勝墨氏尙レ仁。楊氏及刑名諸家。無レ仁亦無レ義。遂以二仁義一。命二諸聖人之道一。有二以別一レ之。而不レ知レ遺レ乎レ禮。如下表記所レ謂厚レ於レ仁者薄レ於レ義。親而不レ尊。厚レ於レ義薄レ於レ仁。尊而不レ親。及孟子以二惻隱之心一爲レ仁。羞惡之心爲上レ義是也。是其意以レ救レ民爲レ仁。誅二亂賊一爲レ義。如二日月之代照一也。如二刑賞之迭用一也。然後道備而不レ偏焉。其言井然若レ有二條理一焉。粲然若レ可レ聽焉。而自不レ知下其與二先王孔子之道一背馳上也。夫天地有二生殺一。人有二善惡一。故聖人固好レ善而惡レ惡。刑賞於レ是乎生。然聖人之所二以好レ善而惡レ惡賞レ之刑一レ之者。仁而已矣。故其立二禮義一也以レ此。君子之行二禮義一也亦以レ此。故仁義竝言者非矣。孟子諸家之意。亦從三夫義有二差別一而見二其有レ所レ不レ爲之意一。又推二諸人心一以見二惡レ惡之心之爲一レ義。遂配二諸仁一以命レ道焉。蓋其初以二仁義一贊レ乎レ禮。則物尙在焉。其卒直以二仁義一命二諸道一。則遂失二其物一。學者徒以二仁義之名一求レ道故也。亦由下其時論說方盛。喜言二其精微一。而義離レ禮而孤行上。古言漸廢故耳。自レ此之後。仁義之道。遂爲二千萬世儒者之常言一。亦不レ稽二諸古一之失也。觀下彼後世君子若二宋諸老先生一者上。其語レ學也。務言下脩レ善而去レ惡。擴二天理一而遏中人欲上。而不レ知下先王之敎唯導二其善一而惡自消上也。其語レ治也。務言下賞二君子一而罰中惡人上。而不レ知下先王之道唯在レ擧二仁者一而不仁者自遠上也。其論レ人也。務備二其長短得失一。而不レ知下先王之道唯在レ用二其長一而天下無中棄才上也。察二其源一。亦未下必不中自二孟子一導上レ之。則毫釐千里之差。豈可レ忽乎。學者審レ諸。

孝悌　一則

體也。得レ之者尊上。說卦傳曰丙。立二人之道一曰乙。仁與レ義。是也。夫先王之道雖レ博乎。莫下不レ歸レ於二安民一者上。是所レ謂仁也。然仁不レ可三以レ言盡二焉。故作二禮樂一以敎レ之。是所レ謂藝也。義亦先王所レ立。詩書所レ載是也。先王之敎。立二禮義一以爲二人之大端一。故書論語中庸皆以二禮義一竝言。而不下以二仁義一竝言上。何則仁者大德也。非二義之倫一也。禮義皆道也。非レ德也。仁義竝言。則比二其非レ倫而遺レ乎レ禮。故古之敎不レ然。然至レ於三論二說道藝一。則有レ時乎以二仁義一竝言。如二禮運說卦之言一焉。禮運之所二論說一者在レ禮也。故以二仁義一贊二禮之德一已。先王之禮雖レ繁乎。莫下不レ歸レ於二安民一者上。則仁其統也。經禮三百。威儀三千。皆有レ義存焉。是仁統二其全一。而義分二其細一。故曰藝之分。仁之節也。集二衆義一而禮立焉仁成焉。故曰協レ於レ藝。講レ於レ仁。講如下講若二畫一一之講上。說卦之所二論說一者在レ易也。故亦以贊二易之德一已。陽大而莫レ不レ統焉。故喩以レ仁。陰小而有レ所レ別焉。故喩以レ義。陰陽相須。不レ可二得而離一。渾渾淪淪。何往非レ仁。差差別別。何往非レ義。是易禮運皆雖下以二仁義一竝言上。然未下嘗岐二仁義一以二一上之。其所二以不一レ盭レ於レ道也。又如下樂記曰。仁以愛レ之。義以正レ之。春作夏長仁也。秋斂冬藏。義也。大傳曰。自レ仁率レ親。等而上レ之至レ于レ祖。名曰レ輕。自レ義率レ祖。順而下レ之至レ于レ禰名曰レ重。鄕飲酒之義曰中天地嚴凝之氣。始レ於二西南一而盛レ於二西北一。此天地之尊嚴氣也。此天地之義氣也。天地溫厚之氣。始レ於二東北一而盛レ於二東南一。此天地之盛德氣也。此天地之仁氣也上凡此之類。亦雖下皆論二說道藝一之言上。然斯已岐二仁義一而二レ之。有下以盭レ乎二孔門之舊一者上也。及二其末流一。聖人之澤將レ斬。儒者之道日卑。紛然與二百家一爭三衡於二戰國之際一。唯咸輔頰舌是務。不三復道二先王之法

喩レ於レ義。小人喩レ於レ利。是民以二營生一爲レ務。故以二財利一爲レ心者。民之業爲レ爾。君子學二先王之道一。仕以共二天職一。故以レ義爲二其道一也。理レ財正レ辭。禁二民爲一レ非。亦略擧二仕者所レ務官守之事一言レ之。理レ財者。冢宰司徒司空之事。正レ辭者。宗伯之事。禁二民爲一レ非者。司馬司寇之事也。

古以二詩書一爲二義之府一。書者帝王大訓。萬世奉以爲レ道。而其片辭隻言。足二援以斷一レ事。故謂二之義之府一者。不二亦然一乎。至レ於三詩之爲二義之府一二。則人多難二其解一矣。夫古之詩。猶二今之詩一也。其言主二人情一。豈有二義理之可一レ言哉。後儒以爲二勸善懲惡之設一者。皆不レ得二其解一者之言已。蓋先王之道。緣二人情一以設レ之。苟不レ知二人情一。安能通二行天下一莫レ有レ所二窒碍一乎。學者能知二人情一。而後書之義神明變化。故以レ詩爲二義之府一者。必併レ書言レ之已。是先王之敎所二以爲一レ妙也。豈淺智之所二能知一乎。」

有下曰二德義之經一者上。德以レ人言レ之。義以レ事言レ之。故古有二是言一。如二德之則。義之府一。亦以二德義一對言。

有レ曰二天之經。地之義一也。贊レ禮之言也。經者。謂下禮之大者。能持二衆義一。如中經緯之經上焉。義者。謂二禮之細者。各制二其宜一焉。所三以謂二之天地一者。贊辭已。

仁義並稱。六經論語。莫レ有二是言一矣。主レ行之故也。七十子而後。以三論二說道藝一爲レ務。論說之弗レ已。日見二其趣一。愈益自喜以言レ之。亦自不レ覺二其流一レ於レ玩二先王之道一也。是勢之所二必至一。道之汚隆繫焉。於レ是乎以二仁義一並言。遂至レ於三以命二先王之道一已。其初去二聖人一未レ遠。故其言亦不レ盭レ於レ道。如丁禮運。曰下義者藝之分。仁之節也協レ於レ藝。講レ於レ仁。得レ之者强。仁者義之本也。順之

臆一。則亦朱子之意而易二其辭一者已。若取二諸先王之義一。則豈可二以爲一レ德乎。其謬可レ見已。嗚呼先王之制レ義。誠亦上無レ所レ稽。而獨取二諸其心一。是其所三以爲二聖人一也。後之君子。學成二其德一者。其或一二取二諸其心一者。亦何無レ之。然是又非二人人所一レ能矣。無二規矩一故也。後儒之敎レ人。乃舍二先王之義一。而使三自取二諸其臆一。豈不レ謬乎。是無レ它。不レ知二孟子之言皆有レ所レ爲而言一レ之。而必欲下援二其言一以爲上レ解故也。辟下諸醫以レ藥治レ病。病愈後。猶服二其藥一弗上レ已。惑之甚者也。

古者未レ有下以レ義爲二德之名一者上。唯周禮六德有レ之。蓋以二大司馬之材一言レ之也。大司馬掌二賞罰黜陟軍旅田獵之事一。而賞罰黜陟。以レ當レ乎レ義爲レ貴。軍旅田獵。皆取レ當レ於二急遽之際一。故非下熟レ於二先王之義一。應變不レ謬者上不レ能已。然是士君子之本業。凡仕者皆然。故它書莫レ有二以爲レ德者一也。如下曰二義士也一。曰中義人也上。皆以二其所レ爲合一レ乎レ義。遂贊二其人一言也。皆以二一事一言レ之。其實非三以爲二德之名一也。

如レ曰二君臣有一レ義也。主レ臣言レ之。蓋君統二其全一者也。先王之道。在二安民一。是以非二仁人一則不レ能レ任レ道矣。故曰爲二人君一止レ於レ仁。臣亦任二先王之道一者也。然君統二其全一。而臣任二其分一。各有二官守一。各有レ所レ事。千差萬別。非レ義則不レ能。故以レ義爲二臣之道一也。如三敎レ子以二義方一。亦謂二敎レ臣之道一也。各有二官守一。彼不レ通レ此。是之謂レ方。唯義爲レ爾。論語曰。君子之仕也。行二其義一也。又曰。行レ義以達二其道一。謂三仕以行二其所レ學先王之義一也。

易大傳曰。何以聚レ民。曰財。理レ財正レ辭。禁二民爲一レ非。曰レ義。論語曰。見レ利思レ義。又曰。君子

合レ義焉。猶三之行二百里一。諸侯朝二天子一。見レ日而行。逮レ日而舍奠。大夫使。見レ日而行。逮レ日而舍。見レ星而行者。唯罪人與下奔二父母之喪一者上。是所レ謂禮也。去二父母之邦一。遲遲吾行。豈窮二日之力一哉。是所レ謂義也。故理雖レ不レ學可レ知。而若二禮與一レ義。非二君子一則不レ能レ知レ之。故人之不レ爲二非理之事一。未レ足三以爲二君子一。唯不レ爲三非禮與二非義一。然後可三以爲二君子一也。故以二義理一竝言者。不レ知レ義者之言也。人有二恒言一曰。是某詩之義也。是某字之義也。是豈有二裁割斷制之意一哉。亦以二古來相傳者一命爲レ義已。如三詩有二六義一。亦豈裁割斷制之意哉。以謂用レ詩之道。古來相傳。有二此差別一已。又如二老子所レ謂失レ道而後德。失レ德而後仁。失レ仁而後義。失レ義而後禮一。是雖レ譏二聖人之道一乎。亦可レ見下古人以二古言一言上レ之。其意以二仁義禮一爲二先王所一レ造。爲レ非二自然之道一。故有二是言一已。告子義外之說亦然。若使二告子果不一レ知レ義。則孟子必辯レ之。觀レ於下孟子不レ爾。而但辯中其內外上。則知二告子之言不一レ誤也。是老子告子孟子。皆以二先王之義一爲レ義也。孟子曰。羞惡之心。義之端也。又曰。人皆有レ所レ不レ爲。達三之於二其所一レ爲。而義不レ可二勝用一也。是裁割斷制之說所レ本也。夫人皆有二羞惡之心一。是故匹夫匹婦自經二於溝瀆一以死。是豈義哉。且人之所レ不レ爲者。豈皆合レ於レ義乎。孟子而以レ此爲レ義。亦妄已。故知二孟子之意必不一レ爾也。古之君子。行二一事一。出二一謀一。不レ取二諸其臆一。而必稽二諸古一。援二先王之禮與一レ義以斷レ之。是以古人有レ所二論說一。必引二詩書一者。以二斯道一也。又如二仁齋先生一以レ義爲レ德。其言曰爲二其所一レ當レ爲。而不レ爲二其所一レ不レ當レ爲。之謂レ義。是據二孟子之言一爲二是解一。然其所レ謂所レ當レ爲所レ不レ當レ爲者。吾不レ知自取二諸其臆一歟。將取二諸先王之義一歟。若自取二諸其

義。亦先王之所レ立。道之名也。蓋先王之立レ禮。其爲レ敎亦周矣哉。然禮有二一定之體一。而天下之事無レ窮。故又立レ義焉。傳曰。詩書義之府也。禮樂之則也。禮樂相須。樂未レ有二離レ禮孤行者一。故曰禮義也者人之大端也。禮以制レ心。義以制レ事。禮以守レ常。義以應レ變。擧二此二者一。而先王之道庶乎足三以盡二之矣。故古者多以二禮義一對言。爲レ是故也。人多知三禮爲二先王之禮一。而不レ知三義亦爲二先王之義一。故其解皆不レ通矣。蓋義者道之分也。千差萬別。各有レ所レ宜。故曰義者宜也。先王既以二其千差萬別者一。制以爲レ禮。學者猶傳下其所二以制一之意上。是所レ謂禮之義也。而其以二空言一傳者。是所レ謂義也。故禮義皆自レ古傳レ之。豈非二先王之義一乎。韓退之曰。行而宜レ之之謂レ義。朱子曰。義者。心之制。事之宜。是皆不レ知三義爲二先王之義一。乃取二諸臆一以爲レ義也。夫取二諸臆一以爲レ義。是非義之義所二由生一也。朱子本レ於二孟子義內之說一。然孟子之意。亦謂下先王率二人性一以立レ道。故義有上レ所レ合レ於二人心一耳。豈以レ義爲レ性乎。其在二先王一。誠亦取二諸其心一焉耳矣。然先王之意本爲二安民一故也。且其聰明睿智之德。通二天地之道一。盡二人物之性一。故所二立以爲一レ義者。千差萬別。各合二其宜一。是豈人人所レ能哉。且不レ知下義以二安民一爲上レ本。徒據二宋儒之說一。取二諸其臆一以爲レ義。是後世之說。雖レ若レ可レ觀。而其所二以盭一レ於二先王之道一者。爲レ是故也。又如下以二裁制決斷一爲上レ義。亦執二先王之義一而以二此裁制決斷一已。苟不レ知二先王之義一則猶空手裁レ物。安能レ之乎。又人多以二義理一竝言。如三程子曰。在レ物爲レ理。處レ物爲レ義。是也。是亦不レ知レ義者之言也。假如下日行可二百里一。而不上レ可二二百里一。是理也。必求二其二百里一。是非レ理也。一日而百里。二日而二百里。是謂三之合レ理而已矣。未レ得レ謂二之

與二一事一。亦皆祀二祖宗一配二之天一。而以下天與二祖宗一之命上出レ之。以二卜筮一行レ之。古之道爲レ爾。後儒不レ識二其意一。而以爲天者自然也。謂三自然有二是禮一也。是其天理節文之所二本自一。殊不レ知以レ天爲二自然一者。老莊之意。而古所レ無焉。若果使二禮自然有一レ之。則知二三代一殊二其禮一。其謂二之何一。故其究。不レ得レ不下以二天理一爲二精微一。以レ禮爲中粗迹上。苟得二其精微一。則若二其粗迹一。左レ之亦可。右レ之亦可也。然則如曰二先王制一レ禮。而弗二敢過一也。先王制レ禮。不二敢不一レ至焉。亦何守二其粗迹一。若レ是其嚴也。故其究。亦不レ得レ不下外二三代之禮一而別立中一定不易之禮上矣。故程子曰。成王之賜。伯禽之受。皆非也。夫周禮者。周公所レ立。成王伯禽親受二之周公一。而旣爲二非禮一。則程子所レ謂禮豈非下外二周禮一而別有上レ之乎。嗚呼外二先王之禮一而別二立己所レ謂禮一。其僭妄亂道之極。可二以見一已。

周禮以レ禮敎レ中。是或釋者之言。誤入二經文一者已。然亦古之言也。蓋先王立レ禮。以爲二民極一。極中也。使二賢者俯而就一レ之。不肖者企而及レ之。故謂二之中一焉。非乙使下人求中無二過不及一之理上以爲甲レ禮也。書曰。民心罔レ中。惟爾之中。是所レ謂中者。聖人所二獨知一。而非二衆人所一レ及。故立レ禮以爲二民極一也。後世義理之學盛。而儒者唯義理是視。不レ知三就レ禮以求二其中一。徒取二中其臆一。而謂三是可二以合一レ禮焉。如下周子以二中正一易中禮智上。是也。人間北看成レ南。東家之西。西家爲レ東。恣以二其意一言レ之。而中於レ是乎移。極於レ是乎壞。豈不レ悲乎。且聖人之立レ禮也。慮二世之日趨一レ文也。故其以爲レ中者。豈必無二過不及一之謂乎。學者思レ諸。

義　八則

理爲精微。故以序和言之。豈不老莊之遺乎。叚使其言之是乎。先王之不以序和爲教。而故作禮樂。是其智不及程子。不爾。亦喜故難人也。且序豈足盡禮而和盡樂乎。可謂鹵莽已。朱子釋禮曰。天理之節文。人事之儀則。是其意亦非不識禮爲先王之禮。然既以爲性。則難乎其言。故以天理彌縫之。而謂禮雖在彼乎。其理具于我。則禮庶乎可以爲性云爾。亦佛氏事理無礙之說耳。此皆不善讀孟子之失也。試觀孟子。既曰恭敬之心。禮也。而又曰辭讓之心。禮之端也。則知其心急於爭內外。不復擇言。任口言之。故或以恭敬。或以辭讓。初無定說焉。夫恭敬辭讓之不足以盡禮。雖孟子豈不知之乎。祇以行禮之心言之。而不及禮之義。則亦謂先王率人性以立道。而不直以爲性者。豈不章章乎哉。如仁齋先生以仁義禮智爲德亦爭性與德之名耳。其實亦不出宋儒之見也。故其釋禮曰。尊卑上下。等威分明。不少踰越。其舍先王之禮而爲是言。豈勝宋儒而上之乎。且其言但以在外者言之。而不與孟子恭敬辭讓之心相應。亦自與其以爲德者相盭。何況足以盡先王之禮乎。嗚呼先王之思深遠也。在千載之上。而既知言語之教不足以盡乎道。是故制作禮樂以教人。而後之學者猶且舍其教。唯言語是務。夫舍其禮而不使學。而欲以己之言盡夫先王之禮。多見其不知量已。辟諸舍彼規矩準繩而不用。曰汝苟用吾言。則雖舍規矩準繩。亦足以爲方圓曲直焉。豈不妄哉。

書曰。天秩有禮。是堯舜之制禮。奉天道以行之。所以神其教也。如三代天子。出一政。

學之。小人由レ之。學之方。習以熟レ之。默而識レ之。至レ於二默而識一レ之。則莫レ有レ所レ不レ知焉。豈言語所二能及一哉。由レ之則化。至レ於レ化。則不レ識不レ知。順二帝之則一。豈有二不善一哉。是豈政刑所二能及一哉。夫人言則喩。不レ言則不レ喩。禮樂不レ言。何以勝レ於二言語之敎一レ人也。化故也。習以熟レ之。雖レ未レ喩乎。其心志身體。既潛與レ之化。終不レ喩乎。且言而喩。人以爲其義止レ是矣。不三復思二其餘一也。是其害。在レ使二人不一レ思已。禮樂不レ言。不レ思不レ喩。其或雖レ思不レ喩也。亦未レ如二之何一矣。則旁學二它禮一。學之博。彼是之所二切劘一。自然有二以喩一焉。學之既博。故其所レ喩。莫レ有レ所レ遺已。且言之所レ喩。雖二詳說一レ之。亦唯一端耳。禮物也。衆義所二苞塞一焉。雖レ有二巧言一亦不レ能三以盡二其義一者也。是其益在二默而識一レ之矣。先王之敎。是其所三以爲二至善一也。是禮樂之敎。雖レ在二默而識一レ之。然人之知。有レ至焉。有レ不レ至焉。故孔子有レ時乎。擧二一隅一以語二其義一。義者先王所二以制一レ禮之義。藏記所レ載皆是已。祇人之知。有レ至焉。有レ不レ至焉。故七十子之信二先王一者。不レ及三孔子之信二先王一也。其人之信二七十子一者。亦不レ及三七十子之信二孔子一也。故其欲レ喩レ人之急。論二說其義一之兆レ已。日以蔓衍。以至レ於二戰國之時一。義遂離レ乎レ禮而孤行。不三復就レ禮言二其義一。觀二孟子書一可レ見已。自レ此其後。去レ古益遠。義理之說益盛。囂然以亂二天下一。先王孔子之敎。蕩乎盡焉。悲夫。如下漢儒以二仁義禮智一爲上レ性。乃本レ於二孟子仁義禮智根一レ於レ性。然孟子豈以レ此爲レ性乎。仁智德也。禮義道也。先王率二人性一以立二道德一。故孟子謂レ根レ於レ性耳。祇其好レ辯。與二外人一爭。口不レ擇レ言。取二諸臆一以言レ之。致二其旨遂晦一也。至レ於二程子一解二禮樂一。專以二序和一爲レ言。是其意以二禮樂一爲二粗迹一。以二其

レ可レ測者一。而以二不レ可レ學者一強二之人人一。其究必立二德之至者一以律レ之。則其優二劣古聖人之德一。亦勢之所二必至一也。其說雖レ根レ於二孟子一。然所二附益一豈小小哉。要レ之不學之過也已。豈不レ悲乎。聖人賢人之名。古亦未レ有レ所三階二級之一也。唯聖人以命二作者一。而賢人者以二材德一言レ之。拔レ乎二其萃一之名也。夫聖人亦拔レ乎二其萃一者也。故差而降レ之。賢者亦有レ數焉。宰我曰。以レ予觀レ於二夫子一。賢レ於二堯舜一遠矣。易大傳曰。可レ久則賢人之德。可レ大則賢人之業。設使二後人措一レ辭。必曰二聖人一。故知賢人泛稱已。至レ於二楊子雲一始曰。聖人之言如レ天。賢人之言如レ地。自レ是之後。聖賢遂爲二階級之名一也。至レ謂二孔子大聖。顏子亞聖。孟子亞聖之次一。則亦竊二倣浮屠如來菩薩補處之稱一。可レ謂レ近レ戲已。

禮　三則

禮者。道之名也。先王所二制作一四教六藝。是居二其一一。所レ謂經禮三百。威儀三千。是其物也。六藝。書數爲二庶人在レ官者府史胥徒專務一。御亦士所レ職。射雖レ通レ乎二諸侯一。其所レ謂射。以二禮樂一行レ之。非レ若二民射主レ皮者比一焉。唯禮樂乃藝之大者。君子所レ務也。而樂掌レ於二伶官一。君子以養レ德耳。至レ於レ禮則君子以レ此爲二顓業一。是以孔子少以レ知レ禮見レ稱。之レ周問三禮於二老聃一。之レ郯之レ杞之レ宋。唯禮之求。子夏所レ記。曾子所レ問。七十子皆斷二斷於レ禮。見二檀弓諸篇一。三代君子之務レ禮。可二以見一已。蓋先王知二言語之不一レ足二以敎一レ人也。故作二禮樂一以敎レ之。知二政刑之不一レ足二以安一レ民也。故作二禮樂一以化レ之。禮之爲レ體也。蟠レ於二天地一。極レ乎二細微一。物爲二之則一。曲爲二之制一。而道莫レ不レ在焉。君子

爲レ主レ於レ內。故不レ知三禮樂謂二之道一也。又不レ知下聖人之稱因二制作一命上之也。徒以二其德一論レ之。而不レ知二德以レ性殊一。也。德之殊。不レ足三以病二其聖一也。妄意謂聖人之德宜レ一焉。而睹二其有レ殊。則曰孔子優レ於二堯舜一矣。曰湯武非二聖人一矣。豈非下無二忌憚一之甚者上乎。尋二其禍端一亦昉レ於二子思孟子一已。方二子思之時一。老氏之徒盛。而有下謂三孔子非二聖人一者上。故子思作二中庸書一。專贊二孔子之德一。孔子學二先王之道一者也。故子思言學可三以至二聖人一。不三唯生知爲二聖人一。孔子非二作者一。故唯以二其德一言レ之。然子思孔子之孫而親見二孔子一。其所レ傳之未レ渝也。故其論レ道。必以二禮儀三百。威儀三千一。其論二孔子一。必以雖善無位不能制作禮樂。古之道存故也。至二孟子之時一。墨翟鄒衍刑名之流皆有レ所二創作一。各以爲レ道。是孔子所レ謂不レ知而作レ之者也。故孟子亦唯以レ德言レ聖。而不三復及二制作一。然其意謂古之聖人皆作者也。孔子非二作者一也。故以二孔子一比二古之聖人一。難レ乎レ爲レ言。於レ是乎旁二引古之賢人德行高者一。比二諸孔子一。以見二孔子之盛一也。是其以二夷惠一爲二聖人一。古所レ無。而孟子取二諸其臆一。以濟二一時之辯一。不四復顧三其有二後災一者。雖レ非二其罪一。亦其過也已。夫聖人聰明睿智之德受二諸天一。豈可二學而至一乎。其德之神明不レ測。豈可二得而窺一乎。故古之學而爲二聖人一者。唯湯武孔子耳。故古之善學二聖人一者。必遵二聖人之敎一。禮樂以成レ德。子思所レ言是已。孟子雖二言不一レ及二禮樂一。然其所レ謂人可三以爲二堯舜一者。亦唯謂下服二堯之服一。誦二堯之言一。行中堯之行上而已矣。不二必求一レ爲二聖人一也。後儒乃不レ察三二子所二以言一之意。妄意求レ爲二聖人一。於レ是乎欲下詳論二聖人之德一以爲中學者之標準一。遂有二聖人之心渾然天理陰陽合レ德不レ偏不レ倚之說一。是其操レ心之銳。以二聖智一自處。喜測二其不

レ之。聖智之分可見レ已。詩曰。具曰二予聖一。誰知二烏之雌雄一。左傳。臧武仲雨行。人識二其非二聖人一。是古來皆稱二智之微妙者一以爲レ聖也。

後儒有下謂二湯武非二聖人一者上。是無二忌憚一之甚者也。其説本レ於三誤二解孔子武未レ盡レ善。孟子性レ之身レ之焉。殊不レ知孔子語レ樂而未レ及二舜武之德一。孟子但言下堯舜生知。而湯武乃學二堯舜之道一。以成中其德上耳。豈優劣之論乎。蓋堯舜禹湯文武周公。作者七人。其所二制作一禮樂政教。君子學焉。故祀二諸學一。傳曰。釋二奠於先聖先師一。又曰。天子將二出征一。類レ乎二上帝一。宜レ乎レ社。造レ乎レ禰。禡レ於二所レ征之地一。受二命於レ祖。受二成於レ學。出征。執二有罪一。反釋二奠于レ學。以二訊馘一告。是學無二所レ祀之神一。何所二受成一。何所レ告。詩曰。既作二泮宮一。淮夷攸レ服。矯矯虎臣。在レ泮獻レ馘。淑問如二皐陶一。在レ泮獻レ囚。在レ泮獻レ功。是其事也。明堂位曰。米廩。有虞氏之庠也。序。夏后氏之序也。瞽宗。殷學也。頖宮。周學也。祭義曰。天子設二四學一。是天子大學兼二四代之制一。合二祀四代聖人一者審矣。夫古者祭レ祖配二之天一。則祖宗與レ天一矣。是天子與二大事一。其所レ受レ命。唯天與二先聖一已。故曰君子有二三畏一畏二天命一。畏二大人一。畏二聖人之言一。是君子所レ畏。亦唯天與二先聖一已。是雖二異代聖人一。尊二崇之一者レ是其至也。況夏之於レ禹。商之於レ湯。周之於二文武一。皆開國太祖。道所二自出一。天下無二貴賤一。奉二其禮樂法制一。不二敢違一レ之。而奚議爲。古之道爲レ爾。故孔子而上。莫レ有下優二劣聖人之德一者上矣。夫聖人亦人耳。人之德以レ性殊。雖二聖人一其德豈同乎。而均謂二之聖人一者。以二制作一故也。唯制作之迹可レ見矣。就二其可一レ見以命レ之。而不三敢論二其德一。尊之至也。古之道爲レ爾。後儒貴レ精賤レ粗之見。

レ凝焉。是之謂也。且其一二所下與二門人一言中禮樂上者。制作之心。可二得而窺一矣。故當時高弟弟子如二宰我子貢有若一。旣稱以爲二聖人一者。不三翅以二其德一。亦爲二制作之道存一故也。假使レ無二孔子一。則先王之道亡久矣。故千歲之後。道不レ屬二諸先王一。而屬二諸孔子一。雖二邪說異敎之徒一。亦莫レ有下謂三孔子非二聖人一者上則宰我子貢有若之言。果徵レ於二今日一焉耳矣。夫孔子之德至矣。然使レ無二宰我子貢有若子思之言一。則吾未三敢謂二之聖人一也。以三吾非二聖人一。而不レ能レ知二聖人一也。夫我以二吾所レ見。定三其爲二聖人一。僭已。僭則吾豈敢。我姑以二衆人之言一。定三其爲二聖人一。無二特操一者已。無二特操一則吾豈敢。雖然。古聖人之道藉二孔子一以傳焉。使レ無二孔子一。則道之亡久矣。千歲之下。道終不レ屬二諸先王一。而屬二諸孔子一。則我亦見二其賢レ於二堯舜一也已。蓋孔子之前。無二孔子一。孔子之後。無二孔子一。吾非二聖人一。何以能定二其名一乎。故且比二諸古作者一。以二聖人一命レ之耳。

周禮六德。曰智。曰聖。是岐二聖人之德一而二レ之。以爲二君子德一。蓋人之性不レ同。故其智有下能通二政治之道一者上。命レ之曰レ智。有下能通二禮樂鬼神之道一者上。命レ之曰レ聖。故其所レ謂聖。亦非レ若二聖人之德一焉。曰唐虞九官。乃有二九德一。周六官。乃有二六德一。德以レ性殊。德成而官レ之。故虞周官制之異。其立レ德所二以不レ同也。故智者冢宰之材也。仁者司徒之材也、聖者宗伯之材也。義者司馬之材也。忠者司寇之材也。和者司空之材也。冢宰掌二邦治。以レ知レ人爲二要務一。司徒掌二邦敎一。職在レ親レ民。宗伯掌二邦典一。乃禮樂鬼神之事。司馬掌二邦政一。乃賞罰黜陟軍旅田獵之事。非レ義則何以得二其宜一乎。司寇掌二邦刑一。非下懇篤詳悉能盡二其心一者上不レ能也。司空掌二邦事一。順二水土之性一。和二百工之業一。以レ此觀

謂知者。必學二道術一以成二其德一而知慧至焉。格物致知是之謂也。知之不下由二德術一來上者。不レ足二以爲レ知。古之道爲レ爾。

聖 四則

聖者作者之稱也。樂記曰。作者之謂レ聖。述者之謂レ明。表記曰。後世雖レ有二作者一。虞帝弗レ可レ及也已矣。古之天子。有二聰明睿智之德一。通二天地之道一。盡二人物之性一。有レ所二制作一。功侔二神明一。利用厚生之道。於レ是乎立。而萬世莫レ不レ被二其德一。所レ謂伏羲神農黃帝。皆聖人也。然方二其時一。正レ德之道未レ立。禮樂未レ興。後世莫二得而祖述一焉。至レ於二堯舜一。制二作禮樂一。而正レ德之道始成焉。君子以成レ德。小人以成レ俗。刑措不レ用。天下大治。王道肇レ是矣。是其人倫之至。參二贊造化一。有下以財二成天地之道一。輔中相天地之宜上。而立以爲二萬世之極一。孔子序レ書。所三以斷レ自二唐虞一者。爲レ是故也。三代聖人。皆亦遵二堯舜之道一。制二作禮樂一。以立二一代之極一。蓋歲月弗レ反。人亡世遷。風俗日漓。以汚以衰。辟二諸川流滔滔一。不レ可二得而挽一也。三代聖人知二其若レ是。乃因二前代禮樂一有レ所二損益一。以維二持數百年風俗一。使三其不二遽趨一衰者。於レ是乎存焉。夫堯舜禹湯文武周公之德。其廣大高深。莫二不レ備焉者一。豈可二名狀一乎。祇以二其事業之大。神化之至一。無下出レ於二制作之上一焉者上。故命レ之曰二聖人一已。至レ於二孔子一。則生不レ遭レ時。不レ能レ當二制作之任一。而方二其時一先王之道廢壞已極。乃有下非二先王之道一。而命以爲二先王之道一焉者上。有下先王之道而黜不三以爲二先王之道一焉者上。是非淆亂。不レ可二得而識一也。孔子訪二求四方一。蒐而正レ之。然後道大集レ於二孔子一。而六經於レ是乎書。故中庸曰。苟不二至德一。至道不

蓰。相什佰千萬。則賢者之難レ知。豈不レ宜乎。況我不レ及二其賢一而能知レ之。如下高宗之於二傅說一、桓公之於中管仲上、可レ不レ謂レ難乎。不レ爾。堯之於レ鯀。徒知二其才一而不レ知二其惡一。謂二之不一レ知レ人可乎。故堯之知レ人。在レ知レ舜。而不レ在レ知レ鯀。古之道爲レ爾。後之學者昧レ乎二斯義一而欲下悉知二其長短得失一、無上レ所レ逃二其藻鑑一。是曹孟德之所レ尙耳。豈古之道哉。然求三其所二以失一レ之。則昉レ於二孟子一邪。孟子曰。是非之心。智之端也。其意亦謂聖人之道率二人性一而立焉。祇好レ辯之甚。不レ覺二其言有一レ弊耳。後儒弗二之察一。乃以下天下之理曉然洞徹莫上レ所二疑惑一爲レ解。殊不レ知是世俗所レ謂智。而非二先王之道所一レ尙也。孔子曰。擇不レ處レ仁。焉得レ知。又曰。知者利レ仁。是其意謂知レ仁莫レ尙焉。不レ知者則又謂究二盡天下之理一。而後知レ仁莫レ尙焉。故宋儒有二格物究理之說一又不レ知下究理本賛二聖人作一レ易之言。而非中學者之事上也。大學所レ謂格物者。謂習二其事一之久。自然有レ所レ得。有レ所レ得而後所レ知始明。故曰物格而后知至。豈究二盡天下之理一之謂哉。苟非レ遵二先王之敎一、習二其事一之久、則所レ知皆世俗之知也。何以能知二仁之可一レ尙乎。故孔子所レ謂知レ禮知レ言知レ道知レ命知レ人。皆以二先王之道一言レ之者也。宋儒所レ謂格物究理是レ是非レ非之類。皆以二世俗之智一言レ之者也。祇小人役レ力。君子役レ心。是以世之君子喜三自用二其智一而不三肯遵二先王之道一者。比比皆然。故孔子每稱二好レ仁好レ德好レ禮好レ義。而未三嘗稱二好レ智者一。爲レ是故也。又曰好レ學近レ乎レ知。可レ見不レ遵二先王之道一則不レ能レ成二其智一也。學者其思レ諸。

孟子有二德慧術知之文一。是古言也。非二孟子所一レ創也。謂慧由レ德而生。智由二道術一而生者也、古之所

過也。然又毎以二規矩一爲レ言。則知其知レ言亦謂レ知二先王之法言一已。知レ命者。知二天命一也。謂レ知二天之所レ命何如一也。先王之道。本レ於レ天。奉二天命一以行レ之。君子之學レ道。亦欲三以奉二天職一焉耳。我學レ道成レ德而得不レ至。是天命レ我以使レ傳二道於レ人也。君子敎學以爲レ事。人不レ知而不レ慍。是之謂レ知レ命。凡人之力。有レ及焉。有レ不レ及焉。强求二其力所レ不レ及者一。不智之大者也。故曰。不レ知レ命。無三以爲二君子一也。後儒或曰知下其所二以然一之理上。或曰知二古凶禍福一。或曰名利得失。亦不レ動レ心。皆不レ知レ道者之言也已。知レ人者。謂レ知二仁賢一也。是智之大者也。書曰。在レ知レ人。在レ安レ民。是皐陶立二智仁二德一。以爲二萬世法一。蓋制二作禮樂一者。聖人之智。而非二通レ下者一焉。然至下其所二以平二治天下一者上。則不レ出レ於二是二言一也。雖二後世之君。雜霸之主一。亦非二是二者一。則不レ能レ成二其隨レ分之治一也。至哉言乎。孔子曰。脩レ己以安二百姓一。堯舜其猶病レ諸。禹曰。咸若レ時。惟帝其難レ之。是雖二堯舜一亦有レ所レ不レ能二是二者一也。豈非二至言一哉。且先王之道。爲レ安レ民設。則宜レ若レ莫下大レ於二安民一者上。而知レ人先レ之。孔子稱二智仁一。亦智先レ於レ仁。是無レ它。安レ民之道。非レ知レ人則不レ能レ行故也。自レ古賛二聖賢之君一。必言下其得二賢人一而臣上レ之。而其它善政不レ遑レ及レ之者。爲レ是故也。故智之爲レ德。莫レ大レ於レ知レ人焉。祇所レ謂知レ人者。世儒多謂二人之智愚賢不肖。其所レ長。其所レ短。妍媸悉照。毫釐弗レ遺。是謬之大者也。大氐古所レ謂知レ人者。在レ知二其所レ長。而其所レ短不二必知一焉。及二其至者一。則必稱三能知二仁賢之人一。謂二之知レ人焉。故樊遲不レ達二知レ人之義一。則子夏釋レ之曰。舜擧二皐陶一。湯擧二伊尹一。可レ見古之道爲レ爾。夫人之知レ人。各於二其倫一。唯聖知レ聖。賢知レ賢。人之爲レ才。相倍

方一。謬之大者也。夫先王之敎。詩書禮樂而已矣。禮樂不レ言。習以成レ德。豈外レ此而別有二所レ謂成レ仁之方一乎。且先王之道。本爲二安民一立レ之。故其言二脩身一者。亦皆以爲二行レ仁之本一已。豈徒成レ己哉。後儒狃二聞莊周內聖外王之說一。而謂天下國家擧而措レ之。是以其解レ仁。或以二天理一。或以レ愛。專歸二重於內一。而止レ於レ成レ己。豈レ不レ悲乎。有下論二說道藝一而曰二是仁也一者上。是非レ稱二先王之德一也。亦非レ稱二仁人與二仁政一也。乃贊二道之德一者已。後儒不レ察混而一レ之。詳見二下仁義一。

智　二則

智。亦聖人之大德也。聖人之智。不レ可二得而測一焉。亦不レ可二得而學一焉。故岐而二レ之。曰聖曰智。是也。故凡經所レ謂智。皆以二君子之德一言レ之如二知レ禮。知レ言。知レ道。知レ命。知レ人。是也。知レ道者。知二先王之道一也。是統二其全一言レ之。無レ所レ不レ包。故難二其人一焉。孔子曰。爲二此詩一者。其知レ道乎。難辭也。知レ禮者。知二先王之禮一也。知レ言者。知二先王之法言一也。之二者。道之分也。分而言レ之。所三以便二學者一也。先王之敎。詩書禮樂。詩書レ言也。義之府也。知レ言則知レ義。知二禮與一レ義。則道庶幾可二以盡一焉。不レ言レ樂者。亦難二其人一焉。孔子稱二臧文仲一。不智者三。皆謂二其不一レ知レ禮矣。可レ見古者以レ不レ知レ禮爲二不智一已。孟子知レ言。亦謂レ知二先王之法言一也。苟能知二先王之法言一。則規矩在レ我足三以知二人之言一焉。故下以二詖淫邪遁一言レ之耳。後儒不レ知レ道。故直謂三孔子知二人之言一也。聽レ訟吾猶レ人也。是雖二孔子一不レ敢自道下知二人之言一。況孟子而能レ之乎。故詖淫邪遁。亦好レ辯之

愛之德。遠近内外。充實通徹。無レ所レ不レ至。是又泥二孟子一。而欲下擴二充惻隱之心一以成上レ仁。不レ屬二諸先王一。而屬二諸人人一。不レ知レ歸二諸安民一。而徒以二慈愛一言レ之。故其弊遂至下以二釋迦一爲中仁人上。豈不レ謬乎。且孟子所レ謂擴二充四端一者。論說之言耳。初非レ語二成レ仁之方一也。辟二諸一星之火。至レ於レ燎レ原。一寸之苗。至上於レ參レ天。苟使二揠而長一レ之。引而伸レ之。則火滅苗槁已。假以レ風鼓レ之。假以二雨露一灌二漑之一。然後可三以馴二致燎原參天之盛一也。人亦若レ是焉。禮樂以養レ之。然後成二仁德一也。不レ知者則謂三禮樂外物也。非二在レ我者一焉。是不レ信二聖人之敎一。而欲下以二其私智一成上レ仁者也。烏知下風與二雨露一假二之於レ外而其功若レ是其大上焉乎。禮樂之道。不レ識不レ知。順二帝之則一。猶二風雨自レ天祐一レ之邪。仁齋與二宋儒一。均レ之不學無術已。

有下稱二仁人一而曰レ仁者上。如三三仁一以レ德。如二管仲一以レ功。二者皆以二安民一言レ之。宋儒求二仁於一レ心。故其說至二管仲一而窮矣。仁齋亦求二諸心一。其所二以異一レ於二宋儒一者。唯不レ言二天理人欲一已。故其說亦至二管仲一而窮矣。其謬可レ見已。

有下稱二仁政一而曰レ仁者上。如下曰知及レ之。仁能守レ之。曰民之於レ仁也。甚レ於二水火一。曰當レ仁不レ讓レ於レ師。及諸子問上レ仁。皆是也。大氐問レ政與レ問レ仁相類。問レ政者。一邑之政也。皆其人爲レ宰而問二今日所一レ行焉。問レ仁者。一國之政也。皆爲二其它日或得一レ爲二一國之政一而預問焉。如三孔子之告二顏子子張一。直以二天下一言レ之。可二以見一已。行二仁政一。以レ脩レ身爲レ本。身苟不レ脩。雖レ行二仁政一。民不レ從レ之。中庸擧二九經一首二脩身一。亦此意。故孔子所レ答。皆脩身之事焉。後儒不レ知レ之。誤以爲レ語二成レ仁之

所三以輔二夫仁一也。且先王存二聰明容知之德一。制二作禮樂一立二是道一。俾二天下後世由一レ是焉。而後之君子奉以行レ之。是雖レ有二聰明容知之德一。將安用レ之。且先王之立二是道一也以レ仁。故禮樂刑政莫二非レ仁者一。是以苟非二仁人一。何以能任二先王之道一以安二天下之民一哉。故孔門之敎。以レ仁爲レ至。以レ依レ於レ仁爲レ務。而不三復求二爲二聖人一者。古之道爲レ爾。孟子曰。仁也者人也。合而言レ之道也。夫道屬二先王一。德屬レ我。唯依レ於レ仁而後道與レ我可二得而合一焉。此古來相傳之說也。後世儒者不レ知二聖人之道一。是以不レ知レ仁。其說曰。仁者愛之理心之德也。又曰。人欲淨盡天理流行。又曰。有二專言者一。有二偏言者一。是其所レ見。根レ於二佛老一。故其學主レ理。主レ心。又誤二讀中庸孟子一。而以レ仁爲レ性。性人人殊。則又以爲其殊者氣質所レ爲。而理與二聖人一一矣。是其意謂仁者愛レ人。然愛者情耳。方二其靜一也。安見二夫所レ謂愛者一乎。然若二愛之理一。則稟二諸天一而具レ于レ心。是卽仁而心之德爲レ爾。人生之初不下與二聖人一殊上。祇氣質人欲所レ錮。仁乃不レ全。及レ於二學成一而人欲盡氣質化。則無二適非一レ仁矣。又其意謂天地之道。生生不レ已。稟二諸人一爲レ仁。故以二流行一見二生生之意一云爾。又其意謂仁爲二心之全德一。故兼二義禮智信一。是專言之仁也。其與二義禮智信一對言者。偏言之仁也。殊不レ知仁者德也。非レ性也。況理乎。仁以愛レ之。特言二其一端一耳。安得レ盡レ於レ仁乎。且孔子所レ謂愛レ人者。謂レ爲二民父母一也。苟非二安民一。烏足三以爲二民父母一乎。宋儒主レ心。主レ心而語レ愛。則釋迦亦仁人耳。其無二安民之德一。則非二吾所レ謂仁一也。氣質可レ變乎。人欲可レ盡乎。何德非レ心。苟以レ仁爲二全德一。豈有二所レ謂衆德一乎。專言偏言。豈非レ妄乎。皆肆言二其理一而未レ睹二夫道一之失也。仁齋先生乃曰。慈

不味。主心學。古所無也。仁齋先生以聖人之德光輝發越爲解。僅足以解中庸引詩懷明德而已。皆求之太深之失也。左傳非僻書。二家未之考。果何謂也。

仁 四則

仁者。謂長人安民之德也。是聖人之大德也。天地大德曰生。聖人則之。故又謂之好生之德。聖人者古之君天下者也。故君之德莫尚焉。是以傳曰。爲人君止於仁。聖人也者不可得而學矣。後之君子學聖人之道以成其德者。仁爲至焉。故孔子曰。君子去仁。惡乎成名。言所以命君子者。以仁也。故孔門之敎。必依於仁。謂其心不與聖人之仁相離也。故仁者。聖人之大德。而君子之所以爲德也。蓋聖人之德莫不備焉。何唯仁。故仁者聖人之一德也。然聖人所以爲聖人者。以其仁天下後世也。故仁者聖人之大德也。聖人之道。衆美所會萃。亦何唯仁。人之學聖人之道者。德以性殊。亦何皆仁。然聖人之道。要歸安民而已矣。雖有衆美。皆所以輔仁而成之也。人性雖殊乎。然無知愚賢不肖。皆有相愛相輔相成之心。運用營爲之才者一矣。故資治於君。資養於民。農工商賈。皆相資爲生。不能去其群獨立於無人之鄕者。唯人之性爲然。夫君者群也。是其所以群人而統一之者。非仁乎安能焉。學而成德者。雖各以性殊乎。其所學者皆聖人之道也。聖人之道。要歸安民。故君子苟不依於仁。何以能和順聖人之道以養成其德乎。辟諸啗人不以五穀。亦瘠而死耳。且君之使斯民學以成其德。將何用之。亦欲各因其材以官之。以供諸安民之職已。聖人之德雖備乎。君子之德雖殊乎。皆

皆有レ之。皆所下以與二老氏一爭中仁義之非上僞也。而道德之名紊焉。思孟皆以レ闢二邪說一爲レ主。所二以失一也。學者思レ諸。

至德者。謂二德之至者一也。孔子稱二泰伯一以二其讓一。稱レ周以二其恭一。書以二允恭克讓一稱レ堯。其爲二至德一可レ知已。然自レ非二聖人之恭讓一則未レ足三以爲二至德一焉。泰伯之讓。以二天下一。周之恭。以二天下一。是其所三以爲二至也。以レ孝爲二至德一者。以三其爲二爲レ仁之本一也。周官至德者。謂三聖人之德爲二萬世之標準一也。敏德者。謂二德以レ性殊者一也。

明德者。顯德也。謂三其德著明。衆所二皆見一也。故多以稱二在レ上之德一焉。左傳。成鱄引二詩其德克明一而釋レ之曰。照二臨四方一曰レ明。齊侯使來。告二成三國一。公使二衆仲對一曰。敢不レ承二受君之明德一。宮之奇曰。若晉取レ虞。而明德以薦二馨香一。神其吐レ之乎。臧文仲曰。先王之明德。猶無レ不レ難也。無レ不レ懼也。況我小國乎。大史克曰。顓頊氏有二不才子一。不レ可二教訓一。不レ知二話言一。告レ之則頑。舍レ之則嚚。傲狠明德。以亂二天常一。臧武仲曰。且夫大伐レ小。取二其所レ得。以作二彝器一。銘二其功烈一。以示二子孫一。昭二明德一而懲二無禮一也。晏平仲曰。晉君宣三其明德於二諸侯一。恤二其患一而補二其闕一。正二其違一而治二其煩一。所二以爲二盟主一也。是皆泛二稱君德一而已。不三必拘二明字一矣。王孫滿曰。桀有二昏德一。鼎遷レ于レ商。德之休明。雖二小重一也。其姦回昏亂。雖二大輕一也。天祚二明德一。有レ所二底止一。劉子曰。美哉禹功。明德遠矣。微レ禹吾其魚乎。孟僖子曰。聖人有二明德一者。若不レ當レ世。其後必有二達人一。皆汎二稱聖人之德一而已。不三必拘二明字一矣。然亦以三其德顯明衆所二皆知一言レ之。朱子虛靈

德一乎。書曰。日宣三三德一。夙夜浚明有レ家。日嚴祗敬六德一。亮采有レ邦。則大夫諸侯之德。不レ可三以汎責二人人一者審矣。是上古聖人所下以立二德之名一以敎上レ人也。朱子解曰。德之爲レ言得也。行レ道而有レ得レ於レ心也。夫道者先王之道也。傳曰。苟非二其人一。道不二虛行一。則其德未レ成。安能行レ道乎。是其意以レ道爲二當然之理一。故有二是解一已。且德固不レ可二離レ心而言一。然僅以レ心言レ之。烏足二以爲一レ德哉。鄉飮酒之義曰。德也者得レ於レ身也。朱子意謂二不レ言レ心而言一レ身。猶淺一矣。不レ知二古言一之失耳。古無下以二身心一對言者上。凡言レ身者。皆謂レ己也。己豈外レ心哉。孟子曰。其生レ色也睟然。見レ於レ面。盎レ於レ背。施レ於二四體一。四體不レ言而喩。是狀レ德之言也。豈徒得レ於レ心之謂哉。夫徒巧二其言一令二其色一。固不レ可二以爲一レ德。然徒得レ於レ心。其失均焉。且不レ以二禮樂一而以レ心。是謂二之不學無術一焉。不レ知レ循二先王孔子敎レ人之道一故也。如二仁齋先生一以レ知レ德自負。乃爭二性與レ德之名一耳。亦誤二讀孟子一而至レ謂下擴二充四端一以成上レ德。則與二朱子一何別。既不レ屬二諸先王一。又不レ知二德以レ性殊一。徒謂如三藥有二治病之德一。如三火有二烹飪之德一。是其所レ爭。在下全レ於二養之後一與上レ全レ於二性之初一已。故其所レ謂德者。皆嘗二其末一レ成而言レ之。有レ名而無レ實。亦宋儒之歸哉。

有二曰以レ德。曰尙レ德。曰知レ德。曰德不レ孤。曰懷レ德。曰好レ德。曰亂レ德之類一。皆指二有德之人一也。又有二對レ怨而言者一。如下曰二以レ德報一レ怨。曰上有二德色一。皆指二恩惠一而言レ之。

達德者。謂下德之通二人人一皆有レ之者上也。子思此言。本レ於二孔子所レ謂君子道者三一。然亦以三夫婦之不肖所二與知能行一言レ之。則微乎微矣。豈孔門之舊哉。因三子思有二此言一。而孟子又言二仁義禮智人

非二人人得レ行者一。如二君子之道一。亦非二民之所レ得レ行者一。則與レ此殊矣。鄭玄以爲二百王通行之道一。後儒又因レ之而以二五者一槩二聖人之道一。誤矣。如二達孝一。亦謂下武王周公能推二其孝一達中諸天下上。使丙天下之人伸乙其孝心甲。故上文有下父爲レ士。子爲二大夫一。葬以レ士祭以中大夫上。達字之義。可二以見一已。後儒不レ知レ之。亦以三天下皆稱二其孝一解レ之。嗚呼天下皆稱二其孝一。何必武王周公已哉。

德　六則

德者得也。謂二人各有レ所レ得レ於レ道也。或得二諸性一。或得二諸學一。皆以レ性殊焉。性人人殊。故德亦人人殊焉。夫道大矣。自レ非二聖人一。安能身合レ於二道之大一乎。故先王立二德之名一。而使下學者各以二其性所レ近。據而守レ之。脩而崇上レ之。如二虞書九德。周官六德。及傳所レ謂仁智孝弟忠信恭儉讓不欲剛勇清直之類一。皆是也。蓋人性之殊。譬二諸草木區以別一焉。雖二聖人之善敎一。亦不レ能レ強レ之。故各隨二其性所一レ近。養以成二其德一。德立而材成。然後官レ之。及二其材之成一也。雖二聖人一亦有二不レ能レ及者一。如下后夔之於レ樂。禹之於二行水一。稷之於中藝殖上。皆堯舜所レ不レ能レ及也。故孔子之於二七十子一。亦因二其材一而篤レ焉。如下告二子路一以レ勇。曾子以上レ孝。可二以見一已。及二其德之成一也。如二四科。及賜也達。由也果。求也藝一。可二以見一已。其所二以養レ之篤一レ之者。則在二禮樂一焉。樂記曰。禮樂皆得。謂二之有德一。論語曰。若二臧武仲之知。公綽之不欲。卞莊子之勇。冉求之藝一。文レ之以二禮樂一。亦可三以爲二成人一矣。謂下學二禮樂一以成中其德上。則四子皆可下爲二成人一也。成人者成德也。文レ之者謂三德成而有二光輝一也。非三自レ外傳二丹雘一也。是皆以二一德一言レ之。不三必兼二衆德一也。聖人之心豈不レ欲三人人兼二衆

由レ之者也。

有下曰三是道也何足二以滅一者上。詩書禮樂。皆先王之道也。故雖二一言半句一。亦稱爲レ道耳。

曰二一變至一レ於レ道。謂二先王道行之世一也。曰レ可二與適一レ道。謂二身合一レ於二先王之道一也。

曰二至道一。曰二大道一。尊二先王之道一之辭。

曰レ志レ於レ道。曰二朝聞一レ道。曰二天下有一レ道。曰二國有一レ道。曰二國無一レ道。曰二無道之君一。曰下就二有道一而正焉上。凡單言レ道者。皆以二先王之道一言レ之。無道者先王之道全亡也。有道者不二必全有一也。如二有道之士一。以三身有二道藝一言レ之。先王之道在レ外。六藝亦先王之道也。故古以二道藝一竝稱。大小之分耳。雖二其人有一レ德。然不レ知二先王之道一。則不レ得レ稱二有道之士一。後世道德之名混矣。學者其審レ諸。

曰二大學之道一。曰二父之道一。曰二母之道一。曰二臣之道一。曰二子之道一。曰二神道一。皆先王之道。以二其別一言レ之。

曰二獲レ於レ上有一レ道。曰下交二朋友一有上レ道。曰三生レ財有二大道一。皆謂レ術也。術者。謂二由レ此以行。自然不レ覺二其至一也。如二民可レ使レ由レ之。有二此意一。蓋先王之道。皆術也。是亦特以二其別一言レ之。又如三詩書禮樂爲二四術一。亦謂二由レ此以學。自然不レ覺二其成一レ德也。及レ於二後世詐術盛興一而後。道學先生皆諱二術字一。如下荀子有二大道術一。漢書譏中霍光不學無術上。其時近レ古。猶未レ諱二術字一者可レ見也。如レ曰二要道一。亦要術耳。

曰二達道一者。謂下先王之道。通二貴賤智愚賢不肖一。可二皆由一者上也。它如二天子之道。諸侯之道一。皆

才一。立二是道一而俾三天下後世由以行レ之。各終二其性命一。是其意豈欲三人皆爲二聖人一乎。又豈求レ使二人人皆知一レ之乎。又豈以二難レ知難レ行者一强二之人人一乎。要歸レ安レ民焉耳矣。學者其思レ諸。

又有下曰二夏之道一曰二殷之道一曰二周之道一者上。蓋道者。堯舜所レ立。萬世因レ之。然又有二隨レ時變易者一。故一代聖人有レ所二更定一。立以爲レ道。而一代君臣由レ之以行焉。是非三必前代之道有レ所レ未レ足而更改一レ之也。亦非二必前代之道已爲一レ至。而我故更改欲レ新二天下之耳目一也。亦非下必萬世因レ之者爲二道之至一。而隨レ時更易者爲上レ次也。乃一代聖人有レ所三前二知數百歲之後一。而以レ此維二持世運一。使下不二遽趨衰一者存上焉。自レ非二聖人之智一。未レ能下與知中其所二以更改一之意上者也。凡諸雜二見傳記一者。如二某善。某未レ善。及夏忠殷質周文之類一。皆孔子論二禮樂一之緒言。亦以二其時一言レ之。其時正值二制作之秋一故也。非三孔子優二劣其道一焉。如レ告二顏淵四代禮樂一。亦學者以爲二萬世不易之制一者。非矣。

又有下曰二天之道一曰二地之道一者上。蓋日月星辰繫矣。風雷雲雨行焉。寒暑晝夜往來不レ已。深玄也不レ可レ測。杳冥也不レ可レ度。萬物資始。吉凶禍福有下不レ知二其然一而然者上。靜而觀レ之。亦似レ有二其所レ由焉者一。故謂二之天道一。載二華嶽一而不レ重。振二河海一而不レ洩。旁礴不レ可レ窮。深厚不レ可レ盡。萬物資生。不レ爲レ之焉。死皆歸藏。不レ爲レ增焉。親而可レ知。而有二不レ可レ知焉者一。徐而察レ之。亦似レ有二其所レ由焉者一。故謂二之地道一。皆因レ有二聖人之道一。借以言レ之耳。

有下曰二小人道長一曰二戎狄之道一者上。皆以下其所二由成一レ俗。自似上レ有二一道一。故言レ之。

有下曰二善人之道一。曰レ無レ改レ於二父之道一者上。亦言二其所一レ由耳。不三必先王之道一。凡其意以レ此爲レ道而

冒二蓁棘一蹈二險巇一。蓋レ由レ焉乎。是何足二以盡レ道哉。若取二當レ行之理其臆一。而謂二是聖人之道也一。則妄之甚者矣。果其言之是乎。孔子奚學。以二彼其聖人之智一。何所レ不レ知。亦不レ思之甚也。大氐先王之道。若レ迂若レ遠。常人所レ不レ能レ知。故曰。民可レ使レ由レ之。不レ可レ使レ知レ之。又曰。爲二此詩一者。其知レ道乎。以二道之難レ知也。又曰。吾道一以貫レ之。而不レ言二以レ何貫レ之。以二其不レ可レ言也。以二其不レ可レ言也。故先王立二言與レ事以使レ守レ之。詩書禮樂。是其敎也。是故以二顏子之知一。猶且博學レ於レ文。約レ之以レ禮。而後見三其如二有レ所レ立卓爾一。若使四道瞭三然於二一言一。則先王孔子已言レ之。萬萬無二此理一。豈不二妄之甚一乎。如二仁齋先生一據二易大傳一陰一陽一而以三所二以往來一爲レ解。殊不レ知所レ謂一陰一陽者本語二易道一也。大傳又曰。一闔一闢謂二之變一。往來不レ窮謂二之通一。其以二變通一爲レ言。豈非二易道一邪。何以盡二先王之道一乎。且其言也以レ意論二說其精微一者也。夫以レ意論二說其精微一者。亦取二諸其臆一者也。其人譏二宋儒一而蹈二其轍一。欲五以下聖人之所レ不レ能レ言者上使四瞭三然於二一言一。均レ之亦宋儒之遺耳。孔安國解二論語一曰道謂二禮樂一也。豈後世所二能及一哉。又解二孝經一曰道者扶二持萬物一。使三各終二其性命一者也。施レ於レ人則變二化其行一而之二正理一。故道在レ身則言自順而行自正。事レ君自忠。事レ父自孝。與レ人自信。應レ物自治。一人用レ之。不レ聞レ有レ餘。天下行レ之。不レ聞レ不レ足。小取レ焉小得レ福。大取レ焉大得レ福。天下行レ之而天下服。其言雖レ淺乎。亦猶爲レ不レ失二古意一。蓋先王之立二是道一也。其心在レ安二天下後世一焉。故書曰。放勳欽明文思安安。是之謂也。故先王之德。仁莫レ大レ焉。孔門之敎。以レ依レ於レ仁爲レ務。故先王因三人皆有二相愛相養相輔相成之心。運用營爲之

王之道也。故欲求聖人之道者。必求諸六經。以識其物。求諸秦漢以前書。以識其名。名與物不舛而後聖人之道可得而言焉已。故作辨名。

道　十二則

道者統名也。以有所由言之。蓋古先聖王所立焉。使天下後世之人由此以行。而己亦由此以行也。辟諸人由道路以行。故謂之道。自孝悌仁義。以至於禮樂刑政。合以名之。故曰統名也。先王聖人也。故或謂之先王之道。或謂之聖人之道。凡爲君子者務由焉。故亦謂之君子之道。孔子之所傳。儒者守焉。故謂之孔子之道。亦謂之儒者之道。其實一也。然先王代殊焉。故曰先王之道者。夏以夏。商以商。周以周。皆在其代之辭也。稱孔子以別它人焉。稱儒者以別百家焉。有對斯小。故君子有時乎言之。非恒言也。夫道也者自上古聖人之時。既已有所由焉。至於堯舜而後道立焉。歷殷周而後益備焉。是更數千歲數十聖人。盡其心力智巧以成之。豈一聖人一生之力所能爲哉。故孔子祖述堯舜。憲章文武。好古。好學。爲是故也。宋儒誤讀中庸孟子書。乃謂人性善。故道率人性自然有之。殊不知當其時老氏之徒盛以仁義爲僞。故子思謂聖人率人性之自然以立道耳。豈謂人率己性則自然有道乎。孟子謂仁義之根於性耳。善亦大槩言之。豈謂人人不殊聖人乎。遂以道屬諸人人。而不屬諸聖人。其究必至於以禮樂刑政爲粗迹焉。殊不知道無精粗無本末一以貫之也。其解曰。道者當行之理。是言也以贊道則猶之可矣。然亦僅足以勸人行道之言耳。由道則坦然。不由道則

辨名上

日本　物茂卿　著

自二生民一以來。有レ物有レ名。名故有二常人名焉者一。是名レ於二物之有レ形焉者一已。至レ於二物之亡レ形焉者一。則常人之所レ不レ能レ睹者。而聖人立焉名焉。然後雖二常人一可二見而識一レ之也。謂二之名教一。故名者教之所レ存。君子愼焉。孔子曰。名不レ正則言不レ順。蓋一物紕繆。民有下不レ得二其所一者上焉。可レ不レ愼乎。孔子既歿。百家坌涌。各以二其所レ見以名一レ之。物始舛矣。獨七十子之徒。愼守二其師說一以傳レ之。迨レ乎二漢代一。人異レ經。經異レ家。其言雖二人人殊一。要皆七十子之徒所レ傳也。雖レ有二舛焉者一乎。此之所レ失。彼或存焉者亦有レ之。參二彼此一以求レ之。庶乎名與レ物不レ舛也邪。傳舊故也。馬融鄭玄旁二通諸家一。有レ所二稽定一。斯有レ所二擯斥一。於レ是乎顓門之學廢。而名與レ物舛焉者。不レ復レ可二得而識一矣。所レ以不レ傳者多故也。豈不レ惜乎。自レ厥以降。世載言以移。唐有二韓愈一而文古今殊焉。宋有二程朱一而學古今殊焉。之數君子者。皆禀二豪杰之資一。雄二跨一世一。慷慨自奮。輙以二聖人之道一爲二己任一焉。然其秉レ心之銳。能遑レ論二其世一哉。迺意自取二諸理一。而謂二聖人之道在一レ是矣。殊不レ知今言二古言一。今文非二古文一。吾居レ於二其中一。而以レ是求二諸古一。迺能得二其名一者幾希。且理者。莫レ不レ適者也。吾以二我意一而自取レ之。是安能得二聖人所レ爲物者一哉。名與レ物失焉。而能得レ於二聖人之道一者。未二之有一也。故程朱所レ爲名。亦其所二自見一耳。非二七十子之徒所レ傳孔子之道一也。則亦非二古先聖

辨名目録

卷上

卷下

六經殘缺。縱其完存。亦古時言也。安能一一得二其義弗一レ謬乎。故後之解二六經一者。皆牽强耳。大氐後儒以二一物不一レ識爲レ恥。殊不レ知古所レ謂知者貴レ知二於仁一也。孔子未二嘗以レ好レ知爲一レ敎焉。今之學者當下以レ識二古言一爲上レ要。欲レ識二古言一。非レ學二古文辭一不レ能也。前漢去二孔子時一未レ遠。故解レ經多二傳授之說一。至二後漢一漸失二古義一。然韓愈未レ出。文章未レ變。古言尙有二存者一。故博讀下秦漢至二六朝一之書上。熟讀玩味以求レ之。庶二或得一レ之哉。然吾亦不レ欲下學者因二吾言一以廢中宋儒及諸家之說上也。古今遼矣。六經殘缺。要不レ得レ不二以レ理推一レ之。以レ理推レ之者。宋儒爲二之嚆矢一焉。祇其理之未レ精也。是以滯二乎理一。精レ之又精レ之。豈有二宋儒及諸家之過一哉。且學問之道。貴二乎思一。方二思之時一。雖二老佛之言一。皆足レ爲二吾助一。何况宋儒及諸家之說乎。

享保丁酉秋七月望。

物茂卿

後世人不レ識ニ古文辭一。故以ニ今言一視ニ古言一。聖人之道不レ明職是之由。且舉ニ其大者一言レ之。易太極。謂三聖人作レ易有ニ此太極一耳。故曰三易有ニ太極一。初不下以ニ天地一言上レ之。究理。研幾。皆贊ニ聖人作レ易耳。後儒以爲ニ學者事一。謬矣。天者上天也。性者性質也。貞者不變之謂。訓レ正而屬ニ諸智一者。牽強矣。嘉會者如ニ婚姻賓客之事一。合禮猶ニ合樂之合一。婚姻賓客之事。所ニ以大合レ禮也。利レ物者利レ用利レ器類。和レ義謂レ和ニ順於義一也。謂ニ義之合ニ宜處一者非也。不レ變ニ其守一。乃所ニ以幹レ事。豈智哉。故下文曰。行ニ此四者一。故元亨利貞配ニ諸仁義禮智一者。傅會之甚矣。繼レ之者善。如ニ繼レ天之繼一。善者謂ニ善人一也。訓ニ流行一者。失ニ繼字義一矣。成レ之者性。謂下人各隨ニ性所レ近而成上レ務也。凡言レ德者。有ニ對レ怨言者一。有ニ對レ財言者一。其單言者。皆性之德也。不レ爾。據ニ於德一。何其荒唐。人心者民心也。如ニ朽索之馭一。故曰レ危。道心者導ニ民心一也。其機甚微。故曰レ微。大學者。古大學有ニ養老序齒等禮一。是其義也。明德者君德也。左傳諸書可レ稽焉。明者舉而明レ之也。非ニ磨而明レ之之謂一也。即謂ニ養老序齒之事一也。人倫明ニ於上一。而小民親ニ於下一。故曰レ親レ民。何必改ニ新民一。新民出ニ康誥一。革レ命之事也。大學之教。豈以レ之乎。物者禮之善物也。格者來レ之也。致者使ニ之來至一也。非ニ極致之謂一也。禮之善物至。而吾之知自然明矣。先王之教之術爲レ然。朱子引ニ易窮理一。不レ成ニ字義一。强矣。陽明訓レ正。引レ格ニ君心之非一。殊不レ知三格皆有ニ感格意一。亦謬矣。敬者敬レ天爲レ本。敬レ君敬レ民敬レ身皆然。豈徒然持敬乎。克レ己者約レ身之解是矣。克猶ニ克レ家之克一。不レ爾。克レ己由レ己。字義相犯。凡此類。皆失ニ古義一之大者也。

心思一易。所レ見自別。故致レ知之道。莫レ善ニ於禮樂一焉。且先王所下以紀ニ綱天下一立中生民之極上者。專存ニ於禮一矣。知者思而得焉。愚者不レ知而由焉。賢者俯而就焉。不肖者企而及焉。其或爲ニ一事一出ニ一言一也。必稽ニ諸禮一。而知下其合ニ於先王之道一與中否上焉。故禮之爲レ言體也。先王之道之體也。雖レ然。禮之守太嚴。苟不ニ樂以配一レ之。亦安能樂以生乎。故樂者生之道也。鼓ニ舞天下一。養ニ其德一以長レ之。莫レ善ニ於樂一。故禮樂之敎。如ニ天地之生成一焉。君子以成ニ其德一。小人以成ニ其俗一。天下由レ是平治。國祚由レ是靈長。先王之敎之術。神矣哉。四術之盡ニ於敎一也。

吾道一以貫レ之。豈特參賜乎。孔門諸子。皆聞而知レ之矣。宋儒推ニ尊思孟一。而又推ニ本諸曾子一。是其道統之說也。豈可レ據乎。或以ニ一理一言レ之、或以ニ一心一言レ之。或以レ誠言レ之。以ニ一理一言レ之者。天地人物皆爾。浮屠法身徧一切之見耳。以ニ一心一言レ之以レ誠言レ之者。知レ歸ニ重於聖人之德一。而不レ知レ歸ニ重於先王之道一焉。孔子明言ニ吾道一。吾道者先王之道也。故孔子曰。文王既歿。文不レ在レ玆乎。夫先王之道。安ニ天下一之道也。安ニ天下一之道在レ仁。故曰ニ一以貫一レ之。何以謂レ貫レ之。仁一德也。然亦大德也。故可三能貫ニ衆德一焉。先王之道多端矣。唯仁可ニ以貫一レ之矣。辟如ニ緡貫一レ錢然。故曰レ貫。若一理也一心也誠也。則一而已矣。何必曰レ貫。故曾子曰忠恕而已矣。忠恕爲レ仁之方故也。曰ニ而已矣一者。猶ニ之堯舜之道孝弟而已矣一。孝弟豈盡ニ於堯舜之道一乎。則忠恕豈盡ニ於道一乎。然由レ是以求レ之庶足ニ以盡一レ之矣。古人言語皆如レ此。後世理學者流。無レ有ニ運用營爲之意一。急欲レ盡ニ其理於目前一也。故忠恕爲ニ理之虛象一。而有ニ天忠恕聖人忠恕學者忠恕種種之說一。豈曾子時語意邪。

爲樸學。而它求高妙精微者。其病坐弗思耳。古聖人一言之微。皆繫乎天下之大。盛衰治亂所由起焉。非疏通知遠者不能讀之。孟子不信書。其稱述堯舜。將何所睹記。宜其昧於先王安天下之道也。詩則異於是矣。諷詠之辭猶後世之詩。孔子删之。取於辭已。學者學之。亦以修辭已。故孔子曰。不學詩。無以言。後世迺以讀書之法而讀詩。謂是勸善懲惡之設焉。故其說至於鄭衞淫奔之詩而窮矣。且其所傳義理之訓。僅僅乎不盈掬焉。果若其說。聖人蓋亦別作訓戒之書。而以是迂遠之計爲也。故皆不知詩者之說矣。如詩序。則古人一時以其意解詩之言。叙其事由而意自見焉。何假訓詁。然詩本無定義。何必守序之所言以爲不易之說乎。如大序乃關雎之解。古人偶於關雎敷衍以長之耳。後儒不解事。析爲大小序。可笑之甚也。大氐詩之爲言。上自廟堂。下至委巷。以及諸侯之邦。貴賤男女。賢愚美惡。何所不有。世變邦俗。人情物態。可得而觀。其辭婉柔近情。諷詠易感。而其事皆零碎猥雜。自然不生矜持之心。是以君子可以知宵人。丈夫可以知婦人。朝廷可以知民間。盛世可以知衰俗者。於此在焉。且其爲義。不爲典要。美刺皆得。唯意所取。引而伸之。觸類而長之。莫有窮已。故古人所以開意智。達政事。善言語。使於鄰國。專對酬酢者。皆於此得焉。書爲正言。詩爲微辭。書立其大者。詩不遺細物。如日月之代明。如陰陽之竝行。合二故經而謂之義之府也。若夫禮樂者德之則也。中和者德之至也。精微之極。莫以尚焉。然中和無形。非意義所能盡矣。故禮以敎中。樂以敎和。先王之形中和也。禮樂不言。能養人之德性。能易人之心思。

則長。不得其養則死。不啻身已。才知德行皆爾。故聖人之道。在養以成之矣。天地之道。往來不已。感應如神。爲於此而驗於彼。施於今而成於後。故聖人之道。皆有施設之方。不求備於目前。而期成於它日。日計不足。歲計有餘。歲計不足。世計有餘。使其君子有以自然開知養材以成其德。小人有以自然遷善遠惡以成其俗。是其道與天地相流通。與人物相生長。能極廣大而無究已者也。近世頗有言宋儒之非者。而顧其所爲道德者。則亦不出言語講說之間。僅能剗其已甚者。而稍傳以溫柔之旨云爾。吁終未免五十步之誚哉。先王之道。莫不本諸敬天敬鬼神者焉。是無它。主仁故也。後世儒者尙知務究理。而先王孔子之道壞矣。究理之弊。天與鬼神。皆不足畏。而己迺傲然獨立於天地間也。是後世儒者通病。豈不天上天下唯我獨尊乎。且茫茫宇宙。果何究極。理豈可究而盡之乎。其謂我盡知之者。亦妄已。故其所爲說。皆陽尊先王孔子而陰已悖之。其意自謂能發古聖人所未發者。而不自知其求勝先王孔子以上之焉。夫聖人之教至矣。豈能勝而上之哉。凡聖人所不言者。迺所當不言者已。若有所當言者。則先王孔子既已言之。豈有未發者而待後人乎。亦弗思也已。

先王四術。詩書禮樂。是三代所以造士也。孔氏所傳是已。然其所以爲教者。經各殊焉。後儒輙以一槩之說解之。則奚以四爲也。蓋書者。先王大訓大法。孔子所畏。聖人之言。是也。古之時。舍此則無書。書唯此耳。後王君子所尊信。學者所誦讀。先王安天下之道具是矣。後儒迺以

善惡皆以レ心言レ之者也。孟子曰。生二於心一而害二於政一。豈不二至理一乎。然心無レ形也。不レ可三得而制レ之矣。故先王之道。以レ禮制レ心。外二乎禮一而語二治心之道一。皆私智妄作也。何也。治レ之者心也。所レ治者心也。以二我心一治二我心一。譬如三狂者自治二其狂一焉。安能治レ之。故後世治心之說。皆不レ知レ道者也。

理無レ形。故無レ準。如下理學者流。以二中庸一爲中精微之極上。其言誠然。然其人若下先識二先王之道一。而後贊二嘆之一謂中是中庸也上。則可矣。若下其人未三嘗識二先王之道一。獨以二己意一擇二中庸之理一。而謂中是與二先王之道一不上殊。則不可也。又如三訓レ道爲二當行之理一。亦以贊二嘆先王之道一也。則可矣。若獨以二己意一求二所レ謂當行之理於事物一。而合二於先王之道一也。則不可矣。是無レ它也。理無レ形。故無レ準。其以爲二中庸一爲二當行之理一者。廼其人所レ見耳。所レ見人人殊。人人各以二其心一謂二是中庸一也。是當行也。若レ是而已矣。人間北看成レ南。亦何所レ準哉。又如二天理人欲之說一。可レ謂二精微一已。然亦無レ準也。辟如三兩鄉人爭二地界一。苟無二官以聽一レ之。將何所レ準哉。故先王孔子皆無二是言一。宋儒造レ之。無用之辨也。要レ之未レ免二堅白之歸一耳。

先王之道。古者謂二之道術一。禮樂是也。後儒乃諱二術字一而難レ言レ之。殊不レ知先王之治。使下天下之人日遷レ善而不中自知上焉。其敎亦使下學者日開二其知一月成二其德一而不中自知上焉。是所レ謂術也。樂正崇二四術一。春秋敎以二禮樂一。冬夏敎以二詩書一。是之謂也。如二後世所レ謂格物究理。克治持敬一。其意非レ不レ美矣。祇其不學無術。事不レ師レ古。欲下襲而取レ之。驟有中諸己上。可レ謂レ强也。大氐人物。得二其養一

者也。後儒輒欲丙以下其與二外人一爭者言上施乙諸學者甲。可レ謂レ不レ知レ類已。

後儒之說。天理人欲。致知力行。存養省察。粲然明備矣。以レ我觀二於孔門諸子一。蓋有下未三嘗知二其說一者上焉。是何其儱侗也。孔子之教蓋亦有下未三嘗及二其詳一者上焉。是何其鹵莽也。然先王孔子以レ彼而不レ以レ此者。教之道本不レ可レ若レ是也。後世廼信二思孟程朱一。過二於先王孔子一。何哉。蓋先王之教。以レ物不レ以レ理。教以レ物者。必有レ事レ事焉。教以レ理者。言語詳焉。物者衆理所レ聚也。而必從事焉者久之。乃心實知レ之。何假レ言也。言所レ盡者。僅僅乎理之一端耳。且身不レ從レ事焉。而能瞭二然於立談一。豈能深知レ之哉。釋氏猶謂如レ飲レ水冷煖自知。曾謂二先王不一レ及二釋氏一乎。故不二先レ之以一レ事而能有レ成焉者。天下鮮矣。不二啻先王之道一。凡百技藝皆爾。

古者道謂二之文一。禮樂之謂也。物相雜曰レ文。豈一言所二能盡一哉。古謂二儒者之道博而寡一レ要。道之本體爲レ然。後世貴レ簡貴レ要。夫直情徑行者。戎狄之道也。先王之道不レ然。孔子曰。文王既歿。文不レ在レ茲乎。後儒謂二謙辭一。夫文者文王之文也。假使孔子自謙。而謙二文王一哉。是自理學者流一二精粗一之見耳。又有二文質之說一。文者道也。禮樂也。質者學者之質也。貴二忠信一者。謂二受レ教之質一耳。忠信而無レ文。不レ免レ爲二鄉人一矣。故孔子十室之邑。不レ貴二忠信一。而貴レ好レ學也。後儒僅能言二精粗本末一以貫一レ之。而察三其意所二鄉往一。則亦唯重レ內輕レ外。貴レ精賤レ粗。貴レ簡貴レ要。貴二明白一貴二齊整一。由レ此以往。先王之道。藉以衰颯枯槁。肅殺之氣。塞二於宇宙一。其究必馴二致於戎狄之道一而後已焉。蓋坐レ不レ知下古之時道謂二之文一。而其教在中養以成上レ德故也。

而後歳功可レ成焉。椎鑿刀鋸備。而後匠事可レ爲焉。寒熱補瀉備。而後醫術可レ施焉。雖レ欲二其銳一。椎欲二其鈍一。石膏大寒。附子大熱。不レ爾。先王治二天下一。莫レ有レ所レ用二其材一也。雖レ然。石膏煆附子煨。是則在二禮樂一哉。石膏雖レ煆。不レ損二其大寒之性一。附子雖レ煨。不レ減二其大熱之性一。故知變二化氣質一之說非矣。且氣質者天之性也。欲下以二人力一勝レ天而反上レ之。必不レ能焉。强レ人以二人之所レ不レ能。其究必至三於怨レ天尤二其父母一矣。聖人之道必不レ爾矣。孔門之敎二弟子一。各因二其材一以成レ之。可二以見一已。祇如二君子不一レ器。仁人之謂也。君相之器也。比二諸匠者與一レ醫焉。或謂二可レ舟可一レ車者。萬萬無二此理一矣。據二於德一。依二於仁一。各隨二其性所一レ近。以成二其德一。苟能得二其大者一。皆足三以爲二仁人一焉。不器之謂也。

思孟以後之弊。在二說レ之詳而欲一レ使二聽者易一レ喩焉。是訟者之道也。欲三速弼二其說一者也。權在レ彼者矣。敎レ人之道則不レ然。權在レ我者矣。何則。君師之道也。故善敎レ人者。必置二諸吾術中一。優游之久。易二其耳目一。換二其心思一。故不レ待二吾言一。而彼自然有二以知一レ之矣。猶或不レ喩也。一言以啓レ之。渙然氷釋。不レ待二言之畢一焉。故敎者不レ勞。而學者深喩焉。何則。吾不レ言之前。思既過レ半故也。先王孔子以レ之。故先王之敎。禮樂不レ言。舉二行事一以示レ之。孔子不レ憤不レ啓。不レ悱不レ發。豈不レ然乎。至二於孟子一則强辨以聒レ之。而欲二以レ是服一レ人。夫以レ言服レ人者。未レ能レ服レ人者矣。蓋敎者施二於信一レ我者一焉。先王之民。信二先王一者也。孔子門人信二孔子一者也。故其敎得レ入焉。孟子則欲下使不レ信レ我之人由二我言一而信上レ我也。是戰國游說之事。非二敎レ人之道一矣。予故曰。思孟者與二外人一爭

渾然天理。無一毫人欲之私矣。是亦以一己之見窺聖人者也。傳曰。一張一弛。文武之道也。孔子曰。可以無大過矣。子思曰。雖聖人有所不知不能焉。不爾。堯之用鯀而舜殛之。舜征三苗而禹班師。周公殺管蔡。孔子墮三都而不能克。吾不知其以何解嘲也。孔子不撤薑。以其嗜之也。傳所載。文王嗜昌歜。庸何傷乎。朱子引通神明。豈不傳會之甚乎。大氐聖人之德。與天地相似焉。聖人之道。含容廣大。要在養而成之。先立其大者而小者自至焉。後人迫切之見。皆其所識小故也。

脩德有術。立其大者而小者自至焉。此孔門所以用力於仁也。去惡有術。學童牛之牿。如豶之牙。今人則欲一日而衆善傅諸身也。襲而取之。矜以持之。譬諸揠苗豈知油然以生之道乎。又欲一日而衆慝如澡也。抉而剔之。吹毛求疵。譬諸庸醫治疾。豈知標本之道乎。何況化之道乎。

言性自老莊始。聖人之道所無也。苟有志於道乎。聞性善則益勸。聞性惡則力矯。苟無志於道乎。聞性惡則棄不爲。聞性善則恃不爲。故孔子之貴習也。子思孟子蓋亦有屈於老莊之言。故言性善以抗之爾。荀子則慮夫性善之說必至廢禮樂。故言性惡以反之爾。皆救時之論也。豈至理哉。歐陽子謂性非學者之所急。而聖人之所罕言也。可謂卓見。

變化氣質。宋儒所造。淵源乎中庸。先王孔子之道所無也。傳所謂變者。謂變其習也。夫先王孔子之道。安天下之道也。安天下。非一人所能爲矣。必得衆力以成之矣。辟諸春夏秋冬備。

古爲言。而未嘗以好知好信爲教。故其非孔門之舊也。荀子譏子思孟子造五行。豈誣乎哉。

仁者養之道也。故治國家之道。擧直錯諸枉能使枉者直矣。脩身之道。亦養其善而惡自消矣。先王之道之術也。後世儒者不識先王之道。廼逞其私智。以謂。爲善而去惡。擴天理而遏人欲也。此見一立。世非唐虞。人非聖人。必惡多而善少。則殺氣塞天地矣。故通鑑之於治國。性理之於脩身。人與我皆不勝其苛刻焉。遂使世人謂儒者喜攻人。豈不悲哉。大氐商鞅之後。不啻朝廷。雖庠序亦用其法。宜其不及三代矣。

先王之道。安天下之道也。後世言經濟者。莫不祖述焉。然後世更封建郡縣。而先王之道。爲世贅旒。故世之稱先王者。廼顧謂以經術緣飾吏治是已。大氐封建之道。其於民猶且有家人父子意。至於郡縣。則唯法是仗。截然大公。無復恩愛。加之隋唐後。科擧法興。士習大變。所務希列。詳備明悉。是其至者已。士生於其世。法家之習。淪於骨髓。故其談道解經。亦從其中來。是烏知所謂道術者乎。宋儒所貴。綱目悉擧。巨細曲盡。豈足以爲先王之道也。

先王之道。立其大者。而小者自至焉。故子夏曰。大德不踰閑。小德出入可也。蓋不若是。不可以進道也。子貢曰。賢者識其大者。不賢者識其小者。故識大者爲賢。識小者爲不賢。後人之不賢。唯小是見。銖銖而稱之。至石必差。寸寸而度之。至丈必過。其論務欲究精微之極。析蠶絲。剖牛毛。而不知其大者已先失之也。是何能養人才安國家哉。其論聖人。亦謂

政禁レ暴。兵刑殺レ人。謂二之仁一而可乎。然要歸三於安二天下一已。先王之敎多端矣。智自智。勇自勇。義自義。仁自仁。豈可二混合一乎。然必不地與下安二天下一之道上相悖天。而後謂二之智勇與一レ義已。如丁孔子曰丙據二於德一。依乙於仁甲。人各據二其性之德一而不レ失レ之。性之德雖二多端一。皆不レ害二於仁一。祇未レ能二養而成一レ之。故悖二於道一。養之道。在下依二於仁一游中於藝上。依者如二聲依一レ永之依一也。樂聲必與二詠歌一相依。淸濁以レ之。節奏以レ之。依之謂也。依二於仁一亦爾。人雖三各據二其德一。亦必和下順於先王安二天下一之道上。不三敢違一レ之。然後足三以各成二其德一。此孔門之敎也。大氐先王孔子之道。皆有レ所二運用營爲一。而其要在二養以成一焉。然後人迫切之見。急欲三以レ仁盡二一切一。是以不レ得レ不二跳而之一レ理。而究二其說一。乃不レ過二浮屠法身徧一切之歸一。悲哉。

多謂人有二仁義一猶三天有二陰陽一也。遂以二仁義一爲二道之總一。是後世之言也。當二先王孔子之時一。豈求三一言以盡二乎道一焉。求三一言以盡二乎道一者。務標二異聖人之道一者也。先王孔子之時。豈有レ是哉。古者禮義對言焉耳矣。仁者聖人之大德。豈禮義之倫乎。故孔門之敎。仁是爲レ上。至二於孟子一竝二言仁義一。以レ是而辨二楊墨之非一。可也。以敎二學者一。不可也。如二仁義禮智一。亦孔子時所レ無。孟子始言レ之。亦備二楊墨所一レ不レ有者一。以見二吾道之備一已。其實禮義人之大端。而仁於レ斯爲レ大。如レ知者。人喜下以二才智一自高上。是其情也。故聖人未二嘗以レ知爲一レ敎矣。如レ曰二知者仁者一。成レ德之名。各因二其性一所レ禀殊焉。若下夫仁義禮智就二一人之身一言レ之者上。未二之嘗聞一也。漢儒以屬二五行一。或智爲レ土。信爲レ水。或智爲レ火爲レ水。未レ有二定說一。可レ見レ非二古道一已。論語屢以二好レ仁好レ義好レ禮好レ德好レ善好レ學好レ

下。孰能孤立不群者。士農工商。相助而食者也。不若是則不能存矣。雖盜賊必有黨類。不若是則亦不能存矣。故能合億萬人者君也。能合億萬人。而使遂其親愛生養之性者。先王之道也。學先王之道而成德於我者。仁人也。雖然。士欲學先王之道以成德於我。而先王之道亦多端矣。人之性亦多類矣。苟能識先王之道要歸於安天下而用力於仁、則人各隨其性所近。以得道一端、如由之勇。賜之達。求之藝。皆能成一材。足以爲仁人之徒。共諸安天下之用焉。而其德之成。如夷齊之淸。惠之和。尹之任、皆不必變其性。亦不害爲仁人焉。若或不識用力於仁。則其材與德。皆不能成。而諸子百家由此興焉。此孔門所以敎仁也。孟子惻隱以愛語仁。是其性善之說。必本諸人心、故不得不以愛言之耳。雖有愛人之心、而澤及不物。豈足以爲仁哉。故雖孟子亦有仁政之說矣、後儒迺不識孟子實爲勸世之言。而謂用力於仁。莫切於孟子也。則輒欲推其惻隱之心以成聖人之仁。可謂妄意不自揣之甚已。主張其學者。遂至謂佛有仁無義也、夫佛無安天下之道。豈足以爲仁哉。墨子乃有見先王之道。仁莫以尙焉。遂謂仁足以盡一切矣。殊不知天地大德曰生。仁亦聖人大德也。雖然。亦一德也。若天地一於生、則何以有夏秋冬乎。聖人一於仁、則何以有勇智信義乎。孟子擧義折之者是矣、然仁又竝言。而仁由是小矣。安在其爲大德乎。宋儒又欲合二者之異、乃造專言偏言之目。專言足以盡一切。偏言足以與衆德對立。庶足以孔孟之敎竝行而不相悖也。是其理學之說。欲瞭然於言語之間者已。安足以知先王孔子之道乎。先王之道多端矣。且擧其尤者言之。

傳焉。可嘆哉。蓋後王君子。奉先王禮樂而行之。不敢違背。而禮樂刑政。先王以是盡於安天下之道。是所謂仁也。後王君子。亦唯順先王禮樂之教。以得為仁人耳。是聖人不可學而至焉。仁人可學而能焉。孔子教人以仁。未嘗以作聖強之。為是故也。大氐後人信思孟程朱過於先王孔子。何其謬也。

後儒多強學者。以高妙精微凡人所不能為者。而曰聖人以是立極也。妄矣哉。先王立極。謂禮也。漢儒訓極為中。禮者所以教中也。又解中庸書而謂子思說禮意矣。其說雖未當。要之去古未遠。師弟所傳授。古義猶存者爾。蓋先王制禮。賢者俯而就之。不肖者企而及之。是所謂極也。是凡人所能為者也。不爾。務以凡人所不能為者強之。是使天下之人絕望於善也。豈先王安天下之道哉。故所謂事理當然之極。及變化氣質。學為聖人類。皆非先王孔子之教之舊矣。近世伊氏能知其非是。而廼以孝弟仁義謂為規矩準繩。果若是乎。則人人自以其意為孝弟仁義也。亦何所準哉。可謂無寸之尺。無星之稱已。

孔門之教。仁為至大何也。能舉先王之道而體之者仁也。先王之道。安天下之道也。其道雖多端。要歸於安天下焉。其本在敬天命。天命我為天子為諸侯為大夫。則有臣民在焉。為士則有宗族妻子在焉。皆待我而後安者也。且也士大夫皆與其君共天職者也。故君子之道。唯仁為大焉。且也相親相愛相生相成相輔相養相匡相救者。人之性為然。故孟子曰。仁也者人也。合而言之道也。荀子稱君者群也。故人之道非以一人言也。必合億萬人而為言者也。今試觀天

亦非一聖人一生之力所能辨焉者。故雖孔子亦學而後知焉。而謂天地自然有之而可哉。如中庸曰率性之謂道。當是時。老氏之說興。貶聖人之道爲僞。故子思著書。以張吾儒。亦謂先王率人性而作爲是道也。非謂天地自然有是道也。亦非謂率人性之自然不假作爲也。譬如伐木作宮室。亦率木性以造之耳。雖然。宮室豈木之自然乎。大氐自然而然者。天地之道也。有所營爲運用者。人之性也。後儒不察。乃以天理自然爲道。豈不老莊之歸乎。

先王聰明睿知之德。稟諸天性。非凡人所能及焉。故古者無學爲聖人之說也。蓋先王之德。兼備衆美。難可得名。而所命爲聖者。取諸制作之一端耳。先王開國。制作禮樂。是雖一端。先王之所以爲先王。亦唯是耳。若唯以其在己之德。則無天子之分矣。若以平治天下之仁命之。則後賢王皆爾。制作禮樂。是其大者也。故以命先王之德爾。其實聖亦一德。如書曰乃聖乃文。詩曰聖敬日躋。及周禮六德。聖居其三。是豈先王之德之全哉。然既已以命先王之德。自此之後。聖人之名。莫以尙焉。至於子思推孔子之爲聖。而孔子無制作之迹。又極言道率人性。則不得不言聖人可學而至矣。故以誠語聖也。至於孟子勸齊梁王欲革周命。則不得不以聖人自處矣。以聖人自處。而堯舜文周嫌於不可及矣。故旁引夷惠。皆以爲聖人也。子思去孔子不遠。流風未泯。其言猶有顧忌。故其稱聖人。有神明不測之意。若孟子則止言行一不義殺一不辜而得天下不爲也。是特仁人耳。非聖人也。要之孟子亦去孔子不甚遠。其言猶有斟酌者若此。祗二子急於持論。勇於救時。辭氣抑揚之間。古義藉以不

道者統名也。擧禮樂刑政凡先王所建者合而命之也。非離禮樂刑政別有所謂道者也。如曰賢者識其大者。不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。又如武城絃歌。孔子有牛刀誚。而子游引君子小人學道。可見已。孔安國註。道謂禮樂也。古時言語漢儒猶不失其傳哉。後世貴精賤粗之見。昉於濂溪。濂溪乃淵源於易道器之言。殊不知道謂易道也。形謂奇偶之象也。器謂制器也。易自卜筮書。不可與它經視焉。如宋儒訓道爲事物當行之理。是其格物究理之學。欲使學者以己意求夫當行之理於事物。而以此混禮樂刑政焉。夫先王者聖人也。人人而欲操先王之權。非僭則妄。亦不自揣之甚。近世又有專據中庸孟子。以孝弟五常爲道者。殊不知所謂天下達道五者。本謂先王之道可以達於天子庶人者有五也。非謂五者可以盡先王之道也。堯舜之道。孝弟而已矣。亦中庸登高必自卑意。非謂堯舜之道盡於孝弟也。又如以中庸爲道。亦欲以己意擇所謂中庸者。苟不學先王之道。則中庸將何準哉。又如以往來弗已爲道。是其人所自負死活之說。猶爾貴精賤粗之流哉。凡是皆坐不識道爲統名故耳。

先王之道。先王所造也。非天地自然之道也。蓋先王以聰明叡知之德。受天命。王天下。其心一以安天下爲務。是以盡其心力。極其知巧。作爲是道。使天下後世之人由是而行之。豈天地自然有之哉。伏羲神農黃帝亦聖人也。其所作爲。猶且止於利用厚生之道。經顓頊帝嚳。至於堯舜。而後禮樂始立焉。夏殷周而後粲然始備焉。是更數千年。更數聖人之心力知巧而成焉者。

法不レ可二復見一矣。近歲伊氏亦豪傑。頗窺二其似焉者一。然其以二孟子一解二論語一。以二今文一視二古文一。猶之程朱學耳。加レ之公然岐二先王孔子之道一而二レ之。黜二六經一而獨取二論語一。又未レ免三和語視二華言一。我讀下其所レ爲二古義一者上。豈古哉。吁嗟。先王之道。降爲二儒家者流一。斯有二荀孟一。則復有二朱陸一。朱陸不レ已。復樹二一黨一。益分益爭益繁益小。豈不レ悲乎。不佞藉二天寵靈一。得二王李二家書一以讀レ之。始識レ有二古文辭一。於レ是稍稍取二六經一而讀レ之。歷レ年之久。稍稍得二物與レ名合一矣。物與レ名合。而後訓詁始明。六經可二得而言一焉。六經其物也。禮記論語其義也。義必屬二諸物一。而後道定焉。乃舍二其物一。獨取二其義一。其不二泛濫自肆一者幾希。是韓柳程朱以後之失也。予五十之年旣過焉。此焉不二自力一。宛其死矣。則天命其謂レ何。故暇日輒有レ所二論著一。以答二天之寵靈一。且錄二其綱要者數十一。以示二入門之士一者乎爾。

孔子之道。先王之道也。先王之道。安二天下一之道也。孔子平生欲レ爲二東周一。其敎二育弟子一。使三各成二其材一。將二以用一レ之也。及下其終不上レ得レ位。而後脩二六經一以傳レ之。六經卽先王之道也。故近世有下謂二先王孔子其敎殊一者上非也。安二天下一以レ脩レ身爲レ本。然必以レ安二天下一爲レ心。是所レ謂仁也。思孟而後。儒家者流立焉。乃以レ尊二師道一爲レ務。妄意聖人可二學而至一矣。已爲二聖人一。則擧而措二諸天下一。天下自然治矣。是老莊內レ聖外レ王之說。輕レ外而歸二重於內一。大非二先王孔子之舊一也。故儒者處焉不レ能下敎二育弟子一以成中其材上。出焉不レ能下陶二鑄國家一以成中其俗上。所二以不一レ能レ免二於有レ體無レ用之誚一者。亦其所レ爲レ道者有レ差故也。

辨道

日本 物茂卿 著

道難知亦難言。爲其大故也。後世儒者。各道所見皆一端也。夫道。先王之道也思孟而後降爲儒家者流。乃始與百家爭衡。可謂自小已。觀夫子思作中庸。與老氏抗者也。老氏謂聖人之道僞矣。故率性之謂道。以明吾道之非僞。是以其言終歸於誠焉。中庸者。德行之名也。故曰擇。子思借以明道。而斥老氏之非中庸。後世遂以中庸之道者誤矣。古之時。作者之謂聖。而孔子非作者。故以至誠爲聖人之德。而又有三重之說。主意所在。爲孔子解嘲者可見焉。然誠者。聖人之一德。豈足以盡之哉。至於孟子性善。亦子思之流也。杞柳之喩。告子盡之矣。孟子折之者過矣。蓋子思本意。亦謂聖人率人性以立道云爾。非謂人人率性。自然皆合乎道也。它木不可爲桮棬。則杞柳之性有桮棬。雖然。桮棬豈杞柳之自然乎。惻隱羞惡。皆明仁義本於性耳。其實惻隱不足以盡仁。而羞惡有未必義者也。立言一偏。毫釐千里。後世心學。胚胎于此。荀子非之者是矣。故思孟者。聖門之禦侮也。荀子者。思孟之忠臣也。然當是時。去孟子未遠。風流尙存。名物不爽。及乎唐韓愈出。文章大變。自此而後。程朱諸公。雖豪傑之士。而不識古文辭。是以不能讀六經而知之。獨喜中庸孟子易讀也。遂以其與外人爭者言。爲聖人之道本然。又以今文視古文。而昧乎其物。物與名離。而後義理孤行。於是乎先王孔子敎

說一卷を收む。山縣周南、名は孝孺、字は次公、通稱は小助、長門の人なり。父良齋長門侯の儒臣たり、周南をして家學を墜さゞらしめんことを欲し、勸飭指誨し、常に戒めて書を樓上に讀ましめ、故なくんば下ることを得ず。周南是によりて夙に經史を涉獵することを得たり。年十九にして父に從ひて江戶に遊び徂徠に師事す。徂徠時に始めて古文辭を倡へ、和する者尙ほ寡し。獨り安藤東野ありて之に從ふ。周南東野と相研磨淬勵し、遂に海內を風靡するに至れり。是に於て其徒羽翼を語るときは必す周南東野を以て稱主とし、徂徠も亦二子を待つこと群弟子に異なれりといふ。周南江戶に居ること三年、業成りて國に歸る。藩侯明倫館を興すに及びて周南預りて力あり。元文二年祭酒小倉尙齋死するに及びて周南代りて館事を督し祭酒となり、益〻學規を立て訓厲方あり、一時才俊輩出せり。周南寶曆二年に歿す、年六十六。著はす所文集、爲學初問、作文初問等あり。今爲學初問二卷を收む。

に春臺は嚴毅方正自ら持す。故を以て二人の間能く調和せず。春臺嘗て曰く、「先生の志進取にあり、故に其人を取るや才を以てして德行を以てせず、二三の門生亦其説を習聞して德行を屑しとせず、是を以て徂徠の門跅弛の士多く、其才を成すに及ぶや特に六人に過ぎざるのみ、其致然るなり、外人既に是を以て先生を譏る、純も亦竊かに先生に不滿あり、此れ先生の純を雞肋視する所以なり」と。徂徠歿して後其門分れて二となる。詩文は服部南郭を推し、經術は春臺を推す。春臺も亦斯學を以て己れが任となし徂徠の學説を繼述し、晩年稍〻從違あり。詩文に至りては痛く李王を斥く。諸侯大夫より草野の士に至るまで從遊するもの甚だ多し。春臺人となり嚴毅端正、前後見ゆる所の諸侯甚だ多けれども、進退必ず禮を以てして未だ嘗て己を枉げて進むことを求めず。嘗て巖邨侯の世子春臺を迎ひて師となす。其始めて至るや、世子送迎せず。春臺艴然として曰く「至賤の處士何ぞ敢て貴人に傲らん、然りと雖説く所は則ち聖人の道なり、苟も道を奉ずるものは王公と雖禮せざるを得ず。而るに其待つ所甚だ薄し、是れ余を禮せざるにあらず、即ち道を奉ぜざるなり、道を奉ぜざるものは余復た見ゆることを欲せず」と。是時に當りて巖邨侯閣老たり。周捨窮達皆其手に出づ。而して其言一も忌憚する所なし。是に於て其後相議して曰く、無禮とは彼れ自らいふなり、世固より師儒多し、請ふ更に他人を招かん」と。世子之を聞いて曰く「寡人過てり、敎を師に受くるに何の狹むことか之れ有らん」と。乃ち禮を厚ふして之に師事せりといふ。春臺辨道書、聖學問答、大經略説、產語、經濟錄、紫芝園謾筆、春臺文集等を著はす。今辨道書卷、聖學問答二卷及び六經略

らじと。その後江州に客遊して一卷の寫本を見る。是れ答問書の出版より以前に寫し得たるものにて、今の答問書に比すれば僅に三が一には足らざりき。その寫本には一々問へる人の國と姓名とをしるせり。今の刊行の本に痾病後に書きたりといへるなどは、莊内の水野氏に答ふとしるせり。水野氏名は元朗、字は明卿、俗名を大膳と稱す。羽州莊内酒井侯の大夫なり。後には春臺を尊信したる人なり。南郭文集に碑の銘あり。これを以て考ふれば、答問書は一々人に答へたる書なり。設けて作れるにはあらず。乃ち此書の由來を知るべきなり。

徂徠の帷を東都に下して古文辭學を唱道するや一時の才俊翕然として其門に集れり。而して詩文に於ては安藤東野、服部南郭、平野金華等を推し、經學に於ては太宰春臺、山縣周南の二氏を推す。春臺名は純、字は德夫、通稱は彌右衞門、信濃の人なり。父言辰飯田侯に事へ三百石を食みしが、故ありて仕を辭して去りて江戶に住居せり。春臺幼にして父に隨ひて江戶に來り、稍〻長ずるに及びて出石侯に事ふ。後數年にして疾を以て骸骨を乞ひしかど許されず。因りて自ら藩を去りて京師に遊び、流宕すること十年の久しきに亘りぬ。是の時に當りて物徂徠復た學を江戶に倡ひ、安藤東野、山縣周南等相助けて業を修め、從遊するもの日に多し。東野少年の頃春臺と共に業を中野㧗謙に受け、其敏學に服せり。因りて屢〻書を送りて春臺を招く。春臺遂に江戶に來り、初めて徂徠に謁見し、其學說に服し、東野等と古學を講習せり。然るに徂徠人と爲り豪爽禮節に拘々せず、然る

せて譯文筌蹄の後生に益あるを稱せり。徂來悅びず。乃ち答て曰く、

譯文筌蹄は土苴なり。若し夫れ二辨の書は、僕自ら謂ふ、開闢以來聖門の大功と。吾子此れを舍てゝ彼れを取る。何ぞ僕を知らざるの甚しき

と。其得意以て知るべきなり。蓋し辨道辨名の徂徠に於けるは猶ほ語孟字義、童子問の仁齋に於けるが如く、一家の見解を發表して以て其取る所の位置を明かにせしものなり。此二書は春臺と南郭と立ちあひて校正せしことと文會雜記卷之一下に見ゆ。此二書は支那にて蚤に飜刻し、小傳を附せり。小傳は梅溪錢泳の撰に係る。全文載せて先哲像傳卷三にあり。宇灊水此二書を解釋し、辨道考辨名考の二書を著はし、齋藤高壽、辨名補義(寫本)十卷を著はし、加藤照郷、辨名辨道辨義(寫本)三卷を著はし、龜井昭陽は讀辨道一卷を著はせり。

學則は學則七篇より成る。共に文集卷之十七に附載すれども、又別に單行本として行はる。卷末に人に與ふるの書五篇を附載せり。享保十二年の刊行に係る。東龜年之れが標註三卷を作り、天明元年を以て刊行せり。又谷元淡が徂徠と往復して學則の旨意を論難せるもの一卷あり。「徂徠學則問答」と題す。首に柳里恭が序あり。享保十三年の刊行に係る。

徂徠答問書は徂徠が人の問ふに答ふる國字の書類を收載するもの、門人根遜志の編錄にして、服部南郭の校刻する所に係る。首に本多忠統及び南郭の序あり。閑散餘錄卷之下に云く、

予嘗て徂徠答問書を見て思へるは、是れ設けて著述したるものなるべし、實に人に答へたるにあ

浮薄とならざるを得ず。又其文章の如きは擬古文なるが故に、其弊流れて奇僻とならざるを得ず。是を以て彼れに反抗するもの叢然として起れり。卽ち宇士新が論語考、石川麟洲が辨道解蔽、蟹養齋が非徂徠學及び辨復古、平瑜が非物氏、森東郭が非辨道非辨名、五井蘭洲が非物、中井竹山が非徵及び閑距餘筆、服蘇門が燃犀錄、富永滄浪が古學辨疑、石川香山が讀書正誤等は皆徂徠の學を剖擊し、併せて人物性行に論及せるものなり。

思ふに名敎上に於ては徂徠の功罪相償はずといふべきなり。徂徠の門人及び徂徠に私淑せるもの、其人に乏しからすと雖も、僅かに春臺一人を除かば、道義節操を以て自ら任ずるもの殆んどあるなし。多くは文墨風流の士にして、輕佻浮薄放蕩無賴の徒少しとせず。稀に經義を講ずるものありと雖も、疎放暴慢にして禮節に拘はらず、動もすれば法度の外に逸するものあり。是れ皆徂徠の責任を遁るゝこと能はざる所なり。後の名敎に志あるもの、徂徠の事蹟に於て豈に鑑みる所なかるべけんや。

徂徠の著書少からず。其儒敎及び諸子に關するものを擧ぐれば辨道一卷、辨名二卷、論語徵十卷、大學解一卷、中庸解一卷、學則一卷、徂徠集三十卷、蘐園隨筆五卷、徂徠答問書三卷、讀荀子四卷、讀韓非子三卷、讀呂氏春秋二卷(寫本)等なり。今辨道、辨名、學則、徂徠答問書及び蘐園談餘の五部を收む。

辨道辨名の二部の書は徂徠が學說を知るに最も重要なるものなり。肥後の藪震菴嘗て徂徠に書を寄

臺墓誌銘を作り、本多忠統墓碣を作れり。長松寺舊と壽命山と稱せしも、一たび徂徠を葬りしより徂徠山と稱することゝなれり。徂徠が法諡を「淸淨院根與知専居士」といふ。別に儒者としての諡は無かりしと見え、門人唯〻徂徠先生と呼べるのみ。

徂徠は道學者といふよりは寧ろ文學者にして、多少政治家の氣質を帶ぶるものなり。晩年道學に就いても一家の見を立てしと雖も、恐くば是れ其本色にあらじ。文學者として一世の文運と發揚するもの、實に彼れが自然の任務なりしが如し。然れども彼れ本と非常の英才なりしが故に、獨り詩文を能くせしのみならず、又兼ねて音樂、語學、兵學、政治、經濟等に通ぜり。特に其長崎の人岡島冠山に就きて支那語を學習し、率先して漢籍を倒讀する習慣を一變して正則の研究法を開かんとしたるは、卓見といふべし。

徂徠資性豪邁にして小節に屑々たらざる所あり。其子弟に對しても寛宏の氣象ありて、毫も局促するが如き態度あるなし。當時江戸には室鳩巢あり、京都には伊藤東涯あり。此二人は徂徠の勍敵なりき。然れども鳩巢は醇儒にして多く爭はず。東涯は猶ほ更に爭はず。東涯は仁齋の學を皐張して鬱として關西の重鎭たり。是故に徂徠の眼に映ずる東涯は隱として一敵國を成せり。然れども徂徠の才氣は優に東涯を壓するに足る。是を以て自ら海內第一の人物を以て居り、群儒を視ること蜉蝣の如く、古人を評騭して罵倒至らざるなし。彼れが抱負の過大なる、彼れが覇氣の滿々たる、已に人の反情を招くに足るものあり。然るに彼れは德育を重んぜずして、獨り文章を尙ぶ。其弊流れて

を攻む。又明の李王に倣ひ、古文辭を修め、其成るに及んで、益〻其舊と作る所の文の是にあらざるを知る。因りて嘆じて曰く、「豈に惟我のみ是の若くならんや。滔々たるもの、天下皆是なり。豈に惟今日のみならんや。千古以來皆是れなり」と。古文辭を以て古經の階梯となし、遂に復た目を東漢以後の書に屬せず。自ら其主張を稱して復古學といひ、先儒作る所の如きは、一切之れを排して侏儒鴃舌を免れずとなす。其豪邁卓識雄文宏詞、一世を籠蓋す。門人服部南郭、太宰春臺、山縣周南、安藤東野、平野金華の徒從つて又之れを鼓盪し、弟子大に進み、聲號藉甚、一世を振撼す。是に於てか一時貴紳公子及び藩國の名士より以て閭巷の處士及び緇徒に至るまで奔趨走謁を求め、唯〻人に後れんことをのみ恐れ、甚しきは一字の襃貶を得て以て其毀譽となすに至る。此の如くにして海内翕然として風靡影從し、文藝之れが爲めに一新するに至れり。

享保六年將軍吉宗公徂徠に命じて淸帝の六諭衍義を句讀せしむ。成るに及んで召し入れて衣服を賜ふ。其後徂徠屢〻公の敎を需むるに應ず。十二年特命あり、再び入りて吉宗公に謁見す。翌十三年（西曆一千七百二十八年）正月十九日疾を以て歿す。時に年六十三。徂徠元と三宅氏を娶り、後佐々氏を娶る。佐々氏亦先ちて歿す。男なし。唯〻一女子あり。三宅氏の生む所なり。然れども夭折す。因りて兄の子道濟を養ふて嗣となす。道濟字は太寧、金石と號す。其子孫亦業を繼いで學職をなす。然れども復た言ふに足るものなし。仁齋の子孫の縣々業を繼いで名聲あるに比すれば、雲泥の差ありといふべし。徂徠の墓は今に芝三田長松寺にあり。表面には「徂徠物先生之墓」とあり。太宰春

生にして彼れに從つて學ぶもの數百人の多きに及ぶ。然れども徂徠の困苦此時より甚しきはなし。

文會雜記卷之二上に云く、

徂徠は芝に舌耕して居られたる時、至極貧にて豆腐屋にかり宅して居られたるゆゑ、豆腐のかすばかりくらはれたるとなり。大に豆腐屋の主人世話やきたるゆゑ、徂徠祿得られたる後、二人扶持やられたるとなり。

增上寺の山主學を好むを以て徂徠之と相識る。時の將軍綱吉公亦學を好む。是を以て山主徂徠が事を公に言上し、公の庇蔭により徂徠兵學を以て柳澤侯に仕ふるを得たり。柳澤侯乃ち徂徠をして書記を掌らしめ、俸十五人口を授く。其祿尚甚だ微なりといふべし。後侯の封累りに益すに從つて徂徠も亦累りに其秩を益し、恩遇殊に渥く、遂に五百石に至る。徂徠の柳澤侯に於けるは、猶ほ熊澤蕃山の芳烈公に於けるが如く、眞に風雲に際會するものといふべし。是時に當りて綱吉公學を好み、世子德松君と共に屢〻柳澤侯の邸に臨み、侯の家臣をして經書を進講せしめ、其都度必らず賞與あり。而して徂徠之れが魁たり。侯編修を好む。徂徠常に之れが總裁たり。侯の館舍を捐つるに及んで、嗣君の郡山侯亦彼れを優待せりといふ。

是より先き伊藤仁齋京師にありて古學を唱ふ。徂徠蘐園隨筆三卷を著はし、大に之れを駁して宋學を廻護し、甚しきは仁齋が用語句法の誤謬までも擧げて之れを論ぜり。此れより徂徠の名聲大に揚れり。時に年四十九。旣にして古學に一變し、一家の見を立て、痛く性理の說を斥け、併せて仁齋

其末子を北溪といふ。徂徠は其中子なり。見たりしとき岐嶷。五歳にして已に字を識り、九歳にして初めて詩を作りて菅廟に捧ぐ。云く

龍蛇指下走。珠玉手中生。松樹萬年翠。梅花千歳芳。

十餘歳にして能く文章を作り、喜んで長老と談論すること殆んど成人の如し。

延寶七年四月父方庵事に坐して上總の長良郡二宮庄本能村に竄せらる。徂徠乃ち父に從つて共に移り、田舍の間に居る。彼れ蚤に大志を抱き、心を講學に用ひ、貧賤の爲めに毫も挫折せず。志を執ること愈々固く、學をなすこと愈々勤む。祁寒盛暑と雖も、篝燈烱々として未だ嘗て倦むことを知らず。居ること幾もなく、文章大に進む。譯文筌蹄題言に云く、

予十四にして南總に流落し、二十五にして赦に値ふて東都に還る。中間十有三年（實は十有二年）日に田父野老と偶處し、尙ほ何ぞ師友の有無を問はん。獨り先大夫篋中大學諺解一本を藏有するによる。實に先大夫仲山府君の手澤なり。予此れを獲て研究し、力を用ふるの久しき、遂に講說によらず、遍く羣書に通ずることを得るなり。

此れに由りて之れを觀れば、徂徠は別に師承ありといふにあらず、全く獨力獨學によりて鬱然一家を成すに至れるなり。殊に彼れが大學諺解一本によりて講學の端緒を開き得しこと、永く文壇の一奇話として傳ふるに足るなり。

徂徠二十五歳にして江戶に還り、芝增上寺の門前に居り、程朱の學を講ず。山中の僧侶及び其外儒

日本倫理彙編巻之六

文學博士 井上哲次郎
文學士 蟹江義丸 共編

古學派之部 下

序説

徳川時代に豪儒の偉器を抱いて起り、鄒魯の學派に一生面を開き、一世の文學を宣揚し、後世に影響を及しゝことの多大なるは物徂徠に若くはなし。徂徠、名は雙松、字は茂卿、幼名を傳二郎といふ。通稱は總右衞門、姓は物部、荻生氏なり。徂徠と號し其社を蘐園といふ。寛文六年（西暦一千六百六十六年）二月を以て江戸の二番町に生まる。其先は三河の荻生の人、物部守屋の後なり。故に荻生を氏とし、又物部を姓とす。後徂徠自ら修めて物氏となす。

徂徠の祖先に荻生少目（すくなめ）といふものあり。初めて參州より勢州に之き北畠家に寄りて卒す。其子を總右衞門といふ。即ち徂徠が曾祖父なり。祖父を玄甫といふ。初めて江戸に來り醫を以て業とせり。父方庵名は篤字は宗甫、將軍綱吉公の侍醫なり。母は兒島氏、三子を生む。其長子を理庵といひ、

日本倫理彙編卷之六目錄

古學派之部 下

文學博士　井上哲次郎
文學士　蟹江義丸　共編

日本倫理彙編

古學派の部（下）

東京　育成會發兌